

(高等学校編)

今、求められる力を高める 総合的な探究の時間の展開

未来社会を切り拓く確かな資質・能力の育成に向けた
探究の充実とカリキュラム・マネジメントの実現

令和5年3月



文部科学省

ま え が き

近年、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、さらには、長引く新型コロナウイルス感染症による影響や混迷を増す世界情勢など、まさに予測困難な時代を迎えようとしています。

このような時代にあって、子供が様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められています。

総合的な探究の時間は、探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することを目標にしていることから、これからの時代においてますます重要な役割を果たすものです。

平成30年3月の学習指導要領の改訂においては、名称を「総合的な探究の時間」に変更し、小・中学校における総合的な学習の時間を基盤とした上で、各教科・科目等の特質に応じた「見方・考え方」を総合的・統合的に働かせることに加えて、自己の在り方生き方に照らし、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、自ら問いを見いだし探究することのできる力の育成が求められています。このような生徒の姿を実現していくに当たっては、生徒が取り組む探究がより洗練された質の高いものになること、つまり、探究が高度化し自律的に行われることが重要になります。

また、令和3年1月の中央教育審議会の答申では、多様な課題が生じている今日においては、これまでの文系・理系といった枠にとらわれずに各教科・科目等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用しながらそれを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結び付けていく資質・能力の育成が求められるとして、総合的な探究の時間における教科・科目等横断的な学習や探究のプロセスの充実を図るとともに、STEAM教育に取り組むことが期待されています。

本書は、学習指導要領の改訂を踏まえ、総合的な探究の時間に係る計画の基本的な考え方や具体例、学習指導及び総合的な探究の時間を推進するための体制づくりなどについて、分かりやすく解説するとともに、優れた実践事例を取り上げました。

各教育委員会及び各学校において、本書が積極的に活用され、総合的な探究の時間の一層の充実が図られることを期待しています。

最後に、本書の作成に当たり、多大な御協力をいただいた協力者や関係の方々に、心から感謝申し上げます。

令和5年3月

目次

はじめに	4
◎ 今、求められる資質・能力	4
◎ 総合的な探究の時間で 生徒、教師、地域が変わる！	10
◎ 「主体的・対話的で深い学び」を実現する総合的な探究の時間	15

第1編 総合的な探究の時間において求められる授業改善 17

第1章 これまでの総合的な学習の時間の成果と探究の充実	18
1. これまでの総合的な学習の時間の成果と課題	18
2. 一層求められる探究の充実	20
第2章 充実した総合的な探究の時間を実現するための学習指導	23
第1節 総合的な探究の時間における指導のポイント	23
1. 学習過程を探究の過程にすること	23
2. 他者と協働して主体的に取り組む学習活動にすること	24
第2節 探究の過程における指導のポイント	28
1. 課題の設定	28
【コラム】 課題設定の視点	34
2. 情報の収集	35
【コラム】 インターネットで情報を収集する際の豆知識	37
3. 整理・分析	44
【コラム】 総合的な探究の時間における「考えるための技法」の活用	53
4. まとめ・表現	56
【コラム】 まとめ・表現に当たっての留意点	57
【コラム】 振り返りの充実	63
【コラム】 ICT端末の活用	64
【コラム】 教育・学習における ICT 活用の特性・強み	66

第2編 総合的な探究の時間とカリキュラム・マネジメント 67

第1章 カリキュラム・マネジメントの充実	68
第2章 全体計画の作成	69
第1節 全体計画の基本的な考え方	69
1. 全体計画の概要	69
2. 全体計画の中心となる三要素	71
3. 三要素を明確にすることの価値	71
第2節 全体計画作成の進め方	72
1. 学校教育目標を確認する	72
2. 各学校において定める目標を設定する	73
3. 目標を実現するにふさわしい探究課題	75
4. 探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力	77
【コラム】 SDGsの視点を取り入れる	85
第3節 全体計画の具体例	87
第3章 年間指導計画の作成	95
第1節 年間指導計画の基本的な考え方	95

1. 年間指導計画とその構成要素	95
2. 年間指導計画における時数配当の考え方	96
3. 年間指導計画における単元配列の考え方	96
第2節 年間指導計画作成上の留意点と具体例	101
1. 生徒の学習経験に配慮すること	101
2. 実社会や実生活との接点を生み出すこと、季節や地域の行事など適切な活動時期を生かすこと	102
3. 他教科・科目等との関連を明らかにすること	103
4. 外部の教育資源の活用及び異校種・他校との連携や交流を意識すること	106
[コラム] RESAS・V-RESAS等のデータ利活用ツールの活用	107
[コラム] STEAMライブラリーの活用	109
第4章 単元計画の作成	112
第1節 単元計画作成の基本的な考え方	112
1. 単元計画作成の手順	112
2. 単元計画としての学習指導案	115
第2節 単元計画作成の具体的手順	116
1. 全体計画・年間指導計画を踏まえる	116
2. 三つの視点から生徒の姿を思い描く	118
3. 探究として単元が展開するイメージを思い描く	121
4. 単元計画を具体的に書き表す	122
第3節 単元計画の具体例	125
第5章 学習指導や指導計画の評価	132
第1節 生徒の学習状況の評価	132
1. 学習評価の基本的な考え方	132
2. 全体計画に示した「学習の評価」の具体化	134
3. 評価の観点の設定	135
4. 学習状況の評価の手順	135
5. 多様な評価の方法	136
第2節 教育課程の評価	139
1. 教育課程の評価の基本的な考え方	139
2. 教育課程の評価項目・指標等の検討	139
3. 教育課程の改善と外部への説明	140
第6章 総合的な探究の時間を支えるための体制づくり	141
第1節 校長のリーダーシップと体制整備の視点	141
1. 求められる校長のリーダーシップ	141
2. 体制整備の四つの視点	142
第2節 体制整備の実践例	143
1. 指導体制と運営体制の整備	143
2. 校内研修等の充実	148
[コラム] 総合的な探究の時間を進める中で教師が育つ	151
第3節 授業時数の確保と弾力的な運用の実践例	152
第4節 学習環境の整備の実践例	154
1. 学習空間の確保	154
2. 学校図書館の整備	155
第5節 外部との連携の実践例	157
(参考資料) STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成	161

はじめに

今、求められる資質・能力

【未来を切り拓き、よりよい社会を創造する】

平成28年12月21日中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（以下、「中央教育審議会答申」という）では、「人間は感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え出すこと」や、「答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだしたりすることができる」など、人間本来がもち合わせている価値や強みについて言及されており、「予測困難な時代に、一人一人が未来の創り手となる」ことが示されている。この文言からは、情報化やグローバル化といった加速度的に進展する社会的な変化、あるいは、誰も予測できなかった未曾有の感染症に対峙していくような、たくましく未来を生きる生徒を育成することが、これからの学校教育に求められていると考えることができる。

たくましく未来を生きる生徒を育成するためには、生涯にわたる学びの基盤となる資質・能力をしっかりと発揮できるようにしていくことが重要となる。生徒一人一人が、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となるために必要な力を育むことが求められているのである。

急激な環境の変化の中、生徒は決して暗く沈んでいるわけではない。例えば、コロナ禍となり今までどおりの学習活動ができない状況でも、創意工夫を巡らし、地域の方と連携・協働する学習活動が数多く報告されているように、生徒は常に前を向き、明るい未来を夢見ている。

予測困難な時代だからこそ、一人一人の生徒のよさや可能性に大いに期待をしたい。未来を生きる生徒が時代を創っていくということを、教育に携わる我々は今一度認識する必要があるだろう。



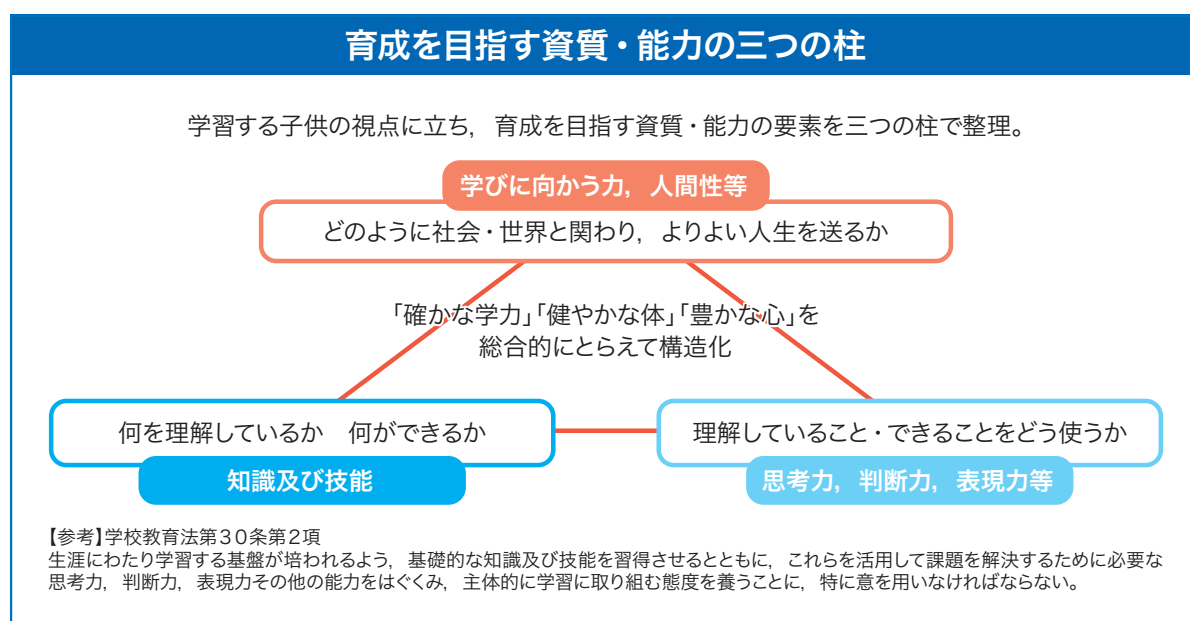
【育成を目指す資質・能力】

中央教育審議会答申においては、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であること、こうした力は全く新しい力ということではなく学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくことが必要とされた。また、汎用的な能力の育成を重視する世界的な潮流を踏まえつつ、知識及び技能と思考力、判断力、表現力等をバランスよく育成してきた我が国の学校教育の蓄積を生かしていくことが重要とされた。

このため「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、ア「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の三つの柱に整理するとともに、各教科・科目等の目標や内容についても、この三つの柱に基づく再整理を図るよう提言がなされた。

今回の改訂では、知・徳・体にわたる「生きる力」を生徒に育むために「何のために学ぶのか」という各教科・科目等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくことができるようにするため、全ての教科・科目等の目標及び内容を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理している。

総合的な探究の時間で育成することを目指す資質・能力についても、他教科・科目等と同様に、総則に示された「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」という三つの柱から明示された。



○資質・能力の三つの柱のバランスのとれた育成

これらの資質・能力の三つの柱は、個別に育成されるものではない。それゆえ、資質・能力の三つの柱がバランスよく育成されるようにしたい。そのためには、資質・能力の三つの柱の関係性について理解しておく必要がある。

生徒は学ぶことに興味を向けて取り組んでいく中で、新しい知識や技能を得る。資質・能力の育成は、知識及び技能の質や量に支えられており、知識や技能なしに、思考や判断、表現等を深めることや、社会や世界と自己との多様な関わり方を見いだしていくことは難しい。一方で、社会や世界との関わりの中で学ぶことへの興味を高めたり、思考や判断、表現等を伴う学習活動を行ったりすることなしに、生徒が新たな知識や技能を得ようとしたり、知識や技能を確かなものとして習得したりしていくことも難しい。

そして、生徒はそれらの知識や技能を、社会や生活の中で直面するような未知の状況の中で活用して思考することを通して、知識や技能をより確かなものとして習得するとともに、思考力、判断力、表現力等を発揮することを通して、深い理解を伴う知識が習得され、それにより更に思考力、判断力、表現力等も高まる。

学びに向かう力、人間性等は、他の二つの柱をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素である。習得した知識や技能、育成された思考力、判断力、表現力等を、新たな学びに向かったり、学びを人生や社会に生かそうとしたりする力として育んでいくことが求められる。

このように、資質・能力の三つの柱は、相互に関係し合いながら育成されるものである。以下では、総合的な探究の時間において育成を目指す資質・能力とそれぞれの関係性について解説する。

○「知識及び技能」～何を理解しているか、何ができるか～

探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。【第1の目標の(1)】

総合的な探究の時間における探究の過程では、生徒は、教科・科目等の枠組みを超えて、長時間じっくり課題に取り組む中で、様々な事柄を知り、様々な人の考えに出会う。その中で、具体的・個別的な事実だけでなく、それらが複雑に絡み合っている状況についても理解するようになる。その知識は、教科書や資料集に整然と整理されているものを取り込んで獲得するものではなく、探究の過程を通して、自分自身で取捨選択し、整理し、既にもっている知識や体験と結び付けながら、構造化し、身に付けていくものである。こうした過程を経ることにより、獲得された知識は、実社会や実生活における様々な



課題の解決に活用可能な生きて働く知識、すなわち概念が形成されるのである。

各教科・科目等においても、「主体的・対話的で深い学び」を通して、事実的な知識から概念を獲得することを目指すものである。総合的な探究の時間では、各教科・科目等で習得した概念を実社会・実生活の課題解決に活用することを通して、それらが統合され、より一般化されることにより、汎用的に活用できる概念を形成することができる。

技能についても同様である。課題の解決に必要な技能は、例えば、インタビューのときには、事前に聞くべきことを場合分けしたり分析方法を想定したりして計画する技能、資料を読み取るときには、大事なことを読み取ってまとめたり他の資料と照合したりして吟味する技能などが考えられる。こうした技能は、各教科・科目等の学習を通して、事前にある程度は習得されていることを前提として行われつつ、探究を進める中でより高度な技能が求められるようになる。このような必要感の中で、注意深く体験を積んで、徐々に自らの力でできるようになり身体化されていく。技能と技能が関連付けられて構造化され、統合的に活用されるようになる。

○「思考力、判断力、表現力等」～理解していることやできることをどう使うか～

実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。【第1の目標の(2)】

育成を目指す資質・能力の三つの柱のうち、主に「思考力、判断力、表現力等」に対応するものとしては、実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現するという、探究の過程において発揮される力を示している。

ここで重要なのが、実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立てることである。問いや課題は、生徒がもっている知識や経験だけでは生まれないこともある。そこで、実社会や実生活と実際に関わることを求めている。その中で、過去と比べて現在に問題があること、他の場所と比べてこの場所には問題があること、自己の常識に照らして違和感を抱く問題があることなどを発見し、それが問題意識となり、自己との関わりの中で課題につながっていく。こうして、問いや課題が定まると、探究がスタートする。ちなみに、探究のプロセスが繰り返される中で、はじめに立てた問いや課題そのものが問い直されて、その質や精度が高まっていくことが思い描かれる必要がある。

探究の過程が動き始めると、「知識及び技能」を活用して問いや課題を掘り下げていく。具体的には、身に付けた「知識及び技能」の中から、当面する課題の解決に必要なものを選択し、状況に応じて適用したり、複数の「知識及び技能」を組み合わせたりして、適切に活用できるようになっていくことと考えることができる。なお、教科・科目等横断的な情報活用能力や問題発見・解決能力を構成している個別の「知識及び技能」や、各種の「考えるための技法」も、単にそれらを習得している段階から更に一歩進んで、課題や状況に応じて選択したり、適用したり、組み合わせたりして活用できるようになっていくことが、「思考力、判断力、表現力等」の具体と考えることができる。こうしたことを通して、知識や技能は、既知の限られた状況においてのみならず、未知の状況においても課題に応

じて自在に駆使できるものとなっていく。

このように、「思考力、判断力、表現力等」は、「知識及び技能」とは別に存在していたり、「知識及び技能」を抜きにして育成したりできるものではない。いかなる課題や状況に対しても、「知識及び技能」が自在に駆使できるものとなるよう指導を工夫することこそが「思考力、判断力、表現力等」の育成の具体にほかならない。そのた



めにも、情報活用能力や問題発見・解決能力を構成する個別の「知識及び技能」、これまで身に付けてきた「考えるための技法」が自在に活用されるような機会を、総合的な探究の時間や他教科・科目等の中で、意図的・計画的・組織的に設けること等の配慮や工夫が重要になってくる。あるいは、総合的な探究の時間においては、探究の過程を通すというこの時間の趣旨を生かして、課題を解決したいという生徒の必要感を前提に、その解決の過程に適合する「知識及び技能」を教師が指導するという方法もあり得る。そのようにして身に付けた「知識及び技能」は、様々な課題の解決において活用・発揮され、うまくいったりうまくいかなかったりする経験を得ながら、学んだ当初とは異なる状況においても自在に駆使できるようになっていく。このことが、個別の「知識及び技能」の習得という段階を超えた、「思考力、判断力、表現力等」の育成という段階である。

○「学びに向かう力、人間性等」

～どのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るか～

探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。【第1の目標の(3)】

課題の解決においては、主体的に取り組むこと、協働的に取り組むことが重要である。なぜなら、それがよりよい課題の解決につながるからである。総合的な探究の時間で育成することを目指す資質・能力は、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力である。こうした資質・能力を育むためには、自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、よりよい解決に向けて主体的に取り組むことが重要である。

他方、複雑な現代社会においては、いかなる問題についても、一人だけの力で何かを成し遂げるとは困難である。これが協働的に探究を進めることが求められる理由である。例えば、他の生徒と協働的に取り組むことで、学習活動が発展したり課題への意識が高まったりする。異なる見方があることで解決への糸口もつかみやすくなる。また、他者と協働的に学習する態度を育てることが求められている。この協働は、単に協力して事に当たるという意味ではなく、それぞれのよさを生かしながら

個人ではつくりだすことができない価値を生み出すことを意味している。探究においては、このような、他者と協働的に取り組み、異なる意見を生かして新たな知を創造しようとする態度が欠かせない。

こうして探究に主体的・協働的に取り組む中で、互いの資質・能力を認め合い、相互に生かし合う関係が期待されている。また、探究の中で生徒が感じる手応えは、一人一人の意欲や自信となり次の課題解決を推進していく。

また、高校生の探究が、実際に社会を変える力となることもある。探究を通して、生徒は自分なりの世界観や価値観を築いていくとともに、地域の人々との協働によって、実際に地域社会を変えていく。そうして、よりよい社会を実現することに向けて経験を深めていく。このように、総合的な探究の時間を通して、自ら社会に関わり参画しようとする意志、社会を創造する主体としての自覚が、一人一人の生徒の中に徐々に育成されることが期待されているのである。実社会や実生活の課題を探究しながら、自己の在り方生き方を問い続ける姿が一人一人の生徒に涵養されることが求められているのである。

この「学びに向かう力、人間性等」については、よりよい生活や社会の創造に向けて、自他を尊重すること、自ら取り組んだり異なる他者と力を合わせたりすること、社会に寄与し貢献することなどの適正かつ好ましい態度として「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を活用・発揮しようとするところと考えることができる。とりわけ高等学校段階においては、探究がより自律的になることが期待されている。

このように、育成を目指す資質・能力の三つの柱は、探究の過程において、よりよい課題の解決に取り組む中で、相互に関わり合いながら高められていくものとして捉えておくことが大切である。



総合的な探究の時間で 生徒、教師、地域が変わる！

平成11年の学習指導要領改訂で創設された総合的な学習の時間は、今回の改訂で「総合的な探究の時間」に名称が変更された。この時間では、探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の在り方生き方を考えていく生徒の姿を目指している。よりよく課題を解決するために、生徒は地域に出かけたり、様々な体験活動を行ったり、多くの人と出会ったりして学んでいく。

その過程で生徒は、実際の社会や日常生活の中で活用できる資質・能力を身に付けていく。また、環境に関する問題や福祉に関する問題など、解決が困難な現代社会の課題について真剣に考えていく。そして、自らの生活や行動などを振り返り、一人一人が自分の在り方生き方を考えていく。この先の社会は、進化した人工知能（AI）が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりするIoTが広がるなど、Society5.0とも呼ばれる新たな時代の到来が、社会や生活を大きく変えていくとの予測もなされている。情報化やグローバル化が進展する社会においては、多様な事象が複雑さを増し、変化の先行きを見通すことが一層難しくなると考えられており、生徒が実社会や実生活における課題を探究する総合的な探究の時間がますます重要なのである。

また、総合的な探究の時間では、生徒の成長とともに、学校や教師、地域も変容する。「生徒」「教師・学校」「地域」の姿から改めて総合的な探究の時間の意味を考えてみる。

生徒が育つ

以下は、総合的な探究の時間での生徒の言葉である。

「総合的な探究の時間を通じて、問いを立てて、調査・分析をし、行動して検証するという一連の流れが身に付いたと思います。自分の進路も、総合的な探究の時間と同じように、自分なりに問いを立てて考えていきました。

「問いを立てる」というと難しい印象がありますが、1年生の頃からどの教科でも行ってきたので、3年生になった今ではスムーズにできるようになりました。難しそうに思えることでも何度もトレーニングすると身に付くものだ実感しています。きっと、社会に出てからも生きる力だと思っています」

「今までは、失敗したら嫌だ、失敗



したらそれで終わり、と思っていました。総合的な探究の時間では、自分と同じ考えをもっている人がいて、その人たちと一緒に、どうしたら問題を解決できるかを考え、何度も何度も失敗を経験しながら、その失敗を次に生かそうとする考え方や前向きな姿勢が身に付きました」



高校生の時期は、個々の生徒の個性に応じて、それぞれの力が大きく伸びるときであり、総合的な探究の時間を通して、自らの能力を発揮し、一層伸ばしていくことが期待される。ここでは、実社会との関わりを重視し、身近な地域や現実の社会にある問題の解決に向けて取り組む総合的な探究の時間を行うことが大切となる。このような探究をする中で、自分自身の将来や地域社会の未来について真剣に考え、実社会における自分の存在や役割などについて考えることにつながっていく。それと同時に、実際の社会で役立つ能力も育っていく。自ら設定した課題について、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し行動する生徒の育成が期待できるのである。

また、それだけではなく、各教科・科目等を学ぶ意味、学習することの意義を見いだす生徒の姿を見ることが出来る。

「総合的な探究の時間で、地域の定住外国人に向けた取組を通じて学んだことは、色々な人とながらることの大切さと学ぶ姿勢の大切さです。支援をする側と支援を受ける側のそれぞれの視点をもつことで、双方にとってよりよい解決策を見付けられると思います。そのためには、行政や公的機関の役割、定住外国人に関する知識や感情的な理解など、たくさんのことを学ぶ必要があります。私たちの取組は一定の評価をいただきましたが、この取組を行政や公的機関と連携して継続させたいと考えています。しかし、今の私では力不足なので、大学に進学して更に深く福祉や行政について学びたいと考えようになりました」

こうして総合的な探究の時間は、今、求められる力を確かに育成していくことにつながる。

教師が変わる

以下は、総合的な探究の時間を実践してきた教師の言葉である。

「先生、総合的な探究の時間って何する時間なの？ と生徒に尋ねられ、答えられなかった自分がいました。自分が担当している教科の魅力ならいくらでも語ることができるのに、総合的な探究の時間については言えないのです。それからの私は、総合的な探究の時間の魅力を語ることができることを目指して取り組んできました。今の自分なら、生徒たちの質問に自信をもって答え

られるような気がします」

「生徒に任せれば任せるほど、生徒には難しいテーマではないだろうか、生徒には解決していくのは無理なのではないだろうかと心配をする自分がいました。生徒のもっている力を信じること、生徒の思いに寄り添うこと、こうして自分も生徒と一緒に探究をした気がします」

「私自身も生徒に触発され、自分の授業の理想型を『探究』し始めまし

た。日々の忙しさにかまけて、例年通りの授業を進めていた私ですが、生徒に指導している『問いを立てる』を自分にも課して、授業改善に取り組んでいます。また、総合的な探究の時間は、職員室の雰囲気も変えました。教育活動の中核に総合的な探究の時間を置くことで、職員も地域課題や国際問題に興味をもつようになり、地域の方々や外部の方々との交流も増えました。何より、職員同士が活発に議論や支え合う姿が見られるようになり、チームとして機能していると感じています。『探究』で、生徒も職員も学校も成長したと思います」



総合的な探究の時間は、各学校で目標や内容を設定する。もちろん教科書はない。このことは、一見難しさや大変さを感じさせる。しかし、生徒の実態、地域や学校の特色に応じた各学校の学習活動を展開することができる。カリキュラムを編成し、実施する。そして、それを見直し、改善していく。まさにカリキュラム・マネジメントの力が必要になってくる。総合的な探究の時間に取り組む教師は、地域に興味をもち、地域を探索したりフィールド調査をしたり、実際に見たり聞いたりして、地域と関わりながら指導計画を作成し、授業を生み出していく。これからの時代に求められる教師の姿が、そこにはある。また、総合的な探究の時間によって、教師は社会に関わっていくようになる。地域の人や行政機関・企業の人との関わりを深めていく教師が増えている。生徒会活動や地域の町内会を通して知り会った人、趣味のサークルを通じて紹介してもらった講師、ボランティアを通してつくった仲間等々、それらの教師の幅広いネットワークが活動のよきヒントやアドバイスを得心することにつながっていく。生徒と共に教師も地域から学ぶ姿勢が身に付いていくのである。

さらに、校内では複数の教師がチームを組んで指導に当たる姿も多く見られるようになる。活動が多岐に渡る場合もあり、各活動に対応し適切な支援をしていくために、学年や全校での指導体制を整えたり、ティーム・ティーチングでの指導を行ったりするようになり、共に創造する教育風土が学校内に溢れるようになっていく。

地域に広がる

以下は、総合的な探究の時間のゲストティーチャーの言葉である。

「高校生が地域のイベントに顔を出してくれるようになりました。イベントに参加していた小学生が、自分もあの高校生みたいになりたいと言って、運営を手伝ってくれるようになりました。高校生は子供にとって身近で、信頼できるあこがれの存在であり、親にとっては、将来の我が子の成長と重ね、子育てがワクワクする存在です。この町はよい町だなあと思いました。私は泣きっぱなしです」



「総合的な探究の時間は、町づくりにつながっていると感じています。高校生が、自分の住む町や世界の課題に対して、真剣に考え行動する姿を見ることに刺激を受け、大人も負けてはいられないと思うようになりました。次のステップとして、高校生と一緒に町づくりをしていき、地域のよさや町づくりの楽しさを高校生と共有したいです」

また、総合的な探究の時間で地域と関わり、地域のために活動を展開した生徒は、次のように語る。

「学校のある地域と私の住む地域とはかなり離れていて、最初はこの学校のある地域のことにあまり興味がありませんでした。しかし、総合的な探究の時間で学校のある地域の人と関わり、地域のよいところが分かったことで、地域への興味や関心が高まりました。そして、私の住む地域のよさや課題についても考えるようになりました」

「地域や社会に貢献したいとは漠然と思っていましたが、それ以上のことは考えていませんでした。しかし総合的な探究の時間で地域に関わっていく中で、もっと地域のために活動したい交流を深めたいという意欲が高まりました。地域と関わることでもっと学びたいという意欲が生まれてきました。小さい頃お世話になっていた児童館に恩返ししたいです。自分が行動することで何かが変わるのではないかなと思うようになりました」

高校生のもつパワーは大きく、その可能性は計り知れない。一人一人の生徒が本気になって、真剣に地域のことを考えることで、学校を取り巻く地域や社会は大きく変容する可能性を秘めている。事実、高校生が取り組む総合的な探究の時間によって、地域が活性化してきた事例もある。そんな高校生のエネルギーを生かさない手はない。

高等学校に総合的な学習の時間として創設されてから20年を超えた。総合的な探究（学習）の時間は学校を地域や社会に開いてきた。生徒の学びは学校を超え、地域全体に広がりを見せている。また、生徒の学びを支えようと、多くの大人が力を合わせる姿もたくさん見られるようになってきた。「高校生が地域の元気の源」「高校生の姿に大人が学ぶ」と話す人もいる。生徒の姿は生き生きとし、そ

の声は明るくはつらつとしている。そんな姿や声が溢れる地域には活気がある。総合的な探究の時間は、生徒を育て、教師を変え、学校を変える。そして、その姿が地域へと大きく広がっていくことが期待できる。



「主体的・対話的で深い学び」を実現する総合的な探究の時間

本書は学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、これからの総合的な探究の時間において求められる資質・能力の育成に向け、前書である平成25年版『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』の内容を「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善、「主体的・対話的で深い学び」の実現のためのカリキュラム・マネジメントの充実、という2つの柱で再構成したものである。

今回の学習指導要領の改訂では、「生きる力」の育成という教育の目標が各学校の特色を生かした教育課程の編成により具体化され、教育課程に基づく個々の教育活動が、生徒一人一人に、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となるために必要な力を育むことに効果的につながっていくようにすることを目指している。

生徒が、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める必要がある。そのための授業改善の視点として示されたのが「主体的・対話的で深い学び」である。

総合的な探究の時間の本質は「探究の過程」にあり、今回の学習指導要領の改訂においても、探究の過程を一層重視することが求められている。これまでも、探究の過程の中で、実社会や実生活と関わりのある学びに主体的に取り組んだり、異なる多様な他者との対話を通じて考えを広めたり深めたりする学びを実現することが大切にされてきた。したがって、総合的な探究の時間において「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を重視することは、探究の過程をより一層質的に高めていくことにほかならない。そこで、本書第1編「総合的な探究の時間において求められる授業改善」では、探究の過程に即した授業改善の事例を紹介している。

また、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、カリキュラム・マネジメントの充実に努めることも重要である。なぜなら、学校全体として、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育内容や時間の配分、必要な人的・物的体制の確保、教育課程の実施状況に基づく改善などを通して、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図る必要があるからである。そこで、第2編「総合的な探究の時間とカリキュラム・マネジメント」では、総合的な探究の時間におけるカリキュラム・マネジメントの充実のためのポイントを解説している。

第1編

総合的な探究の時間において 求められる授業改善

第1章

これまでの総合的な学習の時間の成果と探究の充実

1. これまでの総合的な学習の時間の成果と課題

今回の学習指導要領の改訂では、高等学校の総合的な学習の時間の名称を「総合的な探究の時間」に変更した。これは、中央教育審議会答申における「小・中学校における総合的な学習の時間の取組の成果を生かしつつ、より探究的な活動を重視する視点から、位置付けを明確化し直すことが必要」との指摘を踏まえたものである。

これまでの高等学校の総合的な学習の時間では、「はじめに」で述べた生徒・教師・地域の変容に見られるように、生徒が学習の意義や価値を見いだしたり、地域の活性化につながったりするような事例が生まれている。教師の姿勢にも変化が見られ、学校の雰囲気も変わりつつある。その一方で、例えば、「平成27年度学習指導要領実施状況調査（高等学校 総合的な学習の時間）」の結果を見ると、探究の過程に関する質問のうち、「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」において、肯定的な回答をしている生徒の割合は50%を上回っている一方で、「まとめ・表現」においては、肯定的な回答をしている生徒の割合は35%を下回っている（図1）。また、「整理・分析」、「まとめ・表現」に関する質問において、学校質問紙調査では肯定的な回答をしている教師の割合は約80%である（図2）のに対して、生徒質問紙調査では、肯定的な回答をしている生徒の割合は約35%から約50%にとどまっている。

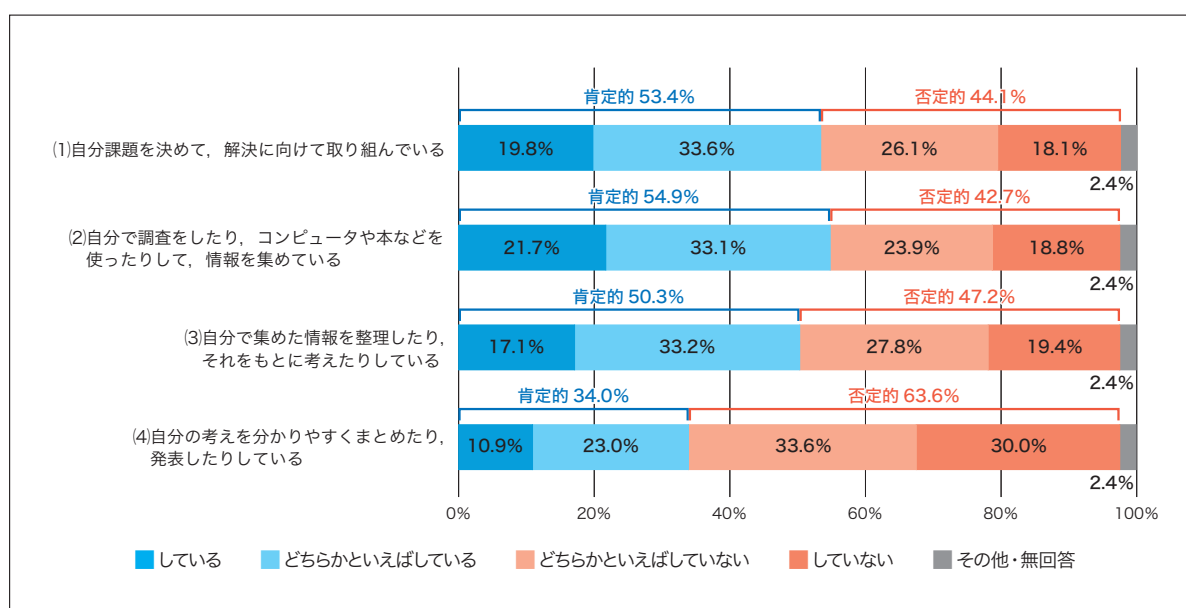


図1 生徒質問紙調査における肯定的な回答と否定的な回答の割合

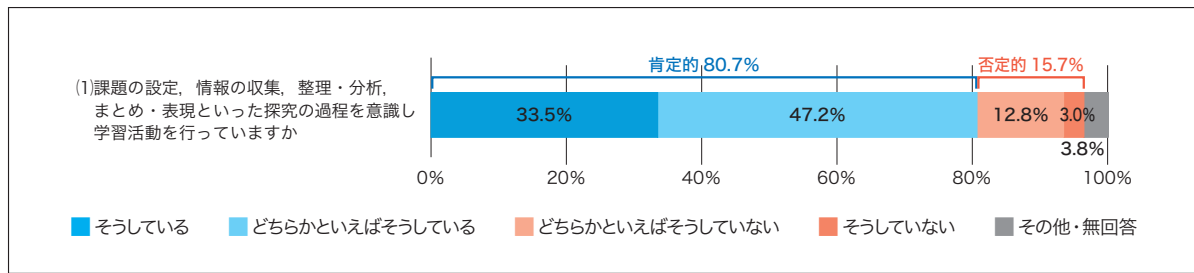


図2 学校質問紙調査における肯定的な回答と否定的な回答の割合

この調査では、全ての質問において、学校種が上がるほど肯定的な回答をしている生徒（児童）の割合が低くなっていることがうかがえる（図3）。このことから、小・中学校の取組の成果の上に高等学校にふさわしい実践が十分展開されているとは言えない状況であることが読み取れる。

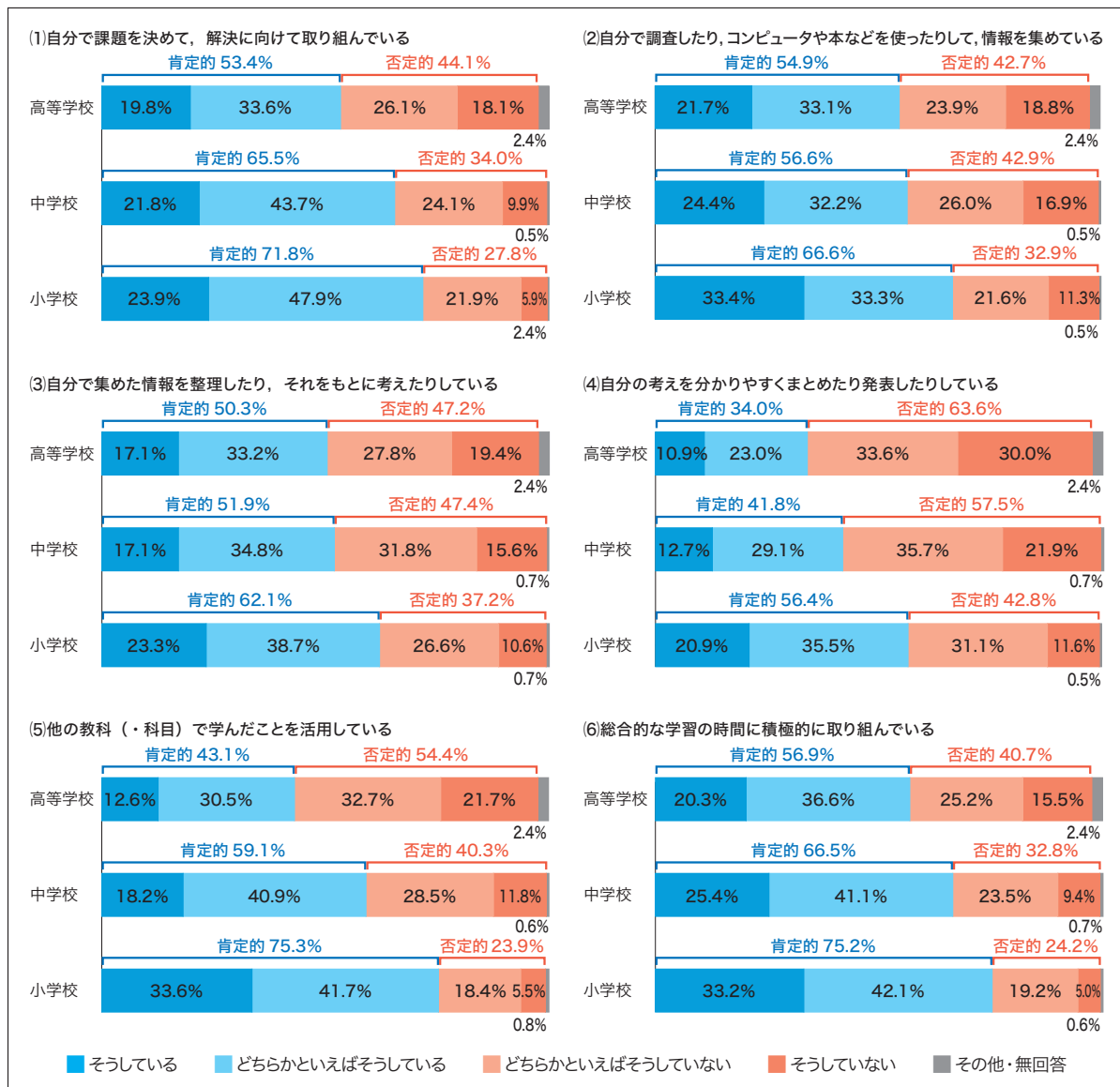


図3 生徒質問紙調査における小・中・高等学校における回答の割合

2. 一層求められる探究の充実

高等学校の総合的な探究の時間の実施に当たっては、小・中学校における総合的な学習の時間の取組の成果を生かしつつ、これまでの総合的な学習の時間との違いを踏まえ、より一層、探究活動を充実させる必要がある。ここでは、三つの視点から解説する。

(1) 探究が高度化し、自律的に行われることを意識する

小・中学校の総合的な学習の時間が、課題を解決することで自己の生き方を考えていく学びであるのに対して、総合的な探究の時間は、自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学びを展開していくことを重視している。高等学校においてこのような生徒の姿を実現するためには、生徒がより洗練された質の高い探究に取り組む必要がある。質の高い探究とは、「探究の過程がより高度化する」ことや「探究がより自律的に行われる」ことと考えることができる。

高度化した探究とは、①探究において目的と解決の方法に矛盾がない（整合性）、②探究において適切に資質・能力を活用している（効果性）、③焦点化し深く掘り下げて探究している（鋭角性）、④幅広い可能性を視野に入れながら探究している（広角性）などの生徒の姿で捉えることができる。

また、自律的な探究とは、①自分にとって関わりが深い課題になる（自己課題）、②探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる（運用）、③得られた知見を生かして社会に参画しようとする（社会参画）などの生徒の姿で捉えることができる。

高度化し、自律的に行われる探究

「探究の過程がより高度化する」ことや「探究がより自律的に行われる」ことについて、具体的な生徒の姿から考えてみたい。

世界の環境汚染に関心をもった生徒は、マイクロプラスチックによる海の環境汚染に着目した。

この生徒は、プラスチックによる海の環境汚染が進んでいるならば、海塩にマイクロプラスチックが含まれているのではないかという仮説を立てた。仮説を検証するため、関係機関と連携し、濾過実験の残留物の元素分析を行った。

実験結果を整理したり分析したりする場面では、個別の実験結果と文献から推測したり、比較したりして、科学的な根拠に基づいて分析した。

濾過実験では、マイクロプラスチックを見付けることができなかったため、実験方法を変更した。

このように、生徒は試行錯誤を繰り返しながら、つ

【鋭角性】 環境汚染の問題をマイクロプラスチックの問題に焦点化している。

【整合性】 海塩にマイクロプラスチックが含まれているかどうかを確かめるために妥当な方法を選択している。

【効果性】 理科の実験等において身に付けた資質・能力を効果的に活用している。

【広角性】 一つの仮説が否定されても、他の可能性を模索し、新たな仮説を立てて探究している。

いに海塩からマイクロプラスチックを検出するに至った。

こうして得られた調査結果を、生徒は論文にまとめるとともに、マイクロプラスチックの危険性を広く訴えた。

今回の探究を通して、生徒は環境汚染への関心を深め、海洋生態系や物質循環について更に学ぶための進路について考えるようになった。

【運用】自らの力で課題を更新し続けている。

【社会参画】探究を通して得られた知見を生かして社会に関わろうとしている。

【自己課題】取り組んだ課題が自分にとってより深い課題となり、自身の進路選択にもつながっている。

(2) 課題の設定において、生徒が自分で課題を発見する過程を重視する

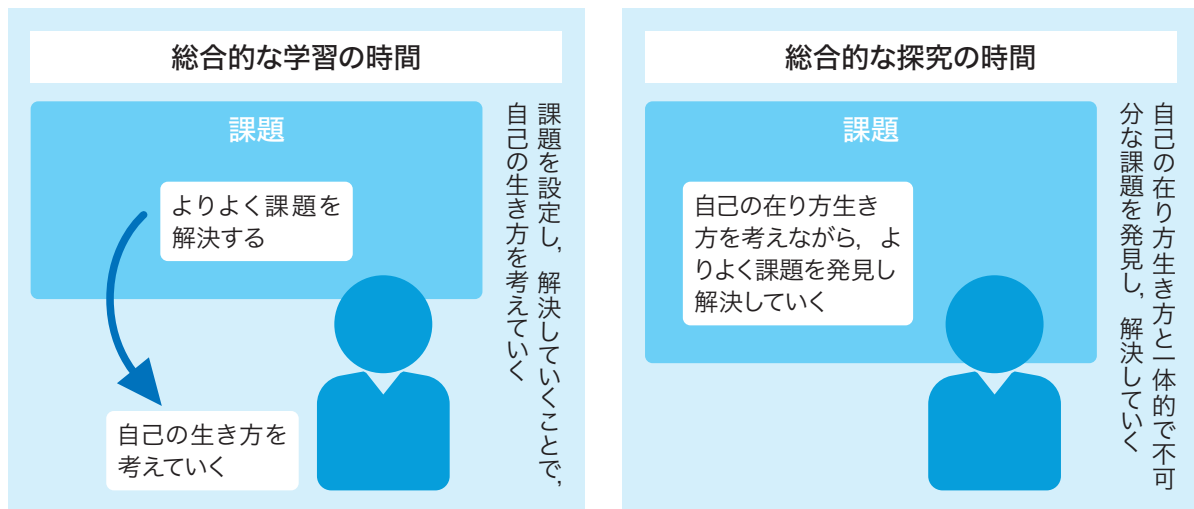


図4 課題と生徒の関係(イメージ)

小・中学校の総合的な学習の時間では、教師の指導も受けながら課題を設定し、解決していくことにより、児童・生徒が結果として自己の生き方を考える契機となっていくことになる場合が多いのに対し、高等学校の総合的な探究の時間では、生徒自身が自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくことが期待される(図4)。したがって、総合的な探究の時間の探究においては、生徒一人一人にとっての「課題の設定」が極めて重要になる。

問いや課題は、必ずしも既存の知識や経験から生まれるとは限らない。実社会や実生活と実際に関わることで、時間的な推移の中で現在の状況が問題をもっていること、空間的な比較の中で身の回りには問題があること、自己の常識に照らして違和感を伴う問題があることなどを発見し、それが問題意識となり、自己との関わりの中で課題につながっていく。

このようにして生徒の中に生まれた問いや問題意識が切実な課題として設定され、より明確な「質の高い課題」として洗練されていくプロセスや時間を確保することが大切である。具体的には、課題に関することを幅広く調べたり、一人でじっくりと考えたり、様々な考えをもつ他者と相談したりするなどして、行きつ戻りつしながら、生徒が自らの力で探究を進めるための原動力となる「リサーチ

クエスチョン」を設定することと考えることができる。

この過程においては、適切な教師の指導・助言が欠かせない。課題を設定するための知識や技能を生徒が身に付け、自分自身で探究を進めることができるよう十分な時間を掛けて指導することが重要である。必要に応じて、単元の総時数の3分の1程度を当てることも考えられる。十分な時間を掛けて一人一人の生徒にとって価値のある適切な課題を設定することが大切である。また、生徒一人一人が設定した課題が、実社会や実生活、そして生徒自身とどのように関係しているのかをはっきりさせることが、生徒にとって切実な必要感のある課題を設定する上で重要である。グループ等で課題を設定する際にも、設定する課題が生徒一人一人にとって切実なものになるよう、設定する課題と生徒自身との関係について深く考えさせることが求められる。

なお、課題の設定については、本編第2章第2節を参照されたい。

(3) 他教科・科目等における探究との違いを踏まえる

今回の改訂では、古典探究や地理探究、日本史探究、世界史探究、理数探究基礎及び理数探究の科目が新設されたが、総合的な探究の時間で行われる探究は、三つの点においてこれらの教科・科目等において行われる探究と異なっている。一つは、総合的な探究の時間における探究の学習対象が、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する事象であり、特定の教科・科目等に留まらず、横断的・総合的な点であるという点である。二つは、他の探究が、その教科・科目等における理解をより深めることを目的にしていることに対し、総合的な探究の時間における探究では、複数の教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に働かせ、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する問題を様々な角度から俯瞰して捉え、考えていく点である。三つは、総合的な探究の時間における学習活動が、解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や、唯一の正解が存在しない課題に対して、最適解や納得解を見いだすことを重視しているという点である。

以上のような総合的な探究の時間の特徴を踏まえた上で、各学校においては全体計画を適切に設定し、全教師が一体となって組織的に指導に当たることが求められる。

第2章

充実した総合的な探究の時間を実現するための学習指導

第1節 総合的な探究の時間における指導のポイント

第2章

今回の改訂においては、「横断的・総合的な学習」を、「探究の見方・考え方」を働かせて行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための「資質・能力」を育成することを目指している。この「探究の見方・考え方」とは、各教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に活用するとともに、広範で複雑な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の在り方生き方を問い続けることであると言える。この探究の見方・考え方は、各教科・科目等の見方・考え方を活用することに加えて、「俯瞰して対象を捉え、探究しながら自己の在り方生き方を問い続ける」という、総合的な探究の時間に特有の物事を捉える視点や考え方である。つまり、探究の見方・考え方を働かせるということは、これまでのこの時間において大切にしてきた課題の解決や探究活動の一層の充実が求められていると考えることができる。

本節においては、今回の改訂の趣旨を実現するための具体的な学習指導のポイントを、次の二つに分けて示していく。一つは、「学習過程を探究の過程にすること」とし、探究の過程のイメージを明らかにしていく。もう一つは、「他者と協働して主体的に取り組む学習活動にすること」とし、探究の過程の更なる充実に向けた方向性を明らかにしていく。

1. 学習過程を探究の過程にすること

学習過程を探究の過程とするためには、以下のようにすることが重要である。

- ①【課題の設定】体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ
- ②【情報の収集】必要な情報を取り出したり収集したりする
- ③【整理・分析】収集した情報を、整理したり分析したりして思考する
- ④【まとめ・表現】気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する

なお、ここでいう情報とは、判断や意思決定、行動を左右する全ての事柄を指し、広く捉えている。言語や数字など記号化されたもの、映像や写真など視覚化されたものによって情報を得ることもできるし、具体物との関わりや体験活動など、事象と直接関わることによって情報を得ることもできる。

もちろん、こうした探究の過程は、いつも①～④が順序よく繰り返されるわけではなく、順番が前後することもあるし、一つの活動の中に複数のプロセスが一体化して同時に行われる場合もある。およその流れのイメージであるが、このイメージを教師がもつことによって、探究を具現するために必

要な教師の指導性を発揮することにつながる。また、この探究の過程は何度も繰り返され、高まっていく。

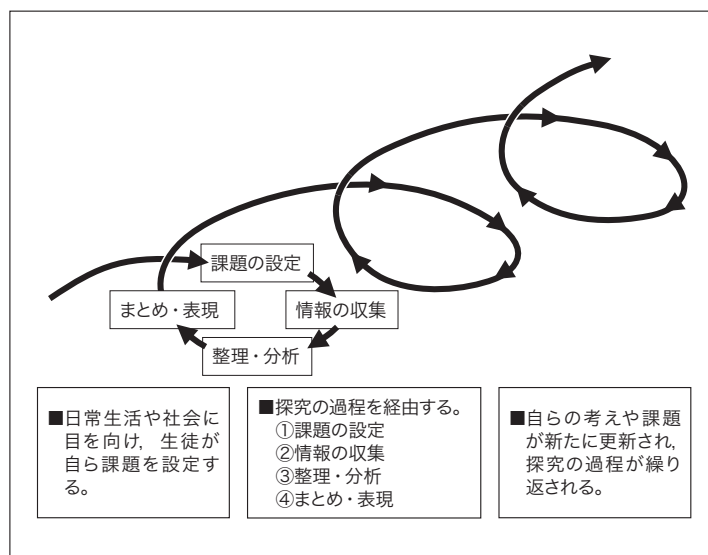


図1 探究における生徒の学習の姿

2. 他者と協働して主体的に取り組む学習活動にすること

総合的な探究の時間においては、目標にも明示されているように、特に、異なる多様な他者と協働して主体的に課題を解決しようとする学習活動を重視する必要がある。それは、多様な考え方をもつ他者と適切に関わり合ったり、社会に積極的に参画したり貢献したりする資質・能力の育成につながるからである。また、協働的に学ぶことにより、探究活動として、生徒の学習の質を高めることにつながるからである。そしてその前提として、何のために学ぶのか、どのように学ぶのかということを生徒自身が考え、主体的に学ぶ学習が基盤にあることが重要である。

協働的に学ぶことの意義の一つ目は、多様な情報の収集に触れることである。同じ課題を追究する学習活動を行っていても、収集する情報は協働的な学習の方が多様であり、その量も多い。情報の多様さと多さは、その後の整理や分析を質的に高めるために欠くことのできない重要な要件である。二つ目は、異なる視点から検討ができることである。整理したり分析したりする際には、異なる視点や異なる考え方があることの方が、深まりが出てくる。一面的な考え方や同じ思考の傾向の中では、情報の整理や分析も画一的になりやすい。三つ目は、地域の人と交流したり仲間と一緒に学習したりすることが、相手意識を生み出したり、学習活動のパートナーとしての仲間意識を生み出したりすることである。共に学ぶことが個人の学習の質を高め、同時に集団の学習の質も高めていく。

特に、高等学校においては、一人一人の学習の質を高めるために、生徒同士による学び合いや地域の大人との関わりを活用することが有効である。

このように協働的に取り組む学習活動を行うことが、生徒の学習の質を高め、課題の解決や探究活動を実現することにもつながる。具体的には、以下のような場面での生徒の姿が想定できる。

(1) 多様な情報を活用して協働的に学ぶ

体験活動では、それぞれの生徒が様々な体験を行い多様な情報を手に入れる。それらを出し合い、情報交換しながらホームルーム全体で考えたり話し合ったりして、課題が明確になっていく場面が考えられる。

例えば、町の福祉の現状について調査した後に、発見したことを出し合い、それをホワイトボードに整理し、「それぞれの調査結果の中で、共通点や相違点はないだろうか」などと発問する。このことで生徒は、町の福祉の現状に関する調査で得られた情報を改めて見つめ直し、共通点や相違点に気付いたり、互いの発見の関連性を見付けたりする。「詳しく調べてみたいということはないだろうか」と更に問いかけることで、「また調査に出かけて詳しく調べてみたい」「誰もが心地よく暮らすためのユニバーサルデザインの考え方で工夫がされていることがわかったので、関わった方々からお話を伺いたい」などと新たに目的や課題を明確にしていくことができる。

ホームルームという集団での協働的な学習を有効に機能させ、多様な情報を適切に活用することで、探究の質を高めることができる。

(2) 異なる視点から考え協働的に学ぶ

物事の決断や判断を迫られるような話し合いや意見交換、議論を行うことは、収集した情報を比較したり、分類したり、関連付けたりして考えることにつながる。そのような場面では、異なる視点からの意見交換、議論が行われることで、互いの考えは深まる。

例えば、食品の在り方について話し合う場面が考えられる。食品をめぐる状況を調査していくと、食品添加物の入っていない自然食品を好んで選択する消費者がいる一方で、食品の保存期間を伸ばし食品を適切に加工する役目を果たすことから食品添加物を必要最小限で使用している生産者の存在に気付く。また、流通に目を向けると、賞味期限間近の食品が廃棄され、運搬や処理に係るコストが生じていることなどにも気付いていく。話し合いでは、生産者と消費者、流通業者といった異なる視点からの意見が出され、互いの考えを深めることにつながっていく。このことにより、食品添加物の使用がどのような理由で行われているのか、そのことが生産や流通、ひいては世界の食糧事情と深く関わっていることなど、生徒の幅広い理解と思考の深まりを生む。

また、例えば、探究課題に基づいて探究を進める過程において、あらかじめ一つの決まった答えがないテーマについて、一面的な視点から正解を求めようとするのではなく、自由な発想で意見を出し合ったり議論したりしながら、多様な視点から課題の解決の糸口を見いだし、考えを深めていく取組を積極的に導入することも、生徒の幅広い理解と思考の深まりを生むことにつながっていく。その際には、こうした取組を生徒同士で行うのみならず、地域などの大人との関わりを活用しながら行うことも有効である。

このように異なる視点を出し合い、検討していくことで、事象に対する認識が深まり、探究活動を質的に高めていくことが考えられる。

そのために、それぞれ異なる個性、興味・関心をもっている生徒同士で学ぶことには大きな意義がある。家業が農業であったり親戚に食品加工業従事者がいたりする生徒、食についての安全性に関心がある生徒、食について深く考えたことはないがスポーツを通して健康に関心のある生徒、外国での

生活経験がある生徒など、異なる興味・関心や経験がある生徒同士が学ぶことにより異なる視点からの考えを出し合いやすくなることが考えられる。またそうした学習を通して、互いのよさや可能性を尊重し合う態度の育成にもつながっていく。

(3) 力を合わせたり交流したりして協働的に学ぶ

一人でできないことも集団で実現できることは多い。生徒同士で解決できないことも地域の人や専門家などとの交流を通じて学んだことを手掛かりにして解決しようとする。また、地域の人や専門家などとの交流は、生徒の社会参画の意識を目覚めさせる。

例えば、自分たちの生活する地域のよさを見だし、その地域のよさを核にして地域活性化に取り組む学習活動が考えられる。生徒は地域のよさを調査した上で案を構想し、地域の人や行政機関に提案しようとする。その際、ホームルームの仲間と力を合わせたり分担したりして構想を練り、一人ではできなかったことも、仲間がいることで成し遂げられることを実感する。また、そこでは、地域の魅力を地域の人に確認しようとしたり、地域活性化の提案を分かりやすく伝えようとしたりして、真剣に活動に取り組む。こうした調査や交流の場面では、仲間や専門家からの助言、地域の大人からの激励や指摘を受ける場面を設定することができる。生徒は地域活性化の提案活動を通して、力を合わせて取り組むことの大切さや地域の社会活動に参画し、地域社会に貢献する喜びなどを実感していく。

ただし、地域活性化について提案することだけが目的ではなく、地域のよさを感じ取ったことを常に意識させながら活動をすることが大切である。こうした探究活動に協働的に取り組むことを通して、生徒は協働的な学習のよさや意義を学ぶことができる。協働的に学ぶことは総合的な探究の時間だけでなく、学校教育全体で進めていくものであるが、あらかじめ一つの決まった答えのない課題の解決や探究活動だからこそ協働的な学習のよさが見えやすいという面がある。

(4) 主体的かつ協働的に学ぶ

協働的に取り組む学習活動においては、「なぜその課題を追究してきたのか（目的）」、「これを追究して何を明らかにしようとしているのか（内容）」、「どのような方法で追究すべきなのか（方法）」などの点が生徒の中で繰り返し問われることになる。このことは、生徒が自らの学習活動を振り返り、その価値を確認することにもつながる。協働して学習活動に取り組むことが、生徒の課題の解決や探究活動を持続させ発展させるとともに、一人一人の生徒の考えを深め、自らの学習に対する自信と自らの考えに対する確信をもたせることにもつながる。ホームルームや学年集団を生かすことで、個の学習と集団の学習が互いに響き合うことに十分配慮し、質の高い学習を成立させることが求められる。

生徒が社会に出たときに直面する様々な問題のほとんどは、一人の力だけでは解決できないもの、協働することでよりよく解決できるものである。しかし、問題を自分のこととして受け止め、よりよく解決するために自分が取り組もうとする主体性がなければ、協働は成り立たない。

総合的な探究の時間は、協働的な学習を基盤とする。しかし、その目指すところは、目標に明示したように一人一人が自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を養うことにある。指導計画の作成の段階、学習活動を行う段階、学習評価を行う段階のいずれにおいても、このことを意識しておきたい。

協働的に学ぶということはそれぞれの個性を生かすということでもある。ホームルームの中には、内省を好む生徒もいれば、他者との関わりに困難さを感じる生徒もいて当然である。全ての生徒を同じ方向に導くということではなく、それぞれの生徒なりに主体的に学ぶこと、協働的に学ぶことのよさを実感できるように工夫することが必要である。

そのためにも、主体性と協働性の両方をバランスよく意識したい。第1の目標の中に探究に主体的・協働的に取り組むことが明示されたこと、各学校が育成を目指す資質・能力を設定するに当たり「学びに向かう力、人間性等については、自分自身に関すること及び他者や社会との関わりに関することの両方の視点を踏まえること」とされた趣旨は、こうした主体的であることと協働的であることの両方が重要であるとしたことによるものである。なお、従来「協同的」としてきたものを今回の改訂で「協働的」と改めた趣旨は、意図するところは同じであるが、ここまで述べたような、異なる個性をもつ者同士で問題の解決に向かうことの意義を強調するためのものである。

第2節 探究の過程における指導のポイント

1. 課題の設定

総合的な探究の時間にあっては、生徒が実社会や実生活に向き合う中で、自ら課題意識をもち、その意識が連続発展することが欠かせない。しかし、生徒が自ら課題をもつことが大切だからといって、教師は何もしないでじっと待つのではなく、教師が意図的な働きかけをし、支援することが重要である。例えば、人、社会、自然に直接関わる体験活動においても、学習対象との関わり方や出合わせ方などを、教師が工夫する必要がある。

課題の設定においては、次の点に配慮することが大切である。

- 人、社会、自然に直接関わる体験活動を重視し、学習対象との関わり方や出合わせ方などを工夫すること
- 事前に生徒の発達や興味・関心を適切に把握すること
- これまでの生徒の考えとの「ずれ」や「隔たり」、対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせるように工夫すること

事例① 体験活動から課題を設定する

「海岸と河川のフィールドワーク」、「A市とB市の現地調査」など、自ら課題を発見できるような体験活動を位置付けたり、体験活動後に感じたことを明らかにしたりすることで、「どうしてこのようになっているのか」、「どうして違うのか」などの問題に気づき、課題へと高めていくことが期待できます。

実践例 マイクロプラスチックの現状を知る



【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・理科における環境問題や科学技術の進歩と人間の生活に関わる学習で身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

●多様な記録方法

- ・気づきや発見、疑問に思ったことをその場で効果的に記録できるノートやカードを用意する。
- ・ICT端末などを用いて実際の様子を写真や映像として記録する。

事例② 資料を比較して課題を設定する

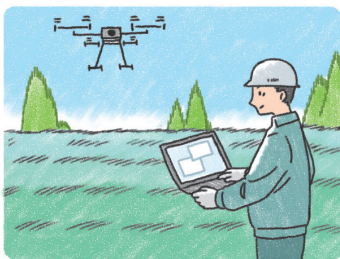
複数の資料を比較することで、生徒から疑問が生まれやすくなります。生徒は資料の違いからその原因を類推するなどして課題を明らかにしていきます。

実践例 対比する資料の提示

対比する資料の例

A市の農業の状況	B市のスマート農業の取組
A市の生産年齢人口比率	B市の生産年齢人口比率
A市の10aあたりの生産量	B市の10aあたりの生産量
A市の10aあたりの生産費	B市の10aあたりの生産費

現在の農業では、高齢化が進み、後継者不足、エネルギーや環境問題についても課題が多くある。



農業の省力化が進み、人材や後継者不足の解消に期待ができる。一方で、就農者のICTスキルを高める方法を考えていく必要がある。

【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・対比する資料、視覚的に捉えやすい写真や映像等を活用し、焦点化して課題を設定する。
- ・公民科の少子高齢社会における社会保障の充実・安定化の学習などで身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

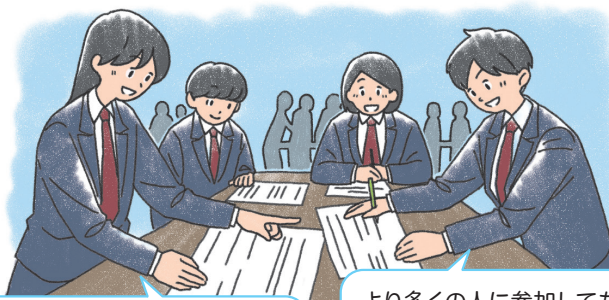
●ICTの活用

- ・端末等で、提示の工夫による資料を細部にわたって確認したり、他者と課題を共有したりする。
- ・RESAS等のシステムを用いて、生徒の予測と実際のデータとの「ずれ」や「隔たり」が生じるような統計資料を用意することが考えられる。

事例③ シミュレーションを通して課題を設定する

実際の場面を想定したり、シミュレーションを行ったりすることで、起こりうる問題状況を明らかにし、課題を設定していきます。

実践例 地域をPRするイベントに向けたシミュレーション



どんな人がイベントに参加してくれるかによって、PRする内容や伝え方が変わってくるね。

より多くの人に参加してもらうためには、車いすで移動できるように会場のレイアウトを工夫する必要があるね。

【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・イベントを開催するに当たって考えられる様々な課題を幅広い視野から設定する。

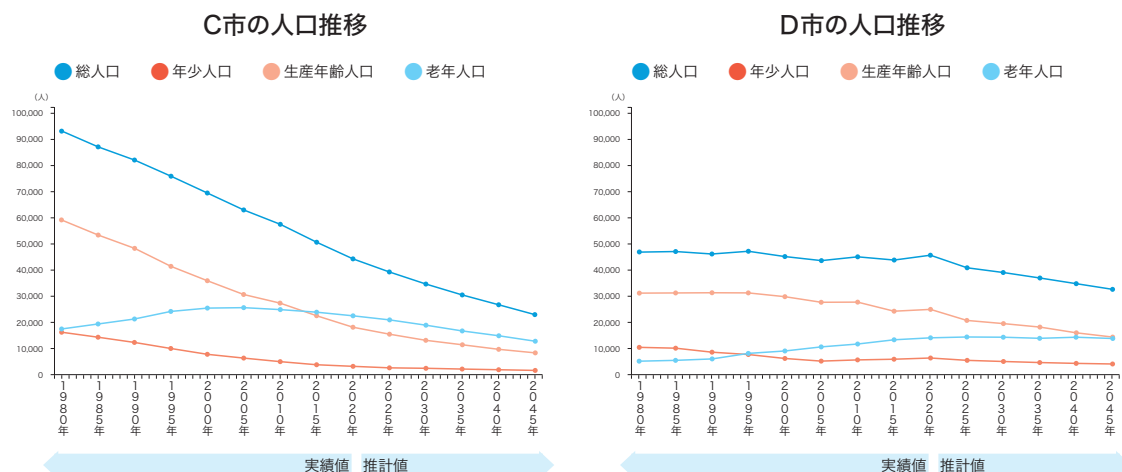
●自律的な探究

- ・想定した状況の中から、自分にとって関わりが深い課題となるように課題を抽出する。

事例④ グラフを読み解いて課題を設定する

グラフなどの統計資料の量の多寡や推移、構成比などに着目することで、生徒は調査対象の今後を予想したり、問題点を見いだしたりすることができます。統計資料を根拠に問題状況を明らかにし、課題を設定していきます。

実践例 人口推移に関するグラフの提示



(1) 人口推移の特徴をグラフから読み取る。

「私たちが暮らすC市と、隣のD市は、現在の人口規模は同じくらいだ」

「C市は、総人口が減少しているが、D市の総人口は大きく変わらない」

(2) 各自で課題を明らかにする。

「同じ人口規模の自治体でも、D市と違ってC市の人口の減少幅が大きいのはなぜか」

「C市は、すでに老年人口が生産年齢人口を上回っているが、行政サービスに支障はないのか」

「C市でこのまま人口が推移していった際に生じる課題は何か」

「D市はなぜ少子高齢化の進行が緩やかなのか」

(3) 関連して調査する必要のある項目はあるか。

「C市とD市の産業はどのように違うのか」

「C市とD市の行政サービスに違いはあるか」

「C市とD市の生活水準に違いはあるか」

「C市の福祉や介護の政策はどのようになっているか」

【ポイント】

●探究の過程の高度化

- 複数の統計資料からデータを比較したり、自分自身の体験と関連付けたりして考えると同時に、話し合いによって他者の読み取り方を参考にすることで、より掘り下げた課題を設定する。

- 数学科のデータ分析や、情報科のデータ活用に関する学習などで身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

●自律的な探究

- 生徒にとって身近な地域に関する統計資料を使用することで、生徒自身にとって関わりが深い課題になるようにする。

●統計資料の準備

- RESAS等のシステムを用いて、生徒の予測と実際のデータとの「ずれ」や「隔たり」が生じるような統計資料を用意することが考えられる。

事例⑤ ブレインストーミングで課題を設定する

テーマについて自由にアイデアを出し合いながら、新しい気付きを得ることができます。自由な意見交換を通して柔軟に発想を広げ、課題を設定していきます。

実践例 地球環境について
ブレインストーミングする

「推奨温度よりも夏は冷房の設定温度を1度上げ、冬は暖房の設定温度を1度下げることになっているよ」

「それだけで効果があるのかな」

「二酸化炭素の排出量の削減につながるね。具体的にはどのくらいの削減になるのかな」

「それが分かるデータや資料を探してみよう」

「電力会社などのHPにもあるかな」

「無理なく環境にもやさしく、電気代の削減にもなるのではないかな」

課題：誰もが取り組める効果的な環境保全は何か。

【ポイント】

●探究の過程の高度化

・多角的に考えて意見を出し合い、幅広い状況に気付きながら課題を設定する。

●ブレインストーミングのルール

①批判禁止：他のメンバーのアイデアは批判しない。

②自由奔放：アイデアは自由奔放であればあるほどよい。

③質より量：アイデアの質を求めるのではなく、量を求める。

④結合や改善：アイデアの付け足しや発展を積極的に行う。

事例⑥ KJ法的な手法で課題を設定する

付箋（カード）を活用したKJ法的な手法を用いて、体験活動などを通して生まれた気付きや疑問を類型化することで、課題を設定していきます。

実践例 付箋（カード）を基にした話し合い



- (1) 体験活動後に感じたことや疑問を付箋（カード）に書く。
- (2) 性質などが共通する付箋（カード）を同一グループとしてまとめていく。
- (3) 付箋（カード）のまとまりごとに、マーカーなどを使いタイトルやキーワードを付ける。
- (4) タイトルやキーワードを基に話し合い、取り組むべき課題を設定する。

【ポイント】

●付箋（カード）の使い方の工夫

①一枚に対して一つの気付きや疑問を書くようにする。その際、色分けなども工夫する。

②付箋（カード）の向きをそろえ、仲間分けをしやすいようにする。

③マーカーなどを使い付箋（カード）の分類を行う。

●少数意見の取扱い

・どのグループにも属さなかった意見も、一つの意見として尊重する。

事例⑦ 対象へのあこがれから課題を設定する。

地域や社会のために仕事をしている人との出会いは、「自分もより深く関わりたい」、「その人に近付きたい」という対象へのあこがれを抱かせます。対象のよさや価値、現在の状況等を実感することを通して、課題を設定していきます。

実践例 宇宙開発を支える産業に携わる人々に 対するあこがれを抱く出会い

- (1) 宇宙開発の状況について知る。
- (2) 宇宙開発技術者から直接話を聞く。
- (3) 宇宙開発の状況や実態について、研究開発の現場を直接見て、体験する。
- (4) 生徒自身にとって、自分との関わりが深まるような宇宙開発における学習課題を設定する。

「宇宙開発技術者の話を聞いて、航空機のエンジニアにあこがれて航空会社に入社したことが分かった」

「一人の飛行士と何千人もの地上クルーとの協力で成り立っていることが分かった」

「自分が宇宙に関わる仕事に就くためには何が必要なのだろうか」

【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・インタビューや職場体験から得られた情報から深く掘り下げて課題を設定する。

●自律的な探究

- ・自分の進路と直接関わる学習対象を課題として設定する。

●対象の吟味

- ・対象を選定する際は、探究となり得る対象かどうか吟味する。

●キャリア教育・自己の在り方生き方との関連

- ・対象との関わりの中で、自分らしい役割の果たし方や生き方を考える機会となるように留意する。

事例⑧ 問題を序列化して課題を設定する。

これまでの経験や体験を通して明らかになった問題を序列化して整理することで、問題を焦点化し、課題を設定していきます。

実践例 情報化の進展に関する問題の序列化

デジタル化の急速な進展に高齢者がついていけない。

若者のデジタルへの依存度が高まっている。

通信障害の際に、スマートフォンのアプリが利用できない。

停電や電力不足などで、災害時に機能しなくなる。

.....

- (1) カードや付箋紙に問題を書き出す。
- (2) 序列化するための尺度を決める。
- (3) 尺度に沿って序列化する。

課題：高齢者にとって役立つデジタル活用講座を企画しよう

序列化するための尺度：
実現可能性

【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・「効果性」、「実現可能性」、「公共性」、「緊急性」、「経済性」、「安全性」などの尺度から、焦点化して、課題を設定する

●自律的な探究

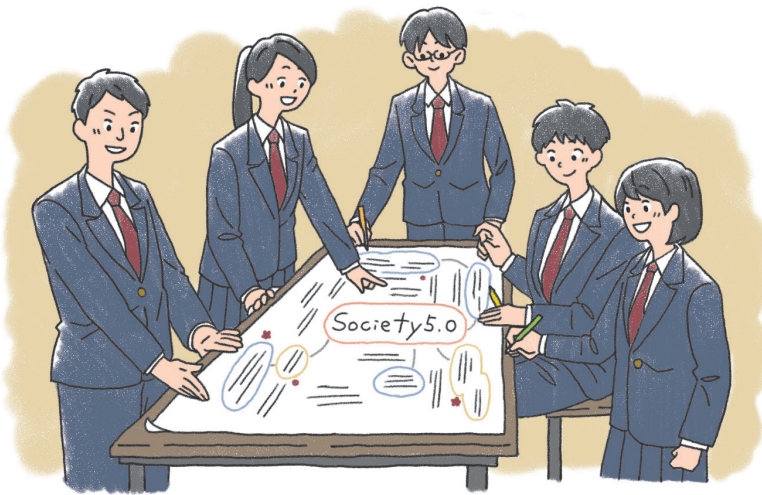
- ・自分の力で取り組める実現可能性の高い課題を選んだり、自分との関わりが深まるような課題となったりする。

事例⑨ ウェビングでイメージを広げて課題を設定する。

個人やグループで、キーワードを基に、文字言語を使って発想を広げ、系統ごとに分類したり、多面的に捉えてたりして課題を設定していきます。

実践例 「society 5.0」をテーマにしたウェビングの作成

- (1) 中心テーマを決める
- (2) テーマから連想すること、関連することを書き込む。
- (3) 完成したウェビングを分析する。
 - ・同じ内容を線で囲む。
 - ・関連あるキーワードを線でつなぐ。
 - ・重要だと思うキーワードに印を付ける。
 - ・他者との考えを比較しながら、課題を明らかにしていく。

**【ポイント】**

- 探究の過程の高度化
 - ・ 中心テーマを多面的に捉えて幅広い可能性から課題を設定する。
- イメージが広がる中心テーマの設定
 - ・ 学年テーマ
 - ・ 地域や社会の特色
 - ・ きっかけとなる体験など
- ウェビングの共有と分析
 - ・ ウェビングを基に話し合い、明らかになった包括的な問題から課題を設定する。
 - ・ 他者の考えと比較する中で問題が共有化され、課題意識が高まる。

- (ア)「外食した飲食店で、ロボットが注文した食事を運んできたよ」
「入店の際に、ロボットがお出迎えなども、見かける光景だね」
- (イ)「携帯電話やタブレット端末などで、AIによる音声アシスタントで会話をしたり、問いかけに対する返答があったりするね」
「自動車やエアコン、掃除機などの自動化もあるんじゃないかな」
「小型バスの運用に向けて試運転しているのもよく見かけるようになったね」
「過疎化の地域や、農業や、福祉の分野でも活用が進んでいるから、今後、様々な分野での可能性が広がるよね」
- (ウ)「スマートフォンにより、位置情報を活用したアプリが多くなっているようだけど、プライバシーなどの個人情報に心配」
「個人情報についてのルール整備も必要になるね」

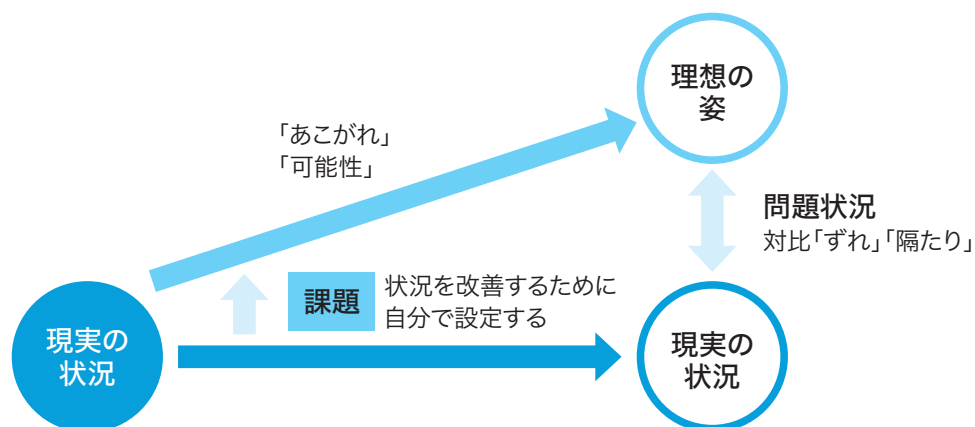
課題：ロボットの導入のメリットとデメリットについて

課題：AIが今後どのように産業や生活分野に使われるか

課題：セキュリティー対策やプライバシーの問題についての対策

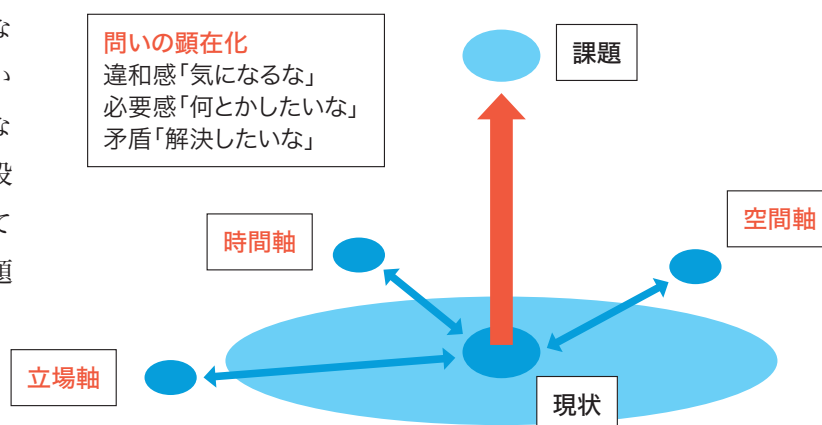
総合的な探究の時間においては、生徒が自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断するなど、生徒の主体性や興味・関心を十分に生かすことが望まれる。生徒の主体性や興味・関心を十分に生かすとは、課題の設定を生徒に任せきりすることではないことに留意が必要である。

生徒は、潜在的に自分の将来に対しての夢や不安を抱き、将来を展望している。課題を設定する上では、現実の状況と理想の姿との対比などから問題を見だし、課題意識を高めることが大切となる。理想の姿を思い描くことによって、現実の状況との「ずれ」や「隔たり」が明確になり、その問題状況を改善するために課題を設定することになる。理想の姿を明確にできなければ、問題状況や課題を明確にすることもできない。生徒が理想の姿を明確にもち、問題状況を把握し、適切に課題を設定できるようにする教師の役割が重要となる。



課題は現在の状況を他と比較することで設定することができる。例えば、現状を時間軸で分析すると、過去はどうだったのか、未来はどうあるべきなのかといった思考が促され、問いが生じる。また、現状を空間軸で分析すると、他の地域や国ではどうなのか、といった思考が促され、さらに、問いが生じる現状を立場軸で分析し、自分以外の専門家の方々や地域の大人、友達の考え等と比較したりすることも考えられる。

教師は、このようにして生じた問いを、生徒たちが自覚化できるように顕在化させることが大切である。問いが顕在化されることにより、生徒は違和感（気になるな）や必要感（何とかしたいな）、矛盾（解決したいな）などを抱くようになる。そこで設定される課題は、生徒にとって身に迫った、切実感のある課題になる。



2. 情報の収集

設定した課題を基に、生徒は、観察、実験、見学、調査、探索、追体験、交流などを行う。こうした学習活動によって、生徒は課題の解決に必要な情報を収集する。情報を収集する活動は、そのことを生徒が自覚的に行う場合と無自覚に行っている場合とがある。目的を明確にして調査したりインタビューしたりするような活動では、自覚的に情報を収集していることになる。一方、体験活動に没頭したり、体験活動を繰り返したりしている時には、無自覚のうちに情報を収集していることが多い。そうした自覚的な場と無自覚的な場とは常に混在している。このように情報を収集することにおいても、体験活動は重要である。

情報の収集では、次の点に配慮することが大切である。

- 学習活動によって「数値化した情報」、「言語化した情報」、「感覚的な情報」など、収集できる情報の違いがあることを意識すること
- 課題解決のための情報の収集を自覚的に行うこと
- 収集した情報を適切な方法で蓄積すること
- 各教科・科目等で身に付けた資質・能力を発揮して情報を収集すること

事例① 観察・実験を通して必要な情報を収集する

観察・実験を通して、客観的なデータを手に入れ、自分の考えを確かにとともに、説得力のある提案へと高めていきます。

実践例 まんじゅうに合う地域の茶を明らかにする実験

〇〇が開発したまんじゅうに合う茶の特徴を明らかにするために、様々な茶の味わいについて、味覚の6要素で分析し、多くの人がまんじゅうに合うと感じた茶についての共通点を明らかにする。主観的・感覚的なデータを数値化して収集することができる。

上位3茶 共通点
・旨味 3.2以上
・酸味 2.0未満

	甘味	苦味	渋味	旨味	酸味	塩味
1位 沢渡ほうじ茶	2.81	3.81	3.44	3.55	1.85	1.47
1位 土佐の紅茶	3.58	2.23	2.42	3.28	1.91	1.70
3位 大抜茶	2.85	3.27	3.06	3.31	1.96	1.51
4位 伝統銘茶	2.40	4.00	3.71	3.08	2.17	1.62
5位 碁石茶[塩入り]	2.68	2.30	2.40	2.09	2.68	3.96
6位 碁石茶[プレーン]	2.79	2.53	2.80	2.19	2.94	2.58

【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・観察・実験の目的を明確にし、仮説を検証するために妥当な手法であるか整合性を確認する。
- ・理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどの科学的に探究する学習活動で身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

●自律的な探究

- ・探究の過程を見通し、分析や考察のために必要なデータを収集する。

事例② インターネットで情報を収集する

個々の様々な疑問に対して瞬時に情報を検索できます。検索の方法やwebページの特徴を理解することで、膨大な情報源の中から目的に応じた情報を適切に取り出すことができます。

実践例 インターネットによる情報収集



【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・自分にとって必要な情報を焦点化して情報を収集する。
- ・テーマに即し、幅広い可能性を視野に入れながら、視点を広げて情報を収集する。

●情報の信憑性の吟味

- ・webページの情報が確かな情報であるかどうかを検討する。例えば、ホームページのURLにある、発信元の組織の種類を表す「ドメイン名」を確認する（事例④を参照）など。
- ・複数の情報源から情報を収集する。

事例③ 図書館や図書室で情報を収集する

目的に合った書籍等の検索方法を身に付けることで、図書館等をよりよく活用することができます。また、学校司書等からのアドバイスなどを聞くことで、より有益な情報が得られます。

実践例 検索した文献からの情報収集



〈コンピュータ検索〉

図書館にある蔵書検索に「書籍名」、「作者名」、「出版社名」等、見付けたい書籍の情報を入力する。

〈情報源のメモ〉

□どこから(出版社名、書籍名)

□いつ(新聞：発行日、書籍：刊行された年月)

【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・自分にとって必要な情報を焦点化して情報を収集する。
- ・テーマに即し、幅広い可能性を視野に入れながら、視点を広げて情報を収集する。

●情報源の記録

- ・情報源は必ず記録しておき、出典を明らかにできるようにしておく。

●図書館ネットワーク等の活用

- ・図書館ネットワークを活用して、他の図書館との書籍の相互貸借もできる。
- ・電子書籍の貸出など、オンラインのサービスを活用する。

●蔵書検索システムや学校司書等の活用

- ・事前に必要な書籍の情報（書籍名、作者名、出版社名等）を調べておく。
- ・収集しようとする情報を学校司書等に伝えて支援してもらう。

コラム インターネットで情報を収集する際の豆知識

【検索エンジンを活用した情報収集】

検索エンジンを活用して情報を検索する。検索サイトはいくつかあるが、基本的な検索の方法は同じである。以下は代表的な検索方法である。

検索方法	検索方法の特徴や使用方法, 活用例
AND検索	指定する全てのキーワードを含むwebページを探す検索方法。入力するキーワードの順序も検索結果に影響するので留意が必要である。 【使用方法】ワードとワードの間にスペースを入れる。 【活用例】〇〇市の産業について知りたいときに、「〇〇市 産業」と入力して検索する。
OR検索	複数のキーワードのうち少なくともどれか1つを含むページを探す検索方法。 【使用方法】ワードとワードの間に「OR（大文字）」を入れる。 【活用例】「環境保全」と「環境保護」という意味の似ているワードを一度に検索する。
ー（マイナス）検索 （除外検索）	指定するキーワードを含むwebページを除く検索方法。 【使用方法】除きたいキーワードの前に「-（半角マイナス）」を付ける。 【活用例】食料品について調べる際に、「食料品 - 価格」と検索すると、価格に関する情報は表示されにくくなる。
フレーズ検索 （完全一致検索）	複合語のような長いキーワードを含むwebページを探す検索方法。 【使用方法】キーワードを「" "（ダブルクォーテーション）」で囲む。 【活用例】「〇〇市公園」と入力して検索すると、「〇〇市公園」という固有の公園についての情報が上位に表示される。

【データベースを活用した情報収集】

インターネット上にある以下のオンラインデータベースを活用することもできる。

主な分類	活用方法
事典・辞典	事典・辞典類の電子版から情報を収集する。
新聞	新聞記事をキーワード検索して情報を収集する。（例：各新聞社のデータベースなど）
論文	論文をキーワード検索して情報を収集する。（例：CiNiiなど）

【統計資料を活用した情報収集】

インターネットでは、公的機関が発信している統計資料からデータを収集することができる。

統計資料を閲覧できるWebサイト	収集できる情報
e-Stat（イースタット） （政府統計の総合窓口） https://www.e-stat.go.jp/	日本の統計が閲覧できる政府統計のポータルサイト。「人口・世帯」「労働・賃金」「運輸・観光」「行財政」など17の分野の情報を収集することができる。
RESAS（地域経済分析システム） https://resas.go.jp/	地域経済に関する様々なビッグデータ（産業の強み、人の流れ、人口動態など）を、地図やグラフで可視化するシステム。データ分析支援機能を利用することもできる（107頁参照）。
リサーチナビ（国立国会図書館） https://rnavi.ndl.go.jp/	統計を検索するためのツールや統計書を、種類や分野ごとに紹介している。

事例④ 電子メールで情報を収集する

電子メールを活用することで、様々な立場の人から課題解決に必要な情報を集めることができます。電子メールのメリットは、デジタルデータのため、加工や二次利用がしやすい点や直接会うことが難しい相手から必要な情報を得ることができる点などにあります。

実践例 研究者への電子メールによる情報収集

TO: xxxxxx@xxxx.ac.jp

件名: 発酵システムについてのご質問

〇〇大学家政学部 〇〇〇〇先生

初めてご連絡させていただきます。〇〇高等学校の〇〇〇〇と申します。
私は現在、高校の「総合的な探究の時間」において発酵食品について研究しています。
〇〇大学では発酵食品の先進的な発酵システムの研究を行っているとうかがいました。

もし可能でしたら、ぜひ、以下のことについて教えていただきたいと思い、メールをさせていただきました。
1. 発酵食品が与える健康への影響
2. 発酵システムの実用化の見通し

お忙しいところ恐れ入りますが、どうぞよろしくお願いいたします。

〇〇高等学校 〇〇〇〇
TEL000-000-0000
mail: 〇〇〇〇@...ed.jp

送信

相手のアドレスは正確に入力する

件名は相手が一目見て内容が分かるようにする

相手先と自分の紹介を書く

依頼・質問内容を簡潔にまとめる。

署名・連絡先を書く

【ポイント】

- 探究の過程の高度化
 - ・国語科における紹介、連絡、依頼などの実務的な手紙や電子メールを書く活動を通して身に付けた資質・能力を効果的に活用する。
- 情報セキュリティの確保
 - ・知らない人からのメールや添付ファイル、不明なリンク先は不用意に開かないようにする。
 - ・プライバシーの保護の観点から掲載する個人情報は必要最小限にする。

TO：メールの送信先。返事をもらいたい相手や責任をもってメールを処理してもらいたい相手を指定する。複数のアドレスを指定することもできるが、TOに指定されているアドレスは、送信した全ての受信者に表示されるため、個人情報の流出に注意が必要である。

CC：カーボン・コピー（Carbon Copy）の略。情報を共有したい相手を指定する。CCに指定されている人は、基本的に返信を求めてはいない。TOと同様に、CCに指定されているアドレスも、送信した全ての受信者に表示されるため、個人情報の流出に注意が必要である。

BCC：ブラインド・カーボン・コピー（Blind Carbon Copy）の略。BCCの受信者のアドレスは、他の受信者に表示されないため、個人情報流出の危険性が低く、同時に同じ内容のメールを多数の人に送りたい場合などに有効である。

メールアドレスやホームページのURLには、発信元の組織の種類を表す「ドメイン名」がある。

〇〇〇〇@〇〇〇.co.jp

ドメイン名

ドメイン名を確認することで、なりすましやフィッシングによる被害を防ぐことにつながる。

日本の主なドメイン名	対象となる組織等
.co.jp	企業等
.or.jp	社団法人、財団法人、NPO法人等
.ac.jp	学校法人、大学・短期大学等
.ed.jp	保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校等
.lg.jp	地方公共団体等
.go.jp	政府機関、独立行政法人等

事例⑤ 電話で情報を収集する

電話を活用することで、見学などで施設等を訪れることなく、課題解決に必要な情報を即時的に集めることができます。またメールや見学などの具体的な活動に発展することも考えられます。

実践例 電話による情報収集の手順例

	手順	内容
1	氏名や所属先、電話番号等を確認する	氏名()所属先() 電話番号：〇〇-〇〇〇〇-〇〇〇〇
2	自己紹介をする	私は〇〇高等学校〇年の()と申します。
3	テーマや聞きたいことを伝える	〇〇というテーマで、〇〇のことについて研究をしています。 (例)〇〇についての詳しい資料をメールでお送りいただけないでしょうか。 (例)～について調べたいのですが、どこでどんなに聞くと情報が得られますか？ (例)詳しくお話をお聞きたいのですが、直接伺ってもよろしいでしょうか。
4	お礼を伝える	ご協力いただきありがとうございました。

【ポイント】

- 目的の明確化
 - ・ 情報収集の目的に合った方法であるかを確認する。
- 相手への配慮
 - ・ 言葉遣いや時間帯など、マナーに十分配慮する。
- 電話の機能の活用
 - ・ スピーカー機能を使うと、同時に複数人で情報を共有できる。

事例⑥ 手紙で情報を収集する

電子メールや電話等でやりとりができない場合には、手紙を活用した情報収集を行うことが考えられます。時間はかかりますが、丁寧な印象を与える情報収集の手段です。また、デジタル化が難しい現物を介して情報を収集する際にも有効な手段と考えられます。

実践例 認定こども園の園長先生への手紙を用いた情報収集

〇〇園長 〇〇〇〇先生

拝啓

銀杏の葉も色づいて秋が深まってまいりました。園長先生におかれましてはますますご健勝のことと拝察いたします。

さて、先日は突然のお電話にも関わらず、ご対応くださりまして誠にありがとうございました。お電話でお伝えしました通り、私は、総合的な探究の時間で、子供が興味をもつおもちゃについて探究しています。実際にペットボトルやビニールテープを利用して手作りおもちゃの作成をしました。試作品をお送りしますので、改良点などについてご指導をお願いいたします。

その他、貴園で園児がどのようなおもちゃに興味を示しているか、教えていただけないでしょうか。引き続き、子供が遊びを通して成長できるようおもちゃを考えたいと思います。そして、実際に貴園の園児のみなさんと一緒に作成したおもちゃで時間を共有したいと思います。

お忙しいとは存じますが、同封の質問項目についてご回答いただけると幸いです。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

敬具

〇〇年〇〇月〇〇日

〇〇高等学校
〇〇〇〇

【ポイント】

- 探究の過程の高度化
 - ・ 国語科における紹介、連絡、依頼などの実務的な手紙や電子メールを書く活動を通して身に付けた資質・能力を効果的に活用する。
- 手紙を送る際の留意点
 - ・ 返事をお願いする場合は自分の宛先を書いた返信用封筒やはがきを同封する。
 - ・ 相手に対して失礼のないように文章表現には十分配慮する。

前文

冒頭に頭語(「拝啓」など)を書き、時候のあいさつを書く。

主文

用件を書く。
・ 総合的な探究の時間で取り組んでいること
・ 相手に教えてもらいたいこと など

末文

結びのあいさつを書き、頭語と対応する結語(「拝啓」に対する「敬具」など)を書く。

後付け

日付や自分の名前を書く。
縦書きでは、最後に宛名を書くことが一般的である。

事例⑦ 訪問インタビューで情報を収集する

訪問インタビューでは、専門家をはじめとする外部の人々の専門的な知見や体験談、その場で気付いたことなどの感覚的な情報を得ることができます。チェックリストを活用して取材の準備を行うことも有効です。

実践例 酪農家への取材による情報収集



チェックリストの例	チェック欄
①訪問先にアポイントを取っている	
②質問する目的を説明できる	
③質問する内容を整理している	
④質問者や記録者などの役割を決めている	
⑤記録用紙やカメラ等の取材道具を準備している。	
⑥事前に質問する内容を伝えている	
⑦写真や動画等を記録することの許可を得ている	
⑧訪問先への行き方や費用を確認している	

【ポイント】

- 探究の過程の高度化
 - ・目的に即してインタビューの対象や質問内容を決めている。
 - ・国語科において育成される、話の内容に対する共感を伝えたり、相手の思いや考えを引き出したりする資質・能力を効果的に活用する。
- 自律的な探究
 - ・自分の希望する進路に関わる人やあこがれを抱いている人を訪問することで、自己課題に迫る情報収集になる。
- 訪問先への事前連絡
 - ・必要に応じて、訪問先に生徒が依頼する前に、教師が探究活動の趣旨を伝える。
- 肖像権や著作権への配慮
 - ・写真や音声、動画等を記録する際は、事前に相手の許可を得る。

事例⑧ リモートインタビューで情報を収集する

リモートインタビューでは、電話と違い、画面越しに相手の表情を見ながらインタビューすることができます。また、関連する資料等を同時に共有することも可能です。さらに、相手の理解を取った上でインタビューを録画し、デジタル情報として蓄積することもできます。

実践例 オンライン会議システムを使用した情報収集



【ポイント】

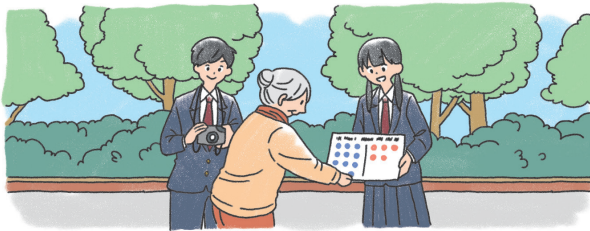
- ICTの活用
 - ・双方のICT環境（使用するオンライン会議システムを含む）を事前に確認する。
 - ・通信状況などに不具合が生じた場合にどのように対応するか事前に確認しておく。
- 質問事項等の事前連絡
 - ・オンライン会議システムの接続情報などをあらかじめ伝えておく。
 - ・事前にどのような質問をするか相手に知らせておくことスムーズにインタビューすることができる。

事例⑨ 街頭インタビューで情報を収集する

目的に合わせて、インタビューの準備を計画的に行うことで、様々な立場の人から多様な考えを直接得ることができます。チェックリストを活用して取材の準備を行うことも有効です。

街頭インタビューでは、フリップボードを提示することで、短時間で多数の人から回答を得ることができます。

実践例 フリップボードを提示した
街頭インタビューによる情報収集



チェックリストの例	チェック欄
①インタビューする対象や、回答の目標数などを事前に決めている。	
②インタビューの目的が説明できる。	
③質問内容が整理されており、相手が答えやすい質問を用意している。	
④質問者や記録者などの役割を決めている。	
⑤記録用紙やカメラ、フリップボード等の取材道具を準備している。	

〈具体的なインタビューの手順〉

- (1)自己紹介をする。
- (2)インタビューの目的や方法に関して説明し、インタビューへの協力について了承を得る。
- (3)インタビューを始める。
- (4)インタビューを終え、謝意を伝える。

【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・国語科における異なる世代の人や初対面の人にインタビューする活動を通して身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

●インタビューを行う際の留意点

- ・相手の表情や話し方なども貴重な情報になるため、必要に応じて写真やタブレット端末を使用して動画で記録することも考えられる。その際は相手の許可を得るようにする。

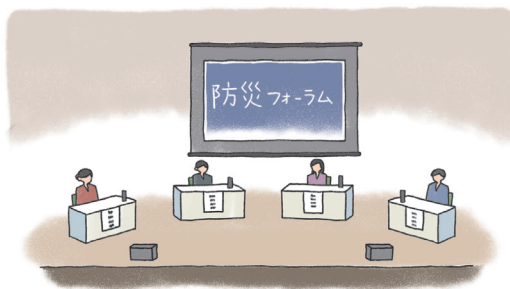
●フリップボードの提示

- ・フリップボードは、「質問内容を端的に表す」「答えやすい質問にする」といった視点で作成する。また、集計表を盛り込んでおくことで数値化した情報を収集できる。

事例⑩ 講演会・フォーラム等で情報を収集する。

オンラインで開催されるものも含め、講演会やフォーラムに参加し、専門家等の知見や研究成果を聞くことで、言語化された情報や、会場の雰囲気などの感覚的な情報を収集することができます。

実践例 防災に関する
フォーラムでの情報収集



【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・自分の設定した課題について質疑応答することで、深く掘り下げる機会とする。

●自律的な探究

- ・自分の課題に関わりの深い情報を収集するために、目的に合った講演会・フォーラム等を自ら選択している。

●講演会等で情報を収集する際の留意点

- ・学校で講演会等を開催する場合は、適切な講師を選定し、十分な打合せを行う。
- ・学校外の講演会等に参加する場合は、探究活動に位置付くように、カリキュラム・マネジメントを意識する。

事例⑪ アンケート調査で情報を収集する

アンケート調査は、多くの人の意見を集めて、その傾向を知りたいときに行います。聞きたい内容を端的にまとめ、答えやすい設問を用意することで、多くの人からのデータ収集が可能になります。また、質問の仕方や質問する相手によって結果が異なってくるため、目的に合わせてアンケートの準備を計画的に行うことが大切です。

実践例 多文化共生に関するアンケート調査による情報収集

多文化共生に関するアンケート

E市には、約1,000人の外国人が住んでいます。私たちは、日本人も外国人も、互いの文化や考え方を尊重し、安心して快適に暮らすことができる多文化共生の地域の実現を目指しています。そのために、多文化共生に関する地域の方々の意識調査を実施することとしました。アンケートへのご協力をお願いいたします。

個人が特定されることのないよう、アンケートの取扱いには十分注意いたします。また、授業の目的においてのみ使用し、第三者に提供することはございません。

1 あなたのお住まいの地域を選んでください。

- ①A地区 ②B地区 ③C地区 ④D地区 ⑤E地区
⑥F地区 ⑦その他

2 あなたの年代を回答してください。

- ①10・20歳代 ②30歳代 ③40歳代 ④50歳代
⑤60歳代 ⑥70歳以上

3 あなたは、〇〇町にどのくらい住んでいますか。

- ①1年未満 ②1年以上3年未満 ③3年以上5年未満
④5年以上10年未満 ⑤10年以上20年未満
⑥20年以上30年未満 ⑦30年以上

4 あなたは、国籍や民族などの異なる人々が互いに認め合い、共に暮らす社会の実現についてどう思いますか。

- ①重要だと思う ②どちらかと言えば重要だと思う
③どちらとも言えない ④あまり重要だとは思わない
⑤重要だと思わない

5 あなたは、普段生活をしていて、外国人住民の存在を身近に感じますか。

- ①とても身近に感じている ②ある程度身近に感じている
③あまり身近に感じない ④全く身近に感じない ⑤わからない

6 5で、「①とても身近に感じている」または「②ある程度身近に感じている」を選択された方にお尋ねします。どのような場面で外国人住民の存在を身近に感じますか。(自由記述)

ご協力いただきましてありがとうございます。

〇〇高等学校〇年 多文化共生グループ

【ポイント】

●自律的な探究

- ・探究の過程を見通しつつ、アンケート結果を予測しながら質問項目を設定して情報を収集する。

●有効な調査にするための留意点

- ・調査の目的や対象を明確にする。
- ・短く、分かりやすい質問文にする。
- ・質問項目を精選し短時間で回答できるようにする。
- ・単純な質問から意見を問う質問へ移っていくようにする。
- ・不特定多数を対象にする場合は、年齢層や居住地等を記入する欄を設けることも考えられる。
- ・個人情報の取扱いについて明記する。

●アンケート用紙を設置する場合の留意点

- ・管理や回収に関して、事前に管理者等の了承を得るようにしておく。

事例⑫ Webアンケートを活用して情報を収集する

インターネット上でアンケートを作成・実施できるツールを用いた情報収集です。あらかじめ用意されているテンプレートを使うことで簡単にアンケートを作成することができます。

紙媒体のアンケートでは印刷や配布、回収、集計などの作業が必要ですが、Webアンケートを活用することで、実施者・回答者双方の負担を軽減して、効率的に情報を収集することができます。

実践例 Webアンケートを活用した情報収集

健康に関するアンケート 締め切り：〇月〇日

1. あなたの年齢を教えてください。

☐ 10歳未満	☐ 50代
☐ 10代	☐ 60代
☐ 20代	☐ 70代以上
☐ 30代	☐ 無回答
☐ 40代	

2. あなたの性別を教えてください。

☐ 男性
☐ 女性
☐ 無回答

3. あなたは日頃、どのような運動をしていますか。

	ほぼ毎日 する	週に2~3日 程度する	週に1日 程度する	月に1日 程度する	ほとんど しない
ウォーキング	☐	☐	☐	☐	☐
ジョギング	☐	☐	☐	☐	☐
水泳(水中歩行を含む)	☐	☐	☐	☐	☐
健康体操(エアロビクス・太極拳等)	☐	☐	☐	☐	☐
球技(ゴルフ・バレーボール等)	☐	☐	☐	☐	☐

4. あなたが運動をする目的を教えてください。(複数回答可)

☐ 健康のため	☐ 楽しみ、気晴らしとして
☐ 体力増進・維持のため	☐ 友人・仲間との交流として
☐ ストレス解消のため	☐ 家族のふれあいとして

【ポイント】

●自律的な探究

- ・探究の過程を見通しつつ、アンケート結果を予測しながら、質問項目を設定して情報を収集する。

●目的に応じた質問項目の検討

- ・目的に照らして、年齢層や居住地等、質問項目の選択肢を十分に検討する。

●回答形式の検討

- ・回答形式には「ラジオボタン」、「チェックボックス」、「スケール」、「星評価」、「マトリックス」、「テキストボックス」など、様々な種類があり、質問内容に合わせて検討する。

●回答期間の設定

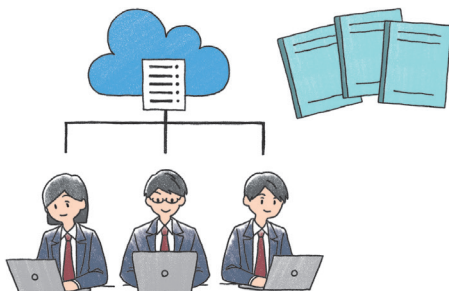
- ・回答期限を具体的に記載していないと回収率が低くなる可能性がある。

●多様な端末から回答を収集する工夫

- ・webサイトからのリンクや、二次元コードから回答フォームに誘導することで、手軽に回答してもらうことができる。

情報を適切な方法で蓄積する

収集した情報は形式をそろえて蓄積することで、必要なときにすぐに見返したり、情報の二次活用を効率的に進めたりすることができるようになります。情報収集の際は、その後の学習活動を視野に入れて、収集する情報の種類や量を考えます。また、収集した情報をどのような方法や形式で蓄積しておくか検討しておく必要があります。



【ポイント】

●自律的な探究

- ・探究の過程を見通し、「整理・分析」や「まとめ・表現」にも利用しやすいように方法や形式を考えてから、情報を収集する。

●収集した情報の蓄積方法

- ・体験で得た情報は、作文やカードなどで言語化して、写真データ等と合わせて蓄積する。
- ・集めた情報は、はじめは時系列で蓄積する。その後、同じ内容でまとめるなどして、情報の整理・再構成をする。
- ・個別の蓄積を基本とし、必要に応じてホームルームやグループで共同して蓄積する。

●ICT活用の利点と留意点

- ・クラウドサーバーを活用し蓄積することで、ICT端末から容易にデータを共有できる。
- ・写真データや音声ファイル等を共有する際には、著作権や肖像権に注意が必要である。

3. 整理・分析

様々な方法で収集した多様な情報を整理したり分析したりして、思考する活動へと高めていく。収集した情報は、相互につながりのない個別なものであり、設定した課題と照らし合わせたときに適していないものを含んでいたり、偏りや不足があったりする。それらを種類ごとに分けるなどして整理したり、細分化し因果関係を導き出したりして分析する。

このような学習活動を通して、生徒は収集した情報を比較したり、分類したり、関連付けたりして情報内の整理を行う。このことこそ、情報を活用した活発な思考の場面であり、こうした学習活動を適切に位置付けることが重要である。

整理・分析においては、次の点に配慮することが大切である。

- どのような情報が、どの程度収集されているかを把握すること
- どのような方法で情報の整理や分析を行うのかを決定すること
- 「考えるための技法」の活用を意識すること（53頁参照）
- 様々な教科・科目等での学習成果を生かすこと
- 適宜、課題の解決や探究活動の過程を振り返り、自分の取組と設定した課題との整合性を点検すること

事例① 時系列で整理・分析する

収集した情報を時系列に並び替えることで、変化や転換点に気付いたり、到達点や手順を明らかにしたりすることができます。その際、時系列ごとに複数の共通する視点から整理・分析することができます。

実践例 市域の中心部の商店街の変遷を 時系列で整理・分析する

- (1) 商店街の変遷や主な出来事について、文献や聞き取りなどによって情報を収集する。
- (2) 得られた情報をカードに書き出し、時系列に並び替える。
- (3) 商店街の店舗数や来街者数の変化と主な出来事に対応付けながら整理・分析する。

〇〇商店街の変遷

年	〇〇商店街 店舗数	1日当たりの 平均来街者数	町の人口	主な客層	主な出来事
1980年	60店舗	1,000人程度	12,000人	家族連れ	△△商店街との競争激化
1990年	58店舗	800人程度	11,800人	家族連れ	コンビニ出店
2000年	38店舗	600人程度	11,500人	高齢者	大型商業施設出店
2010年	20店舗	300人程度	10,200人	高齢者	ネットショッピングの普及
2020年	24店舗	700人程度	9,800人	高齢者 観光客	アニメとタイアップ

【ポイント】

●探究の過程の高度化

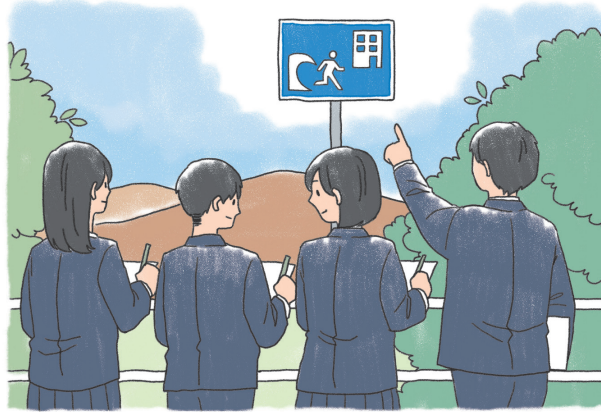
- ・時系列で並び替え整理しながら、目的に応じた視点を設定して整理・分析する。
- ・地理歴史科の生活圏の調査と地域の展望に関する学習や、家庭科の高齢期の生活と福祉、消費行動と意思決定に関する学習などで身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

事例② 地図を用いて整理・分析する

生徒がフィールドワーク等で調査・収集した情報を、地図を活用して整理・分析することができます。各種の地図を比較することで、事実や関係が把握しやすくなり、事実の特徴や傾向、偏り等を捉えることが可能になります。

実践例 地域の地形を踏まえた防災・減災について地図を用いて整理・分析

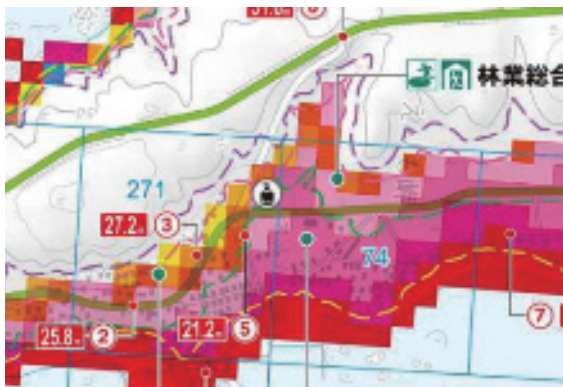
(1) 調査エリアを決め、フィールドワークで調査する



(2) 調査エリアについて、国土地理院の「地理院地図」を用いて地形や災害伝承碑などから、過去の災害を確認する



(3) ハザードマップ等と比較しながら分析する



【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・下記の「地理院地図」を活用したり、古地図などの文献を用いたりして、時間軸を遡り、地域の地形の変化などを確認することで、掘り下げて整理・分析する。
- ・地理歴史科の自然環境と防災に関する学習や、理科の自然景観と自然災害に関する学習で身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

●ICTの活用

- ・国土地理院の「地理院地図」(<https://maps.gsi.go.jp/help/intro/>)では、新旧の地図を比較したり、地形や避難場所を確認したりすることができる。
- ・タブレット端末で撮影した写真や動画等に記録された位置情報を活用することができる。

【地図を用いて整理・分析すると効果的な例】

- ・希少な植物の自生状況と土地の利用状況
- ・空き家・空き地の分布状況と賑わいの創出
- ・不審者の目撃情報と防犯カメラの設置状況
- ・地域の観光イベントの開催と人流の変化

など

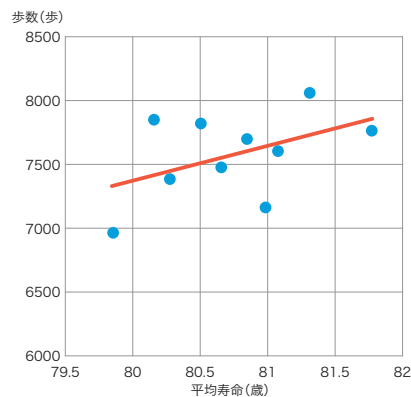
事例⑤ 統計的手法を用いて整理・分析する

収集した情報を統計的に整理・分析することで、事象の特徴を客観的に捉えたり、事実関係を推測したりすることができます。

実践例 歩数と平均寿命の関係を分析する

- (1) 調査したデータを表にする。
- (2) データの散らばりを散布図で表す。
- (3) 2つの指標の相関の強さを分析する。

地域	平均歩数 (歩)	平均寿命 (歳)
A	7,760	81.78
B	8,056	81.32
C	7,599	81.08
D	7,158	80.99
E	7,696	80.85
F	7,474	80.66
G	7,817	80.51
H	7,381	80.28
I	7,845	80.16
J	6,958	79.86



【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・目的に応じて、適切な統計手法やグラフを選択して、整理・分析する。
- ・数学科のデータ分析の学習で身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

●参考情報

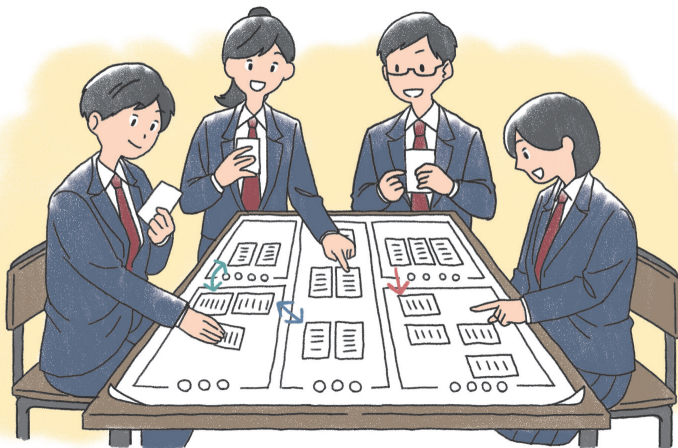
- ・総務省統計局の「なるほど統計学園」(<https://www.stat.go.jp/naruhodo/>)では、統計の基礎知識やグラフの作成方法、データの解析方法などについて紹介している。

事例⑥ KJ法的な手法を用いて整理・分析する

複数の情報から上位概念や法則などを見いだします。収集した情報を基にした新たな発見や各情報間の関係性に気付くことができます。

実践例 インターンシップで体験した内容の整理・分析

- (1) インターンシップで収集した情報を、一つずつカードや付箋紙などに書き出す。
- (2) 性質の近いものをまとまりとして集める。
- (3) まとまりごとにタイトルを付けて抽象化する。



【ポイント】

●まとまり間の関係を明示

- ・まとまり同士を線や矢印で結びながら、全体を整理することで、より広い視野で関係性を俯瞰して捉えることができる。

●対話を通じた抽象化

- ・カードの内容について対話を通して情報を共有し、共通理解を図りながら共通する性質を見だしていく。

●ICTの活用

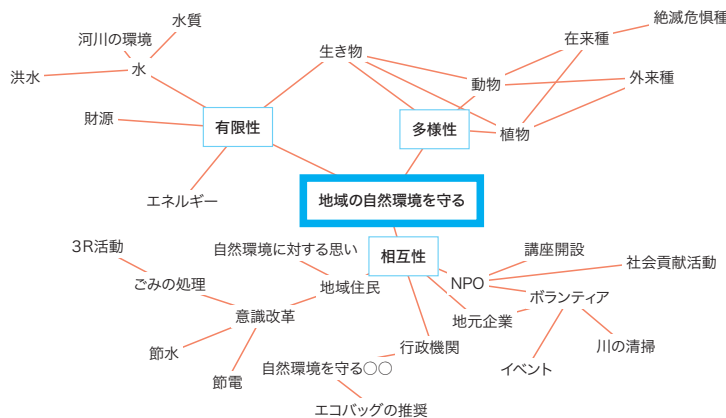
- ・デジタルホワイトボード等を利用することで、効率よく共有したり、データとして蓄積したりすることができる。

事例⑦ コンセプトマップを用いて整理・分析する

コンセプトマップは、事柄に関する複数の情報をマップ上に並べて線でつないだ図のことです。関連する追加的な情報を見いだしたり、関係や関連する情報を矢印で可視化することで全体像を把握したりすることもできます。

実践例 地域の自然環境を守る取組

- (1) 中心となる事柄(地域の自然環境を守る)を中央に置く。
- (2) 中心となる事柄がもつ性質(有限性, 多様性, 相互性等)を意識しながら, 収集した情報を書き出す。
- (3) 収集した情報を線や矢印で結び, その関係性を明らかにする。



【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・コンセプトマップを用いることで, 必要な情報を追加しつつ, 幅広い可能性を視野に入れながら多面的・多角的に整理・分析する。

●考えるための技法を自在に活用

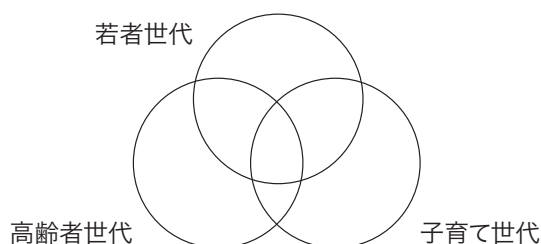
- ・コンセプトマップを用いて整理・分析することで, 考えるための技法(関連付ける等)が活用・発揮される。
- ・収集した複数の情報について, それぞれの特徴や性質から相互の関連性を見いだしたり, 不足している情報を収集し, 増やしたりする。

事例⑧ ベン図を用いて整理・分析する

収集した情報の共通点と相違点の両方を比較し, 明らかにすることができます。目的に応じて, 整理する視点を設定して情報を振り分けることで, 対象の特徴が明確になります。

実践例 公園整備に対する地域住民の世代別意識の共通点を見いだす

- (1) 調べたことを付箋やカードに書き出す。
- (2) 視点(世代)を示したベン図を用意する。
- (3) 共通点や相違点を考えながらベン図に位置付ける。



【ポイント】

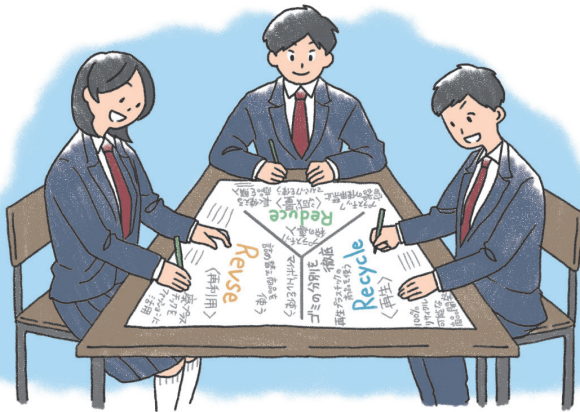
●考えるための技法を自在に活用

- ・ベン図を用いて整理・分析することで, 考えるための技法(比較する, 分類する等)が活用・発揮される。
- ・探究の過程を見通して, 仮説を検証していく分析ができるような視点を生徒が設定する。例えば「年齢」, 「国籍」, 「地域」, 「立場」などの視点から整理・分析する。

事例⑨ XチャートやYチャートで整理・分析する

対象について共通する視点ごとにまとめることで、整理・分析します。Yチャートは三つの視点、Xチャートは四つの視点が設定できます。

実践例 海外の海洋プラスチックゴミ削減に向けた取組



【ポイント】

- 考えるための技法を自在に活用
 - ・XチャートやYチャートを用いて整理・分析することで、考えるための技法（分類する等）が活用・発揮される。
 - ・探究の過程を見通して、仮説を検証していく分析ができるような視点を生徒が設定する。その際、対象にある共通点に着目して視点を見いだす。

事例⑩ SWOT分析で整理・分析する

SWOT分析は、強み、弱み、機会、脅威の頭文字から命名されたフレームワークで、内的要因（強みや弱み）と外的要因（機会や脅威）から多面的な分析を行うことができます。

実践例 職業による自己実現と社会貢献

自分の強みを生かしてどのように自分の価値を高めることができるか、あるいは自分の弱みをどのように克服したりリスクを回避したりすることができるのか、自分のキャリアを見つめ直した。体験活動の事前と事後でそれぞれ分析を行うことで、自己の在り方や生き方を問い直すことにつながった。

- (1) 外的要因（機会や脅威）を分析する。
- (2) 内的要因（強みや弱み）を分析する。
- (3) 4要素の内容を掛け合わせて現状を分析し、自己実現や社会貢献への展望を描く。

【ポイント】

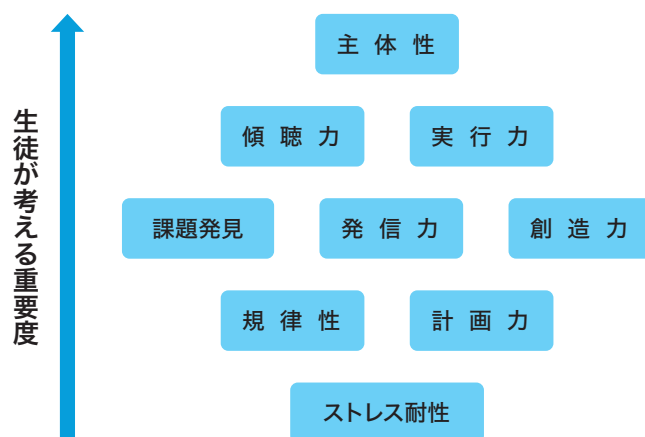
- 目的の明確化
 - ・分析することが目的化しないように、分析の目的や意味を明確にする。
- 考えるための技法を自在に活用
 - ・SWOT分析で整理・分析することで、考えるための技法（多面的に見る等）が活用・発揮される。
 - ・自己を客観的に把握することで、これまで見落としていた自分のよさ、課題や改善点を見いだしていく。

		内的要因	
		強み (Strength)	弱み (Weakness)
外的要因	機会 (Opportunity)	・明るく笑顔で挨拶ができる。 ・友達が悩んでいるときに相談に乗ることができる。	・最後まで粘り強く努力することが苦手。 ・プレッシャーに弱い。
	脅威 (Threat)	・AIに代替されるかもしれない。 ・グローバル化で競争相手が増える。	・初めのことにも積極的に挑戦する。
		・持ち前のコミュニケーション力を生かし、人と深く関わるができる仕事を考える。 ・持ち前のコミュニケーション力を生かし、人と深く関わり、地域を活性化させる仕事を考える。	・何事も計画を立て、見通しをもつ。
		・語学力 (英語力) を高め、自分のグローバル人材としての価値を高める。 ・プログラミングスキルを身に付ける。	・教育職や介護職など、今後も一定の需要のありそうな職種についても考える。

事例⑪ ランキング表を用いて整理・分析する

対象を，ある視点や条件に沿って順序付けます。

実践例 ダイヤモンドランキング「社会で求められる力とは」



【ポイント】

- 考えるための技法を自在に活用
 - ・ランキング表を用いて整理・分析することで，考えるための技法（順序付ける等）が活用・発揮される。
 - ・複数の対象について，生徒が目的に応じて視点や条件を設定し，それに沿って対象を並び替える。
 - ・グループでランキング化したり，他者のランキングと比較したりすることで，自己理解や他者理解につながる。

事例⑫ ロジックツリーを用いて具体化しながら整理・分析する

解決すべき課題について，論理的に整理・分析する際に有効な方法です。収集した情報を基に，課題に対する類型や要素を具体化し，その解決方法を個別に考えていくことができます。また，樹形図のように整理することで，課題解決に向けた取組の全体像を把握することもできます。

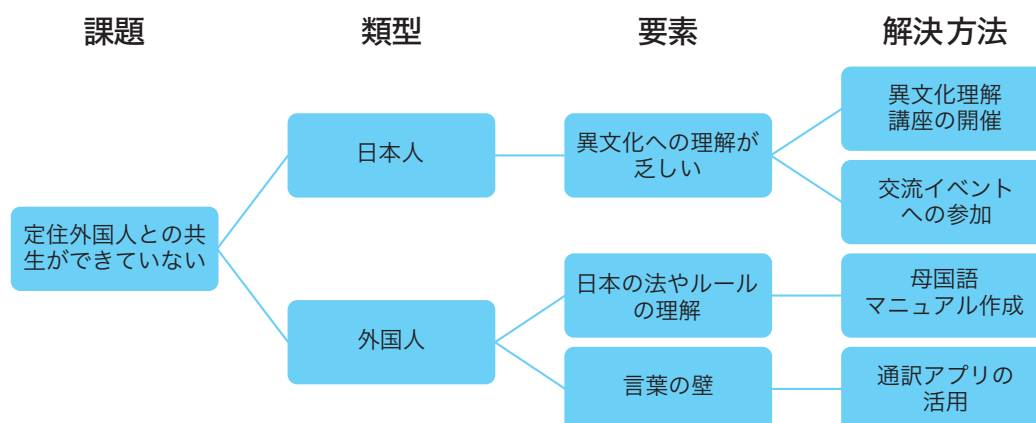
実践例 ロジックツリー「定住外国人との共生」

例えば，以下のような手順が考えられる。

- (1)「定住外国人との共生ができていない」といった課題を書く。
- (2)2層目と3層目で，課題に対する類型や要素を書き出す。
- (3)4層目に，それぞれの要素に対応する解決方法を書き出す。

【ポイント】

- 考えるための技法を自在に活用
 - ・ロジックツリーを用いて整理・分析することで，考えるための技法（具体化する等）が活用・発揮される。
 - ・生徒が，目的に合わせて，収集した情報を基に，「全体と部分」，「原因と結果」，「意図と行為」，「目的と手段」などの視点で類型や要素を具体化し，原因や解決方法を分析する。

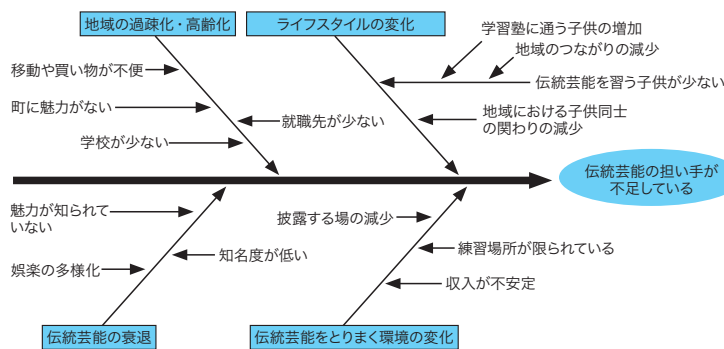


事例⑬ フィッシュボーン(特定要因分析)で整理・分析する

課題の解決に向けて、フィッシュボーンを活用することで、対象のもつ複数の性質に着目したり、対象を異なる複数の角度から捉えたりすることができます。

実践例 伝統芸能の担い手不足の解消に向けて

- (1) 「伝統芸能の担い手が不足している」という対象(テーマ)をフィッシュボーンの魚の頭の部分に書き出し、背骨の線を引いておく。
- (2) 対象(テーマ)に対する視点(要因)について、思いつく限り大骨に書き出す。
- (3) 大骨につながる小骨に視点(要因)に対する具体例を書き出す。小骨を更に細かく分け、孫骨とすることもある。
- (4) 対象(テーマ)を多面的・多角的に捉える。



【ポイント】

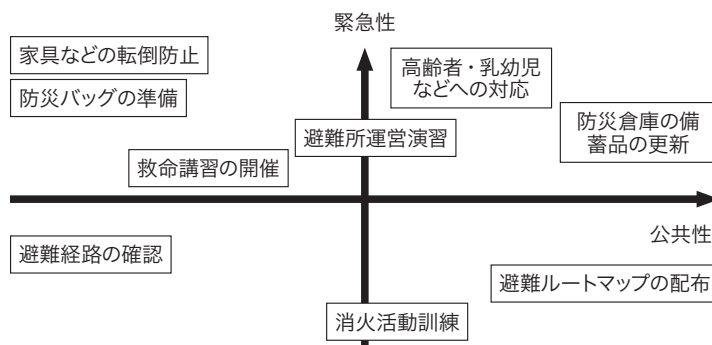
- 考えるための技法を自在に活用
 - ・ フィッシュボーンを用いて整理・分析することで、考えるための技法(多面的・多角的に見る等)が活用・発揮される。
- ・ 生徒が、目的に応じて、対象がもつ複数の性質を具体例で整理し、対象を幅広く捉えている。(多面的)
- ・ 生徒が、目的に応じて、対象を複数の視点から具体例を導き出しながら捉えている。(多角的)

事例⑭ 座標軸を用いて整理・分析する

座標軸を用いることで、2つの尺度を組み合わせることで対象の性質(共通点・相違点や程度、度合い)を比較しながら整理することができます。対象を座標軸に位置付けることで、その性質について、尺度を組み合わせることで捉えられます。

実践例 地域の防災・減災を考える

- (1) 地域の防災・減災に向けて必要だと思われることをカードに書き出す。
- (2) 座標軸の視点を「公共性」「緊急性」と決める。
- (3) カードをどこに位置付けるとよいか話し合いながら整理する。



【ポイント】

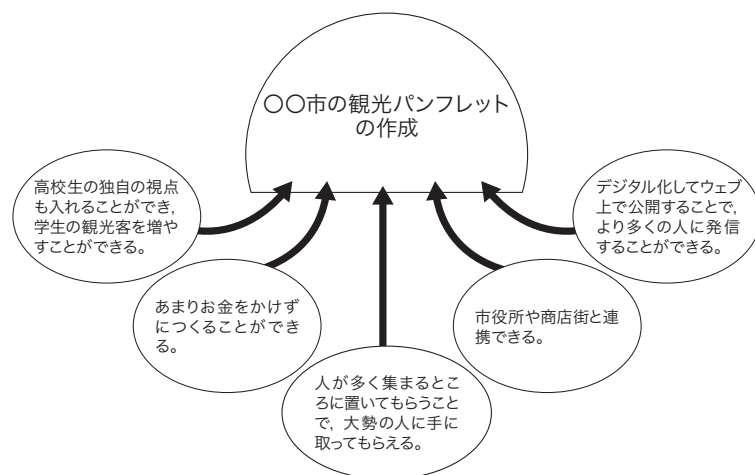
- 自律的な探究
 - ・ 課題解決に向けての行動の順位付けを行い、計画的な活動につなげる。
- 考えるための技法を自在に活用
 - ・ 座標軸を用いて整理・分析することで、考えるための技法(比較する等)が活用・発揮される。
 - ・ 探究の過程を見通して、仮説を検証していく分析ができるような尺度を生徒が設定する。例えば「効果性」「実現可能性」「公共性」「緊急性」「経済性」「安全性」などから尺度を設定して分析する。

事例⑮ クラゲチャートを用いて整理・分析する

頭の部分に意見、取組、問題等を書き込み、その根拠や原因を足の部分に記入します。収集した情報や経験の中から、意見や取組の根拠や出来事の原因を探して整理し、理由付けることができます。

実践例 ○○市の観光パンフレットの作成

- (1) 課題やテーマに沿って意見や取組を頭の部分に書く。
- (2) 収集した情報の中から、根拠となる情報を探して、足の部分に書き出す。



【ポイント】

●考えるための技法を自在に活用

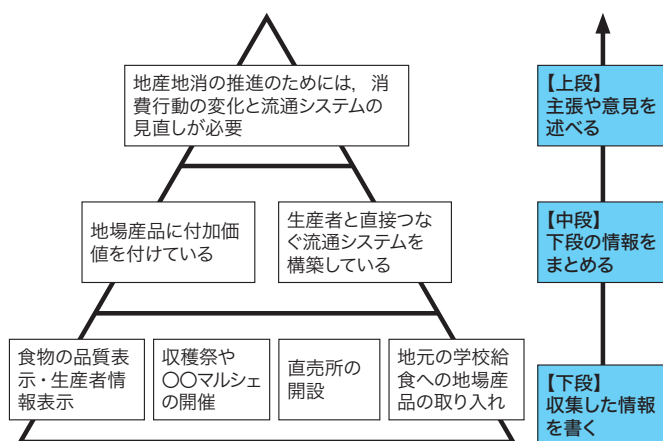
- ・クラゲチャートを用いて整理・分析することで、考えるための技法（理由付ける等）が活用・発揮される。
- ・収集した情報を基に、様々な可能性から意見や取組を支える根拠を生徒が自分で考え、必要に応じてその信憑性や妥当性を検証し、説得力のある主張を組み立てる。

事例⑯ ピラミッドチャートを用いて整理・分析する

対象をピラミッドの下から上に抽象化することで、対象に共通する性質や傾向、類型や概念をつくり出すことができます。

実践例 地産地消の推進

- (1) 下段に、収集した具体的な情報を書き出す。
- (2) 中段に、下段から重要な情報を選び、まとめる。
- (3) 上段に、中段のまとめから言える主張をつくる。



【ポイント】

●考えるための技法を自在に活用

- ・ピラミッドチャートを用いて整理・分析することで、考えるための技法（抽象化する、一般化する、統合化する等）が活用・発揮される。
- ・生徒が探究の過程を見通して、収集した情報を目的に応じて抽象化していく。その際、「共通することは何か」「全体で言えることは何か」などの視点から分析する。

●ピラミッドチャートで「具体化する」活用法

- ・対象をピラミッドチャートの下から上に具体化する（個別化する、分解する）ことで、類型や概念を構成している要素を明確にすることができる。

コラム

総合的な探究の時間における「考えるための技法」の活用

「考えるための技法」とは、考える際に必要になる情報の処理方法を、「比較する」「分類する」「関連付ける」のように具体化し、技法として整理したものである。以下は、学習指導要領において、各教科・科目等の目標や内容の中に含まれている思考力、判断力、表現力等に係る「考えるための技法」につながるものを分析し、概ね中学校段階において活用できると考えられるものを例として整理したものである。高等学校においては、こうした「考えるための技法」が自在に活用できるものとして身に付くことが期待されている。

○順序付ける

- ・複数の対象について、ある視点や条件に沿って対象を並び替える。

○比較する

- ・複数の対象について、ある視点から共通点や相違点を明らかにする。

○分類する

- ・複数の対象について、ある視点から共通点のあるもの同士をまとめる。

○関連付ける

- ・複数の対象がどのような関係にあるかを見付ける。
- ・ある対象に関係するものを見付けて増やしていく。

○多面的に見る・多角的に見る

- ・対象のもつ複数の性質に着目したり、対象を異なる複数の角度から捉えたりする。

○理由付ける（原因や根拠を見付ける）

- ・対象の理由や原因、根拠を見付けたり予想したりする。

○見通す（結果を予想する）

- ・見通しを立てる。物事の結果を予想する。

○具体化する（個別化する、分解する）

- ・対象に関する上位概念・規則に当てはまる具体例を挙げたり、対象を構成する下位概念や要素に分けたりする。

○抽象化する（一般化する、統合する）

- ・対象に関する上位概念や法則を挙げたり、複数の対象を一つにまとめたりする。

○構造化する

- ・考えを構造的（網構造・層構造など）に整理する。

「考えるための技法」の活用を支援する上で、「思考ツール」の活用が効果的である。「思考ツール」とは、思考を可視化することで、いわば道具のように「考えるための技法」を意識的に使えるようにするためのものである。本節「探究の過程における指導のポイント」で紹介した事例においても、様々な「思考ツール」の活用が想定されている。次頁の図は、これらの「思考ツール」がどのような「考えるための技法」の活用を支援するのかを示している。

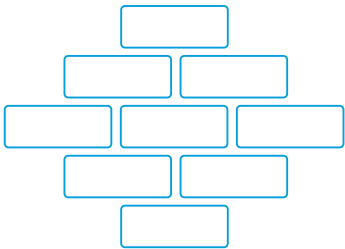
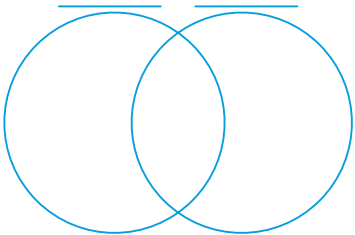
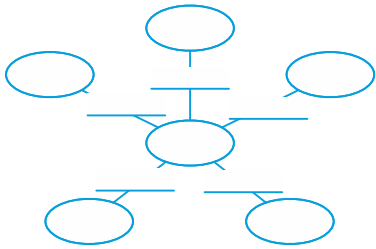
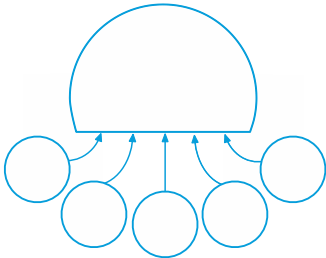
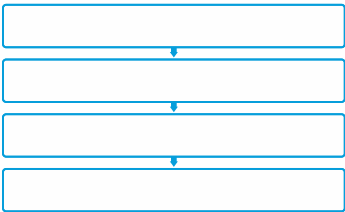
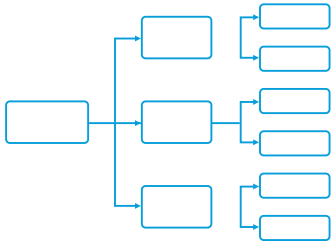
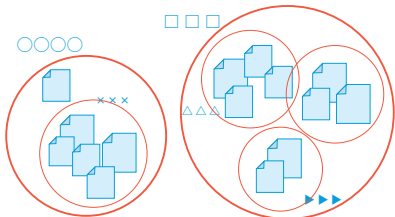
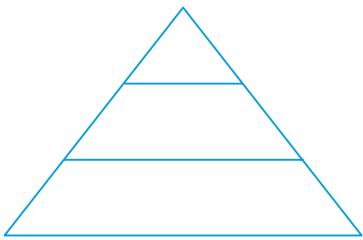
考えるための技法	代表的な思考ツール	考えるための技法	代表的な思考ツール
順序付ける	 ダイヤモンドランキング	比較する	 ベン図
分類する	 X, Yチャート	関連付ける	 コンセプトマップ
多面的に見る・多角的に見る	 フィッシュボーン	理由付ける (原因や根拠を見付ける)	 クラゲチャート
見通す(結果を予想する)	 ステップチャート	具体化する (個別化する, 分解する)	 ロジックツリー
抽象化する (一般化する, 統合する)・	 グルーピング	構造化する	 ピラミッドチャート

図 考えるための技法と思考ツール

「考えるための技法」を活用することの意義については、以下の三点がある。

一つ目は、探究の過程のうち特に「整理・分析」の過程における思考力、判断力、表現力等を育てるという意義である。情報の整理・分析においては、収集した情報をどのように処理するかという工夫が必要になる。「考えるための技法」は、こうした分析や工夫を助けるためのものである。

二つ目は、協働的な学習を充実させるという意義である。「考えるための技法」を使って情報を整理・分析したものを黒板や紙、デジタルホワイトボード等で表現することによって、可視化され生徒間で共有して考えることができるようになる。

三つ目は、教科・科目等を越えた全ての学習の基盤となる資質・能力を育成すると同時に、各教科・科目等で学んだ資質・能力を実際の問題解決に活用するという総合的な探究の時間の特質を生かすという意義である。「考えるための技法」を意識的に使えるようにすることによって、各教科・科目等と総合的な探究の時間の学習を相互に往還する意義が明確になる。

しかし、「思考ツール」を授業場面でただ用いるだけでは、生徒が「考えるための技法」を意識的に使えるようにはならない。教師は以下の二点に留意する必要がある。

第一に、「思考ツール」を活用すること自体が目的にならないように、探究の過程に適切に位置付ける必要がある。さもないと、「思考ツール」が、生徒の自由な発想を妨げるものになってしまったり、「思考ツール」に単に書き込む作業に終始してしまったりすることがある。そうしたことを避けるために、探究の過程において、どのような意図で、どのように活用するかを十分検討し、「考えるための技法」に対応した「思考ツール」を選択する必要がある。

第二に、「考えるための技法」や「思考ツール」を各教科・科目等や総合的な探究の時間において組織的・計画的に活用する指導を工夫する必要がある。それは、物事を比較したり、分類したりすることや、物事を多面的に捉えたり考えたりすることは、様々な形で各教科・科目等で育成を目指す資質・能力やそのための学習の過程に含まれているからである。「考えるための技法」や「思考ツール」を組織的・計画的に活用する指導を工夫することで、生徒は、各教科・科目等の様々な学習場面において、「考えるための技法」や「思考ツール」を習得する。さらに、総合的な探究の時間や他教科・科目等でそれらを活用する経験を積み重ねることで、身に付けた資質・能力が汎用的な資質・能力として育成されることが期待されている。実際の指導に当たっては、例えば、「比較する」場面では、どの教科・科目等においても同じ「思考ツール」を活用するように組織的・計画的に指導することで、生徒が比較するための思考ツールを意識的に活用できるようになり、教科・科目等を越えた汎用的なものとして身に付いていくことが期待できる。

4. まとめ・表現

情報の整理・分析を行った後、それを他者に伝えたり、自分自身の考えとしてまとめたりする学習活動を行うことにより、それぞれの生徒の既存の経験や知識と、学習活動により整理・分析された情報とがつながり、一人一人の生徒の考えが明らかになったり、課題がより一層鮮明になったり、新たな課題が生まれたりしてくる。このことが学習として質的に高まることであり、表面的ではない深まりのある探究活動を実現することとなる。

まとめ・表現においては、次の点に配慮することが大切である。

- 相手意識や目的意識を明確にしてまとめたり、表現したりすること
- 情報を再構成し、自分自身の考えや新たな課題を自覚できるようにすること
- 伝えるための具体的な手順や作法を身に付け、目的に応じて選択して使えるようにすること
- 各教科・科目等で身に付けた表現方法を積極的に活用すること

事例① レポートでまとめ・表現する

レポートは、設定した課題に基づいて調査したことや体験したことなどを文章や図表等を使ってまとめて報告するものです。

実践例 探究活動の成果をレポートでまとめる

【レポートの構成例】

- ①序論（問題提起）
 - ・テーマはあらかじめ設定されていることが多い。
 - ・問い（課題）は曖昧ではなく具体的なものにする。
 - ・テーマについて自ら設定した問い（課題）について書く。
- ②本論（根拠の提示）
 - ・問い（課題）の答えに関する客観的な根拠を具体的に述べる。
 - ・図表を効果的に使うことで説得力が増す。
- ③結論（まとめ）
 - ・調べた結果分かったことや考えたことを簡潔にまとめて書く。
 - ・必要に応じて今後の課題などを書く。

【ポイント】

●レポートの構成

- ・レポートは、「序論」「本論」「結論」などの構成とすることが一般的である。
- ・大まかな構成が決まったら、アウトラインを検討する。
- ・収集した情報に基づき、読み手が納得するような根拠を十分に盛り込むようにする。

●探究の過程の高度化

- ・国語科における調べたことを整理して、報告書や説明資料などにまとめる活動等を通して身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

事例② 論文でまとめ・表現する

論文は、自ら提起した問題に対し、独自の仮説を立て、それを論証していく文章です。一定の手順や作法に従って文章を書き進めていきます。

実践例 探究活動の成果を論文でまとめる

【論文の構成例】

- ①タイトル・目次
- ②要旨
 - ・テーマ、目的、方法、結論などを簡潔に書く。
- ③導入
 - ・テーマに関わる状況の説明やこの探究の重要性、目的と仮説を書く。
- ④方法・結果・考察
 - ・探究で実際に行った実験や調査の方法を書く。
 - ・実験や調査などから得られた結果を事実即して客観的に述べる。
 - ・実験や調査の結果を考察して、明らかになったことを具体的に書く。
- ⑤結論
 - ・この探究で主張したいことを簡潔にまとめる。
 - ・今後の課題や展望などを書く。
- ⑥謝辞・文献
 - ・指導や支援を受けた相手への感謝の意を述べる。
 - ・参考文献・引用文献を書く。

【ポイント】

●論文の構成

- ・論文は、「タイトル・目次」「要旨」「導入」「方法・結果・考察」「結論」「謝辞・文献」などの構成とすることが一般的である。
- ・大まかな構成が決まったら、アウトラインを何度も練る。
- ・先行研究等も踏まえ、独自性のある主張ができるよう意識するとともに、論理に矛盾や飛躍がないか注意して書くようにする。

●探究の過程の高度化

- ・国語科における論理的な文章などを読み、本文や資料を引用しながら、自分の意見や考えを論述する活動等を通して身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

コラム まとめ・表現に当たっての留意点

まとめ・表現に当たっては、一定の手順や作法を理解させ、研究活動の不正行為等になってしまうことがないように注意する必要がある。特に、論文等では、客観性や信頼性のある論述とするために、以下の点について理解することが大切である。

○引用のルール

- ・著者名と刊行年を記載する。書誌情報（著者名、文献名、刊行年、出版元など）は引用文献に必ず記載する。
- ・原文をそのまま、加工せずに抜き出し、引用であることがはっきり分かるようにする。

○参考文献・引用文献の示し方

- ・末尾に、執筆の参考にした文献や引用した文献の書誌情報を列挙する。著者名の五十音順で整理したり、文献の種類ごとにまとめて整理したりする。

○注の付け方

- ・本文からはずれるが、本文を補強するために説明しておく必要があると思われる内容を、脚注または後注として、本文から切り離して掲載する。

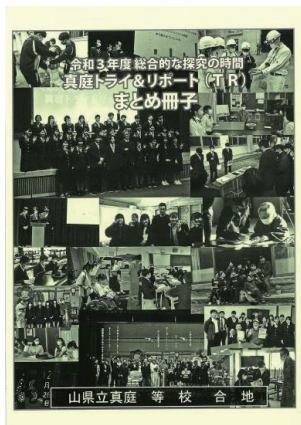
○研究活動の不正行為等

- ・盗用：他人のアイデアやデータなどを勝手に流用すること。
- ・改ざん：研究結果等を真正でないものに加工すること。
- ・ねつ造：存在しないデータ、研究結果等を作成すること。

事例③ 活動報告書でまとめ・表現する

探究活動の内容や成果を活動報告書にまとめることで、自分の学びを総括したり、地域の人々や保護者、外部の協力者等に発信して、外部からの評価を得たりすることができます。

実践例 探究活動の成果を 活動報告書でまとめる



【ポイント】

●探究成果の蓄積・共有化

- ・生徒が作成した活動報告書等を、学校図書館等で蓄積し閲覧できるようにしておくことで、探究活動の参考事例となり得る。

●探究成果の発信

- ・活動報告書を外部の協力者等に発信することで、総合的な探究の時間の取組についての理解を促進させ、更なる協力を得ることにつながる。

事例④ プレゼンテーションとしてまとめ・表現する

プレゼンテーションとしてまとめ・表現することで、探究活動の内容や成果を多くの聴衆に一斉に伝えることができます。

実践例 プレゼンテーションソフトを 活用したまとめ・発表

- (1) スライドで伝える内容を検討する。
探究してきたことの中で、相手意識や目的意識を明確にして、何を伝えるのかを焦点化していく。
- (2) 構成を考える。
①タイトル②目的③現状と課題④仮説⑤調査方法⑥調査結果⑦考察⑧まとめ⑨今後の課題⑩謝辞⑪参考文献などの順が考えられる。
- (3) 発表時間に合わせて、内容を絞り込む。
1スライド30秒から1分を目安とすることが考えられる。
- (4) スライドを作成する。【「スライド作成上の工夫」を参照】
- (5) リハーサルを行いながら、相互評価等を行い改善する。
発表会場でリハーサルができる場合は、文字の大きさやスライドの表示などが適切であるか確認する。
- (6) 発表する。
発表資料を事前に配布することも考えられる。
想定される質問と答えをあらかじめ考えておく。

【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・国語科において育成される、話し言葉の特徴を踏まえて話したり、場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど、相手の理解が得られるように表現を工夫する資質・能力を効果的に活用する。
- ・国語科における集めた情報を資料にまとめ、聴衆に対して発表する活動を通して身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

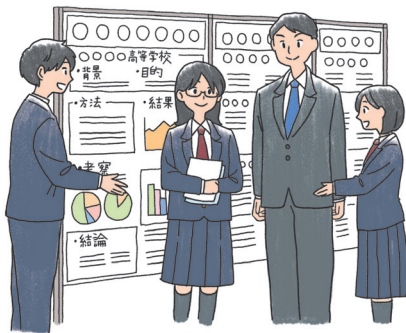
スライド作成上の工夫

- ・色の使い方や文字の大きさに配慮する。
- ・スライドのデザインはシンプルなものにする。
- ・ポイントを押さえて簡潔に表現する。
- ・写真や動画、グラフ、図などを効果的に用いる。
- ・強調したい部分を枠で囲んだり、色を変えたりする。
- ・アニメーションや効果音を多用しない。
- ・必要に応じて謝辞や参考文献などを記載する。

事例⑤ ポスターセッションを行いまとめ・表現する

探究活動の成果を1枚のポスターにまとめ、聴衆に向けてその内容を伝える発表形式です。発表内容に関心をもっている聞き手に向けて発表するため、聞き手にとって理解しやすく、発表者にとっても聞き手との質疑応答や意見交換を通して自分の考えを深めたり、新たな視点を得たりすることが期待できます。

実践例 探究活動の成果を
ポスターセッションで発表する



【ポイント】

●探究の過程の高度化

・国語科における集めた情報を資料にまとめ、聴衆に対して発表する活動、芸術科（美術）のデザインに関する学習、情報科のコミュニケーションと情報デザインに関する学習で身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

●ポスター表現の工夫

・1枚のポスターに全ての構成要素をまとめる。その際、文字はできるだけ少なくして、大事なことをだけまとめ、グラフ・図表や写真を用いることで、視覚的に訴えかけるような工夫をする。

●相手意識を明確にした表現

・聞き手が理解できるように、コミュニケーションをとりながら進める。必要に応じて、具体物や実演を交えてもよい。

事例⑥ 中間発表会や成果報告会でまとめ・表現する

中間発表会を設定することで、聴衆（他の生徒や外部の協力者等）の意見を聞きながら、これまでの探究活動を振り返ったり、その後の探究活動を展望したりすることができます。また、成果報告会で、自分に取り組んできた活動の成果等について、行政や地域社会、国内外に広く発信することによって、達成感や自己有用感、協働的に学び合うことのよさを実感することにつながります。

実践例 SDGsプロジェクト中間発表会

1. 各グループが、これまでの探究活動を通して検討したプロジェクトの中間発表をする。
- (1)発表会に参加される外部の協力者に、プロジェクトの進め方や提言内容の妥当性について講評してもらえるよう、あらかじめ依頼しておく。
- (2)中間発表に当たっては、提言だけではなく、それまでのプロセスや最終報告に向けた見通しを含めて発表する。
- (3)必要に応じて、関連資料を用意したり、具体物を提示したりする。

2. 外部の協力者等から講評をいただく。
「対象の世代や生活スタイル等の特徴に合った提言にしてほしい」
「海外にも関連する取組があるので参照してほしい」
「地域課題を的確に捉えた興味深い提言だと思うので、次は実際に試行的に行い、提言の有効性の検証をしてほしい」

3. プロジェクトを見直し、次の探究活動につなげる。

【ポイント】

●探究の過程の高度化

・聴衆の意見を聞くことで、客観的な視点や専門的な視点を加え、探究のプロセスを確かめ、よりの確なものとしたり、より焦点化して掘り下げたりする。

●ICTの活用

オンライン会議システムを活用することで、より多くの人が参加し、意見交換することが期待できる。

事例⑦ パネルディスカッションやシンポジウムを行いまとめ・表現する

発信者が決められたテーマについて異なる立場で議論するパネルディスカッションや、発信者が決められたテーマについて提案し、その後、聴衆が質問や意見を出し合い、新しい考えを発見するシンポジウムを活用してまとめ・表現する方法です。

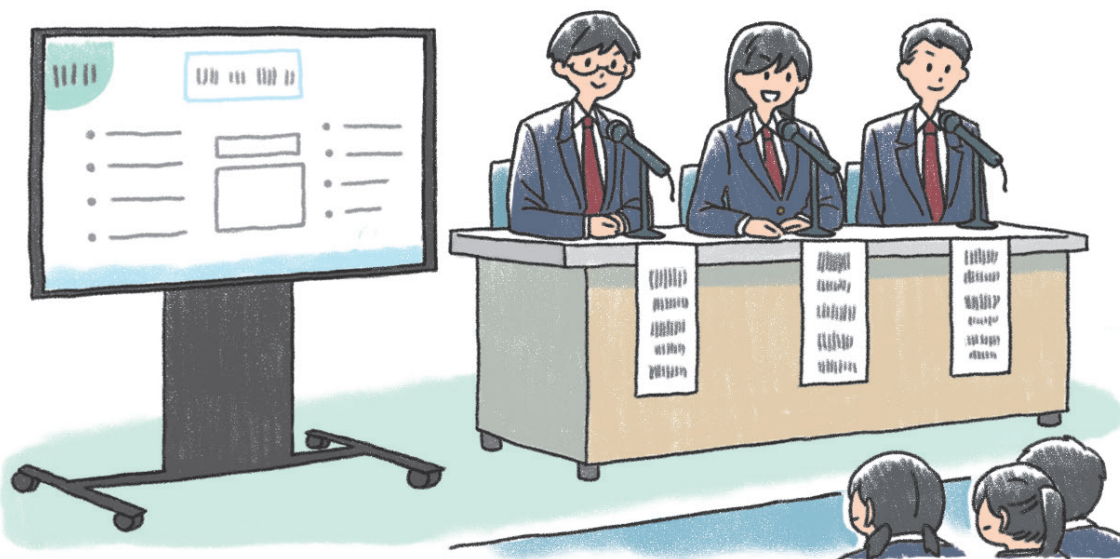
実践例 探究の成果をまとめ・表現するための パネルディスカッション

- (1) 共通のテーマの確認(司会者)
 - ・どんな立場に立って(仮説で)探究してきたのか
- (2) 各パネリストによる提案(パネリスト)
 - ・異なる視点や立場で提案する
 - ・具体的な資料を提示する
- (3) 聴衆の質問、意見(聴衆)
 - ・よく分からなかったことや疑問点を質問する
 - ・提案に対する自分の考えを発言する
 - (例)「～と思うのですが、どう思いますか」
 - ・反対意見や情報を提供する
- (4) パネリストの意見(パネリスト)
 - ・聴衆の質問や意見について自分の考えを分かりやすく話す
 - (※(3)(4)を繰り返し、テーマにおける自分の考えを明確にする)
- (5) 司会者のまとめ(司会者)
 - ・話し合いから生まれた新しい考え方や意見をまとめる
 - ・質問や意見から新たな課題を見いだす
- (6) 最後に各パネリストが言い残したことや総括的な意見を発表する(パネリスト)

【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・国語科における自分の考えについてスピーチしたり、それを聞いて、同意したり、質問したり、論拠を示して反論したりする活動を通して身に付けた資質・能力を効果的に活用する。
- ・共通するテーマについて異なる／複数の立場で議論することで、幅広い可能性を視野に入れながら自分の考えを生み出していく。



事例⑧ 新聞でまとめ・表現する

自分自身の考えを伝えるために、情報を再構成して新聞としてまとめることが考えられます。その際、目的、相手などに応じて、内容、表現方法、情報量、構成などを工夫する必要があります。

実践例 探究活動の成果を新聞でまとめる



【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・国語科における説明書や報告書の内容を、目的や読み手に応じて再構成し、広報資料などの別の形式に書き換える活動を通して身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

表現上の工夫

- ・見出しは要点を10文字以内で表現すると読みやすい。
- ・長い記事は、内容を要約したリードを付けると分かりやすい。
- ・本文は重要度の高い内容から書いていく。
- ・トップ記事は紙面で最も目立つ右上に配置する。
- ・写真や資料を効果的に使うことで、活動の様子や臨場感等を伝えることができる。

事例⑨ パンフレットでまとめ・表現する

多くの情報を一目で分かりやすくまとめ・表現するには、パンフレットも一つの方法です。左右に開く観音折りであれば4ページを一度に見ることができるなど、レイアウトと折り方を工夫することで、様々な表現が可能となります。

実践例 探究活動の成果をパンフレットでまとめる

伝えたい内容に「見出し」を付けてカードで整理する
・伝えたい内容を「見出し」を付けてカードに書き出す ・カードには1枚に1項目を書く
「見出し」を並べてパンフレットに載せる順序を決める
・どのような順番に載せれば、読み手への説得力があるかを考える ・キャッチコピーを考える (例) 数字や色、諸感覚での主張、色で主張、擬音語の活用、擬人化など
文章と図や表、写真とのバランスを考える
・文章に合わせて入れたい図や表、写真などを決める ・優先順位や分量等に配慮してレイアウトを考える ・パンフレットの形式を考える (1枚裏表印刷、観音折り、8ページの冊子など)
レイアウトに従って文章や図表を貼り付け、まとめる
・見出しは大きく目立たせる ・文章は短い文で分かりやすく、少なく ・図や写真、文章の量を考えて書く (基本的には文章30%、図・表・写真70%が目安)

【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・国語科における読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書く活動、数学科のデータを分析する活動、外国語科の情報や考え、気持ちなどを適切な理由や根拠とともに段落を書いて伝える活動で身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

●ICTの活用

- ・ICT端末にインストールしたDTP (Desktop Publishing) アプリを用いれば、自由なレイアウトで各種印刷物を編集、作成することができる。DTPアプリを活用すると、一人または少人数で効果的・効率的に制作することができる。

事例⑩ 制作、ものづくりとしてまとめ・表現する

探究の過程に位置付いた具体的な制作やものづくりを行い、鑑賞者や利用者などとの関わりを通して、自分の制作物に込めた思いや表現の背景にある意図や価値について認識し、探究活動の意義や価値に気付いたり、次の課題を生み出したりすることが期待できます。

実践例 地域の特産品を使った商品開発

料理(ご当地グルメ)、お弁当、
スイーツ、飲み物、
伝統工芸品
など



制作、ものづくりの例

- ・地域の魅力を紹介するウェブサイトの制作
- ・地域の避難経路マップの作成
- ・行政や地元企業とタイアップした地域の観光ガイドの制作
- ・AIを活用した気象条件から就航を予測するプログラムの開発
- ・フードロス削減に資する食堂の受注最適化アプリの制作
- ・労働者の負担を軽減するロボットの制作

【ポイント】

●自律的な探究

- ・探究の過程を見通しつつ、制作やものづくりにおける技能、経費や時間などを把握し、自分の力で進められる。
- ・制作やものづくりの過程で、地域の人や専門家から助言を受ける場面を設定することで社会に参画する意識をもつことができる。
- ・各種コンテストに参加したり、自治体等のイベントと連携したりすることで、社会参画意識の醸成とともに、自らの探究活動で得られた成果を幅広く発信することができる。

事例⑪ イベントを企画・運営してまとめ・表現する

日常生活や社会の中にある問題や地域の事象を実際に解決していくために、地域などと連携したイベントを企画し運営することで、実社会に働きかけ、自ら社会に貢献することを実感することが期待できます。

実践例 商店街の再生イベントの企画・運営



【ポイント】

●自律的な探究

- ・探究の過程を見通しつつ、生徒がイベントの企画・運営に必要な労力や時間、経費などをマネジメントできるようにする。
- ・イベントを企画・運営する過程で、課題解決に向けて当事者と直接関わることで、社会に参画する意識をもつことができる。

●地域などとの連携

- ・イベントの企画・運営に当たっては、地域の人々や行政機関、関係団体などと連携することで、多様な視点から検討し、その実効性を高める。

事例⑫ 総合表現としてまとめ・表現する

探究活動の成果を演劇や、身体表現や音楽表現、造形表現等の総合表現として行うことも効果的です。多様な表現方法を組み合わせて表現するため、協働的に取り組む態度の形成や各教科・科目等の学習との往還が期待できます。

実践例 地域の伝統を受け継ぐ映像制作

探究活動で学んだ郷土の伝統芸能のよさや抱える課題を伝える映像を、伝統文化関連団体等と連携して制作し、広く国内外に発信することで、伝統文化の魅力向上とその継承につなげる。



総合表現の例

- ・地域の歴史を伝える演劇やミュージカルの上演
- ・移住促進に向けたPRムービーの制作 など

【ポイント】

●探究の過程の高度化

- ・芸術科（美術）における映像メディア表現で身に付けた資質・能力を効果的に活用する。

●自律的な探究

- ・探究の過程を見通しつつ、総合表現における技能、経費や時間などを把握し、自分の力で進められる。
- ・総合表現する過程で、地域の人や専門家から助言を受ける場面を設定することで、表現活動の質や社会に参画する意識を高めることができる。
- ・各種コンテストに参加したり、自治体等のイベントと連携したりすることで、社会参画意識の醸成とともに、自らの探究活動で得られた成果を幅広く発信することができる。

コラム 振り返りの充実

高校生の時期は、自らの在り方生き方と本気で向き合おうとする時期である。「自分のことを知りたい」あるいは「社会との関わりで自分を価値付けたい」と思っている時期でもある。これらの視点を自覚し、内省的に捉えることで、潜在的に育成され高まりを見せようとしている資質・能力を顕在化し、確かに育成することになる。こうした学びが実現されるためにも、学習活動の丁寧な振り返りが欠かせない。

振り返りは、各授業の終末や単元の節目などに、主たる学習活動やそこでの学びについて時間を遡って見つめ直すことである。次のような点を意識して指導することで、振り返りの充実を図りたい。

- 出来事を時間軸に沿って考えたり、事象同士を関係付けて考えたり、事実の背景にある原因を明らかにして考えたりできるようにする。
- 音声言語を使って意見交換したり、文字言語を使って表現したりする言語活動を設定する。
- 言語化の場面は定期的に設定するとともに、多様な記録方法を用いるなどの工夫をする。
- 「自分自身に関すること」「他者や社会との関わりに関すること」の二つの視点などをポートフォリオの項目に入れるなどして、生徒が自己の変容を認識できるようにする。
- ポートフォリオから生徒の変容を教師が読み取り、それを示すことで、生徒が気付かない自分自身の成長を実感できるようにする。

ICT端末を効果的に活用することで、探究の一層の充実が期待できる。

以下、ICT端末を活用することによって深まる学びについて、探究の過程に沿って考えていきたい。

・「課題の設定」の場面での活用

「課題の設定」の場面は探究のプロセスのスタートである。この場面では、生徒が探究する価値のある課題をどのように見付けていくのかが重要である。そのためには、課題状況を具体的にイメージし、それを自分のこととして捉えられるようにする必要がある。

ICT端末があれば、動画や写真などを用いて課題状況をイメージしやすくなるように補助することや、それと自分の思いとのズレを認識させることができる。また、課題状況を具体的にイメージするためには、ICT端末を用いるだけでなく、生徒が実際に地域に出てインタビューやフィールドワークを行うことも有効である。その際、ICT端末で写真や動画、音声データ等として記録、蓄積し、視聴することで生徒の課題意識を高めることも考えられる。また、見付けた課題について、既に実行されている解決策や他の地域の取組の様子などを調べることも可能になる。

このように、ICT端末を活用することで、課題を具体的にイメージすると同時に、課題をより焦点化させることが期待できる。

・「情報の収集」の場面での活用

「情報の収集」の場面は、ICT端末を活用する場面がたくさんある。インターネット上には多種多様な情報が無数に存在している。どの本を読むべきか、誰に話を聞くべきかという情報もインターネット上の情報を参考にすることができる。オンライン会議システム等を活用して、遠隔地の専門家に話を聞くこともできるだろう。また、動画情報なども上手に使いえば優良な情報源となりうる。観察やインタビュー等の体験による情報収集の場合も写真や動画、音声データ等として蓄積しておくことで、その後の探究を深める役割を果たすと考えられる。



なお、情報の収集に当たっては、複数の情報源にアクセスすることが求められる。そうすることで、情報の信憑性を担保したり、主張の偏りがないかを見極めたりすることに役立つ。

・「整理・分析」の場面での活用

ICT端末の活用によって「情報の収集」の場面が充実するからこそ、「整理・分析」の場面がより重要となる。集めた情報を比較したり、分類したり、関連付けたりしながら、自分なりの考えを構成していくことが求められる。「整理・分析」の場面では、例えば、表計算ソフトを用いた統計処理や、テキストマイニングによる定性分析などが考えられる。また、「考えるための技法」を意識的に使えるようにするための「思考ツール」などを活用しながら、「整理・分析」の学習活動を支援していく

ことも求められる。

・「まとめ・表現」の場面での活用

「まとめ・表現」の場面においても、文字情報だけでなく、写真や動画、音声データなど、多様なメディアを使って表現したり、情報通信ネットワークを介して、まとめたものを学校以外の人に広く知らせたりすることができる。同時に、この場面では、時間的な制約や物理的な距離の制約を超えるというICTの特性を活かし、学習の履歴や活動の様子をポートフォリオ化して、学びの振り返りを支援したり、ワークシートなどをICT端末で記録しておき、以前の考えと今の考えと比べて自己の変容を自覚させたり、昔の写真やデータと今のものを比べて状況がどのように改善されたのかを明らかにしたりして、更なる課題の発見を支援することも可能になる。また、学びの振り返りを他者と共有したり、グループで統合したりして、学習集団として成果を蓄積することも可能となる。

さらに、生徒一人一人がICT端末を活用することにより、それぞれの生徒が自身にとって最適な手順や方法を選ぶことができる。これまでは、インターネットで情報検索をさせる場合には、クラス全員でコンピュータ教室に行き、全員が一斉にインターネットに接続することが一般的であったが、一人一台端末環境ではそのような必要がなくなる。調べる課題自体が異なることもあるだろうし、同じ課題に向かっていたとしても、それぞれの生徒がよいと思う手順や方法での情報収集を行うことも可能になる。本で調べている生徒もいれば、インターネットで調べている生徒もいるような状況設定が可能になるだろう。

同時に、それらの学習状況や学習成果を常に教師や生徒間で共有できることもICT端末を活用する利点である。「情報の収集」の場面では、見付けた情報をクラウド上のフォルダで共有しておけば、短時間で多様で多量な情報を収集することが可能である。また、「まとめ・表現」の場面でも、文章やスライドをクラウド上で共有し、共同編集しながらまとめていくことで、内容の重複やデザインの統一などをチェックしながら進めたり、それぞれの進捗状況を確認したりしながら作業を分担することが可能になる。

このように、ICT端末を活用することによって、探究の過程は、ますます高度化したり自律的になったりして、実社会や実生活の中でも生かされていくようになる。同時に、現実の複雑な問題状況を解決する過程で活用されることによって、ICT端末が探究のための道具として活用できるものになっていくことが期待される。

そのためにはいつ、どこで何を使うのかということを生徒が自分で選択できる状況や、いつでもICT端末を利用できる状況をつくっていくことが重要である。端末の使い方やアプリの活用方法、活用のマナーやルールなどの必要なことを事前に指導するとともに、生徒の活用状況に応じて適宜指導を行うようにしたい。



教育・学習におけるICT活用の特性・強みを生かすことで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善や個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実につなげることができる。そうすることで、従来はなかなか伸ばせなかった情報活用能力等の資質・能力の育成や、今までの学習方法では困難さが見られた生徒の一部への効果の発揮、今までできなかった学習活動の実施が可能となる。

ICT活用の特性・強み	ソフト・機能
1 多様で大量の情報の取扱い、容易な試行錯誤 (1)探究の過程における活用 ①課題の設定 デジタルデータによる学習課題の具体的なイメージや焦点化等 ※グローバルな課題、ローカルな課題、情報の蓄積による個に応じた課題の設定が可能となる ②情報の収集 ウェブブラウザによるインターネット検索等 ※多様な情報、大量の情報、最新の情報、加工しやすい情報を、いつでも、どこでも、素早く、手軽に調査し収集することが可能となる ③整理・分析 表計算ソフトによるデータ等の整理・分析、グラフの作成、プレゼンテーションソフトを使った図の作成や情報の整理等 ※デジタルデータを検索、分析するなどして情報を再構成したり、プログラミング的思考を育成したりすることが可能となる ④まとめ・表現 文書作成ソフトによるレポート、論文等の作成、プレゼンテーションソフトを使った発表等 ※校内のみならず、国内外への多様な発信、手軽な制作と加工の繰り返し、成果物の継続的な蓄積が可能となる。 (2)今までの学習方法では困難さが見られた生徒に対する学習指導の際に、ウェブブラウザを活用した多種多様な学習動画、デジタル教材などから生徒の興味・関心、特性に応じた活用 (3)プログラミングにおける試行錯誤の繰り返しなど論理的思考・課題解決	・ウェブブラウザ ・文書作成 ・表計算 ・プレゼンテーション ・プログラミング
2 時間的制約を超えた情報の蓄積、過程の可視化 (1)写真や動画の撮影・編集・保存による学習過程を可視化した学習の振り返り、目標や学習課題の更新 (2)クラス管理ソフトを活用したデータの共有により個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の実現	(1のソフト・機能に加えて) ・写真・動画の撮影・編集・保存 ・クラス管理
3 空間的制約を超えた相互かつ瞬時の情報の共有 (1)ウェブ会議機能、ファイル共有機能等による学校と家庭、他の学校・地域や海外との交流のような距離が離れた場をつないだ学習 (2)ウェブ会議機能、ファイル共有機能等による他者との意見共有、比較検討、合意形成、アイデア創出、発表資料等の協働制作	(1のソフト・機能に加えて) ・コメント ・アンケート ・チャット ・電子メール ・ウェブ会議 ・ファイル共有

※平成28（2016）年『「2020年代に向けた教育の情報化に関する懇談会」最終まとめ』を参考に作成

学習指導要領との関連（高等学校学習指導要領 第4章 第3の2(5)）

探究の過程においては、コンピュータや情報通信ネットワークなどを適切かつ効果的に活用して、情報を収集・整理・発信するなどの学習活動が行われるよう工夫すること。その際、情報や情報手段を主体的に選択し活用できるよう配慮すること。

第2編

総合的な探究の時間と カリキュラム・マネジメント

第1章

カリキュラム・マネジメントの充実

カリキュラム・マネジメントは、学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えて組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくものであり、高等学校学習指導要領第1章総則第1款5において次の三つの側面が示されている。

- ①内容等を教科・科目等横断的な視点で組み立てていくこと
- ②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと
- ③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

これらは、①が教科・科目等横断的なカリキュラム・デザイン、②がPDCA サイクルを通した教育課程やその下での教育活動の検証・改善、③が学校内外のリソース活用、を指しており、それぞれが、各学校で育成を目指す資質・能力を育むことを目的とした組織的・計画的な取組と位置付けられる。関連して、同章第6款1アでは、「各学校においては、校長の方針の下に、校務分掌に基づき教職員が適切に役割を分担しつつ、相互に連携しながら、各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行うよう努めるものとする。(後略)」と示されているように、カリキュラム・マネジメントは校長が定める学校の教育目標など教育課程の編成の基本的な方針や校務分掌等に基づき行われることを示しており、全教職員が適切に役割を分担し、相互に連携することが必要である。

一方、同章第2款1において、教育課程の編成に当たって、学校教育全体や各教科・科目等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にすることとともに、各学校の教育目標を設定するに当たっては、第4章総合的な探究の時間の第2の1に基づき定められる目標との関連を図るものとする」とされた。

各学校における教育目標には、地域や学校、生徒の実態や特性を踏まえ、主体的・創造的に編成した教育課程によって実現を目指す生徒の姿等が描かれることになる。各学校における教育目標を踏まえ、総合的な探究の時間の目標を設定することによって、総合的な探究の時間が、各学校の教育課程の編成において、特に教科・科目等横断的なカリキュラム・マネジメントという視点から、極めて重要な役割を担うことが今まで以上に鮮明となった。それゆえ、総合的な探究の時間におけるカリキュラム・マネジメントの充実について検討することは、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図る上で極めて重要である。

本書第2編では、総合的な探究の時間におけるカリキュラム・マネジメントの充実のための具体的な方策について解説する。カリキュラム・マネジメントの三つの側面について、①については2章から4章、②については5章、③については6章で論じている。

第2章 全体計画の作成

第1節 全体計画の基本的な考え方

1. 全体計画の概要

全体計画とは、指導計画のうち、学校として、総合的な探究の時間の教育活動の基本的な在り方を示すものである。具体的には、各学校において定める目標及び内容について明記するとともに、学習活動、指導方法、指導体制、学習の評価等についても、その基本的な内容や方針等を概括的・構造的に示すことが考えられる。

全体計画に盛り込むべきものとしては、①必須の要件として記すもの、②基本的な内容や方針等を概括的に示すもの、③その他、各学校が自分の学校の全体計画を示す上で必要と考えるもの、の三つに分けて考えられる。

①必須の要件として記すもの

- ・各学校における教育目標
- ・各学校において定める目標
- ・各学校において定める内容（目標を実現するにふさわしい探究課題、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力）

②基本的な内容や方針等を概括的に示すもの

- ・学習活動
- ・指導方法
- ・指導体制（環境整備、外部との連携を含む）
- ・学習の評価

③その他、各学校が全体計画を示す上で必要と考えるもの

- ・年度の重点、地域の実態、学校・課程・学科の実態、生徒の実態、保護者の願い、地域の願い、教職員の願い
- ・各教科・科目等との関連、地域や大学との連携、小学校や中学校との連携、高等学校間の連携など

その他、全体計画には、各学校が必要と考える事項を加えることができる。

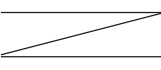
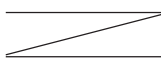
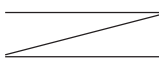
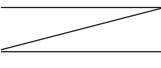
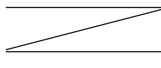
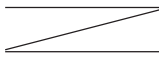
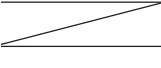
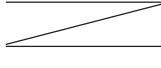
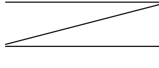
以上を書き表した全体計画の様式の例が図1である。必要な要素が含まれていれば、その様式は、各学校で自由に定めることができる。

なお、「社会に開かれた教育課程」の理念に基づき、目指すべき教育の在り方を家庭や地域と共有し、その連携及び協働のもとに教育活動を充実させていくためには、各学校の教育目標を含めた教育課程の編成についての基本的な方針を、家庭や地域とも共有していくことが重要である。そのためにも、総合的な探究の時間の全体計画の策定や公表を効果的に行うことが求められる。

生徒の実態	総合的な探究の時間 第1の目標	保護者の願い
地域の実態	〇〇高等学校 教育目標	地域の願い

総合的な探究の時間の目標

総合的な探究の時間の内容

学年	目標を実現するにふさわしい探究課題	探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力		
		知識及び技能	思考力, 判断力, 表現力等	学びに向かう力, 人間性等
第1学年	〇〇〇			
第2学年	△△△			
第3学年	□□□			

学習活動 「内容」との関わりにおいて実際に生徒が行う学習活動	指導方法 学習活動を適切に実施する際に必要となる指導方法	指導体制 全体計画を適切に推進するための体制	学習の評価 評価の考え方や評価方法, 指導計画・学習指導の評価に関する方針, 評価活動を充実させる手立て等
--	--	----------------------------------	---

各教科・科目等との関連	地域との連携	近隣の小学校・中学校・高等学校等との連携
-------------	--------	----------------------

図1 総合的な探究の時間の全体計画の様式(例)

2. 全体計画の中心となる三要素

先に示した全体計画における必須の要件の中でも「各学校において定める目標」と、「目標を実現するにふさわしい探究課題」、「探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力」は、全体計画における必須の要件となる三要素と考えることができる。

〈全体計画の中心となる三要素〉

- ①各学校において定める目標
- ②目標を実現するにふさわしい探究課題
- ③探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力

総合的な探究の時間においては、横断的・総合的な学習や探究活動としての単元を実現することが欠かせない。そのためには、三要素を明らかにする必要がある。

これらの関係は、図2のように、表すことができる。

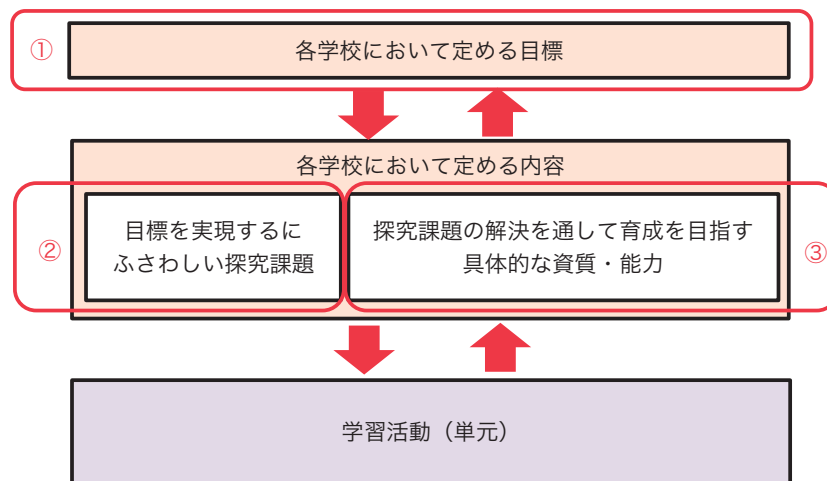


図2 全体計画の三要素と学習活動(単元)の関係

三要素のうち、「各学校において定める目標」は、学習指導要領に示された第1の目標及び各学校における教育目標を踏まえて作成するものである。一方、「②目標を実現するにふさわしい探究課題」、「③探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力」は、探究課題としてどのような対象と関わり、その探究課題の解決を通して、どのような資質・能力を育成するのかを示すものであり、両者は各学校において定める内容を構成している。②と③は互いに関係していると同時に、両者がそろって初めて、各学校が定める目標の実現に向けて指導計画は適切に機能する。

3. 三要素を明確にすることの価値

全体計画の作成に当たっては、2に示した三要素がとりわけ重要である。それは、以下の理由による。

一つ目は、「探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力」とは、各学校において定める目標に記された資質・能力を各探究課題に即して具体化したものであり、生徒が各探究課題の解決に取り組む中で、教師の適切な指導により実現を目指す資質・能力だからである。各学校において

定める目標と、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力の二つにより、この時間の教育活動を通して「どんな生徒を育てたいか」を明示することになる。

二つ目は、総合的な探究の時間では、現代的な諸課題（国際理解、情報、環境、福祉・健康など）や、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題、職業や自己の進路に関する課題などに取り組むことが期待されているからである。これらの実社会・実生活の中から見いだされた探究課題は、これからの社会を担う生徒にとっては避けて通ることのできない課題である。こうした正解が一つに定まらない課題について、真剣に解決に向けて取り組むことこそが、これからの時代を生きる生徒に求められている。「目標を実現するにふさわしい探究課題」を明らかにすることは、実社会・実生活の中にある複雑な問題状況に向き合い、学び続ける生徒の育成につながる。

三つ目は、周囲の環境等との関係の中で、将来に向けていかに生きていくかを考えることが期待されているからである。問題の解決や探究活動では、生徒が自ら設定した学習課題や学習対象などを、自分と切り離して見たり扱ったりするのではなく、自分や自分の生活との関わりの中で捉え、考えることになる。また、人や社会、自然を、別々の存在として認識するのではなく、それぞれがつながり合い関係し合うものとして捉え、認識しようとする。総合的な探究の時間では、それぞれの生徒が具体的に関係的な認識を、自ら構築していくことを期待している。こうして総合的な探究の時間では、目標に示す「自己の在り方生き方を考えていく」生徒の姿が具現されていくのである。

そのためにも、地域や社会との関わりを重視することが大切である。地域や社会との関わりを重視することは、自分とのつながりが明らかになり生徒の関心も高まりやすい。また、直接体験なども行いやすく、身体全体を使って、本気になって取り組む生徒の姿が生み出される。また、生徒にとっての学ぶ意義や目的を明確にすることが可能で、そのことが生徒の意欲的な学習の姿を生み出すことにもつながる。

このように、各学校においては、総合的な探究の時間の必要性や重要性を再確認し、三要素を定めることが求められる。

第2節 全体計画作成の進め方

1. 学校教育目標を確認する

高等学校においては、各学校の設置者が、各学校が育成を目指す資質・能力を明確にするために、各学校その他関係者と連携しつつ、在籍する生徒の状況や意向、期待に加え、学校の歴史、現在の社会や地域の実情を踏まえて、また、20年後・30年後の社会像・地域像を見据えて、各学校の存在意義や各学校に期待されている社会的役割、目指すべき学校像を「スクール・ミッション」として再定義することが求められている。

各学校においては、スクール・ミッションや学校教育目標の達成に向けて、「入口」から「出口」までの教育活動を一貫した体系的なものに再構築するため、また、継続性のある教育活動を担保するために、まずは、「グラデュエーション・ポリシー」（育成を目指す資質・能力に関する方針）を明らかにし、そのために求められる「カリキュラム・ポリシー」（教育課程の編成及び実施に関する方針）

を定めた上で、「アドミッション・ポリシー」（入学者の受入れに関する方針）について明らかにすることが求められる。これらの3つのスクール・ポリシーを定め、スクール・ポリシーを起点として組織的かつ計画的に、学習者重視の立場から各種の教育活動の改善を図ることが大切である。

高等学校学習指導要領の第1章総則には、学校教育目標と総合的な探究の時間の目標について、以下のように規定されている。

教育課程の編成に当たっては、学校教育全体や各教科・科目等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にするとともに、教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。その際、第4章の第2の1に基づき定められる目標との関連を図るものとする。

ここに示されているように、教育課程の編成に当たっては、各学校の教育目標を明確にするとともに、総合的な探究の時間において各学校が定める目標との関連を図ることが求められている。したがって、総合的な探究の時間の目標の設定に当たっては、学校教育目標を確認し、その関連を意識することが大切である。

その場合には、学校教育目標が達成された生徒の姿を、育成を目指す資質・能力の三つの柱に沿って具体化することが考えられる。例えば、「自律・協働・創造」を学校教育目標とする高等学校であれば、以下のように具体化できる。

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
自律	自分のよさや課題	解決の見通しをもつ	自律的に地域や社会に関わる
協働	人々の努力や工夫	目的や相手に合わせる	地域や社会に参画する
創造	持続可能な地域や社会の創造	自ら課題を見つける	よりよい地域や社会を創る

このように学校教育目標を分析的に捉えることで、各学校が育成を目指す「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が明確になり、学校教育目標と各学校において定める目標がつながることが期待できる。

2. 各学校において定める目標を設定する

各学校における目標は、次のような点を基本に考えていくことができる。

(1) 目標の設定

各学校が目標を設定する際には、総合的な探究の時間の教育活動が創意工夫に満ちた、豊かなものになるよう第1の目標の構成に従って、以下の二点を踏まえ、独自に目標を定める必要がある。

①「探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通すこと」、「自己の在り

方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成すること」という、目標に示された二つの基本的な考え方を踏襲すること。

- ②育成を目指す資質・能力については、「育成すべき資質・能力の三つの柱」である「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つのそれぞれについて、第1の目標の趣旨を踏まえること。

（2）目標の書き表し方の例

目標を書き表すには、上の二点を適切に反映した上で、これまで各学校が取り組んできた経験を生かして、各目標の要素のいずれかを具体化したり、重点化したり、別の要素を付加して目標を設定することが考えられる。

○「具体化」の例

地域の素材を扱った学習を想定している場合、「横断的・総合的な学習を行うことを通して」は、次のように「具体化」できる。

- ・自分の生活と地域の人々や事象との関わりについて探究することを通して
- ・地域の自然や社会と人々についての探究を通して など

○「重点化」の例

「よりよく課題を解決し」を「重点化」すると、次のようになる。

- ・仮説を立て、調査を通して得られた情報を分析し、論理的に結論を導く考え方を身に付け
- ・課題解決を目指して事象を比較したり、因果関係を推測したりして考え など

○「付加」の例

各学校において大切にしたいことで、この時間の趣旨や教育課程上の位置付けに照らして妥当な要素を「付加」することができる。例えば、次のような要素が考えられる。

- ・地域に対する誇りと愛着を高め
- ・持続可能な社会づくりへの意識をもち
- ・自他の思いや願いを尊重し など

目標の記述の仕方については決まった型があるわけではない。重要なことは、適切な分量の中で各学校が大切にしたいことを、分かりやすい表現で盛り込むように工夫することである。例えば、以下のような示し方が考えられる。

〔設定例〕

探究の見方・考え方を働かせ、地域や社会の人、もの、ことに関わる総合的な学習を通して、自己の在り方生き方を考えながら、適切で論理的な課題の発見と解決ができるようにするために、以下の資質・能力を育成する。【重点化】

- (1) 地域や社会の人、もの、ことに関わる探究の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付けるとともに、地域や社会の特徴やよさに気づき、それらが人々の関わりや

協働によって支えられていることに気付く。【具体化】

(2) 地域や社会の人、もの、ことと自分自身との関わりから問いを見だし、その解決に向けて仮説を立てたり、調査して得た情報を基に分析したりする力を身に付けるとともに、論理的にまとめ・表現する力を身に付ける。【重点化】

(3) 地域や社会の人、もの、ことについての探究活動に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、持続可能な社会を実現するために行動し、社会に貢献しようとする態度を育てる。【付加】

3. 目標を実現するにふさわしい探究課題

(1) 目標を実現するにふさわしい探究課題とは

目標を実現するにふさわしい探究課題とは、目標の実現に向けて学校として設定した、生徒が探究に取り組む課題であり、従来「学習対象」と説明してきたものに相当する。目標を実現するにふさわしい探究課題については、地域や学校の実態、生徒の特性等に応じて、例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題、職業や自己の進路に関する課題などのことであり、以下の三つの要件を兼ね備えることが求められる。

- ①探究の見方・考え方を働かせて学習することがふさわしい課題であること
- ②その課題をめぐって展開される学習が、横断的・総合的な学習としての性格をもつこと
- ③その課題を学ぶことにより、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくことに結び付いていくような資質・能力の育成が見込めること

(2) 例示された探究課題の特質

探究課題については、各学校の総合的な探究の時間の目標や、生徒、学校、地域の実態に応じて、前述の三つの要件を満たす教育的に価値ある諸課題を、各学校の判断で内容として設定したものであり、①国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、②地域や学校の特色に応じた課題、③生徒の興味・関心に基づく課題、④職業や自己の進路に関する課題の四つが例示されている。

国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題とは、社会の変化に伴って切実に意識されるようになってきた現代社会の諸課題のことである。そのいずれもが、持続可能な社会の実現に関わる課題であり、現代社会に生きる全ての人が、これらの課題を自分自身の在り方生き方との関わりで考え、問いを発し、よりよい解決に向けて行動することが望まれている。また、これらの課題については正解や答えが一つに定まっているものではなく、従来の各教科・科目等の枠組みでは必ずしも適切に扱うことができない。

地域や学校の特色に応じた課題とは、町づくり、伝統文化、地域経済、防災、都市計画、観光など各地域や各学校に固有な諸課題のことである。全ての地域社会には、その地域ならではのよさがあり

特色がある。古くからの伝統や習慣が現在まで残されている地域、地域の気候や風土を生かした特産物や工芸品を製造している地域など、様々に存在している。これらの特色に応じた課題は、よりよい郷土の創造に関わって生じる地域ならではの課題であり、生徒が地域における自己の在り方生き方との関わりで考え、問いを発し、よりよい解決に向けて地域社会で行動していくことが望まれる。

生徒の興味・関心に基づく課題とは、生徒がそれぞれの発達段階に応じて興味・関心を抱きやすい課題のことである。個々の生徒が、日常の生活はもちろん各教科・科目等における学習の進展に応じて興味・関心を抱いたり、各教科・科目等の学習を契機に生起したりすることも期待できる課題である。例えば、社会や時代の変化と流行の変遷との関連について考えたり、社会の変化に対応した教育や保育の在り方について考えたりすることなどが考えられる。これらの課題は、一人一人の生活と深く関わっており、生徒が自己の在り方生き方との関わりで考え、問いを発し、よりよい解決に向けて行動することが望まれる。

職業や自己の進路に関する課題とは、中等教育の最終段階にある生徒にとって、自己の在り方に関する思索を自身の進路に結び付け、自己の生き方について現実的に検討する上で必要となる諸課題のことである。この時期の生徒は、人間としての在り方や将来の生き方について、深く考えることを求めているとともに、就職や進学などについて、現実的に検討することを迫られてもいる。職業や自己の進路について、この両面から思う存分、納得がいくまで探究する機会を提供し、自己の中で統合できるまでに導くことは、生徒の人間的成熟や安定の確保、自己の将来を力強く着実に切り開いていこうとする資質・能力の育成において、極めて重要である。したがって、こうした課題を総合的な探究の時間の探究課題として取り上げ、具体的な学習活動としていくことには大きな意義がある。

(3) 探究課題の設定

探究課題の設定に当たっては、例示された四つの課題を意識し、生徒が探究的に関わりを深める人・もの・ことなどの学習対象について具体化して示すことが考えられる。例えば、以下のようなものなどである。なお、これらは、従来「学習対象」として示されてきたものと深く関わっている。

四つの課題	探究課題の例
横断的・総合的な課題 (現代的な諸課題)	外国人の生活者とその人たちの多様な価値観(国際理解)
	情報化の進展とそれに伴う経済生活や消費行動の変化(情報)
	自然環境とそこに起きているグローバルな環境問題(環境)
	高齢者の暮らしを支援する福祉の仕組みや取組(福祉)
	心身の健康とストレス社会の問題(健康)
	社会生活の変化と資源やエネルギーの問題(資源エネルギー)
	食の問題とそれに関わる生産・流通過程と消費行動(食)
	科学技術の発展と社会生活や経済活動の変化(科学技術)
	など
地域や学校の特色に応じた課題	地域活性化に向けた特色ある取組(町づくり)
	地域の伝統や文化とその継承に取り組む人々や組織(伝統文化)
	商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会(地域経済)
	安全な町づくりに向けた防災計画の策定(防災)
	など
生徒の興味・関心に基づく課題	文化や流行の創造や表現(文化の創造)
	変化する社会と教育や保育の質的転換(教育・保育)
	生命の尊厳と医療や介護の現実(生命・医療)
	など
職業や自己の進路に関する課題	職業の選択と社会貢献及び自己実現(職業)
	働くことの意味や価値と社会的責任(勤労)
	など

4. 探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力

探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力とは、各学校において定める目標に記された資質・能力を各探究課題に即して具体化したものであり、生徒が各探究課題の解決に取り組む中で、教師の適切な指導により育成を目指す資質・能力のことである。したがって、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力には、各学校の目標が実現された際に現れる望ましい生徒の成長の姿が示されることになる。各学校において定める目標と、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力の二つにより、この時間の教育活動を通して「どんな生徒を育てたいか」を明示することになる。

これまでは、総合的な学習の時間において「育てようとする資質や能力及び態度」として、「学習方法に関すること」、「自分自身に関すること」、「他者や社会との関わりに関すること」の三つの視点を参考にして例示されていた。今回の改訂では、こうした趣旨を受け継ぎつつ、資質・能力の三つの柱に沿って、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力を各学校で明示することが求められている。

(1) 知識及び技能

探究の過程において、それぞれの課題についての事实的知識や技能が獲得される。この「知識及び技能」は、各学校が設定する探究課題に応じて異なることが考えられる。一方、事实的知識は探究の過程が繰り返され、連続していく中で、何度も活用され発揮されていくことで、構造化され生きて働く概念的な知識へと高まっていく。

「知識及び技能」に関する資質・能力については、「①概念的な知識の獲得」「②自在に活用することが可能な技能の獲得」「③探究の意義や価値の理解」の三つに配慮して設定することが考えられる。

①概念的な知識の獲得

総合的な探究の時間においては、事実に関する知識に加え、各教科・科目等の枠を超えて、知識の統合がなされていくことにより、次のような概念的な知識の獲得が想定されている。

多様性：それぞれには特徴があり、多種多様に存在している
独自性：それぞれに違いがあり、個別のよさをもっている
相互性：互いに関わりながらよさを生かしている
協働性：力を合わせ、目的の実現に向けて取り組む
有限性：物事には終わりがあり、限りがある
創造性：新しいものを創り出し、生み出していく

探究の過程により、どのような概念的な知識が獲得されるかということについては、何を探究課題として設定するか等により異なる。例えば、「外国人の生活者とその人たちの多様な価値観」を探究課題として設定した場合は、

- ・世界各地には、それぞれの文化や伝統があり、それを大切に生活していること（独自性）
- ・文化的背景の多様性を受け入れつつ、様々な立場の人が支え合い、協力し合っていること（協働性）
- ・文化や伝統、生活様式の違いを生かした新しい価値を生み出していること（創造性）

などが考えられる。また、「自然環境とそこに起きているグローバルな環境問題」を探究課題として設定した場合は、

- ・生物はそれぞれに異なる生態的特徴をもっており、それは生育環境に影響を受けていること（多様性）
- ・自然環境は互いに関わり関係しながら、国を越えて地球規模でつながっていること（相互性）
- ・自然環境は様々な要因で変化する可能性があり、限りがあること（有限性）

などが考えられる。

この例では、直接的に学習で関わる対象は「外国人の生活者とその暮らしや価値観」「自然環境とその変化や現状」であるが、それを探究することを通して獲得される概念は、対象に限定された概念だけではなく、広く持続可能な社会づくりに関わる様々なテーマについて考える際にも使うことができる概念的な知識となりうる。各学校が目標や内容を設定するに当たっては、どのような概念的な知識が形成されるか、どのように概念的な知識を明示していくかなどについても検討していくことが重

要である。

このように、知識については、探究課題からどのような概念的知識の獲得を目指すのかを明確に設定することが大切である。図3は、平成25年度版『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』に掲載されていた学習対象と学習事項を参考に再整理したものである。学習対象とは、生徒が探究的に関わりを深める人・もの・ことを示したものであり、探究課題に該当するものと考えることができる。そして、学習事項とは、個々の学習対象との関わりを通して、生徒に「どんなことを学んでほしいか」について、更に踏み込んで分析的に示したものである。獲得する概念的知識を設定する際は、この図に示した探究課題や学習事項を参考にして検討していくとよい。

②自在に活用することが可能な技能の獲得

技能は、探究の過程が繰り返され連続していく中で、手順に関する知識を関連付けて構造化し、特定の場面や状況だけではなく日常の様々な場面や状況で活用可能な技能として身に付いていく。したがって、いつでも、滑らかに、安定して、素早く行われるような技能を獲得する生徒の姿として設定することが考えられる。

③探究の意義や価値の理解

総合的な探究の時間においては、①②とともに、探究の意義や価値の理解として、資質・能力の変容を自覚すること、学習対象に対する認識が高まること、学習が生活とつながること、探究を自律的に進められることなどを、探究してきたことと結び付けて理解することが期待されている。したがって、探究の意義や価値を理解している生徒の姿として設定することが考えられる。

探究課題		学習事項(例)
横断的・総合的な課題(現代的な諸課題)	外国人の生活者とその人たちの多様な価値観(国際理解)	・世界の国々の伝統、文化、価値観等の特徴と地球市民としての自覚 ・日本の伝統、文化、価値観等の特徴と日本人としての自覚 ・国際社会の持続可能な発展のための課題と共生に向けた取組
	情報化の進展とそれに伴う経済生活や消費行動の変化(情報)	・情報通信技術の進展による、社会経済や人々の消費行動、コミュニケーションスタイルの変化等に伴う問題状況 ・情報の収集・選択・発信における責任主体としての自覚 ・望ましい情報社会の構築に向けた情報リテラシー
	自然環境とそこに起きているグローバルな環境問題(環境)	・自然環境のかけがえのなさとその人類的価値 ・地域の自然環境の調査とそこで見いだされた課題 ・国際関係の中での、環境の保全と社会の経済的発展との構造的課題
	高齢者の暮らしを支援する福祉の仕組みや取組(福祉)	・高齢者の尊厳と自立に向けた支援における日本や諸外国の取組 ・わが町の高齢者福祉の現状と課題 ・福祉問題の解決やよりよい福祉を創造するための地域活動と参画
	心身の健康とストレス社会の問題(健康)	・健康の意味と人間関係や社会・自然環境との関連 ・社会構造の変化と健康の保持・増進をめぐる問題状況 ・より健康で安全な生活を送るための対策や取組
	社会生活の変化と資源やエネルギーの問題(資源エネルギー)	・社会を支える資源・エネルギー活用と、その有限性や危険性、経済性との構造的課題 ・資源・エネルギー問題と自分たちの消費意識や行動との関わり ・省資源・省エネルギーと持続可能な社会の構築のための取組
	食の問題とそれに関わる生産・流通過程と消費行動(食)	・日本の農水産業やその従事者の現状とグローバル化による変化 ・食の安全保障をめぐる生産や流通の現状と自分たちの食生活との関わり ・食をめぐる問題の解決とよりよい食環境の創造を目指した取組
	科学技術の発展と社会生活や経済活動の変化(科学技術)	・科学技術の発展に伴う生活様式や価値観、社会構造の変化 ・科学技術の発展がもたらした、私たちの暮らしの中の光と影 ・科学技術の進展と持続可能な社会の構築との共存
地域や学校の特色に応じた課題	域活性化に向けた特色ある取組(町づくり)	・地域の現状と地域の特徴 ・町づくりや地域活性化への住民の取組 ・地域の担い手としての自覚や未来の町づくりに向けた構想
	地域の伝統や文化とその継承に取り組む人々や組織(伝統文化)	・地域の伝統や文化のもつ特徴 ・地域の伝統や文化の継承に力を注ぐ人々や社会の仕組み ・地域の一員として、伝統や文化をよりよく継承し発展させていこうとする取組
	商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会(地域経済)	・社会の変化と地域の商店街が抱える問題 ・地域経済の活性化に向けて努力する人々とその思い ・地域の一員として、地域社会の再生にかかわろうとする活動や取組
	安全な町づくりに向けた防災計画の策定(防災)	・自然災害による被害の深刻さと広がり ・過去の災害の被害状況とその反省に基づく防災対策 ・地域社会の一員として、災害に備えた安全な町づくりの担い手としての取組
生徒の関心に基づく課題	文化や流行の創造や表現(文化の創造)	・社会や時代の変化と流行の変遷との関連 ・流行や文化に対する自分たちの意識や行動の調査 ・社会への帰属意識と自己・個性の表現との対峙
	変化する社会と教育や保育の質的転換(教育・保育)	・成熟社会における教育の在り方とその転換 ・自分たちの受けてきた教育の歴史的な位置付けや外国の現状 ・これからの社会に応じた教育や子育ての在り方への模索と取組
	生命の尊厳と医療や介護の現実(生命・医療)	・生命の質や生命倫理等に関わる今日的課題 ・生殖補助医療や臓器移植等、最先端医療の是非と、治療を受けている人やその家族の思い ・自他の生命の尊厳を理解し守るための医療・看護の在り方と個々人の死生観
職業や自己の進路に関する課題	職業の選択と社会貢献及び自己実現(職業)	・社会貢献や自己実現のための職業選択への模索と取組 ・自分自身の職業的将来展望を模索する取組 ・様々な仕事の関連性と課題
	働くことの意味や価値と社会的責(勤労)	・現代社会をつくり、支える様々な職業や機関の機能や意義と課題 ・様々な勤労者の夢や思い ・経済的自立と働くことの意味と責任

図3 探究課題と学習事項の例

(2) 思考力、判断力、表現力等

「思考力、判断力、表現力等」については、「知識及び技能」を未知の状況において活用できるものとして身に付けるようにすることが大切である。そのためにも、様々に異なる状況や複雑で答えが一つに定まらない問題に対して、「知識及び技能」を繰り返し活用・発揮することが大切になる。その過程で、問題状況の特質や情報の性質、表現する相手やその目的等によって、どの「知識及び技能」が適切であり有効であるかなどに気付いていく。そのような経験の積み重ねの中で、次第に未知の状況においても活用できるものとして、思考力、判断力、表現力等は確かに育成されていく。

「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力については、「①課題の設定」「②情報の収集」「③整理・分析」「④まとめ・表現」の過程で育成されるものとして設定することが考えられる。

①課題の設定

「課題の設定」については、実社会や実生活に広がっている複雑な問題に向き合って、自らの力で解決の方向を明らかにし、見通しをもって計画的に取り組むことができるようになることが期待されている。資質・能力の設定に当たっては、例えば、

- ・複雑な問題状況の中から適切に課題を設定する
- ・仮説を立て、検証方法を考え、計画を立案する

などの視点で設定することが考えられる。

②情報の収集

「情報の収集」については、情報収集の手段を意図的・計画的に用いたり、解決の過程や結果を見通したりして、多様で効率的な情報収集が行われるようになることが期待されている。資質・能力の設定に当たっては、例えば、

- ・目的に応じて手段を選択し、情報を収集する
- ・必要な情報を収集し、類別して蓄積する

などの視点で設定することが考えられる。

③整理・分析

「整理・分析」については、収集した情報を取捨選択すること、情報の傾向を見付けること、複数の情報を組み合わせて新しい関係を見いだすことなどが期待されている。資質・能力の設定に当たっては、例えば、

- ・複雑な問題状況における事実や関係を把握し、自分の考えをもつ
- ・視点を定めて多様な情報を分析する
- ・課題解決を目指して事象を比較したり、因果関係を推測したりして考える

などの視点で設定することが考えられる。

④まとめ・表現

「まとめ・表現」については、整理・分析した結果や自分の考えをまとめたり他者に伝えたりすること、振り返ることによって対象や自分自身に対する理解が深まることなどが期待されている。資質・能力の設定に当たっては、例えば、

- ・相手や目的、意図に応じて論理的に表現する
- ・学習の仕方や進め方を振り返り、学習や生活に生かそうとする

などの視点で設定することが考えられる。

なお、総合的な探究の時間において育成することを目指す「思考力、判断力、表現力等」を、探究の過程の各段階で整理すると図4のようになる。

	小学校・中学校	高等学校	
①課題の設定	■問題状況の中から課題を発見し、設定する ■解決の方法や手順を考え、見通しをもって計画をたてる など	■複雑な問題状況の中から適切に課題を設定する ■仮説を立て、検証方法を考え、計画を立案する など	より複雑な問題状況 確かな見通し、仮説
②情報の収集	■情報収集の手段を選択する ■必要な情報を収集し、蓄積する など	■目的に応じて手段を選択し、情報を収集する ■必要な情報を収集し、類別して蓄積する など	より効率的・効果的な手段 多様な方法からの選択
③整理・分析	■問題状況における事実や関係を把握し理解する ■多様な情報にある特徴を見付ける ■課題解決を目指して事象を比較したり、関連付けたりして考える など	■複雑な問題状況における事実や関係を把握し、自分の考えをもつ ■視点を定めて多様な情報を分析する ■課題解決を目指して事象を比較したり、因果関係を推測したりして考える など	より深い分析 確かな根拠付け
④まとめ・表現	■相手や目的に応じて、分かりやすくまとめ、表現する ■学習の進め方や仕方を振り返り、学習や生活に生かそうとする など	■相手や目的、意図に応じて論理的に表現する ■学習の仕方や進め方を振り返り、学習や生活に生かそうとする など	より論理的で効果的な表現 内省の深まり

図4 探究の過程における思考力、判断力、表現力等とその深まり(例)

こうした「思考力、判断力、表現力等」は、この探究課題ならばこの力が育まれるといったような対応関係があるものではなく、複数の単元を通して、さらには学年や学校段階をまたいで、探究の過程を繰り返すことで、時間を掛けながら徐々に育成していくものである。

このため、それぞれの過程で育成される資質・能力について、生徒の発達の段階や、探究活動への習熟の状況、その他生徒や学校の実態に応じた設定をしていくことが重要である。

例えば、課題の設定については、学年が上がり、生徒の探究活動への習熟が高まるにつれて、問題状況を単純なものからより複雑なものへとしたり、解決の手順等について教師があらかじめ示すことを段々と少なくし、生徒自身が見通しや仮説を立てることに比重を移したりして、質を高めていくことが考えられる。

同じように、情報の収集においては、多様な方法からより効率的・効果的な手段を選択できるようにしたり、整理・分析においては、より深く分析したり、より確かな根拠付けが行われるよう質を高めていくことが考えられる。

まとめ・表現については、相手や目的に応じてより分かりやすく伝わるように、より論理的で効果的な表現を工夫したり、学習を振り返る中で、より物事や自分自身に関して深い気付きとなるよう内省的な考え方が深まるようにしたりしていくことが考えられる。

（3）学びに向かう力、人間性等

「学びに向かう力、人間性等」は、よりよい生活や社会の創造に向けて、自他を尊重すること、自ら取り組んだり異なる他者と力を合わせたりすること、社会に寄与し貢献することなどの適正かつ好ましい態度として「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を活用・発揮しようとするところと考えることができる。その設定に当たっては、「自分自身に関すること及び他者や社会との関わりに関することの両方の視点を含む」ようにすることが求められる。一方、自分自身に関することと他者や社会との関わりに関することとは截然と区別されるものではなく、例えば、社会に参画することや社会への貢献のように、それぞれは、積極的に社会参画をしていこうという態度を育むという意味においては他者や社会との関わりに関することである。また、探究を通して学んだことと他者理解とを結び付けながら自分の将来や進路について夢や希望をもとうとすることは、自分自身に関することとも深く関わることでありと考えることもできる。

重要なことは、自分自身に関することと他者や社会との関わりに関することの二つのバランスをとり、関係を意識することである。主体性と協働性とは互いに影響し合っているものであり、自己の理

		小学校・中学校	高等学校
自己理解・他者理解	自分自身に関すること	探究的な活動を通して、自分の生活を見直し、自分の特徴やよさを理解しようとする 	探究を通して、自己を見つめ、自分の個性や特徴に向き合おうとする 
	他者や社会との関わりに関すること	探究的な活動を通して、異なる意見や他者の考えを受け入れて尊重しようとする 	探究を通して、異なる多様な意見を受け入れ尊重しようとする 
主体性・協働性	自分自身に関すること	自分の意思で、目標をもって課題の解決に向けた探究に取り組もうとする 	自分の意思で真摯に課題に向き合い、解決に向けた探究に取り組もうとする 
	他者や社会との関わりに関すること	自他のよさを生かしながら協力して問題の解決に向けた探究に取り組もうとする 	自他のよさを認め特徴を生かしながら、協働して解決に向けた探究に取り組もうとする 
将来展望・社会参画	自分自身に関すること	探究的な活動を通して、自己の生き方を考え、夢や希望などをもとうとする。 	探究を通して、自己の在り方生き方を考えながら、将来社会の理想を実現しようとする 
	他者や社会との関わりに関すること	探究的な活動を通して、進んで実社会・実生活の問題の解決に取り組もうとする 	探究を通して、社会の形成者としての自覚をもって、社会に参画・貢献しようとする 

図5 学びに向かう力、人間性等の例

解なくして他者を深く理解することは難しい。これらの関係は、図5のように表すことができる。

自分自身に関することとしては、自己理解や主体性、将来展望などに関わる心情や態度、他者や社会との関わりに関することとしては、他者理解や協働性、社会参画などに関わる心情や態度が考えられる。

このように図5を参考にしながら、「学びに向かう力、人間性等」については、自他を尊重する「①自己理解・他者理解」、自ら取り組んだり力を合わせる「②主体性・協働性」、未来に向かって継続的に社会に関わろうとする「③将来展望・社会参画」について育成される資質・能力として作成することが考えられる。

コラム SDGsの視点を取り入れる

2015年9月にアメリカ合衆国・ニューヨークで実施された国連サミットにおいて、150か国以上の首脳に参加により「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals, SDGs)が掲げられた。これは、発展途上国のみならず先進国自身も取り組む2016年から2030年までの国際目標で、貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社会など、持続可能な世界を実現するための17の目標と169のターゲットから構成されている。



SDGs全ての目標の達成に寄与する「持続可能な開発のための教育（ESD）」は、地球規模の課題を自分事として捉え、その解決に向けて自ら行動を起こす力を身に付けるための教育であり、学習指導要領においても、前文及び総則に「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられている。SDGs達成に向けては、解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や、唯一の正解が存在しない課題に取り組む必要がある。したがって、実社会や実生活における課題を探究する総合的な探究の時間において取り組む探究課題も、SDGsの目標やターゲットに関連することが想定される。例えば、77頁で例示した探究課題については、図6に示すようにSDGsの目標が関連することが考えられる。なお、これらはあくまで例示であり、必ずしもここに示したSDGsの目標が関連するとは限らず、また、他のSDGsの目標が関連することも考えられる。なお、SDGsの目標の4番目には、「教育」に関する目標が示されているが、この目標はSDGsの目標の一つとして位置付けられているだけでなく、SDGsの全ての目標の実現に寄与するものである。

総合的な探究の時間において取り組む探究課題について、SDGsの視点を踏まえて探究することにより、生徒は、自分たちが解決しようと取り組んでいる課題が、地域や国を超えて地球規模でつながっていることを実感することができる。

その一方で、SDGsの視点を取り入れる際には、SDGsに関する知識の習得を図る学習指導に終始することのないよう、今回の改訂により総合的な探究の時間において明確にされた、「探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行う」というこの時間の特質を十分に踏まえることが大切である。

(参考)「持続可能な開発のための教育（ESD）推進の手引き」

<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1405507.htm>

探究課題		関連するSDGsの目標の例		
横断的・総合的な課題(現代的な諸課題)	外国人の生活者とその人たちの多様な価値観(国際理解)			
	情報化の進展とそれに伴う経済生活や消費行動の変化(情報)			
	自然環境とそこに起きているグローバルな環境問題(環境)			 
	高齢者の暮らしを支援する福祉の仕組みや取組(福祉)			
	心身の健康とストレス社会の問題(健康)			
	社会生活の変化と資源やエネルギーの問題(資源エネルギー)			
	食の問題とそれに関わる生産・流通過程と消費行動(食)			
	科学技術の発展と社会生活や経済活動の変化(科学技術)			
地域や学校の特色に応じた課題	地域活性化に向けた特色ある取組(町づくり)			
	地域の伝統や文化とその継承に取り組む人々や組織(伝統文化)			
	商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会(地域経済)			
	安全な町づくりに向けた防災計画の策定(防災)			
基づく課題 生徒の興味・関心に	文化や流行の創造や表現(文化の創造)			
	変化する社会と教育や保育の質的転換(教育・保育)			 
	生命の尊厳と医療や介護の現実(生命・医療)			
進路に関する課題 職業や自己の	職業の選択と社会貢献及び自己実現(職業)			
	働くことの意味や価値と社会的責任(勤労)			

図6 探究課題とSDGsの関連の例

第3節 全体計画の具体例

事例 A高等学校の全体計画

県の中心部に位置するA高等学校は、長い歴史をもつ伝統校で、交通のアクセスもよいことから、毎年多くの志願者が集まる学校である。設置している学科は普通科のみであり、ほとんどの生徒が大学等への進学を希望している。

A高等学校では、総合的な探究の時間と自分の将来の進路を重ねながら探究し続ける生徒の育成を目指しており、毎年、総合的な探究の時間の全体計画の見直しをしている。

(1) 学校において定める目標

A高等学校の学校教育目標は、「県のリーダー校として、グローバルな社会に貢献できる力をもった人材の育成」である。この学校教育目標を実現するため、「地域や現代社会の諸問題に関わる探究活動の充実」に重点を置き、学校において定める目標を設定している。(1)は知識及び技能(2)は思考力、判断力、表現力等(3)は学びに向かう力、人間性等に関わる資質・能力を指している。

(2) 目標を実現するにふさわしい探究課題

目標を実現するにふさわしい探究課題を、第1学年及び第2学年では、「地域の自然環境とそこに起きているグローバルな環境問題」とし、同じテーマを選択した生徒が小グループとなって探究を進める。第1学年で地域の環境に関する問題を洗い出し、第2学年で解決のための具体的な取組を行う。その後、第3学年では、「職業の選択と社会貢献及び自己実現」を探究課題とし、2年間の学びを踏まえ、個人で探究を進める。自己の在り方生き方を探し求める「自己の探求」を行う。自分と社会のつながりを理解し、社会の一員としてできることを考え行動する姿を目指している。

(3) 探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力

各学校において定める目標に記された資質・能力について、各探究課題に即して具体的に示している。A高等学校では、学びに向かう力、人間性等については長期的に見取るため、第1学年及び第2学年を共通のものとして示している。

(4) 指導体制

生徒が取り組むテーマが専門性の高いものとなる可能性もあるため、校内の指導体制の整備に加え、大学教員及び同窓会の人材バンクや地域の商工会等と連携し、専門性の高い指導を実現している。

(5) 学習の評価

発表やプレゼンテーションなどの表現による評価、制作物による評価、個人内評価、教師や友達、地域の人々からの他者評価等、多様な評価方法や評価者を適切に組み合わせている。また、キャリア教育との関連を踏まえ、キャリア・カウンセリングやキャリアパスポートを活用して評価の充実を図っている。

(6) 各教科・科目等との関連

学習の効果を高め、育成を目指す資質・能力を身に付けることができるようにするために、各教科・科目等との関連を意識して総合的な探究の時間の全体計画を構想している。第1学年と第2学年の探究課題を「地域の自然環境とそこに起きているグローバルな環境問題」とし、理科、数学科、地理歴史科及び公民科等で学んだことが、課題の解決の文脈で生かされるように、各教科・科目等の指導計

画を作成している。また、まとめ・表現する過程では国語科、情報科及び外国語科の関連も深いため、各教科・科目等において、総合的な探究の時間で活用できるように指導計画を作成している。

生徒の実態

○ほとんどの生徒が進学希望である。

○県内外から生徒が入学しており、高等学校が位置する市内から通学している生徒は約3割である。

○学力は高いが、自尊感情が低い生徒が県平均と比較して多い。

保護者の願い

○自己実現のために主体的に取り組んでほしい。

○他者の視点に立ち、相手の身になって考え、行動できるようにしてほしい。

〈学校教育目標〉

県のリーダー校として、グローバルな社会に貢献できる力をもった人材の育成

目指す生徒像 これからのグローバルな社会で活躍できる人材

総合的な探究の時間の目標

探究の見方・考え方を働かせ、地域や現代社会の諸問題に関わる横断的・総合的な学習を通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見解決していくための資質・能力を次のとおりを育成する。

(1) 地域や現代社会の諸問題に関わる探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付けるとともに、地域や現代社会の諸問題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解する。

(2) 地域や現代社会の諸問題と自分自身との関わりから問いを見だし、その解決に向けて仮説を立てたり、調査して得た情報を整理・分析したりする力を身に付けるとともに、論理的にまとめ・表現する力を身に付ける。

(3) 地域や現代社会の諸問題に関わる探究活動に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、持続可能な社会を実現するために行動し、地域の一員として社会に貢献しようとする態度を育てる。

地域の実態

○周りに幼稚園、小学校、中学校、大学等の教育機関が充実している。

○地域住民の自治活動が盛んで、地域をあげての行事や取組等が多い。

地域からの期待

○よりよい社会の実現に貢献できるリーダーとなってほしい。

○様々な問題に対して、それらを自分の問題として捉え、多様な人々と協働できる人になってほしい。

総合的な探究の時間の内容

探究課題を解決することを通して育成を目指す資質・能力

目標を実現するにふさわしい探究課題	知識及び技能			思考力、判断力、表現力等				学びに向かう力、人間性等		
	知識	技能	探究の意義や価値の理解	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	自己理解・他者理解	主体性・協働性	将来展望・社会参画
【第1学年】 地域の自然環境とそこに起きているグローバルな環境問題 単元名 地域を探究するⅠ ～地域の現状を環境の視点から見つめよう	・地域の自然環境は互いに関わりながら、地球規模でつながっていることに気付く。	・様々な情報の収集の方法を身に付ける。 ・収集した情報やデータが正確なものであることを確認する。	・地域の環境に対する認識の高まりは、持続可能な社会を目指す取組について探究してきたことの成果であることに気付く。	・様々な問題の中から、適切に課題を設定することができる。	・調べたい目的に応じて、効果的な手段を選択することができる。	・課題の解決に向けて、収集した情報を比較したり、関連付けたりして分析できる。	・相手に分かりやすく論理的に表現することができる。 ・学んだことを振り返り、他の教科・科目等の学習に生かそうとすることができる。	・探究を通して、異なる多様な意見を受け入れ尊重しようとする。	・自分の意図で真摯に課題に向かい合い、解決に向けた探究に継続して取り組もうとする。	・探究を通して、自己の在り方生き方を考えながら、社会の一員として将来社会の理想を実現しようとする。
【第2学年】 地域の自然環境とそこに起きているグローバルな環境問題 単元名 地域を探究するⅡ ～地域に自分たちは何ができるか	・地域の自然環境は互いに関わりながら、地球規模でつながっていることを理解する。 ・地域の環境保全に関わっている方や組織について知る。	・様々な情報の収集の方法を身に付ける。 ・収集した情報やデータが正確なものであることを精査する。	・地域の環境に対する認識の高まりは、持続可能な社会を目指す取組について探究してきたことの成果であることに気付く。	・様々な問題の中から、適切に課題を設定することができる。 ・仮説を立て、検証できる方法を考え、計画を立案することができる。	・調べたい目的に応じて、効果的な手段を選択することができる。 ・必要な情報を複数の方法で収集することができる。	・課題の解決に向けて、収集した情報を比較したり、関連付けたりして、共通点や差異点を明確にできる。 ・収集した情報を精査することができる。	・相手に目的に応じて論理的に表現することができる。 ・学んだことを振り返り、他の教科・科目等の学習に生かそうとすることができる。			
【第3学年】 職業の選択と社会貢献及び自己実現(職業) 単元名 自己を探究する ～自分はこれからどう生きたいのか	・自分の生活が社会とつながっていることや、社会の一員として自分が貢献できることに気付く。	・統計調査やアンケート調査等を適切に実施する。 ・収集した情報やデータが正確なものであることを精査する。	・地域の課題との関係で自己の将来を考えてきたことやそのことによる自己変容が、これまでに進んできた探究の積み重ねによるものであると理解する。	・地域や社会の複雑な問題状況を把握し、自分の進路や興味・関心と結び付けながら自己の課題を明らかにする。 ・全体を見渡し、無理のない計画を立案することができる。	・自己の研究内容に応じて、効果的に情報を収集したり蓄積したりすることができる。 ・必要な情報を複数の方法で、多角的に収集することができる。	・課題の解決に向けて、収集した情報を比較したり、因果関係を推測したりして考察できる。 ・収集した情報を複数の情報源に当たって精査することができる。	・データの質や相手や目的に応じて論理的に表現することができる。 ・学んだことを振り返り、学習や生活に生かそうとすることができる。	・探究を通して、自己を見つめ、自分の個性や特徴に向かい合い、自分なりに自分とはどんな人なのかを問い続けようとする。	・自他のよさを認め、それぞれの特徴を生かしながら、協働して解決に向けた探究に取り組もうとする。	・探究を通して、社会の一員として何ができるのかを問い続け、よりよい社会の実現のために社会に参画・貢献しようとする。

学習活動	指導方法	指導体制	学習の評価	教科・科目等との関連
・第1学年及び第2学年は小グループで、第3学年は個人での探究を通して、自己の在り方生き方を見つめられるようにする。 ・体験活動を重視し、よりよい社会を実現するために自分に何ができるかを考えさせるようにする。	・各教科・科目等との関連を重視し、キャリア教育の視点から充実を図る。 ・生徒が学びたい、探究したいという学習意欲や興味・関心が持続できるよう適切な指導・支援を行う。 ・探究課題によっては、積極的に外部人材を活用する。	・各学年の総合的な探究の時間サポートチームを中心に、内容や指導方法について定期的に協議する。また、全職員が指導に当たることのできるような体制を確立する。 ・地域及び関係大学及び同窓会との連携を図る。	・観点に応じた評価基準を設け、どのような力が身に付いたかを的確に捉えられるようにする。 ・個人内評価だけでなく、他者評価等も組み合わせた評価とする。 ・キャリア・カウンセリングの場の活用やキャリアパスポートを活用した評価の充実を図る。	・第1学年及び第2学年は環境問題をテーマとしているため、理科、数学科、地理歴史科及び公民科等で学んだ内容との関連を図る。 ・表現する場面においては、国語科、情報科及び外国語科との関連を図り、相手や目的に応じて論理的に表現できるようにする。

図7 A高等学校 総合的な探究の時間 全体計画

事例 B高等学校の全体計画

B高等学校のある地域は、山林や河川といった多様で豊かな自然環境に囲まれている。県中心部にあり、長く商工業等の産業が充実した地方都市であるが、近年は周辺市町への若者の流出をはじめ人口減少傾向が続いている。

B高等学校は、6つの系列（人文科学、自然科学、ビジネス、情報技術、デザイン、生活福祉）を持つ総合学科で、大学・専門学校に進学する生徒や就職する生徒等多様な進路を希望し、交通のアクセスがよいこともあり、安定して志願者が集まる学校である。B高等学校では、生徒が、総合的な探究の時間と系列の教科・科目等とを往還しながら、課題意識を高め、自分自身の進路選択を考えられるように全体計画を作成している。

（1）学校において定める目標

学校において定める目標について、学校教育目標と学習指導要領に示された第1の目標を基に、生徒、学校、地域の実態や、保護者や地域の願いを踏まえて、次のように第1の目標の文言を具体化して設定している。

育成を目指す資質・能力の三つの柱	第1の目標の文言	B高等学校の学校において定める目標の文言
知識及び技能	課題に関わる概念の形成	地域の特性や課題の背景を理解する
	探究の意義や価値の理解	自らが主体的に地域課題の解決に向けた活動に関わることの意義を理解する
思考力、判断力、表現力等	実社会や実生活と自己との関わり	地域課題の解決に取り組む人との協働的な活動
学びに向かう力、人間性等	新たな価値の創造	持続可能な社会の実現に向けて自らのできること

（2）目標を実現するにふさわしい探究課題

目標を実現するためにふさわしい探究課題について、地域の諸課題に焦点を当てた。1年次では、「地域社会を元気にするために活動する魅力的な人や組織と活動」とし、地域社会の課題やその解決に向けた具体的な活動を体験することで、自らがどのように地域課題解決に関わることができるかを探究する。2年次では、「地域社会の発展を担う企業等の取組と魅力、果たす役割」とし、企業等がどのように地域社会の発展に貢献しているかを理解するだけでなく、自ら働くことを通して社会にどのように貢献できるのかを探究する。3年次では、「地域社会の持続可能な発展に貢献する取組と必要とされる力」とし、1, 2年次の取組の振り返りを通して、地域社会における自らの課題意識を問い直し、地域社会に貢献するために取り組むべきことや、自らが更に高めなければならない資質・能力について具体化し、自らの進路選択につなげる。

（3）探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力

「知識及び技能」については、現場で得られる情報の重要性を実感すること、課題解決を通して地域社会に貢献する組織や企業等の取組への理解を深めることを意識している。また、探究のプロセスの振り返りを通して自らの資質・能力の高まりを自覚できるようにしている。

「思考力、判断力、表現力等」について、「課題の設定」では、実際の体験で得た実感を、「自分に

何ができるか」という視点で課題設定につなげることを意識している。「情報の収集」では、現場で諸感覚を駆使して情報を収集し、実際の体験で得た実感を言語化できるようにしている。「整理・分析」では、各教科・科目等で学んだ知識や技能等を生かすこと、発表後などにフィードバックを受けた多様な考えや思いを生かすこと、他の事例と比較検討することを意識している。「まとめ・表現」では、短いサイクルでグループ内発表やホームルーム発表等の様々な発表の機会を繰り返し設定し、そこから得た気付きやフィードバックを活用することで、学習として質的に高まっていくようにし、課題の設定や情報の収集の精度を高めることで、表面的でない深まりのある探究活動を実現できるようにしている。

「学びに向かう力、人間性等」については、体験活動の中で出会った人の思いや、共に学ぶ仲間からのフィードバックから繰り返し刺激を受け、「自分に何ができるか」を考え続けることで、課題意識の自覚化や主体性の高まりにつなげ、自らの進路や地域社会での役割と関連させるようにしている。

(4) 指導方法

6つの系列をもつ総合学科であることから、1年次の探究活動を通して得た課題意識を、2年次以降の系列選択につなげるよう指導している。また、2年次以降の探究活動では、系列における教科・科目等との往還を意識し、各教科・科目等で得た資質・能力と総合的な探究の時間で身に付けた資質・能力を互いに生かし合うよう意識した指導を行っている。

(5) 指導体制

総合的な探究の時間を担当する探究推進部を校務分掌の一つとして設置し、担任等の指導担当者間の連絡調整のための探究推進部会を週時間割に設定している。探究推進部会では、指導計画や各時間の指導事項や留意事項を共有し、見通しをもった指導の実現を図るとともに生徒の取組状況を共有し、生徒の実態に合わせて指導計画や指導内容の修正につなげている。また、探究推進部は、生徒の振り返りを活用して、単元計画や指導方法等の効果や改善点を読み取り、次年度のカリキュラム改善につなげている。

B高等学校は、多くの卒業生が地域企業で活躍しており、地域課題の解決に取り組む組織や団体が充実した地域にある。そのため、地域コーディネーターと連携して、団体や企業等と、生徒の実態、総合的な探究の時間の目標や育成したい資質・能力等を共有し、指導体制の充実を図っている。

(6) 学習の評価

各学年の最初に、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力を生徒と共有する。これを踏まえて、生徒は、1時間ごとに、気付きや成果、次の時間への課題等の振り返りを記録する。また、複数回設定されている発表の機会ごとに、発表を通して得た気付きやホームルームの仲間からのフィードバック等を参考に、得られた成果や次の発表への課題、自らの成長等の振り返りを記録する。あわせて、探究活動を通して作成したワークシートやインタビュー記録、レポートやプレゼンテーション等の成果物等をファイルに集積する。単元の最後には、1年間の振り返り記録や成果物等を活用して具体的な資質・能力ごとの評価規準に沿って自己評価を行う。教師は、各時間の生徒の取組の様子や振り返りを評価するとともに、次回以降の授業の場面での指導に生かすようにしている。

生徒の実態 ・素直で、思いやりをもって行動できる。 ・学習意欲があり、課題に積極的に取り組むことができる。 ・他者との協働や自らの考えを表現することに苦手意識がある。	学校教育目標 地域社会の一員であることを自覚し、課題意識をもって主体的に行動し、他者と協働して地域社会の持続可能な発展に貢献する人を育成する。 ○地域社会の一員であることを自覚し、自律した行動ができる生徒 ○課題意識をもって行動し、学びを深め、失敗を恐れず挑戦する生徒 ○互いのよさを認め合い、他者と協働して主体的に行動できる生徒	保護者の願い ・希望する進路の実現に向けて、将来の夢や目標を見付けてほしい。 ・自ら考えて行動できる自立した大人になってほしい。 ・生まれ育った地域を大切にして地域社会で活躍してほしい。
学校の実態 ・総合学科で6系列の学びが展開されている。 ・中心市街地から近く、他校種や企業等との連携が充実している。	学校において定める目標 探究の見方・考え方を働かせ、地域の抱える課題に向き合い、その解決に向けて取り組む人と協働的に取り組む学習を通して、自らの学ぶ系列の学びとの往還を意識し、自己の在り方生き方を考えながら、主体的・協働的な活動を通して、実感をもって課題を発見し解決することができる資質・能力を育成する。 (1) 地域課題の探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、地域の特徴や課題の背景を理解し、自らが主体的に地域課題の解決に向けた活動に関わることの意義を理解する。 (2) 地域課題の解決に取り組む人との協働的な活動を通して問いを見だし、自ら課題を設定し、体験的な活動を通して情報を集め、自らの学ぶ系列の学びを生かしながら整理・分析して、まとめ・表現することができる力を身に付ける。 (3) 地域の抱える課題の解決に向けた探究活動に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、持続可能な社会の実現に向けて自らのできることを考え、主体的に参画しようとする態度を養う。	地域の願い ・高校生と地域がつながり、地域社会のよさを実感してほしい。 ・将来、地域社会で活躍し、持続可能な発展に貢献してほしい。
地域の実態 ・幅広い分野の産業が発展している。 ・少子高齢化が進み、地域社会の担い手が不足している。 ・高校卒業後に多くの生徒が県外に進学・就職してしまう。		

学校において定める内容									
【1 年次】探究課題：「地域社会を元気にするために活動する魅力的な人や組織と活動」									
探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力									
知識及び技能			思考力、判断力、表現力等			学びに向かう力、人間性等			
知識	技能	探究の意義や価値の理解	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	自己理解・他者理解	主体性・協働性	将来展望・社会参画
自らが生活する地域の課題とその課題を解決するための地域活性化の取組を理解できる。	体験的な活動等を通して情報収集の方法を身に付ける。	地域社会について探究してきたことによって、自らの行為が地域社会の未来に生かせることに気付く。	地域活性化の取組や効果等から得た知識を生かして、地域社会にできることを考え、計画を立てる。	実際の活動における、体験的な活動等を通して取組内容や関係する様々な人の思いを適切な手段で収集する。	自ら得た情報に加えて、他の地域における取組等と比較しながら、取組のよさや改善点等を分析する。	情報の収集、整理・分析を通して得た考えをまとめ、自らの言葉で表現する。	自らの興味・関心を自覚するとともに、他者の多様な思いや考えを知り、他者を尊重し、理解しようとする。	出会った人や協働的に探究活動に取り組む生徒から刺激を受け、自らの関心の高まりを自覚して主体的に取り組もうとする。	自ら地域社会に何ができるかを考え、科目選択や系列選択に活用する。
【2 年次】探究課題：「地域社会の発展を担う企業等の取組と魅力、果たす役割」									
探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力									
知識及び技能			思考力、判断力、表現力等			学びに向かう力、人間性等			
知識	技能	探究の意義や価値の理解	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	自己理解・他者理解	主体性・協働性	将来展望・社会参画
自らの生活や地域社会を支える企業の事業内容とその魅力、地域社会に果たす役割を理解できる。	体験を通して情報収集を含め、目的に応じた適切で、複数の方法で情報収集をすることができる。	企業等の取組や魅力、役割についての理解の深め、複数の探究の積み重ねが、将来の学びや進路選択につながることに気付く。	事業内容や魅力、地域社会に果たす役割等から得た知識を生かして、企業等に貢献するための計画を立てる。	業務体験を含めた体験的な活動等を通して、働く人や利用する人等、関係する様々な人の思いを適切な手段で収集する。	自ら得た情報に加えて、関連する企業や他の地域の企業との取組等と比較・分析しながら、取組のよさや改善点等を検討する。	選択した系列の学びを活用し、多様な考えをもつ他者を意識して表現する。	自らの興味・関心や地域社会への課題意識を自覚するとともに、他者の多様な思いや考えを尊重し、自らの考えに生かそうとする。	企業における体験的な学びを通して、協働的に取り組むことの意義を自覚し、主体的に他者に関わりようとする。	自ら地域社会や企業の担い手として何ができるかを考え、進路選択に活用する。
【3 年次】探究課題：「地域社会の持続可能な発展に貢献する取組と必要とされる力」									
探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力									
知識及び技能			思考力、判断力、表現力等			学びに向かう力、人間性等			
知識	技能	探究の意義や価値の理解	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	自己理解・他者理解	主体性・協働性	将来展望・社会参画
自らが課題意識をもつ社会課題を取り巻く環境とその解決に向けた取組やその課題を理解できる。	統計調査やアンケート調査、観察や実験、体験活動など、対象に応じた適切で、情報収集を正確に実施することができる。	地域課題の解決への理解の深まりや貢献意識の高まりが、これまでに行ってきた探究の積み重ねによるものであることを理解できる。	地域の複雑な問題状況を把握し、自分の進路や興味・関心と結び付けながら自己の課題を明らかにする。	体験的な活動等の他、遠く離れた場所との通信等を活用して、取組内容や関係する様々な人の思いを適切な手段で収集する。	探究活動や教科・科目等の学びから得た知識や経験を活用し、先行事例等と比較・分析しながら、具体的な取組のよさや改善点を検討する。	探究活動や選択系列の学びを活用し、多様な価値観をもつ他者に共感が得られるように表現する。	自らの地域社会の課題意識を自覚するとともに、他者の多様な思いや考えを尊重し、共感が得られるよう表現する。	実際の現場での体験的な学び等を通して、協働的に取り組むことで得られる効果を理解し、主体的に他者と協働して取り組もうとする。	自ら地域社会の担い手として地域社会の持続可能な発展にどのように貢献できるかを考え、今後身に付けたい力を明確化する。

学習活動	指導方法	指導体制	学習評価
・実際の体験活動や地域の企業等との連携を通して、地域の課題に焦点を当てて課題を設定する。 ・グループの仲間・地域の企業等の協力者と協働して課題解決する活動を計画する。 ・各学年とも、探究課題を解決するために自分自身に何ができるかを考える。	・個人の活動とグループ等の活動を繰り返し、他者からの気づきを生かすよう指導・助言する。 ・体験を通して実感を言語化し、課題設定に生かすよう助言する。 ・選択系列の学びとの往還を意識させるよう教科・科目等と連携する。	・総合的な探究の時間を担当する校務分掌（探究推進部）を設置し、担任等と連携し3年間を見通した指導体制を構築する。 ・地域コーディネータと協働し、探究課題に適した地域企業、団体、役所、大学等と連携する。 ・探究推進部会を毎週時間割の中に設定し、生徒の実態に応じて柔軟に指導計画を修正できる体制を確保する。	・生徒同士の相互評価を行う場面を設定し、共有する。 ・校内サーバに、生徒の活動記録・成果物を共有できる環境を整備し、生徒の自己評価に活用する。 ・単元別に評価規準を作成して生徒と共有し、生徒の自己評価や振り返り等を活用して観点別評価を行う。

図8 B高等学校 総合的な探究の時間 全体計画

事例 C高等学校の全体計画

C高等学校のある地域は、人口減少・少子高齢化が進む中山間地域である。県都にある高等学校への進学希望者が年々増えており、同校への進学希望者は減少傾向にある。近隣校との統合を繰り返してきた小規模校であるC高等学校は、特色ある学校づくりを行うために、「探究」を教育課程の中心に据える新学科「探究科」を開設し、更なる学校の魅力化と活性化を図っている。

(1) 学校において定める目標

C高等学校の学校教育目標は、少子高齢化に伴う人口減少が急速に進行する中で、郷土を支える人材になってもらいたいという学校の希望と、地域からの強い要請に基づいている。また、地域の衰退と県都への一極集中が進む中で、地域のよさを理解し、地域に貢献しようとする生徒が減少している現状を踏まえ、自己や地域に誇りをもち、社会の有意な形成者としての自覚をもった生徒を育てたいという思いが反映されている。C高等学校では、この学校教育目標を踏まえ、学校において定める目標を設定している。

特徴的な点は「グローバル」という視点を踏まえていることにある。探究を通して、生徒が十数年間育ってきた地域を改めて見直すことにより、地域が抱える課題は自分が解決すべき課題であり、その課題とは世界が抱える課題とも関連するものであるというグローバルな視点をもつことを目標に掲げている。SDGsをはじめとする世界が抱える問題について、生徒はややもすると「他人事」や「遠い世界の事」と捉えがちであるが、身近な課題を考えることが、世界の課題を考えることにも通じ、その課題を探究することが、よりよい自己の未来を創る力となることを自覚できるようにすることが大切であるとの考えに基づいて目標を設定している。

(2) 目標を実現するにふさわしい探究課題

第1学年では、探究課題を「少子高齢化など地域が抱える課題や地場産業・観光資源など地域がもつ強み」と設定している。ここでは、伝統産業や観光資源など地域がもつ強みを生かして、地域が抱える課題を解決することを目指す。その際、地元商工会や行政機関との連携を図り、「地域を学ぶ」ことができるようにする。なお、第1学年では、探究の「型」を確立するために、グループ単位で探究活動を行う。

第2学年では、探究課題を「グローバルな視点に基づく気候変動や人権問題などSDGsがターゲットにするような世界的な諸課題」としている。SDGs等世界的な諸課題を、地域に根差した「グローバルな視点」を通して見つめることで、誰かがいつか解決する問題ではなく、今、自分が取り組むべき問題であることを再認識し、課題解決に向かう姿勢を養うことを目的とする。その際、地元の大学や研究機関などと連携し、アカデミックな視座で課題を捉えられるようにする。なお、第2学年では、これまでに身に付けた探究の「型」を用いて、個人で探究活動を行う。

第3学年では、探究課題を「地域と世界を結ぶ存在として、また世界の未来を担う存在としての自己」としている。ここでは、2年間の探究活動のまとめとして、また、生涯にわたる探究活動の基盤となるように、生徒個人の興味・関心に基づく探究活動とする。これまでに培った地域や社会の人々との関わりや探究に関わる資質・能力を最大限に発揮し、社会的意義のある課題を設定し、その解決に取り組む。

（3）探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力

知識及び技能では、探究の「型」を身に付けることや、他教科・科目等で身に付けた資質・能力を様々な場面で活用できるようにすることを目指している。思考力、判断力、表現力等では、グローバルな視点や探究の仕方を身に付けられるようにすることを目指している。そして、学びに向かう力、人間性等では、他者と協働したり、自律的に探究したりできるようにすることを目指している。

（4）指導体制

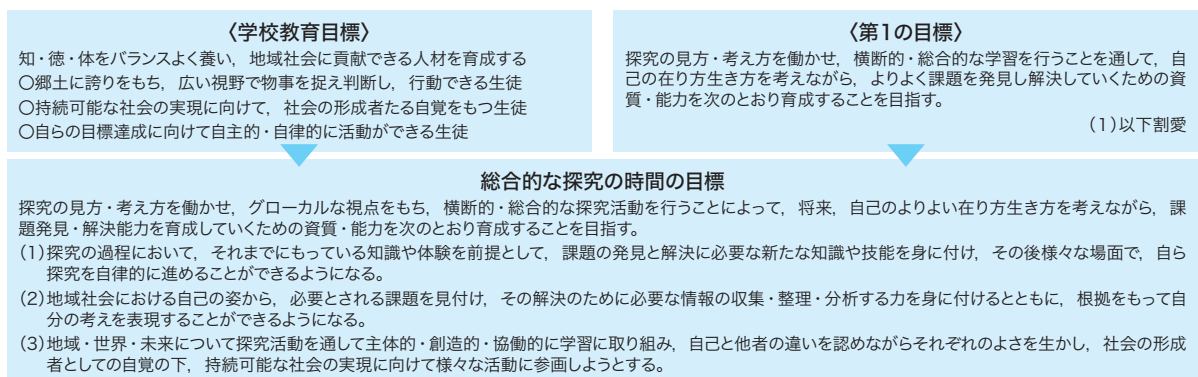
第3学年の探究については内容が多岐にわたることが想定されるため、校内の各教師が身近な「専門家」として、それぞれの専門分野について相談を受けたり、大学等の専門機関への仲介役をしたりする。

（5）学習の評価

最終プレゼンテーションや論文、制作物などのいわゆる「成果物」に加え、探究の過程を評価し、指導の改善に生かせるようにしている。ポートフォリオ評価を取り入れたり、地域コーディネーターなど外部の人による外部評価等を適切に組み合わせたりして評価を行っている。

（6）各教科・科目等との関連

総合的な探究の時間で身に付けるべき力は、総合的な探究の時間のみで培われるものではないことを前提として、各教科・科目等との具体的な連携を図ることが望まれる。発表用の資料の作成に当たっては、情報科の授業と連携させたり、プレゼンテーションについては、国語科や外国語科等の授業と連携させたりすることを想定している。



各学年の内容

学年	テーマ	単位数	学習形態
第1学年	地域と自己	2	グループ学習(3～5名)
探究課題	少子高齢化など地域が抱える課題や地場産業・観光資源など地域がもつ強み		
探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力	・「課題の設定」から「まとめ・表現」に至る探究のサイクルを回す探究の「型」を身に付ける。(知識及び技能) ・校内外の人とコミュニケーションをとり、自分の考えや意見を記述したり、表現したりすることができる。(思考力、判断力、表現力等) ・身の回りの興味をもった出来事について関心を持ち、地域社会に働きかけることができる。(学びに向かう力、人間性等)		
学習活動	・地域が抱える課題や地域がもつ強みを、新聞等から探し興味のある内容について調べる。 ・興味のある内容について、地元企業や役場等と連携し、地域の「プロフェッショナル」から現状と課題、課題に対する取組等について、講義を受けたり、調査等を行ったりする。 ・グループで探究課題を設定し、リサーチクエスト及び仮説を立て、探究計画書を作成する。 ・中間発表において、他グループや教師、地域コーディネーター等からの意見や質問を受け、探究の質を更に高める。 ・レポートと発表スライドを作成し、最終発表を行う。		
実施上の注意	・グループでの学び合いを最大限生かすため、他者の意見や考え方を尊重する姿勢を重視する。		

学年	テーマ	単位数	学習形態
第2学年	世界と自己	2	個人研究
探究課題	グローバルな視点に基づく気候変動や人権問題などSDGsがターゲットにするような世界的な諸課題		
探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力	・他教科・科目等での学びと自己の探究活動を結び付けながら、課題発見・解決能力を高めることができる。(知識及び技能) ・身の回りの諸課題と世界の諸課題から、グローバルな視点で考えることができる。(思考力、判断力、表現力等) ・SDGs等世界が直面する諸課題について「自分事」として捉え、他者と協働して解決方法を探ることができる。(学びに向かう力、人間性等)		
学習活動	・様々な立場でグローバルな問題に取り組んでいる方々から現状と課題、課題に対する取組等についての講義を受けたり、ディスカッションを行ったりする。 ・課題を設定し、リサーチクエストと仮説を立て、探究計画書を作成する。 ・中間発表において、他グループや教師、地域コーディネーター等からの意見や質問から探究の質を更に高める。 ・レポートと発表スライドを作成し、最終発表を行う。		
実施上の注意	・基本的には2年間にわたる探究テーマとなるため、課題の設定及びリサーチクエスト、仮説の設定は慎重に行う。		

学年	テーマ	単位数	学習形態
第3学年	未来と自己	2	個人研究
探究課題	地域と世界を結ぶ存在として、また世界の未来を担う存在としての自己		
探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力	・探究の見方、考え方を他の教科・科目等と関連付け、知識及び技能を課題解決の様々な場面で活用することができる。(知識及び技能) ・2年次の探究活動の成果を、伝えたい内容や方法を意識して、適切に論文にまとめ、発表することができる。(思考力、判断力、表現力等) ・地域社会の形成者としての自覚を持ち、自己のよりよい在り方生き方を考えながら、自律的に探究を行うことができる。(学びに向かう力、人間性等)		
学習活動	・2年次の活動を総括し、アカデミックな視点から探究活動を振り返る。 ・探究内容を論文としてまとめ、学校内で発表したり、大学や自治体等が主催するコンテスト等に応募したりする。 ・3年間の探究活動を振り返り、自分自身の変容を客観的に把握する。 ・中間発表において、他グループや教師、地域コーディネーター等からの意見や質問から、探究の質を更に高める。		
実施上の注意	・発表を通して更なる探究のサイクルを回し、自発的かつ自律的な活動となるよう適切な指導・助言を行う。		

3年間の活動におけるポイント

【指導方法】	【指導体制】	【学習評価】
・1年間で一定の形が見えるよう、進捗管理を綿密に行い、探究のサイクルを意識した指導・助言を行う。 ・カリキュラム・マネジメントを意識し、他教科・科目等との相互的相乗的な効果が発揮できるような指導の工夫及び校内での共有をする。	・校内における連絡、調整を十分に行い全職員による指導体制を確立する。 ・地域コーディネーターを中心に外部人材の活用や、企業や役場、地元大学及び研究機関等、外部機関との連携を図る。	・観点別学習状況などを把握するために明確な評価規準を設定する。 ・個人内評価を重視する。 ・自己評価や生徒間での相互評価を発表会等のタイミングで実施するなど、評価を工夫する。 ・探究活動に参画してくれた地域コーディネーターや関係機関の方々からの評価を重視する。

図9 C高等学校 総合的な探究の時間 全体計画

第3章 年間指導計画の作成

第1節 年間指導計画の基本的な考え方

1. 年間指導計画とその構成要素

年間指導計画は、学年の始まる4月から翌年3月までの1年間における生徒の学びの変容を想定し、時間の流れに沿って具体的な学習活動を構想し、単元を配列したものである。各学校で作成した総合的な探究の時間の全体計画を踏まえ、学年やホームルームにおいて、その年度の総合的な探究の時間の学習活動の見通しをもつために1年間の流れの中に単元を位置付けて示すものである。どの時期に、どれくらいの時間を掛けて、どのように学習活動を展開するのか、また、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力を中心に計画を立てることで、1年間にわたる具体的な生徒の学習の様子を思い描きながら構想を立てるようにしたい。

特に、今次改訂の高等学校学習指導要領では、第4章総合的な探究の時間第3の1の(1)において、「年間や、単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること」と示されたことを踏まえることが重要である。ここで「年間」という視点が入れられているのは、他の教科・科目等との関連を意識して主体的・対話的で深い学びの実現を図るためには、単元だけでなく年間を見通すということが大変重要であるという、総合的な探究の時間の特質を踏まえたものである。

年間指導計画には特に固定的な様式はないが、各学校が実施する教育活動の特質に応じて必要な要素を盛り込み、活用しやすい様式に工夫して表すことが大切である。その際、各学校が作成する全体計画に示されたこの時間の目標及び内容との関連性に十分配慮することが重要である。

年間指導計画に含まれる基本的な構成要素としては、単元名、各単元における主な学習活動、活動時期、予定時数などがある。これらの要素に加えて、単元のねらい、生徒の意識、各教科・科目等との関連、他学年や中学校、地域や外部講師との関連などを記すことが考えられる。なお、複数の学科をもつ学校では、各学科の特色等に応じて、それぞれに年間指導計画を作成することも考えられる。

1年間の学習活動の展開を構想する際には、地域や学校の特色に加えて、各学校において積み重ねてきたこれまでの実践を振り返り、その成果を生かすことで、事前に準備を進めることができる。これまでの活動について、実施時期は適切であったか、時数の配当に過不足はないかなどについて、育成を目指す資質・能力を中心に、生徒の学習状況等を適切に把握しながら必要に応じた計画の見直しを適宜行うことが考えられる。

総合的な探究の時間「地域課題の解決に向けて努力する人々や組織」(1単位)		単位数
4月	地域の課題発見 (15時間) ・ 中学校での総合的な学習の時間で行った学習内容を各自が発表し、情報交換をする ・ 全体で本年度の総合的な探究の時間の見通しを立てる ・ 地域について調査し、地域の課題を知る ・ グループで仮テーマを定める ・ 地域の実態調査を行う ・ 課題を設定し、探究活動を行う ・ 外部有識者による講演会と体験活動を行う	小単元名
5月		主な学習活動
6月		
7月		
8月		
9月		
10月	地域の課題解決 (20時間) ・ グループでテーマを決定して、探究活動をする ・ 探究のまとめを行う ・ 探究の成果をレポートにまとめ、駅前商店街で学年発表会を行い、その成果を関係機関に送り意見を頂く ・ 地域の課題を解決する方策を考える ・ 地域でできる活動を考え、グループ単位で活動する ・ 地域で実際に活動を行っているグループと協力し、地域の方の思いに触れる ・ 公開発表会を開き活動の成果を他学年や保護者、関係機関に伝える	予定される時数
11月		活動時期
12月		
1月		
2月		
3月		

図1 年間指導計画の構成要素

2. 年間指導計画における時数配当の考え方

総合的な探究の時間の授業時数は、学習指導要領第1章総則第2款の3に示されたとおり1単位時間を50分とし、35単位時間の授業を1単位として卒業までに3～6単位に見合う標準授業時数105～210単位時間数を確保するとともに、学校や生徒の実態に応じて、適切に計画する必要がある。また、通信制の課程における扱いは、学習指導要領第1章総則第2款の5に示されている。この時数を確保した上で、各単元の実施に必要と見込まれる授業時数を配当することになる。

その際、授業時数の配当は、卒業までを見通しながら、卒業までの各年次の全てにおいて実施するものや、特定の年次において実施するものなど、学校や生徒の実態に応じて配当することになる。また、特定の学期又は期間に行う方法を組み合わせて活用することも可能である。いずれの場合にも、当該学年の教育課程全体を視野に入れつつ、予定される学習活動を実施するために必要な時数を配当するとともに年間授業時数が確保されるよう明示することが必要である。そして、授業時数の確保が行われているかどうかを、週単位、月単位、学期単位などで十分把握しなければならない。

3. 年間指導計画における単元配列の考え方

年間指導計画において単元を配列する際には、1年間を通して一つの単元を行う場合や、複数の単元を行う場合などがある。配列する際の工夫としては、例えば、図2のように複数の単元の間に何ら

かのまとまりや主題性をもつようにすることが挙げられる。それは、単元と単元が活動や生徒の意識の流れにおいて一定の連続性を持ち、場合によっては連なって展開されることで、活動の見通しをしつかりともって、探究に取り組むことができる等、学びを深め、生徒の学習意欲を高める効果が期待できるからである。

これらの他にも様々な考え方があり、それぞれに特徴が認められる。学習活動や生徒の意識が、連続し発展するように配列することが大切である。

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
分散型	■					■					■	
年間継続型	■				-----	■				-----	■	
並列型	■				-----	■				-----	■	
複合型	■					■					■	
	(ホームルーム)					(学年)					(ホームルーム)	

図2 単元配列の考え方の例

①分散型

総合的な探究の時間の単元を学期ごとなどいくつかの期間に分けて配列するものである。このとき、単元ごとに取り扱われる探究課題が異なる場合が多い。

②年間継続型

1年間を通じて同じ探究課題で継続的に取り組むものである。ただし、年間を通じて取り組む場合でも、活動には自ずと一定のまとまりがあり、まとまりごとにいくつかの単元に分かれることもあることに留意したい。

③並列型

同じ時期に複数の単元に並行して取り組むものである。この場合、複数の単元の間で探究課題が関連性をもつ場合と相互に独立している場合がある。

④複合型

学年単位の活動とホームルーム単位の活動など、異なる学習形態や学習集団などを組み合わせて取り組むものである。

なお、どの型においても、季節や地域の行事などを中核にしてある期間に集中的に取り組む場合も考えられる。その期間は、総合的な探究の時間を中心として学校生活が組織される場合もある。

[学習活動を具体的に示した年間指導計画事例]

①分散型

図3は、前期と後期に分け、異なるテーマの単元を実施する第1学年の年間指導計画であり、単元名、単元目標、主な学習活動、活動時期、予定時数が記載されている。前期は探究活動の基礎を学び、後期は他者との協働による課題解決に重点を置いている。

月		「探究基礎」 1 単位	
4 ～ 9 月	第1単元「ミニ探究」(19時間)		
	単元の目標		
	生徒にとって身近なものを対象にして、探究活動の基本的な技能を身に付ける。スライド発表資料の作成を通して、習得した技法を活用しながら思考を深め、よりよい課題の解決や表現方法について話し合うことで、創造的、協働的な態度を育成する。		
	主な学習活動と指導上の留意点		
	課題設定 (2時間)	身近なものを題材にクラスごとのテーマ、グループテーマを設定し、ブレインストーミング、ウェビング、KJ 法的手法などを効果的に活用しながら、グループ内で発想を広げ、個人テーマの設定を行う。	・中学校までの学習経験を考慮し、今後の学習で必要な知識・技能を習得できるよう十分に配慮する。 ・「個人シート作成・発表」から「探究発表会Ⅰ」における学習活動は、教科「情報」の学習と関連させる。 ・「情報の収集」「まとめ・表現」の場面では、ICT を積極的に活用する。
	個人シート作成・発表 (4時間)	個人テーマについて、インターネットや書籍・文献を活用して情報を収集し、個人シートにまとめる。	
	スライド作成 (5時間)	班員の作成した個人シートを持ち寄り、グループテーマとして一つにまとめたスライドを作成する。	
発表準備・中間発表 (5時間)	作成したスライドを使って、発表する際の工夫について班員とアイデアを出し合う。必要なものを作成しながら、発表のリハーサルを行う。		
探究発表会Ⅰ (2時間)	スライドの発表会を全グループが行い、生徒同士が互いにスライド及び発表に関して相互に評価し合う。		
単元のまとめ (1時間)	この単元で学習したことを振り返り、学習した感想や取組の反省、自己の変容などをまとめる。		
10 ～ 3 月	第2単元「安全な町づくりに向けた地域防災の取組」(16時間)		
	単元の目標		
	地域防災の課題を対象にして、チームで課題を共有し、協力し合う経験を通して、多面的・多角的な思考力やコミュニケーション能力、協働的な態度を育成する。		
	主な学習活動と指導上の留意点		
	課題の確認 (2時間)	専門家や地域住民、行政職員などから地域防災についての話を聞き、地域防災の課題を明らかにする。	・第1単元で身に付けた知識及び技能を、グループでの議論やポスターセッション等で積極的に活用できるよう十分に配慮する。 ・全ての生徒が様々な場面で発表する機会を設定する。 ・情報収集や発表に関する学習活動は、教科「情報」の学習と関連させる。
	情報収集 (2時間)	設定した課題に基づき、地域防災の取組の現状についての情報を収集して、チーム内で情報共有する。情報共有する場合に必要な資料の準備や伝え方を体験的に身に付ける。	
	整理・分析と更なる情報収集(3時間)	収集した情報を整理・分析する中で明らかとなった不足している情報について、更なる情報収集を行う。	
ポスターの作成 (4時間)	ポスターセッションに向けて、ポスターを作成する。		
リハーサル (2時間)	ポスターセッションを前に、リハーサルを行い、グループ内で伝わりやすくするにはどうすればよいかを検討する。		
探究発表会Ⅱ (2時間)	ポスターセッションを実施する。生徒同士で発表に対する質疑応答を行い、相互に評価し合う。		
単元のまとめ (1時間)	この単元で学習したことを振り返り、学習した感想や取組の反省、自己の変容などをまとめる。		

図3 1年間を複数単元に分けた年間指導計画の例(第1学年)

②年間継続型

図4は、探究課題「地域活性化に向けて努力する人々や組織と地域社会」を踏まえて、1年間継続して実施する第1学年の年間指導計画である。

回数	月	曜	時 限	時 数	小単 元名	学習内容	主なねらい	学習 形態	会場	担当	備考	評価計画		
												知	思	主
1	4月	水	6	1	探究計画を立てよう	オリエンテーション1	探究とはどのようなものか。 3年間の総合的な探究の時間の学びを見通す。	学年	体育館	担当職員				
2	4月	水	6	1		オリエンテーション2	中学校での総合的な学習の時間を互い発表して共有する。	HR	各教室	HR担当者				
3	4月	水	6	1		オリエンテーション3	2年生の昨年度の探究の成果を聞き、先輩の探究を知る。	学年	全校各教室	HR担当者	3年生と合同開催			
4	5月	水	6	1		講演会	地域の現状を知る8名の講師の講演を聴く。 現状や地域課題に対する取組を知り自分との関わりを確認する。	学年	各教室	全教師	外部講師有			
5	5月	水	6	1		地域の現状の共有	異なった講座に参加した生徒同士が班となり、前回の講演会の内容を発表し合い共有する。	HR	各教室	HR担当者	ジグソー形式			
6	5月	水	6	1		課題の設定	興味関心のある地域課題について、思考ツールを用いて整理する。	班	各教室	HR担当者				
7	6月	水	6	1		課題と各教科・科目等との関連	各教科・科目等の見方・考え方から課題に迫り、社会や日常生活が教科と関連していることを実感する。	班	各教室	HR担当者				
8	6月	水	6	1		探究計画の立案	課題を絞り込み、具体的な探究計画を立てる。	班	各教室	HR担当者				
9	6月	水	6	1		地域課題に対する先行事例の調査	地域課題に対する先行研究や現状を再調査する。	個人	図書室他	HR担当者				
10	6月	水	6	1		課題の設定と探究計画の検討	収集した情報を整理・分析し、課題の設定と探究計画を検討する。	班	各教室	HR担当者				
11	7月	水	6	1		地域課題発表会	他の班に向けて課題と今後の計画を発表する。	HR	各教室	HR担当者	2年生がファシリテーターとして参加			
12	7月	水	6	1		課題と探究計画の修正	地域課題発表会を踏まえて課題と探究計画を練り直す。	班	各教室	HR担当者		①		
13	7月	水	6	1		探究計画の立案	練り直した探究計画を班で検討し、ブラッシュアップする。	班	各教室	HR担当者			①	
夏季休業					地域課題の解決に向けて探究しよう	フィールドワーク	設定した班ごとの個別の課題についての情報収集、体験活動をして、成果をレポートにまとめる。	班	フィールドワーク先					
14	9月	水	6	1		自治体担当者との交流会	班ごとに自治体職員が入り、課題についての自治体の取組や関連住民とつなぐ。	HR	各教室	HR担当者				
15	9月	水	6	1		オンライン交流会Ⅰ	オンラインで、専門家から情報を収集する。	班	各教室	班担当者	外部連携			
16	9月	水	6	1		オンライン講習会Ⅱ	オンラインで、海外の高校生から情報を収集する。	班	各教室	班担当者	外部連携	②		
17	9月	水	6	1		情報の集約とフィールドワークの事前準備	これまでの情報を最適な形でまとめる。 次回のフィールドワークの時間、場所、インタビュー内容などの確認をする。	班	各教室	全教師				
18	10月	水	6	1		フィールドワーク	各班で関連企業、NPOなどのフィールドワークをして情報収集をする。	班	校 外	全教師		②	②	
19	10月	水	6	1		フィールドワーク	各班で関連企業、NPOなどのフィールドワークをして情報収集をする。	班	校 外	全教師				
20	10月	水	6	1		情報の収集	必要な情報は何かを見極め、取捨選択する。また、不足している情報の収集をする。	班	各教室	班担当者				
21	10月	水	6	1		情報の収集	必要な情報は何かを見極め、取捨選択する。また、不足している情報の収集をする。	班	各教室	班担当者				
22	11月	水	6	1		アンケートの分析	アンケート結果から表や図をつくり、課題解決の根拠資料をつくる。	班	各教室	班担当者			③	
23	11月	水	6	1		アンケートの分析	アンケート結果から表や図をつくり、課題解決の根拠資料をつくる。	班	各教室	班担当者				
24	11月	水	6	1		統計データの作成	得られたデータをグラフや表にして視覚化する。 インタビューや講演会、書籍、新聞などで得た情報を班員で共有してまとめる。	班	各教室	班担当者				
25	11月	水	6	1		情報の精査・実践計画の立案	情報の精査をしてまとめる方向性や今後の計画の立て直しをする。	班	各教室	班担当者		③		
26	12月	水	6	1		情報の精査・実践計画の立案	情報の精査をしてまとめる方向性や今後の計画の立て直しをする。	班	各教室	班担当者				
27	12月	水	6	1	探究成果を発表しよう	課題解決の実践	実践計画に基づいて、課題解決のための実践をする。	班	各教室	班担当者	フィールドワークの班あり			③
28	12月	水	6	1		課題解決の実践	実践計画に基づいて、課題解決のための実践をする。	班	各教室	班担当者	フィールドワークの班あり			
29	1月	水	6	1		課題解決の実践	実践計画に基づいて、課題解決のための実践をする。	班	各教室	班担当者	フィールドワークの班あり			
30	1月	水	6	1		レポート作成	探究のまとめをレポートにする。	班	各教室	班担当者	フィールドワークの班あり			
31	1月	水	6	1		スライド作成	発表のためのスライドを作成する。	班	各教室	班担当者	フィールドワークの班あり			
32	2月	水	6	1		学年発表会	1年間の探究の成果について発表する。	学年	全校	全教師			④	
33	2月	水	6	1		全体発表会	2年生合同で探究発表会をする。	学年	全校	全教師	1・2年生合同開催			
34	2月	水	6	1		振り返り	班で探究成果を振り返る。	班	各教室	班担当者		①		
35	3月	水	6	1		振り返り	個人で探究成果を振り返る。	個人	各教室	班担当者				

図4 年間継続型の年間指導計画の例(第1学年)

③並列型

図5は、年間を通して二つの単元を並列して実施する第2学年の年間指導計画である。上段はローカルプロジェクト、下段はグローバルプロジェクトに関する単元である。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合的な探究の時間	ローカルプロジェクト (35 時間)											
	1 地域を住みやすくするには？ (10 時間) ○ コンソーシアムで地域の実態を知る。 ○ 地域の現状を調査する。 ○ 調査から分かったことをまとめ課題を設定する。 2 住みやすい地域にするための実践をしよう。 (18 時間) ○ 課題に対する解決策を考え実践計画を立てる。 ○ 市役所の担当者と打合せをして実践計画を企画する。 ○ 市役所の担当者と連携して実践をする。 ○ 住みやすさについての検証をする。 3 論文にまとめよう。 (7 時間) ○ 論文の形にまとめ、相手に分かりやすく伝わるように工夫する。											
総合的な探究の時間	グローバルプロジェクト (35 時間)											
	1 地球規模の課題を知ろう (12 時間) ○ SDGs の目標について事例を調査し発表する。 ○ オンラインで海外連携校とのプロジェクトを開始するため班を編成する。 ○ 班の探究テーマを SDGs の目標の中からどれかを選択して決定する。 ○ 探究計画を立てる。 2 フィールドワークで課題を深めよう。 (16 時間) ○ 日本や世界の「海の豊かさ」、「陸の豊かさ」について調査をして、班ごとに意見交換をする。 ○ 解決策についてのプレゼンテーションを行い、外部からの評価を受ける。 3 海外の現状を伝えよう。 (7 時間) ○ SDGs の目標に海外の高校生とともに取り組んだ成果と課題を発信する。 ○ 次の課題に向けての振り返りをする。											

図5 並列して二つの単元を実施する年間指導計画の例(第2学年)

④複合型

図6は、学年やホームルームなど、活動を展開する学習集団や学習形態が異なる年間指導計画である。上段が学年全体で取り組む小単元、下段は学級ごとに取り組む小単元である。

この他にも、各学年で取り組んできたことを基にして異学年で一緒に課題の解決に取り組む単元なども考えられる。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学年	1 地域の観光の課題は何かを調査し、課題を設定しよう。(5 時間) ○ 市の観光課との懇談会で市の現状を把握する。 ○ 観光課題を重点化して課題を設定する。 2 観光活性化に向けて情報収集をしよう。(5 時間) ○ 個人で、観光の課題に関わる情報収集をする。 ○ 郷土料理、名所旧跡、自然、特産品などのグループに分かれ、中間報告会を開く。											
ホームルーム	3 市の観光活性化の実践をしよう。(20 時間) ○ 郷土料理、名所旧跡、自然、特産品などの視点から、ホームルームごとに解決案をまとめる。 ○ ワールドカフェを行い、解決案を改善する。 ○ 改善した解決案を実践する。 4 今後の学びに活かす。(5 時間) ○ 実践や探究活動全体を振り返る。 ○ どのような資質・能力が向上したかを振り返る。 ○ 次の課題に向けて自分にとって関りの深い課題を設定する。											

図6 複合型の年間指導計画の例(第2学年)

第2節 年間指導計画作成上の留意点と具体例

年間指導計画においては、時間軸に沿って単元を配列し、学習活動の1年間の概要を明示することがポイントとなる。その際、学習活動に関する細かな計画は単元計画で記載するため、年間指導計画では、単元の実施期間を概略的に示したり、主な学習活動をいくつかに絞って箇条書きにして示したりするなど、簡潔な記述となるように工夫したい。

次に示す四つの留意点は、『高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編』に示された年間指導計画作成上の留意点であり、これらの点に配慮しつつ、年間の学習活動のイメージをもつことのできる簡潔な年間指導計画を作成したい。

1. 生徒の学習経験に配慮すること

年間指導計画を作成するに当たっては、当該学年までの生徒の学習経験やその経験から得られた成果について事前に把握し、その経験や成果を生かしながら年間指導計画を立てる必要がある。また、課程や学科、進路の希望など生徒の特徴に応じた計画とすることも必要である。第1学年にあつては中学校の、第2学年以降にあつては当該学年までの生徒の学習経験について把握しておくことが大切である。高等学校では、一般に複数の中学校から生徒を受け入れるため、小・中学校の学習との連続性をもたせることが困難な場合が多い。そこで、年間指導計画の作成に当たっては中学校までの学習経験の有無や学習の深まりについて十分に把握しつつ、学校の特色や生徒の特徴を十分に踏まえることが重要である。

事例 学びの履歴を明らかにする

図7は、同一の学年の生徒についての学びの履歴を表したものである。当該学年以前の学習経験を把握するために、学びの履歴を年間指導計画に加えることは、それまでの経験や成果を無駄なく生かすという点で有効である。

また、中学校における学習活動とその成果を把握するという観点でいえば、学びの履歴の中に「中学校の総合的な学習の時間で訪れた場所」「中学校の総合的な学習の時間に関わった人」等の学習対象について記載することも考えられる。

このような年間指導計画は、校内における共通理解のために有益であるだけでなく、保護者や地域の講師、あるいは進学先の大学や専門学校、就職先など、外部の関係者に対する情報提供の資料としても活用できる。

市内中学校の総合的な学習の時間での主な活動 (中高連携での資料共有と聞き取りによる)					・地域の伝統文化を受け継ごう ・地域の職場で働く体験を通して、地域の食や特産物を作ろう ・地域産業の魅力を発信しよう ・エネルギー問題について知り、問題の解決に向けてできることを考えよう ・放置竹林問題を解決しよう							
学年/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
○年度 第1学年 (1単位)	過去とつなぐ（自分を知らう・自分グラフで分析） ・自分グラフを書く⇒グループで発表⇒強みは何を分析する ・身近な課題を解決しよう⇒ブチ探究（1週間実践してみよう） ・ブチ探究の成果をまとめて⇒ワールドカフェ方式で発表をする						地域とつなぐ（職業を知らう・未来設計を構想） ・地域を知らう⇒RESASなどを使って情報収集⇒グループで共有する ・フィールドワーク⇒インタビューで実社会の課題を設定する ・地域産業を盛り上げる方策⇒課題解決の方法を考え実践⇒中間発表					
○年度 第2学年 (1単位)	地域と地域をつなぐ（研修旅行で現地調査・地域の活動に参加） ・国内の他地域との比較から課題解決の方法を探る⇒他地域比較や先進的な取組 ・研修旅行での現地調査⇒現地の高校との意見交換会⇒現地調査とインタビュー取材 ・現地研修の振り返り⇒スライドにまとめる⇒クラス発表⇒学園祭での発表								日本と世界をつなぐ ・SDGsの17の目標から課題を設定する ・現状の把握と今後の課題を整理する ・レポートにまとめる			
○年度 第3学年 (1単位)	未来とつなぐ（人間力の育成） ・自己の将来の目標を設定し幅広い職業観を育成し、自分探しを進める中で課題を設定し解決する最適解を追究する ・各自の実行計画に基づき、探究のサイクルを一人一人の生徒が進め、9月の学園祭で発表する ・探究活動のまとめ⇒論文作成⇒ラウンドテーブルでの発表⇒3年間の振り返りをする											

図7 学びの履歴を記録した資料の例

2. 実社会や実生活との接点を生み出すこと、 季節や地域の行事など適切な活動時期を生かすこと

年間指導計画の作成においては、生徒の発達特性から、実社会や実生活と自らの行為とのつながりを自覚するとともに、実社会や実生活との接点が生み出せるように総合的な探究の時間を行うよう配慮することが大切である。例えば、地域で取り組む環境保全の活動に参加し生活を改善すること、身近にいる障害者に関心をもち福祉施設でボランティア活動に取り組むこと、地域活性化のためのイベントを自ら企画し実行することなどは、実社会に働きかけ、自ら社会に貢献することを実感することが期待できる。

図8は、2年次に現地研修で被災地を訪れ、ボランティアを行い、3年次はその体験を地域で生かす取組の例である。1年次に1単位、2年次に2単位、3年次に1単位を行っている。

学年 (単位数)	単元名	授業 時数	実社会や実生活と関係する活動
第1学年 (1単位)	生活と社会	17	・地域の防災対策について情報収集をして、課題の検討をする。
		18	・地域の防災対策について、ブレインストーミングでアイデアを広げ、具体的な提案をポスターセッションで発表する。 ・地域と協働して避難訓練を実施する。
第2学年 (2単位)	未来と社会	15	・被災地の現状を認識する。
		30	・被災地でのボランティア活動をする。
第3学年 (1単位)	地域に生かす	40	・地域の未来を支える活性化策を提案する。
		5	・地域活性化策を論文にまとめる。

図8 実社会や実生活との接点を明らかにした資料の例

また、年間指導計画の作成においては、1年間の季節や行事の流れを生かすことが重要である。季節の変化、地域や校内の行事等について、時期と内容の両面から、総合的な探究の時間の展開に関連付けることかできるかを、あらかじめ検討することが大切である。

地域の伝統行事や季節に応じた生産活動、地域で開催が予定されているイベント、歴史的・国際的な記念日など、学習活動が特定の時期に集中することで効果が高まったり、適切な時期を逃してしまうことで効果が薄くなったりすることがある。例えば、地域の伝統行事やイベントが開催される日程、それに関わる関係者の準備等の活動の展開を把握しておくことで、生徒が行事等を参観するだけでなく、行事等の実現を目指す地域の人々と協力し、企画・実行する過程で、行事等の背景や地域の人々の思いや願いについて直接触れたり、感じたりすることができる。さらに、自分で考え実行した活動が、地域の人々や地域を訪れた人々などにどのような効果を及ぼしたか、あるいはどのような支援となったのかについて、直接、評価をしてもらい、自ら検証することもできる。

歴史的な記念日や国際的な記念日をきっかけに、課題の解決や探究活動を展開する際にも、同様の事が考えられる。例えば、世界環境デーや国際平和デーなどの国際デーは、国際連合などの国際機関によって定められた記念日であり、毎年決められた日や週などに特定の問題に関して関心を高めたり、問題の解決を呼びかけたりしている。国際デーが近付くと報道などでその内容が紹介されることも多い。このような機会を捉えて、新聞やテレビなどから得られた資料を紹介するなどして関心を呼び起こし、地域で行われる活動に生徒が参画したり、専門家を教室に招いて話を聞いたりする、さらには、校内や地域で、独自にその記念日の趣旨に基づく活動を企画して実行することへと発展させることもできる。社会的な関心の高まりを生かした学習活動を行うことによって、生徒の学習は一層深まるものと考えることができる。

これらを踏まえ、例えば、地域で取り組んでいる環境や福祉、観光、歴史的な記念日や国際的な記念日、地域における特徴的な行事に関する情報をまとめた資料を用意しておくことが考えられる。さらに、このような資料を職員室に掲示する等、情報を常に確認できるようにしたり、職員・生徒間で共有したりしておくことで、適切な活動時期を捉えた効果的な学習活動へとつなげることができる。

3. 他教科・科目等との関連を明らかにすること

年間指導計画の作成に当たっては、各教科・科目等との関連的な指導を行うことが求められている。また、関連的な指導は、各教科・科目、総合的な探究の時間及び特別活動の全てにおいて大切にしているが、横断的・総合的な学習を行う観点から、総合的な探究の時間において最も数多く、幅広く行われることが予想される。こうした特性を踏まえて、高等学校学習指導要領第4章総合的な探究の時間第3の1の(4)に各教科・科目等との関連付けを明記し、この時間において特に重視している。

具体的には、各教科・科目等で身に付けた資質・能力を十分に把握し、組織し直すことで、改めて現実の生活に関わる学習において活用されることが期待されている。そうした資質・能力を適切に活用することが、総合的な探究の時間における探究活動を充実させることにつながる。

例えば、次のように他教科・科目等で学んだことを総合的な探究の時間に生かすことで、生徒の学習は一層の深まりと広がりを見せる。

- ・地理歴史科や公民科の資料活用の方法を生かして現地調査やインタビュー、文献調査などをして情報を収集すること。
- ・数学科や情報科の統計の手法でデータを整理して効果的な図表などに示すこと。
- ・国語科で学習した複数の文章や資料を基に必要な情報を関連付けて自分の考えを広げたり深めたりすることを生かして論述し議論すること。また、文章の書き方を生かして相手や目的に応じて論理の構成や展開、文章の形態や文体、語句などを工夫して、説得力のある企画書や報告書、案内状や御礼状、レポート等を書くこと。
- ・理科で学習した生物の多様性と生態等に関することを生かして、自然の事物・現象の変化とその要因とを関係付け、変化の要因を考えながら観察、実験などを計画的に行いつつ、地域の生態系の保全計画を立てること。
- ・地域のイベントへの参画において、芸術科で学んだ手法を生かしてポスター、イラスト、マスコットなどを制作すること。
- ・外国語科の学習を外国人観光客への案内、掲示やパンフレットの作成などで生かすこと。 など

また、総合的な探究の時間で行われた学習活動によって、各教科・科目等での学習のきっかけが生まれ意欲的に学習を進めるようになったり、各教科・科目等で学習していることの意味やよさが実感されるようになったりすることも考えられる。例えば、総合的な探究の時間で行った体験活動を生かして国語科で論文やレポート、プレゼンテーションやポスターセッション、Web上の動画やテキスト等、様々な表現を通して自分の思いや考えをまとめるなど、総合的な探究の時間での体験活動が各教科・科目等における学習の素材となることも考えられる。また、総合的な探究の時間で食と健康や、消費に関心をもった生徒は、家庭科における食の安全に配慮した献立や調理、自立した消費者としての意思決定や行動に関する学習に前向きに取り組む姿が想像できる。保健体育科における学習でも総合的な探究の時間で福祉・健康について学んだことの成果を生かして、学習に深まりと広がりを生み出すことが期待できる。

事例 各教科・科目等を網羅する

図9は、学年の各教科・科目等の全ての単元を一覧表の形にした年間指導計画（単元配列表）である。この表を作成することにより、学年の全教育活動を視野に入れることができる。このような年間指導計画を作成する際には、機械的に単元名や学習活動を書き込むだけでなく、育成を目指す資質・能力を把握し、それらが相互に関連することが示されることによって、それぞれの学習活動は一層充実し、結果として各教科・科目等における資質・能力の育成に有益なものとなる。

例えば、矢印等を使って関連を示す際は、資質・能力の三つの柱のうち、育成に重点を置く資質・能力について焦点化して示すことなどが考えられる。

健 康 ―自らの生活や行動について考える（日常生活を豊かにするために）―				
	4月	5月	6月	7月・8月
総合的な探究の時間 (1単位)	① 生活習慣と毎日の生活（9時間） ・ フリップボードを利用して生活習慣について調査する。 ・ 市役所で、健康を支える社会制度を学ぶ。 ・ 地域の保健所の講師に、具体的な取組についての話を聞く。 ・ 健康を保持する生活習慣についての情報を整理・分析する。 ・ 理想の生活スタイルをレポートにまとめ、地域に提案する。			② 健康と医療（12時間） ・ 医療の現場を知る。 ・ 薬の正しい服用について学ぶ。 ・ 高度医療技術と生命の尊厳についてディスカッションを行う。
現代の国語（2単位）	未知の世界に出会う	異文化理解（思考の枠組）	マイクロディベート	ワールドカフェ
公共（2単位）	公共の扉をひらく		現代の民主政治と社会参画	
数学Ⅰ（3単位）	数と式		集合と命題	図形と計量
生物基礎（2単位）	生物の特徴		遺伝子とその働き	生物の体内環境の維持
地学基礎（2単位）	個体地球とその活動		大気と海洋	
美術Ⅰ（2単位）	絵画（身近なものを描く・浮世絵・墨表現の可能性）		映像で伝えるデザイン	
体育（3単位）	身体づくり運動		球技	
保健（2単位）	現代社会と健康 （ヘルスプロモーション・がんや成人病の予防・精神疾病の予防）		生涯を通じる健康 （各年齢における健康・労働と健康）	
家庭基礎（2単位）	人の一生と家族・家庭及び福祉			
情報Ⅰ（2単位）	情報社会と問題解決		コミュニケーションのと情報デザイン	情報とコンピュータ

図9 各教科・科目等を網羅した年間指導計画の例(第1学年)

関連する教科・科目等を重点的に示す

図10は、関連させる単元のみを抜粋して記入し、各教科・科目等との関連を重点的に示した第1学年の年間指導計画である。

健康 ―自らの生活や行動について考える（日常生活を豊かにするために）― 1単位		
月	総合的な探究の時間の主な学習活動	関連する教科・科目等
4	① 生活習慣と毎日の生活（9時間） ・ フリップボードを利用して生活習慣について調査する。 ・ 市役所で、健康を支える社会制度を学ぶ。 ・ 地域の保健所の講師に、具体的な取組についての話を聞く。 ・ 健康を保持する生活習慣についての情報を整理・分析する。 ・ 理想の生活スタイルをレポートにまとめ、地域に提案する。	【現代の国語】マイクロディベート、ワールドカフェ
5		【公共】持続可能な社会をつくる
6		【数学Ⅰ】データの分析
7		【生物基礎】生物の体内環境の維持
8		【地学基礎】自然との共生
9		【保健】現代社会と健康、生涯を通じる健康、健康を支える環境づくり
10		【体育】身体づくり運動
11		【家庭基礎】人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住の生活と健康
12	② 健康と医療（12時間） ・ 医療の現場を知る。 ・ 薬の正しい服用について学ぶ。 ・ 高度医療技術と生命の尊厳についてディスカッションを行う。	【美術】映像で伝えるデザイン
1		【情報Ⅰ】コミュニケーションと情報デザイン、情報セキュリティ
2		
3	③ 健康と食生活（14時間） ・ 地域の農業や生産者の現状をインタビューで調査する。 ・ 日本及び世界の食糧問題についての情報を収集する。 ・ 収集した情報を整理・分析し、具体的な取組について検討する。 ・ 健康と食生活をめぐる具体的な取組についてプレゼンテーションを行う。	

図10 関連する教科・科目等を重点的に示した年間指導計画の例(第1学年)

4. 外部の教育資源の活用及び異校種・他校との連携や交流を意識すること

総合的な探究の時間を効果的に実践するためには、保護者や地域の人、研究者や大学院生をはじめとする専門家などの多様な人々の協力、社会教育施設、社会教育団体、企業、NPO など、様々な教育資源を活用することが大切である。このことは、高等学校学習指導要領第4章総合的な探究の時間第3の2の(9)にあるとおりである。年間指導計画の中に生徒の学習活動を支援してくれる団体や個人を想定し、学習活動の深まり具合に合わせていつでも連携・協力を求められるよう日頃から関係づくりをしておくことが望まれる。学校外の教育資源の活用は、この時間の学習活動を一層充実したものにしてくれるからである。

また、総合的な探究の時間の年間指導計画の中に、幼稚園、認定こども園、保育所、小学校、中学校、特別支援学校、大学等との連携や、幼児・児童・生徒が直接的な交流を行う単元を構成することも考えられる。また、数校が合同しての生徒による学習成果発表会などを開催することも考えられる。異校種・他校との連携や交流活動を行う際には、生徒にとって交流を行う必要感や必然性があること、交流を行う相手にも教育的な価値のある互恵的な関係であることなどに十分配慮しなければならない。教師、保育者が互いに目的をもって計画的・組織的に進めることが大切である。

なお、学校外の多様な人々の協力を得たり、異校種・他校との連携や交流活動を位置付けたりして学習活動を充実させるには、綿密な打合せを行うことが不可欠である。そのための適切な時間や機会の確保は、充実した学習活動を実施する上で配慮すべき事項である。

外部の教育資源として、ウェブサイトを活用することも考えられる。以下に、参考になるウェブサイト及びリンクを掲載する。

- ・子供の学び応援サイト（文部科学省）：

https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/index_00001.htm

- ・学校と地域でつくる学びの未来（文部科学省）：<https://manabi-mirai.mext.go.jp/>

- ・SSH卒業生活躍事例集（文部科学省・国立研究開発法人科学技術振興機構）：

<https://www.jst.go.jp/cpse/ssh/ssh/public/pdf/alumnipamphlet.pdf>

- ・STEAMライブラリー（経済産業省）：<https://www.steam-library.go.jp/>

- ・地域経済分析システムRESAS（内閣府・経済産業省）：<https://resas.go.jp/>

子供の学び
応援サイト
（文部科学省）



学校と地域で
つくる学びの未来
（文部科学省）



SSH卒業生活躍事例集
（文部科学省・国立研究開発
法人科学技術振興機構）



STEAMライブラリー
（経済産業省）



地域経済分析
システムRESAS
（内閣府・経済産業省）



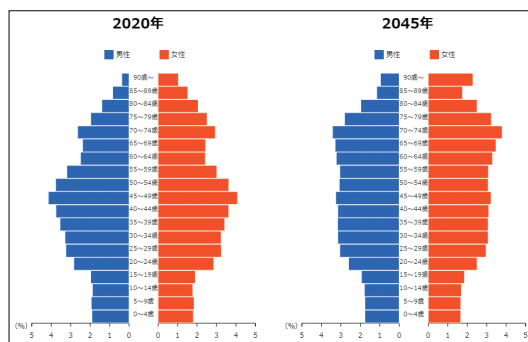
コラム

RESAS・V-RESAS等のデータ利活用ツールの活用

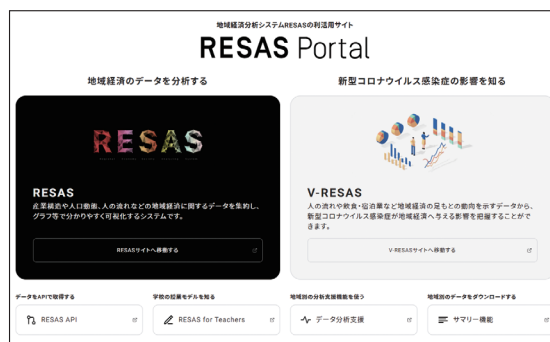
1. RESAS・V-RESAS等のデータ利活用ツールの普及促進に向けた取組

内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局及び内閣府地方創生推進室では、地方創生を効果的に推進するため、地域におけるデータ利活用の拡大に取り組んできた。2021年には、新たにデジタル田園都市国家構想の実現に向けた取組を開始しており、地域の社会課題をデジタルの力を用いて解決するため、データ利活用スキルをもつデジタル人材の育成・確保に向けて取り組んでいる。

現在は地域経済に関するデータを地図やグラフ等で分かりやすく可視化するウェブサイトとして地域経済分析システム（RESAS：リーサス）、感染症が地域経済に与える影響をリアルタイムに近い形で把握することができるV-RESAS（ブイ・リーサス）の提供を行っているほか、2022年9月から、RESAS・V-RESAS等の地域経済に関するデータを利活用するためのポータルサイト（RESAS Portal）の提供を開始している。



RESAS（地域経済分析システム）-人口構成-



RESAS Portal：トップページ

2. データ利活用ツールの学校教育への展開

学校教育においては、生徒自らが課題を設定し、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現といった探究のプロセスを通して、問題の解決を図る学習活動が一層求められている。学校現場では総合的な探究の時間をはじめとする各教科・科目等における探究学習の教材としてRESAS等が取り上げられるなど、RESAS・V-RESAS等のデータ利活用ツールを活用した授業への関心が高まっている。

3. 各種ツールの紹介とその活用方法

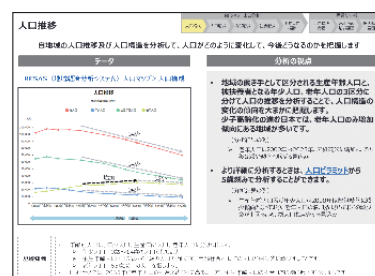
学校教育においてデータ利活用が行える人材の育成を支援するため、RESAS・V-RESAS等のデータ利活用ツールをはじめ、次のような様々なツールが提供されている。

① RESAS・V-RESAS (<https://resas.go.jp>, <https://v-resas.go.jp>) は、各地域の人口や産業、町づくりなどのデータをグラフ等で簡単に表示できるウェブサイトであり、生徒が自ら試行錯誤しながら地域経済に関するデー

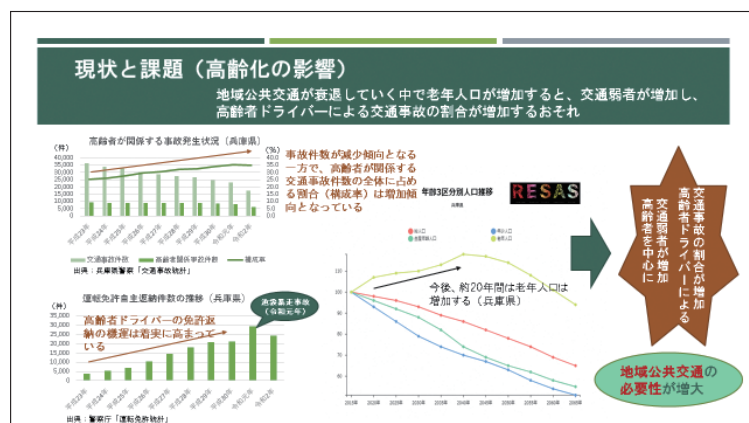


RESAS for Teachers：生徒用ワークシート例

タを探索することができる。②RESAS for Teachers (<https://teacher.resas-portal.go.jp>) は、教師向けにRESASを活用した学習指導案や授業用スライド、生徒用ワークシートをそれぞれ教科・科目等別に取りまとめて公開しているほか、授業実践事例やRESASの教材を活用した教師や生徒の成果発表の動画等も掲載している。③RESAS Portal (<https://resas-portal.go.jp>) は、RESAS等の活用方法や地域における活用事例のほか、データ分析の視点や流れを紹介する地域課題分析ナビゲーションを掲載している。④データ分析セミナー (<https://www.chisou.go.jp/sousei/resas/dataseminar.html>) は、データ分析を行う際の分析手法について専門家による講義が受けられるものであり、HP上では過去の資料と講義動画を掲載しているほか、事前申込みを行うことでリアルタイムのオンラインセミナーの受講が可能である。⑤RESAS研修は、各地域の地方支分部局のRESAS調査員を派遣して講義やワークショップ形式による研修活動を実施するもので、中には教師向けの研修や授業の一環としてデータ利活用に関する講義を実施した例もみられる。⑥地方創生☆政策アイデアコンテストは、探究活動の集大成となる発表の場としての活用が可能で、データから地域の課題を発見し、分析を行った上で解決策を提案するコンテストとして、毎年多くの応募を頂いている。学校の授業とコンテストを関連付けて、3年間のカリキュラムを見通しつつ、RESAS研修やRESAS for Teachersの教材の活用とも組み合わせ、コンテストに向けてデータ利活用スキルを高める取組を行っている学校もみられる。



(RESAS Portal)地域課題分析ナビゲーション



(地方創生☆政策アイデアコンテスト2021)
高校生・中学生以下の部 優秀賞
灘高等学校「地域公共交通の再生と地域の成長戦略」

内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局及び内閣府地方創生推進室では、今後もRESAS・V-RESAS等のデータ利活用ツールの提供を通じて、デジタル田園都市国家構想の実現に不可欠なデータを活用できるデジタル人材の育成に向けて取り組んでいく方針である。各学校における探究学習の更なる内容の充実や質の向上に向け、生徒の実態等に応じ全国各地域の経済に関するデータを効果的に活用いただきたい。



授業にRESASを活用して未来の教育を
RESAS for Teachers



地域経済分析システムRESASの活用サイト
RESAS Portal

コラム STEAMライブラリーの活用

STEAMライブラリーは経済産業省が開発した、探究活動を支援する動画コンテンツである。「ビジョンだけでは授業はつukれない。現場に役立つ『道具』が必要だ」——そんな思いから生まれたコンテンツである。

STEAMライブラリーには、生徒の主体性や対話、探究心を引き出すための指導案（授業用ガイド）やワークシート、動画といった教材がパッケージとしてそろっている。このため、教師の教材研究の負担を軽減し、すぐにでも授業に活用することが可能である。STEAMライブラリーには大学、企業、研究機関等と開発した173テーマ、1000動画以上に及ぶコンテンツがあり、SDGsをはじめ、デジタルシチズンシップ、防災、金融、食育、スポーツ、美術、最新の基礎研究など、教科・科目等の枠を超えた学びにつながるものが多い。

総合的な探究の時間の授業では、特定のコンテンツについてじっくり時間を掛けて他者と協力して進めることや、生徒一人一人が自己の興味・関心に基づいたコンテンツを選択して進めていくことが考えられる。以下は活用方法の一例であるが、個人ワークとグループワークを組み合わせながら、洗練された質の高い探究としていくことを目指している。なお、STEAMライブラリー内の各コンテンツには一定の指導案（授業用ガイド）がついているが、「こうしなければならない」ということではない。例えば、他教科・科目等の授業で一部の動画を視聴し生徒の興味を引き出したり、生徒が自由にコンテンツを選んで視聴したりしてもよい。各学校や生徒の実態に応じ、創意工夫して効果的に活用いただきたい。

STEAMライブラリーの活用例

1. 総合的な探究の時間での活用

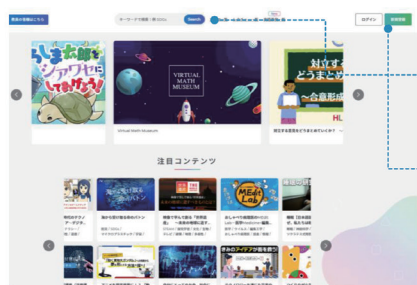
- ・STEAMライブラリー内の特定テーマについて、複数のコンテンツの視聴通して、生徒が多面的・多角的に考えたり、生徒間で議論したりすることで、生徒の問題意識を深まり、新たな疑問や課題が生まれ、生徒の主体的な課題設定につながる。
- ・様々なテーマのコンテンツが掲載されていることを生かし、生徒が自己の在り方生き方に照らし、キャリア形成の方向性と関連付けた課題を選定する。また、事前・事後指導を適切に位置付けながら、休業日等における学校外の学習活動にも効果的に活用する。

2. 他教科・科目等での活用

- ・各教科・科目等での学習の導入において、学習内容と関連するSTEAMライブラリー内のコンテンツを用いて生徒の疑問や問題意識の喚起を促し、学習意欲を高める。
- ・体育や部活動等における運動と関連させ、スポーツ分析のコンテンツを活用することで、運動を科学的に考え、学習をより深める機会とする。

OSTEAMライブラリーの基本的な機能

STEAMライブラリーの機能



STEAMライブラリートップページ

- 1 コンテンツ(教材)は、3つの方法で検索
 - ◆テーマ(SDGs)で検索・学年で検索・キーワードで検索
- 2 ユーザー登録で以下の便利な機能が利用可能
 - ◆コンテンツ(教材)の「お気に入り」保存
 - ◆各教材の動画・PDFのダウンロード
 - ◆コンテンツ視聴率・学習履歴の記録
 - ※メールアドレスとパスワードのみで登録でき、無料
 - ※登録時に確認メールが送付されます。
 - ※迷惑メールフォルダー含めご確認ください



コンテンツ概要ページ

- 3 テーマの概要がわかることに加え、関連動画/教材(全コマ)の一括ダウンロードが可能
 - ※ユーザー登録が必要



コンテンツ詳細ページ

- 4 サイト上で動画コンテンツを視聴
 - ◆コンテンツごとにコマ数は異なる
- 5 PDF形式での教材ダウンロード
 - ◆指導案やワークシートを掲載

OSTEAMライブラリーのコンテンツ例



コンテンツ例①
「カーボンニュートラル社会実現のために」
「現代的な諸課題」を考える



コンテンツ例②
「IoT技術により未来はどうなる？」
「職業や自己の進路に関する課題」を考える

「STEAMライブラリー」
<https://www.steam-library.go.jp/>



STEAMライブラリー



■年間指導計画作成の視点と留意事項

表は、先に述べた年間指導計画作成上の留意点を踏まえ、実際に年間指導計画を作成するための視点とそれぞれの留意事項の例を示したものである。

図11 年間指導計画作成の視点と留意事項の例

	視点	年間指導計画作成の留意事項
I. 素案の作成	学校の全体計画と関連付けて単元を配列した素案の作成	☐ 学習指導要領で総合的な探究の時間の「第1の目標」、「学校の教育目標」を確認している。 ☐ 実施しようとする単元展開と自校の「目標及び内容」との間に整合性があるか確認している ☐ 実際に年間指導計画の中に単元の予定を入れ込み、年間指導計画を作成している ☐ 学年・学級の経営方針との関連を図っている
II. 素案の吟味・修正・改善	生徒の意識の流れの把握	☐ 生徒の学習経験について把握している ☐ 生徒の意識の実態に照らして、一年間の意識の流れに無理がないか確認している
	単元配列の検討	☐ 年間を通して学ぶことが期待される内容が当該学年の生徒にふさわしいか確認している ☐ 年間を通しての資質・能力の育成が無理なく確実に進むように配列されているか確認している ☐ 単元の実施が適切な時期に配列されているか確認している
	各教科・科目等及び学年間の関連	☐ 各教科・科目等の年間計画を把握し、関連について確認している ☐ 他学年を見通し、当該学年として学習活動の水準が適切か、下学年と比べて学習活動に質的な高まりや積み上げがあるか確認している
	地域素材の教材化及び外部資源の活用	☐ 地域の素材を捉え、実地調査している ☐ 地域の行事等について、日程と内容の両面から関連を確認している ☐ 地域の外部資源が適切に活用されているか確認している ☐ 異校種との交流や連携が無理なく位置付けているか確認している
III. 管理と運用	授業時数の管理と運用	☐ 探究活動を行うために必要な時数が確保されているか確認している ☐ 単元の途中は、実施した授業時数を確認し、教育課程上の時数が確保されているか確認している
	年間指導計画の弾力的運用	☐ 単元の途中では、生徒の興味・関心や問題意識が追究課題や学習課題とずれていないか確認し、「ずれ」が生じた場合には、年間指導計画に変更や修正を加えている

第4章

第1節 単元計画作成の基本的な考え方

単元とは、課題の解決や探究活動が発展的に繰り返される一連の学習活動のまとまりという意味である。単元計画の作成とは、教師が意図やねらいをもって、このまとまりを適切に生み出そうとする、教師の自律的で創造的な営みである。学校として、既に十分な実践経験が蓄積され、例年実施する価値のある単元計画が存在する場合においても、目の前の生徒の実態、社会の変化や課題に即した単元へと改善するために、単元を構想し、計画を練り直すことが必要である。

単元計画の作成は、大きく次の二つに分けることができる。まず、単元を構想する。次に、単元計画を具体的に書き表す。実際には、必ずしも単元構想から計画へと移るのではなく、二つの作業を行きつ戻りつすることを繰り返し、よりよい単元計画を作成していくことが大切なことである。

1. 単元計画作成の手順

単元計画の作成に当たっては、図1「単元計画作成の手順チャート」に沿って、以下の㉠から㉢の
手順が考えられる。

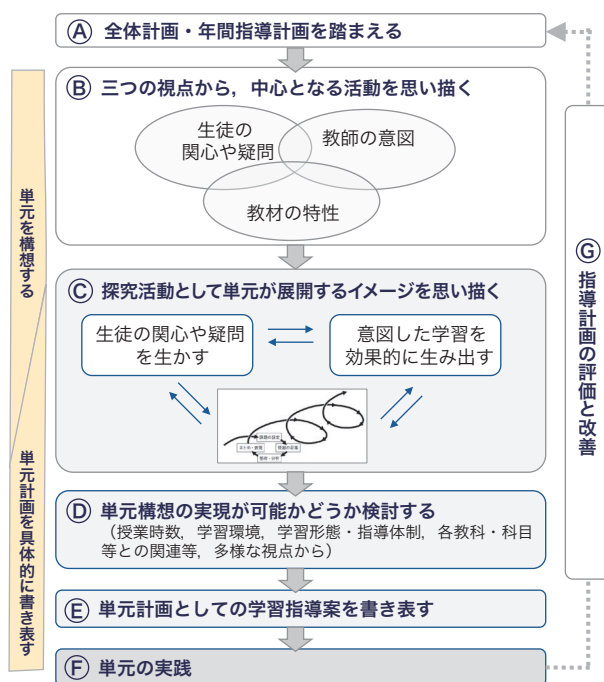


図1 単元計画作成の手順チャート

④全体計画・年間指導計画を踏まえる

単元計画を作成するに当たっては、その前提として、学校の全体計画・年間指導計画を踏まえる必要がある。

⑤三つの視点から、中心となる活動を思い描く

単元計画作成の出発点として、「教師の意図」「生徒の関心や疑問」「教材の特性」の三つの視点が考えられる。どの視点から構想を始めてもよいが、他の二つの視点についても、十分に考えを巡らせることが大切である。

①教師の意図

教師の意図を出発点とすることで、探究課題を通してどのようなことを学ばせたいのか、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力を明確にした単元構想が可能となる。また、生徒の興味・関心だけではなく、その課題が探究に値するものであるのかを教師の視点から十分に考慮して単元を構想することで、価値ある探究を保証することにつながる。

②生徒の関心や疑問

個々の生徒の学習経験、将来の進路目標、社会的な事情に対する問題関心などを出発点とすることで生徒の主体的な活動が保障できる。その際に、生徒の関心や疑問は、既出している部分だけではなく、無意識の中に存在する部分が今後の様々な体験を通じて現れるなど、現時点では言語化されていない部分が存在することにも注意する必要がある。教師の意図的な働きかけや学習機会の提供によって、無意識に存在していた関心や疑問を生徒が自覚することがある。また、生徒の興味・関心は不変ではなく、探究を進めながら様々な相互作用によって変化していくものである。そのことを踏まえ、生徒の可視化された関心や疑問だけでは、単元を通じて生徒の関心や疑問が高まったり、深まったりする姿をイメージすることも重要である。

③教材の特性

教材とは、生徒の学習を動機付け、方向付け、支える学習の素材のことである。教材の特性を出発点とすることで、どのような課題の解決や探究活動を行うことができるのか、明確に見通すことができる。さらに、実社会や実生活と関わる教材であることで、生徒の興味・関心を引き出し、探究に対する意欲を高めることもできる。その際に、これらの教材を通じて、横断的・総合的な学習が実現するように意識することが求められる。

⑥探究活動として単元が展開するイメージを思い描く

⑤で考えを巡らせ、描いた中心的な活動を、生徒主体の価値ある探究にするためには、次の二つのポイントがある。

①学習の展開における生徒の意識や活動の向かう方向を的確に予測すること。

学習の展開における生徒の意識や活動の向かう方向を的確に予測するためには、まず、生徒の立場

で考えることが大切である。タイプの異なる生徒を想定し、「この生徒であればこの場面ではどう考えるのだろうか」「この課程や学科で学んでいる生徒であればこう考えを広げていくのではないか」などと可能な限り具体的に即して予測することが考えられる。そして、複数の教師で予測を行い、意見が異なった点については慎重に検討する必要がある。

②十分な教材研究を行うこと。

総合的な探究の時間においては、探究課題における教材の意味や教材の活用方法を検討したり、教材を取り巻く状況を把握したりすることが大切である。それは、探究をより質の高いものにしていくために、教師が生徒に寄り添い、場面に応じて適切な支援をしていくためである。教材研究によって、生徒が探究の中でつまづきそうな場面やより思考を深めるようにしたい場面を想定し、課題への迫り方、情報の調べ方、分析の方法などを考え、適宜提供できるようにしておくことが大切である。

なお、総合的な探究の時間においては、生徒にとって意味のある問題の解決や探究活動のまとまりを基に単元を構成するため、その活動の過程において取り扱う課題や教材は一つとは限らない。一つの単元の中で複数の課題や教材が見込まれることも考えられる。したがって、教材研究においても、できるだけ幅広く、拡散的に思考を巡らせていくことが重要である。

㊦単元構想が実現可能か検討する

単元を構成する諸活動を考えた後、各活動が生徒の意識や活動の自然な流れに沿って展開できるかを検討する。流れに不自然さや無理がある場合には、順番を入れ替えたり、活動の間に別の活動を挟んだり省略したりすることで、単元構想を実現する可能性をより高めることができる。さらに、各活動の授業時数、学習環境、学習形態、指導体制、各教科・科目等との関連等の多様な視点から、単元構想が実際に実現可能かを吟味する。特に、高等学校では職業選択や進路実現に直接結び付けて自己の在り方生き方について考えることが求められる。そのため、各学校の実態に応じて、連携・協力を求める大学や専門学校等の教育機関、行政機関や企業、NPOなどの外部の教育資源の活用を想定しておくことも重要である。

㊦単元計画としての学習指導案を書き表す

単元の計画を具体的に表現するには、以下のような構成要素が考えられる。

○単元名	・生徒の実態	・地域や学校の特色
○単元目標	・目標を実現するにふさわしい探究課題	・社会の要請
○単元設定の理由・・・・・・・・	・育成を目指す資質・能力	・学校研究テーマとの関連
○単元の評価規準	・教材について	・各教科・科目等との関連
○単元の展開(指導計画・評価計画)	・教師の願い	など

⑥単元の実践

どれだけ丁寧に単元計画を作成しても、生徒の活動は教師の想定通りにはならない場合もある。生徒の学習状況に応じて計画を柔軟に修正しつつ、学びを生み出そうとする、教師の構えが重要である。

⑦指導計画の評価と改善

単元の実践を振り返り、単元計画を見直すとともに、次年度の全体計画や年間指導計画の改善に役立てる。

2. 単元計画としての学習指導案

単元計画としての学習指導案を書き表す上での基本的なイメージは、図2のようなになる。ここでは、⑤に示した単元計画の構成要素に基づき、作成している。なお、単元計画作成の具体的手順や、その具体例については、第2節で述べる。

〇〇年度 〇〇高等学校 総合的な探究の時間 〇年〇組 学習指導案 (例)			
1 単元名			
総合的な探究の時間において、どのような横断的・総合的な学習や探究が展開されるかを一言で端的に表現したものが単元名である。総合的な探究の時間の単元名については、 ①生徒の学習の姿が具体的にイメージできる単元名にすること、②学習の高まりや目的が示唆できるようにすることに配慮することが大切である。			
2 単元目標			
どのような学習活動を通して、生徒にどのような資質・能力を育成することを目指すのかを明確に示したものが単元目標である。各学校が定める目標や内容を視野に入れ、中核となる学習活動を基に構成することが考えられる。なお、目標の表記については、一文で示す場合、箇条書きにする場合などが考えられる。			
3 単元設定の理由			
なぜ、この単元を設定したかについて、様々な要素からその設定理由を述べる。			
4 単元の評価規準			
評価の観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	①概念的な知識の獲得 ②自在に活用することが可能な技能の獲得 ③探究の意義や価値の理解 の三つに関して作成することが考えられる。	①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現 の各過程で育成される資質・能力を生徒の姿として作成することが考えられる。	①自己理解・他者理解 ②主体性・協働性 ③将来展望・社会参画 などについて育成される資質・能力を生徒の姿として作成することが考えられる。
5 単元の展開 (〇時間)			
学習過程 (時間数)	活動内容	評価 規準	指導ポイント・ 関連する教科・科目等 など
単元の展開では、目標を実現するにふさわしい探究課題、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力、生徒の興味・関心を基に中核となる学習活動を設定する。活動内容や時間数、学習環境をより具体的に記述するとともに、それぞれの活動における指導のポイントや関連する教科・科目等の学習内容、評価規準等についても示すことが求められる。			

図2 単元計画の基本的なイメージ(例)

第2節 単元計画作成の具体的手順

前節の考え方に沿って、単元計画を作成した事例を示す。

単元名「地域活性化プロジェクトを立案しよう」(第2学年) 45時間扱い

《単元の概要》

本格的な少子高齢社会を迎え、過疎地域での人口減少など地域を取り巻く厳しい状況の下、地域コミュニティの活性化が大きな課題となっている。本単元は、実際に様々な形で地域の課題解決に取り組む機関や団体・個人と連携・協力し、自分たちの街を活性化するために様々な困難を乗り越え、具体的な取組を実現するなかで、生徒が主体的に考え行動し、将来の進路実現や社会の一員としての生き方について考えられるように構想している。

1. 全体計画・年間指導計画を踏まえる

■全体計画との関連

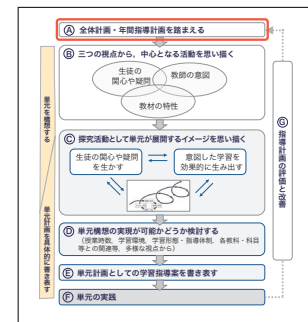
〇〇高等学校 学校教育目標

国際社会や地域で活躍し、貢献できる主体性をもった生徒を育成します。

《育てたい生徒像》

- 1 「知」を探究し、学びを深めようとする知的好奇心をもつ生徒
- 2 自他を尊重し、協働することができる豊かな人間性をもつ生徒
- 3 目標を高くもち、その実現に向けて着実に歩み続けることのできる挑戦する生徒

「単元計画作成の手順チャート」
のA



〇〇高等学校 みらい探究タイム（総合的な探究の時間）の目標

探究の見方・考え方を働かせ、地域の人、もの、ことに関わる探究を通して、目的や根拠を明らかにしながら課題を解決し、主体的・自律的・創造的に自己の在り方生き方を考えることができるようにするために、以下の資質、能力を育成する。

- (1)世界や地域の人、もの、ことに関わる探究の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付けるとともに、地域の特徴やよさに気づき、それらが人々の努力や工夫によって支えられていることを理解する。
- (2)世界や地域の人、もの、ことの中から自ら課題を設定し、その解決に向けて必要な情報を収集したり、整理・分析して考えたりする力を身に付けるとともに、考えたことを、理由や根拠を明らかにしてまとめ、表現する力を身に付ける。
- (3)世界や地域の人、もの、ことについての探究に主体的・創造的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、持続可能な社会を実現するための具体的な行動を考え、地域の一員として社会に参画しようとする態度を育てる。

〇〇高等学校 みらい探究タイム（総合的な探究の時間）の探究課題	
学年	探究課題
1	世界の諸課題とSDGsの実践（グローバルな課題と理解）
2	地域課題の理解と課題解決プロジェクトの実践（地域課題と参画）
3	自己の課題認識の深化とキャリアプランニング（自己課題と進路実現）



第2学年の探究課題と、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力			
探究課題 地域課題の理解と課題 解決プロジェクトの実 践（地域課題と参画）	探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力		
	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
	・〇〇市の課題解決のためには、市に存在する人材や環境など諸々の資源の魅力や質を向上させること、住民一人一人の意識の高まりや実践などが重要であることを理解する。 ・調査活動において、目的に応じた適切さで、正確かつ安定的に取材を実施できる。 ・〇〇市の課題や解決の取組みに関する理解は、自らが課題意識をもって探究を行ってきた成果であることに気付いている。	・〇〇市が抱える経済・福祉・自然環境など複雑な問題状態の中から、適切に課題を設定し、計画を立案できる。 ・課題の解決に必要な情報を、目的に応じて適切な手段を選択しながら収集し、情報の性質を考慮しながら蓄積できる。 ・課題解決に向けて、諸事情が相互に関連した複雑な問題に関する事実や関係を整理し、費用と効率の両面から情報を分析することができる。 ・相手や目的に応じて、根拠を示しながら自の考えを分かりやすく表現することができる。	・他者と協働しながら探究活動に積極的に取り組もうとする。 ・自らと他者（校内の仲間や校外の協力者）のもつそれぞれの特性を生かしながら、〇〇市のよりよい未来の姿を構想しようとする。 ・〇〇市の抱える課題についての探究を通じて、社会の形成者としての自覚をもって社会に参画・貢献しようとする。

■年間指導計画との関連

月	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3				
総合的な探究の時間	「地域活性化プロジェクトを立案しよう」(45時間) <table><tr><td>小単元1 (15時間) 「課題把握・プロジェクトの設定」</td><td>小単元2 (30時間) 「調査研究・プロジェクトの準備」</td></tr><tr><td> ○昨年度までの自校の探究事例の把握 ○担当教師と生徒によるプロジェクトの設定に関する面談 ○連携する外部の諸機関や個人の選定 </td><td> ○地域課題の解決に取り組んでいる外部講師による出前講座 ○フィールド・調査活動の実施 ○実践可能な企画の準備 </td></tr></table>								小単元1 (15時間) 「課題把握・プロジェクトの設定」	小単元2 (30時間) 「調査研究・プロジェクトの準備」	○昨年度までの自校の探究事例の把握 ○担当教師と生徒によるプロジェクトの設定に関する面談 ○連携する外部の諸機関や個人の選定	○地域課題の解決に取り組んでいる外部講師による出前講座 ○フィールド・調査活動の実施 ○実践可能な企画の準備	「地域活性化プロジェクトを実施しよう」 (25時間) ○課題解決の実践 ○研究・実践成果のまとめと成果報告 ○振り返りと次年度にプロジェクトに取組む後輩への提言			
	小単元1 (15時間) 「課題把握・プロジェクトの設定」	小単元2 (30時間) 「調査研究・プロジェクトの準備」														
○昨年度までの自校の探究事例の把握 ○担当教師と生徒によるプロジェクトの設定に関する面談 ○連携する外部の諸機関や個人の選定	○地域課題の解決に取り組んでいる外部講師による出前講座 ○フィールド・調査活動の実施 ○実践可能な企画の準備															

2. 三つの視点から生徒の姿を思い描く

この事例では、全体計画で掲げる教育目標の実現や生徒に資質・能力を身に付けさせたいという教師の願いから単元を構想した。地域の抱える課題に対して「自分たち高校生にもできる」という自信や自己肯定感をもつことができる機会を設けることで、生徒が自ら学び、追究し始める自律的な探究活動につながると考えた。

(1) 教師の意図

まずは、生徒の実態や課題を踏まえて、全体計画や目標とする資質・能力を育成するために、どのような指導上の課題があるのか、その課題を克服して目標を実現するにはどのような手立てが必要なのかを思い描いた。



教師(総探担当)

計画では「主体性」や「挑戦」を掲げているけど、実際は自分から何かしようとか社会に貢献したいという思いや姿が生徒からは見えないよね。



担任A

でも、進路相談では「将来□□になりたい」とか「△△に進学したい」って話す生徒も多いですよ。自分のことだからでしょうか。探究学習も同じように自分のこととして捉えられないと主体性や挑戦の意識は高まらないのではないのでしょうか。



担任B

自分の興味・関心を追究するのも大切だけど、高等学校の探究では、それが社会や自己の将来につながるものであることも重要です。



担任C

真面目で一所懸命な生徒が多いけど、自分から何かを始める積極的な生徒は少ないと感じます。まずは生徒自身が挑戦し、達成や実現ができたという経験ができる学習機会が必要だと思います。

(2) 生徒の疑問や関心

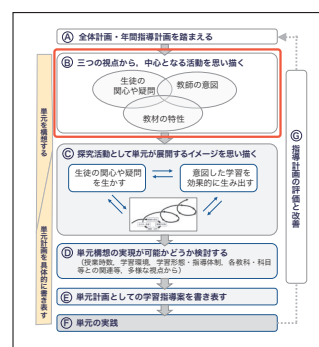
次に進学や就職に向けて地元に対する関心が強い生徒の進路意識や地域に対する課題意識を生かしながら、課題を自分のこととして捉え、自律的に探究が展開されるように単元を思い描いた。



進学や就職をしてもあまり遠くには行きたくないけど、人口が減り続けている〇〇市で将来も生活できるかどうか心配です。何とかしたいという思いはあります。



私は地域の人たちの町おこしイベントにボランティアで参加しました。参加してみて楽しかったし、誰かの役に立つのはうれしかった。私でもできることがあるなと思いました。



どんな資質・能力を育てたいのか？

全体計画を踏まえて、探究課題の解決を通して、どのような資質・能力を育てたいのか、具体的に考える。

どんな探究が成長を促すのかを生徒の実態に応じてイメージする。

自校の生徒の長所や課題を踏まえ、どんな指導をすれば、長所を伸ばせるのか？ または、課題の克服につながるのか？を考える。

生徒のこれまでの学習経験や疑問や関心の実態を把握する。

これまでの単元における学習で高まっている生徒の疑問や関心を、活動の様子を観察、感想などの振り返りから把握する。



私たちの街だからこそ、住み続けることができる〇〇市にするために、自分の力を生かせたらいいです。そして、それが将来の進学や就職にもつながっていくと思います。

生徒が主体的に取り組む単元にするための要素として、その探究に対して生徒が目的意識や必然性を感じる必要がありますね。



担任A

生徒が課題解決を通してやりがいや達成感を感じることも、生徒が自分のこととして捉え、自律的な学習になるために大切だと思います。ここでは生徒の関心に加え、生徒の目的意識や達成感を感じるような探究課題を盛り込む単元にしたいですね。



担任B

(3) 教材の特性

生徒が探究を通して成長するために必要な教材を準備する上で、学校内だけではなく、地域の諸機関や団体、個人など地域の存在や環境などを「教育資源」として活用することも有効である。ここでは、地域の人々や企業、行政機関などと共同で取り組む「地域活性化プロジェクト」における「協働パートナー」や「地域の課題」を教材として捉え、これらの教材の特性を明らかにした。



担任A

〇〇市のために生徒が実際に取り組める現実的な課題を設定したいけど、学校だけの力では限られています。積極的に外部の力を借りることで、生徒の興味・関心や資質・能力を生かせる課題を設定し、生徒と地域が共同でプロジェクトを進める単元にしたいですね。



担任B

〇〇市は新しい児童館を建設するために高校生から実行委員会を募集しているみたいです。また、〇〇商店街組合が空き家の活性化を一緒に取り組んでいる人を探していました。このような取組に、生徒が関わることができるといいのではないのでしょうか。



担任C

生徒の進学や就職とも関連付くプロジェクトもよさそうですね。例えば、本校には将来、地方公務員として地域で活動したいと考える生徒が多いから、市役所や企業などと連携した〇〇市の活性化を進められるプロジェクトができれば、生徒も意欲的に探究するのではないのでしょうか。



担任A

それでは、単元名を「地域活性化プロジェクトを立案しよう」として、地域の方々や企業、行政などと共同で地域の活性化に取り組むプロジェクトを立案する単元を組んではどうでしょうか。

教材と出会う姿を思い描く。

生徒が思い描く「課題解決」を実現・具体化の過程を通じて、生徒の主体性を引き出し、目標とする資質・能力を身に付ける姿を思い描くことで単元の中心的な活動や課題を明確にした。

教材の意義や価値を考える。

生徒がその教材と出会い、学ぶことにはどんな価値や意味があるのかを思い描くことで、単元の狙いや方向性を決める。

ふさわしい単元名を考える

何をさせたいのか、何を学んでほしいのかといった、教師の願いが生徒に伝わるような単元名を考える。



「地域活性化プロジェクト」では、探究の質が高まるように、どのような「地域課題」を扱うか、吟味しておく必要がありますね。



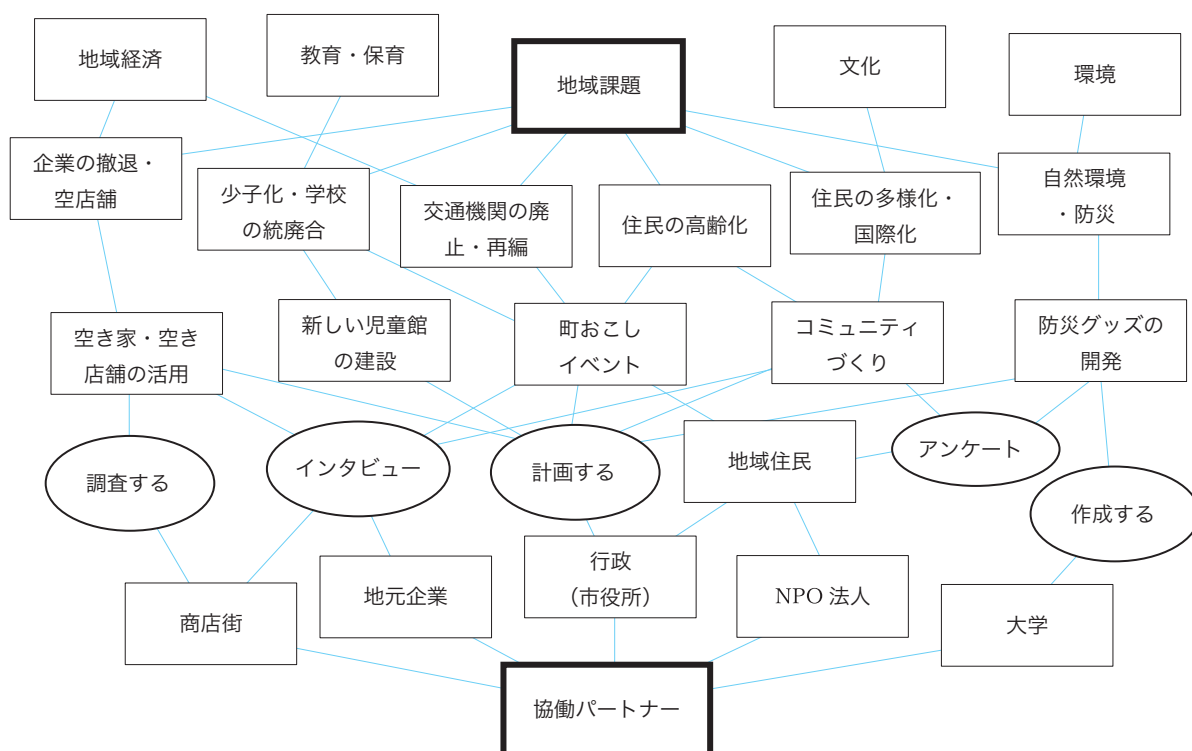
一緒に取り組む「協働パートナー」も重要な役割を担います。それぞれの協働パートナーが、生徒と一緒にどんなプロジェクトを立案できそうか、想定しておくことが大切だと思います。



それでは、「地域活性化プロジェクト」で扱う「地域課題」や、一緒に取り組む「協働パートナー」が、どんな教材としての特性をもっているか、そして教材としてふさわしいか、ウェビングで確認してみましょう。

教材がふさわしいかを
ウェビングで確かめる

中心の教材を「地域課題」「地域パートナー」としたとき、教材としての広がりがあるか、どのような対象や活動が考えられるかを予測する。



3. 探究として単元が展開するイメージを思い描く

これまでに考えた単元構想を具体化する際に、探究の過程となるよう、単元の計画を考えた。

単元「地域活性化プロジェクトを立案しよう」

課題の設定では

自分たちが考える〇〇市の課題を、ブレインストーミングやウェビングを使って出し合ってみよう。

出てきた課題について、KJ法的手法を使って整理してみよう。どんな分野やテーマが見えてくるか、〇〇市に関する課題の関連性やつながりについて注目してみよう。

自分たちが考える〇〇市のビジョン（課題が解決された将来の「理想の姿」）を考えよう。

設定したビジョンを実現するために必要な方法や計画を考えてみよう。

情報の収集では

設定した目標や手立てに関連した取組を行う団体など、今後の探究のパートナーになれそうな人を探そう。

課題解決を実践している行政機関や企業の方を外部講師とする「出前授業」やインタビューをして情報を収集しよう。この時にはインターネットも含めた情報収集ツールの特性を踏まえ、目的に応じた手段を選択しよう。

自分たちが考えた解決策についても講師やインタビュー相手から意見や助言をもらおう。

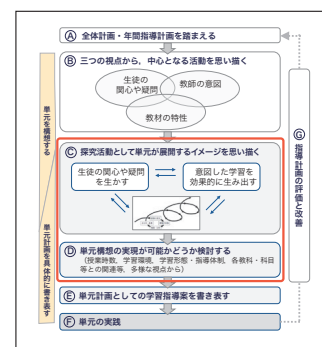
整理・分析では

現在行われている取組について分かったことを、比較や分類しながら整理してみよう。その際に高校生の視点で既存の取組を評価してみよう。

自分たちの考えた案について外部のアドバイスと、既存の取組の評価結果を踏まえて、設定した「目標（ビジョン）」の達成するために貢献できる解決策（ゴール）を実現するプロジェクトを1年間のロードマップとして計画立ててみよう。

設定したプロジェクトでは自分たちができること、協力者の力を借りることで可能となることを整理して考えよう。

プロジェクトの途中や終了時に評価・検証を行うための評価指標、目標値を事前に設定しておこう。



探究を通じてよりよい社会の在り方を考えさせる。これによって生徒に課題解決の意義や目的を意識させ、主体的に社会に参画する態度や意欲を高める。

意図的に生徒が外部とコミュニケーションをとったり、専門的な知識や技能をもつ人と関わったりする機会を設けることで、学校の枠を超えた協働的な学びを実現する。

収集した情報をKJ法的な手法やベン図などを用いて評価や分析を行う。

「いつ、どこで、誰が、何をする、どう評価検証するのか」など年間の探究の過程を見通した計画を考える。

プロジェクトの成果や過程をどのように評価するのかを、「プロセス評価」と「到達度評価」などに分け、それぞれの指標と目標値を設定する。

自分たちが考えたプロジェクトの内容や計画を、外部連携先の方に対して1次プレゼンテーションで、自分たちのプロジェクトと一緒に取り組んでもらえるように構想を発表しよう。

外部の方からはプロジェクトの改善点や協力するために必要な点など指摘をもらい、2次プレゼンテーションに向けて計画を練り直そう。

2次プレゼンテーションを行い、実践するプロジェクトの内容や計画を決めよう。計画はあくまでも計画として捉え、実際に進めていくなかで問題点が出てくればその都度修正しながら進めていこう。

生徒が考えたプロジェクトの不十分さや問題点などに気付くために、振り返る機会を設ける。プロジェクトの不足点や問題点を知ること、その改善についても考える機会となり、学びの深まりを実現できる。

次の単元「地域活性化プロジェクトを実現しよう」では、この単元の内容を踏まえて自分たちが設定した企画や取組を実践し、その成果を評価検証する。その内容を論文やポスターなどの形でまとめて発表することを中心に学習活動を展開する。

4. 単元計画を具体的に書き表す

単元の構想で描いたイメージを、様々な条件を考慮して具体化する。

総合的な探究の時間 単元計画

1 単元名「地域活性化プロジェクトを立案しよう」(45時間)

2 単元目標

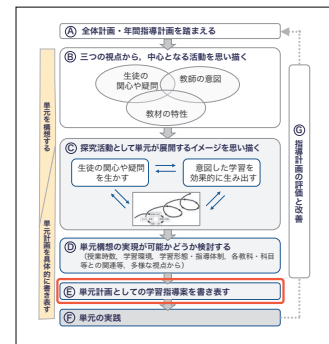
地域の企業や団体、行政機関との関わりを通して、地域がもつ魅力や価値、地域が抱える課題やその課題とグローバルな課題とが関わっていることを理解し、その課題に取り組む中で、課題の解決と自己の在り方生き方とを結び付けて考えるとともに、地域や社会の形成者としての自覚をもち、進んで社会に参画・貢献できるようにする。

3 単元設定の理由

(1) 生徒の実態から

生徒は、第1学年でグローバルな課題について探究したことで、持続可能な社会の在り方や未来に向けて解決すべき課題の存在などについて関心を深めている。そして、「自分の力で地域や社会に貢献したい」という思いを高めている。

こうした生徒の状況を踏まえて、第2学年では、生徒が身近な問題として捉えることができる〇〇市を対象として探究を展開する。ここでは実際に行政機関や企業と協働した探究活動を行う機会を設定する。そのことによって課題に対して当事者意識をもち、「自分にもできることがある」「今はここまでしかできなくても、将来、大学や企業などで専門的な知識や技能を身に付けることでもっとできることが広がる」といった自己の在り方生き方にもつ



なげ、社会に参画する主体的な生徒の育成を図ることをねらいとして本単元を設定した。

(2) 教材について

本単元は、全体計画で定めた探究課題「地域課題の理解と課題解決プロジェクトの実践」を踏まえ、福祉、防災、経済など一人一人の生徒の興味・関心や将来の進路志望と、課題解決に向けた実践的な取組を結び付けたプロジェクトとして課題を設定した。学校だけでは実現できない生徒の願いや意志を、行政機関や企業など地域の関連諸団体と協働することで実現を目指す。計画や提案に加えて、実践まで組み込んだ現実的な探究とすることで、生徒に自信や社会貢献への意欲も喚起することにもつながる。また、外部の協力者を行う取組は課題解決の困難さやその実現のために個々の力を合わせる協働の重要性にも気付かせることができる教材になる。

4 単元の評価規準

評価の観点		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①〇〇市の課題解決を通じて、市がもつ魅力や市に関係する人々など現在の〇〇市がもつ魅力や価値について理解している。 ②目的や対象に応じた調査活動を実施するために、事前準備をし、情報を適切な手続きによって、収集している。 ③〇〇市の課題との関係で自らの将来を考えてきたことやそのことによる自己変容が、これまでに行ってきた探究の積み重ねによるものであると気付いている。	①探究の対象を多面的・多角的に捉え、自分たちに解決可能な形で適切に課題を設定している。 ②課題の解決に必要な情報を、目的に応じて適切な手段を選択しながら収集し、情報の性質を考慮しながら蓄積している。 ③課題の解決に向けて、観点に合わせて情報を整理・分類し、考察している。 ④目的や対象に応じて適切な形で提案・報告・実践などの形で構想・表現し、自分たちの意図や目的を相手に明確に伝えている。	①仲間や連携先する協力者との関わりを通じて、自分自身のもつ個性や能力などに気付き、それを生かしながら探究活動に取り組もうとしている。 ②目標を共有しながら、自身とは違う他者の意見にも耳を傾け、自他の考え方や手法の違いを調整すること協働的に学習を行っている。 ③市の課題についての探究を通じて、社会の形成者としての自覚をもち、現在または将来の進路目標の実現を通じて社会に参画・貢献しようとしている。

単元において育成を目指す資質・能力を踏まえて記述する。

5 指導計画 (45時間)

	ねらい・学習活動(時数)	知	思	学	指導のポイント等
課題把握・プロジェクトの設定(15)	【課題と目標(ビジョン)の設定】 ・生徒の興味・関心や将来の進路目標に応じて、分野ごとに〇〇市の課題を分析する。 ・〇〇市の課題解決に取組む地域人材を外部講師とする特別講座を実施し、設定した課題についての理解を深める。 ・設定した課題に関して、SDGsの視点を踏まえたプロジェクトの目標(ビジョン)を設定する。		①		・就職や進学先の分野など自身の将来の姿をイメージさせながら、自身の関心や能力を生かせる分野を選択させる。 ・分野として経済分野、教育分野、医療福祉分野、歴史文化分野、防災環境分野など考えられる。 ・市の課題解決に取組む地域人材として、市役所などの行政機関、地元企業、商店街の組合やNPO法人などの団体や個人が考えられる。

「単元の評価規準」の指導計画への位置付けについては、総括的な評価を行うためにも、生徒の姿となって表れやすい場面、全ての生徒を見取りやすい場面を選定する。

				・生徒の探究と連携する外部人材との連携には、同窓会や学校運営協議会制度の活用などが考えられる。 ・課題の分析や目標(ビジョン)の設定には、座標軸やピラミッドチャートなど思考ツールを用いて整理・分析する。
	【プロジェクトの設定と修正】 ・設定した課題に関して、ビジョン(目標)を実現するためのアプローチ(手法)と本年度の取組のゴール(到達点)を設定する。 ・設定したアプローチやゴールを実現するために、生徒と地域の連携先(行政機関や地元企業など)が協働して取り組むプロジェクトの計画案を作成する。 ・作成した計画案を連携先に提案する発表会を行い、評価や助言を受ける。 ・連携先からの助言を基に計画の修正や変更を行い、実践するプロジェクトプランを策定する。		②	・ゴール(到達点)は、学期や年間など適切な期間で区切り、その間で達成を目指す到達点を基準として設定する。 ・アプローチ(手法)には学校や生徒だけではなく、地域の人材や団体との協働を踏まえた内容を盛り込むように指導する。 ・指導教師と連携先と事前に打合せを行い、生徒への指導や助言の内容、特にプランの改善点や修正点について調整・共有する。
調査研究・プロジェクトの準備(30)	【情報の収集と共有】 ・設定したプロジェクトのゴール(到達点)を評価するための、評価指標、基準値を設定する。 ・設定したプランを実行するために、必要な情報や材料を収集するアンケート調査やフィールドワーク等を実施する。 ・収集した情報を整理・分析し、その結果を連携先と共有するために、情報交流会を実施する。	②	②	① ・評価項目には、数値目標を組み込むことで振り返りや評価が効果的になるように指導する。 ・情報収集のツールや手段がもつ性質や長所・短所の理解について、各教科・科目等での学習とのつながりを生徒に意識させる指導を行う。
	【プロジェクト準備】 ・生徒と連携先が役割分担を行い、プロジェクトの実践や成果物作成に関する必要な準備を行う。	①	③	・最終的なまとめや実践の前にプロジェクト意見交換会やプロジェクト施行実践などを行って振り返りや自己評価をすることで、成果と課題が明確になり、今後の展開に向けた自己調整や見通しをもった学習が行えるように指導する。
	【プロジェクト意見交換会】 ・設定したプロジェクトの第1回の実践や成果物の作成を行う。 ・プロジェクト試行実践の結果や成果物の内容について評価するために、プロジェクト意見交換会を実施する。 ・プロジェクト意見交換会についての評価や検証内容を踏まえて、第2回プロジェクト試行実践について準備する。	③	④	③ ・プロジェクト意見交換会や第1回の実践の結果を踏まえて、必要であれば設定した評価基準の修正を行う。

生徒の思いや意識の流れを予想して記述し、生徒が自分の探究活動を進めるイメージをもって学習活動のまとまりを示す。

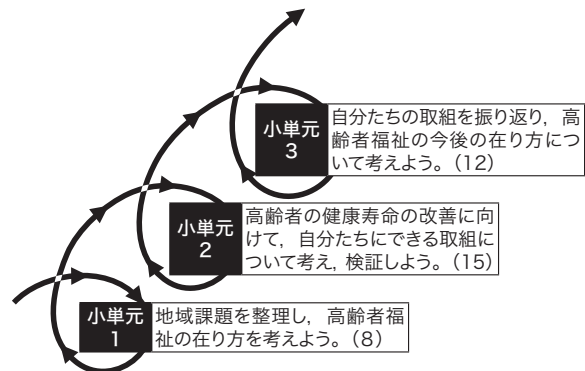
第3節 単元計画の具体例

事例① 単元名：第3学年「町民の健康寿命を延ばすために～地域住民と共に取り組めること～」(35時間扱い)

単元の概要

本単元は、過疎化・高齢化が進む地域で行われた実践である。町民の福祉は、多くの生徒の関心が高い地域課題である。しかし、生徒を対象にした意識調査によると、その改善に向けた具体的な取組については「行政に働きかける」「高齢者と若者が交流をする」などのように、表面的な課題意識に留まっていた。

こうした背景から、町民の暮らしや健康に対する現状や課題に目を向け、地域の高齢者が安心して健康に暮らす町づくりに寄与することができる生徒を育てていくことを目指し、「町民の健康に関する問題と、健康寿命の改善に向けた具体的な取組」という探究課題を踏まえて構想した単元である。



単元の目標

町民の健康や福祉を向上するための活動を通して、わが町の福祉は様々な人や組織が関わって成り立っていることや、持続可能な取組を創造していくことの意義や価値について理解するとともに、健康寿命を延ばすための方策を科学的根拠に基づいて考察し、自他を尊重する精神をもちながら様々な世代が健康に暮らす社会を共に実現しようと行動できるようにする。

単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①町民の健康や福祉の向上のために様々な人や組織が関わっていること、高齢者も活躍できる社会の実現に向けては持続可能な取組を共に創造していくことが大切であることを理解している。 ②考案した取組の効果に関する実地調査を、相手や研究内容に応じた適切さで正確に実施している。 ③町民の健康や福祉に対する認識の高まりは、健康寿命の改善に向けた創造的な取組について探究してきたことの成果であることに気付いている。	①町民が抱える健康上の問題点について、自己の関心を基に研究内容を設定し、検証方法を考え研究計画書を作成している。 ②町民の健康の現状を捉えるために、自己の研究内容に応じて、手段を選択し情報を収集したり蓄積したりしている。 ③統計や先行研究、町民を対象とした調査結果を基に、自分たちにできる高齢者の健康寿命促進の取組を検討し、実施効果に着目して、取組内容を決めている。 ④町民の健康や福祉の今後の在り方について、自己の取組を振り返り、学習や生活に生かしている。	①町民の健康の実態に関して、他者の研究内容との関係で自らが設定した研究内容の特徴を捉え、向き合おうとしている。 ②行政や医療職、介護施設職員等と協働して町民の健康寿命の向上に取り組もうとしている。 ③町民の健康や福祉の維持発展に向け、持続可能な自己の取組を明らかにして将来社会の実現に貢献しようとしている。

指導と評価の計画

小単元名(時数)	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
(1) 地域課題を整理し、高齢者福祉の在り方について考えよう。(8)	・地域の健康や福祉に関する問題点について自らの認識を出し合い、過疎化、高齢化と深く関連していることを確認する。 ・高齢者の健康や福祉に焦点を絞って研究内容を設定し、課題の解決に向けた今後の活動への見通しや検証方法を考える。		①		・発言 ・研究計画書 ・研究日報
	・自己の研究内容に照らして必要な情報を収集し、分析した結果を研究内容報告会で交流し合う。 ・研究内容報告会から、町民の健康寿命の現状に関する課題意識を高め、研究計画書を更新する。		②	①	・研究内容報告会における発表や発言 ・研究計画書
(2) 高齢者の健康寿命の改善に向けて、自分たちにできる取組について考え、検証しよう。(15)	・先行研究やアンケート調査等を踏まえて、町民の健康寿命に関する現状の分析を行い、実施可能な方策について検討する。		③		・健康寿命改善計画書 ・データ分析資料 ・研究日報
	・行政や医療職等と連携・協働した高齢者向け健康教室を実施するとともに、自分たちが考案した取組の検証や改善を行う。	②		②	・行動観察や発言 ・データ分析資料 ・研究日報
(3) 自分たちの取組を振り返り、高齢者福祉の今後の在り方について考えよう。(12)	・研究内容への取組をまとめ、得られた成果や効果についての研究発表会を企画・実施する。	③	④		・研究発表会における発表や質疑応答
	・自己の研究内容に関する結論や考察について研究集録にまとめる。	①		③	・研究集録

※評価計画の作成の意図や実際の評価については、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校 総合的な探究の時間】』を参照する。

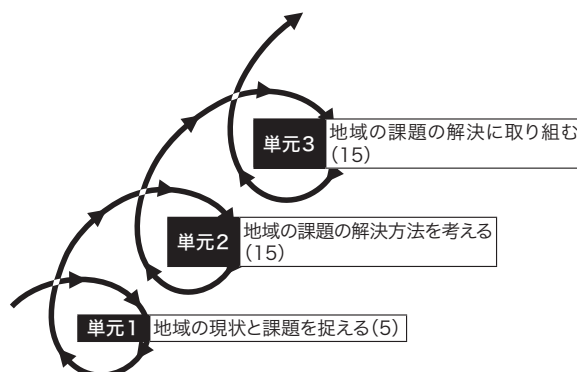
事例② 単元名：第2学年「持続可能な地域づくりに向けて」(35時間扱い)

単元の概要

本単元は、「地域が抱える課題とSDGs」を探究課題とし、「町づくり」「伝統文化」「地域経済」「防災」などの地域課題について、SDGsの目的や理念と関連させることで、グローバルな視点で考えられるように構想した単元である。

第1学年において、気候変動や生物多様性等のグローバルな課題に着目し、探究に取り組んだ。その中で、SDGsに関連する様々な取組が行われていることを理解し、自分たちにできることを考えてきた。

第2学年では、自己の興味・関心に応じた地域課題を選択し、グループごとに探究を進める。その際、より洗練された質の高い探究とするために、地域の方や行政職員、大学教員などのアドバイスを受けながら、SDGsの目的や理念と関連させ、グローバルな視点で課題の解決に取り組んでいく。地域の方と一緒に課題解決活動に取り組むことを通じて、持続可能な地域づくりへ主体的に参画する態度を育成することを目的とする。



単元の目標

地域課題とSDGsの目的や理念とを関連させ、その解決に取り組む活動を通して、地域課題がグローバルな課題につながっていることを理解するとともに、その解決に向けて課題を焦点化したり、適切な解決の方法を考えたりしながら、持続可能な地域づくりに主体的に参画できるようにする。

単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①地域課題がグローバルな課題と相互に関連していることや、その解決に向けた取組について理解している。 ②客観性の高いデータや根拠となる事実を、目的に応じて適切に収集している。 ③持続可能な地域づくりへの理解は、これまで積み重ねてきた探究の成果であることに気付いている。	①探究の過程を見通しながら、仮説を立て、取り組む課題と解決のための計画を立案している。 ②設定した課題に応じて適切な対象や手段を選択し、情報を収集している。 ③最適な解決の方法とするために、課題を焦点化して、収集した情報を整理・分析している。 ④探究の目的と解決の方法に矛盾がないか意識しながら、解決のための具体的な提案内容をまとめている。	①自分のよさや特徴に向き合いながら、取り組む課題を設定しようとしている。 ②多様な意見を受け入れながら、他者と協働して課題の解決に取り組もうとしている。 ③持続可能な地域づくりの実現に向けて、探究を通して得られた知見を生かして社会に参画しようとしている。

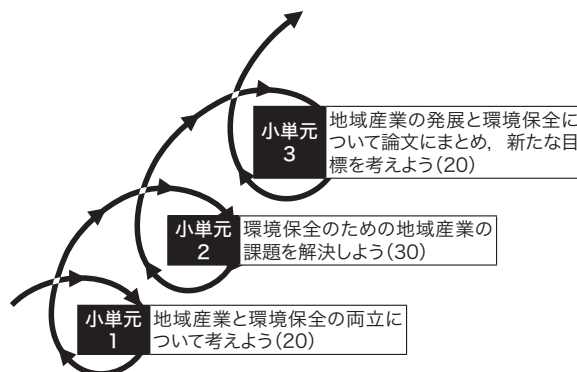
指導と評価の計画

小単元名(時数)	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
1 地域の現状と課題を捉える(5)	・将来の地域の姿を、RESASなどの情報を基にしながら思い描き共有する。 ・地域の方や行政機関の職員等から、地域の現状や課題についての話を聞く。 ・地域課題を町づくり、伝統文化、地域経済、防災等の視点で分類し、取り組むべき具体的な課題を明確にする。 ・取り組むべき具体的な課題の中から、自己の興味・関心と照らして自分の取り組みたい課題を決める。			①	・ワークシート
2 地域の課題の解決方法を考える(15)	・同じ課題を選択した生徒同士でグループを編成する。 ・グループごとに、探究の目的や対象を明確にして、課題の解決に向けた今後の活動への見通しをもつための探究計画書を作成する。その際、SDGsの目的や理念と関連させつつ、グローバルな視点を踏まえるようにする。		①	②	・探究計画書
	・先行研究や先行事例の情報を収集する。 ・設定した課題に即して、フィールドワークやアンケート調査等を実施する。		②		・探究記録シート
	・収集した情報を基に、自分たちが取り組むべき活動を見いだし、それらについて、効果性、実現可能性、公共性、経済性などの観点から比較し優先順位をつける。 ・優先順位が高いものを選択し、自分たちが取り組む活動を提案書にまとめる。	②	③		・提案書
	・地域の方や行政機関の職員、大学教員、SDGs推進団体等に、提案書を基に説明し、アドバイスを受ける。 ・アドバイスを基に、自分たちが取り組む活動を練り直し、探究計画書をブラッシュアップする。	①	④		・提案書 ・探究計画書
3 地域課題の解決に取り組む(15)	・地域の方や行政機関の職員と一緒に活動に取り組む。			②	・探究記録シート ・活動の様子
	・取組を振り返り、これまでに取り組んだこととこれからの自己の在り方生き方を関連付けて持続可能な地域づくりをテーマにしたレポートを作成する。 ・協力者へ作成したレポートを同封し、お礼状等を送る。	③		③	・レポート

事例③ 単元名：第2学年「地域の環境保全～地域産業と共に取り組めること～」 (70時間扱い)

単元の概要

本単元は「地域産業における環境問題とその改善に向けた取組」を探究課題とした単元である。地域産業と環境保全の両立を教材とし、学際的な視点で探究活動を行う。例えば、科学技術分野の内容を扱う場合には、実際に観察や実験等の体験を重視する。また、心豊かな生活や社会的な価値を創り出すような内容を扱う場合には、実際に諸感覚による分析やアンケートを用いた情報の収集等を重視する。



本単元においては、グループごとの探究活動とするため、多様に学習が展開する場合や、複合的な内容を含む場合等が想定される。そのため、人的または物的な体制の確保を進め、地域や高等教育機関、行政機関、民間企業等と連携・協働していく。

このように、実社会での問題発見・解決に向けて、様々な可能性を視野に入れたり、課題を深掘りしたりすることで、学際的な視点で探究活動をしていく。

単元の目標

地域産業や環境保全に取り組む人々と協働しながら環境問題の解決に向けた活動を通して、地域産業における環境問題とその改善に向けた取組を理解するとともに、環境保全の観点から、持続可能な地域産業の発展を考え、未来に向けて地域の環境を保全し続けようとする。

単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①地域産業が環境に与える影響と、その改善のためには安定的に持続した取組が必要であることを理解している。 ②調査活動を、目的や対象に応じた適切さで、正確かつ安定的に実施している。 ③地域産業の環境課題の解決に向けた安定的で持続した取組への理解は、探究してきたことの成果であることに気付いている。	①地域産業が環境に与える影響を明らかにし、未来に向けた地域の環境を保全する取組となるように仮説を立てて計画している。 ②課題解決への精度を高めていくために、必要な情報を相手や目的に応じて効果的な手段を選択しながら収集している。 ③探究テーマを焦点化したり、広い視野で捉えたりするために必要な情報を取捨選択したり、複数の情報を比較したり関係付けたりしている。 ④探究テーマの意図や実践が伝わるように、論理的な構成で論文にまとめている。	①探究を通して、自分の個性や特徴を見つめながら、多様な意見を受け入れ尊重しようとしている。 ②自分自身の生活を見つめ直し、地域産業や環境の課題解決に取り組もうとしている。 ③課題解決の状況を振り返り、地域産業の発展や環境の課題の解決に貢献し続けようとしている。

指導と評価の計画

小単元名(時数)	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
地域産業と環境保全の両立について考えよう (20)	・地域での出来事や、地域で活躍している方の話から、グループ内で共通する興味・関心について話し合い、探究テーマを決定する。 (例)地域産業による環境問題の解決 (例)水環境や生物を保全するエコシステムの開発 (例)情報技術を活用した環境保全のための取組 ・地域産業に携わる人たちへの意識調査や、地域産業や環境問題に関する先行事例の収集などの調査活動を行う。 ・地域産業やそれを取り巻く環境課題とその解決に向けた取組を計画する。	②	①	②	・探究計画書 ・行動観察
環境保全のための地域産業の課題を解決しよう (30)	・調査活動で得た情報を整理・分析し、プロジェクトを立ち上げる。	①	③		・探究記録シート
	・同じ課題に取り組む専門家のアドバイスを受け、課題解決への精度を高めていく。 (例)地域産業の社会貢献活動へ参画する (例)エコシステムを開発するための観察や実験に協力する (例)環境改善が見込まれるデータを測定する (例)環境保全のためのロボットを開発する (例)地場産品を使った環境負荷の低い商品を開発する		②		・探究記録シート ・行動観察
	・プロジェクトの取り組みを中間発表することで、多様な意見を聞き、探究の価値を高めていく。			①	・探究記録シート ・中間発表
	・中間発表の知見を基に、プロジェクトの内容を更新して実施していく。			③	・探究記録シート ・行動観察
地域産業の発展と環境保全について論文にまとめ、新たな目標を考えよう (20)	・論文の書き方を確認し、論文を作成する。 ・探究テーマごとに論文集としてまとめ、関係機関に配ったり、学校図書館に置いたりする。		④		・論文
	・これまでの探究を振り返り、学習してきたことの意義や価値を実感し、自己のキャリア形成に向けて新たな目標を検討する。	③			・探究記録シート

STEAM教育としての取組

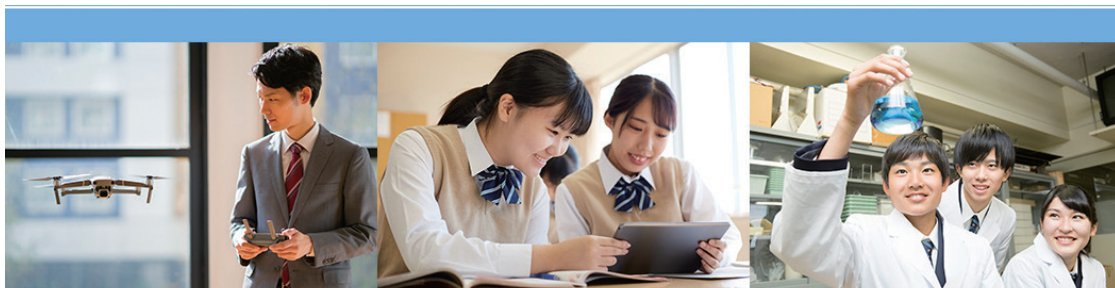
本単元では、地域産業や環境保全に取り組む人々と協働しながら環境問題の解決に向けて探究していく。ここでは、STEAM教育の視点から、人文科学、社会科学、自然科学等の学問分野を横断的に捉え、納得解や最適解を導き出すことを目指している。また、各教科・科目等の学びを実社会や実生活における問題解決に生かすことで、各教科・科目等の学びを効果的に活用することは、探究を高度化させていくことにつながる。

本単元では、例えば、理科と関連付けながら、水環境や生物、エコシステムについて学び、地域産業の発展と自然環境の保全の両立の難しさについて認識した上で、その課題解決に取り組む人たちの思いに触れることが想定される。また、情報科の授業において、AIを活用した地域の環境の変化について予測するプログラムを開発し、地域の方々に活用してもらう中で、データには表れにくい感覚的な側面についても分析することの必要性を理解する。

環境負荷の低い商品の開発においては、芸術科や家庭科で身に付けた資質・能力が生かされると同時に、その発信を幅広く効果的に行うために、国語科や情報科で身に付けた資質・能力が発揮されることが期待される。

生徒の在り方生き方と一体的で不可分な課題を発見し解決していくために、一人一人の興味関心に応じたグループを編成した探究活動とする。そのグループごとの探究活動を担当する教師は、それぞれのもつ専門性を生かし、課題を焦点化し、深く掘り下げた探究が行われるように伴走していくことが求められる。

さらに、幅広い可能性を視野に入れた探究活動を展開するためには、地域や高等教育機関、行政機関、民間企業等と連携・協働するなどの人的または物的な体制を整備していくことが望まれる。



STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進

第5章

学習指導や指導計画の評価

総合的な探究の時間では、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開するよう、各学校において目標や内容を定めて実施することが求められている。各学校により、生徒に育てようとする資質・能力も異なることから、それらを踏まえ、評価の観点や評価規準を設定し、評価活動を適切に進めていく必要がある。この時間の評価には、生徒の学習状況の評価はもとより、各学校の指導計画や教師の学習指導の評価も含むものである。

第1節 生徒の学習状況の評価

1. 学習評価の基本的な考え方

生徒の学習状況の評価は、この時間の目標について、どの程度実現しているのかという状況を把握することによって、適切な学習活動に改善するためのものである。また、その結果を外部に説明するためのものである。それには、各学校において定める内容に示す具体的な資質・能力が適切に育まれているのかを、生徒の学習状況から丁寧に見取ることが求められる。

学習状況の評価は、教師にとっては、生徒にどのような資質・能力が身に付いたのかを明確にし、生徒の学習活動を改善するためにどのような指導・支援を行えばよいかを映し出してくれる。生徒にとっても、自分の学習状況を把握し、自己を見つめ直すきっかけになり、その後の学習や発達を促す働きをする。評価が変われば授業が変わり、それにより生徒が育つ。一人一人の生徒の伸びや成長につながる評価を行うことが欠かせない。

総合的な探究の時間における生徒の学習状況の評価を適切に実施するには、信頼される評価の方法であること、多面的な評価の方法であること、学習状況の過程を評価する方法であること、の三点が重要である。

第1に、信頼される評価とするためには、およそどの教師も同じように判断できる評価が求められる。例えば、あらかじめ指導する教師間において、評価の観点や評価規準を確認しておき、これに基づいて生徒の学習状況の評価することなどが考えられる。この場合には、評価の観点を、一単位時間で全て評価しようとするのではなく、年間や、単元などの内容や時間のまとまりを通して、一定程度の時間数の中において評価を行うように心掛ける必要がある。

第2に、生徒の成長を多面的に捉えるために、多様な評価方法や評価者による評価を適切に組み合わせることが重要である。多様な評価の方法としては、例えば次のようなものが考えられる。

- ・プレゼンテーションやポスター発表，総合芸術などの表現による評価
 - ・討論や質疑の様子などの言語活動の記録による評価
 - ・学習や活動の状況などの観察記録による評価
 - ・論文・報告書，レポート，ノート，作品などの制作物，それらを計画的に集積したポートフォリオ（小学校や中学校からの蓄積があると望ましい）による評価
 - ・課題設定や課題解決能力をみるようなパフォーマンス課題を解決することによる評価
 - ・評価カードや学習記録などによる生徒の自己評価や相互評価
 - ・保護者や地域の人々等による第三者評価
- など

いずれの方法も，生徒が総合的な探究の時間を通して資質・能力を育てることができているかどうかを見ることが目的である。成果物の出来映えのみをもって総合的な探究の時間の評価とすることは適切ではなく，その成果物から，生徒がどのように探究の過程を通して学んだかを見取ることが大事である。

第3に，学習状況の結果だけではなく過程を評価するためには，評価を学習活動の終末だけではなく，事前や途中に適切に位置付けて実施することが大切である。学習活動前の生徒の実態の把握，学習活動中の生徒の学習状況の把握と改善，学習活動終末の生徒の学習状況の把握と改善という，各過程に計画的に位置付けられることが重要である。また，全ての過程を通して，生徒の実態や学習状況を把握したことを基に，適切な指導に役立てることが大切である。

なお，総合的な探究の時間では，生徒に個人として育まれるよい点や進歩の状況などを積極的に評価することや，それを通して生徒自身も自分のよい点や進歩の状況に気付くようにすることも大切である。グループとしての学習成果に着目するのではなく，一人一人の学びや成長の様子を捉える必要がある。そうした個人内評価を行うためには，一人一人が学習を振り返る機会を適切に設けることが重要である。

これら三点の関係性を整理すると、図1のようになる。評価の信頼性を高めるためにも、生徒にどのような資質・能力が育まれているのか、生徒は何を学び取っているのかを、多様な評価と過程の評価を意識して行い、それを指導に役立てることが重要である。なお、総合的な探究の時間では、単元が多様な学習活動で構成されることが多い。学習活動やそこで学ぶ内容に応じ、どの場面で、誰がどのように評価するのかを考えておく必要がある。

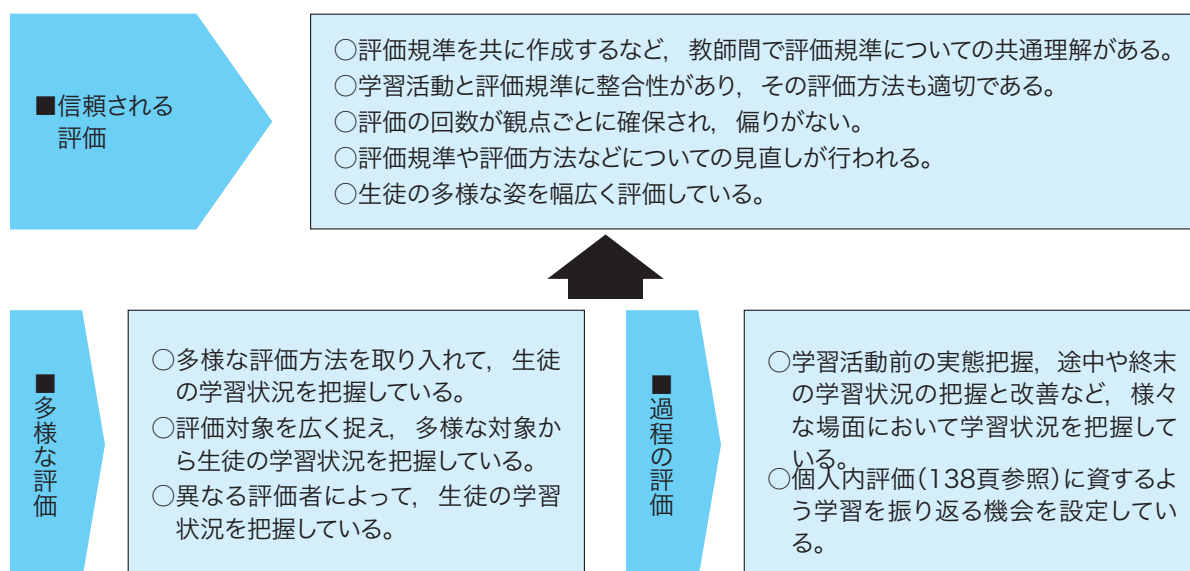


図1 生徒の学習状況を適切に評価するためのポイント

今後は、積極的に教師一人一人が生徒の学習状況を的確に捉えることが求められる。そのためには、評価の解釈や方法等を統一するとともに、評価規準や評価資料を検討して妥当性を高めること（モデレーション）などにより、学習評価に関する力量形成のための研修等を行っていくことも考えられる。

2. 全体計画に示した「学習の評価」の具体化

総合的な探究の時間では、その全体計画に「学習の評価」の欄を設け、そこに示した評価の方針や手立てに基づき、評価を行うことが考えられる（70頁参照）。

この「学習の評価」の欄には、学習状況の改善を図るのに有効な評価の考え方や評価方法、指導計画・学習指導の評価に関する方針、評価活動を充実させる手立て等を簡潔に記述する。各学校の実態や課題を吟味して、この欄に掲げる項目を検討することが大切である。例えば、生徒の学習状況の評価に関しては、以下のような記述が考えられる。

- ポートフォリオを活用した評価の充実
- 観点別学習状況を把握するための評価規準の設定
- 個人内評価の重視

など

3. 評価の観点の設定

今回の学習指導要領改訂では、各教科・科目等の目標や内容を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の三つの柱で再整理しているが、このことは総合的な探究の時間においても同様である。

学習指導要領が定める目標を踏まえて各学校が目標や内容を設定するという総合的な探究の時間の特質から、各学校が評価の観点を設定するという枠組みが維持されているが、資質・能力の三つの柱で再整理した学習指導要領の下での指導と評価の一体化を推進するためにも、評価の観点についてこれらの資質・能力に関わる「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の三観点を踏まえ、評価の観点を設定することが求められる。

なお、指導要録については、実施した「学習活動」、「評価の観点」、「評価」の三つの欄で構成し、その生徒のよさや成長の様子など顕著な事項を文章で記述することが考えられる。

4. 学習状況の評価の手順

(1) 内容のまとまりごとの評価規準を作成する

総合的な探究の時間の「内容のまとまり」は、一つ一つの探究課題とその探究課題に応じて定めた具体的な資質・能力と考えることができる。目標の実現に向けて、生徒が「何について学ぶか」を表したものが探究課題であり、各探究課題との関わりを通して、具体的に「どのようなことができるようになるか」を明らかにしたものが具体的な資質・能力という関係になる。

「内容のまとまりごとの評価規準」を作成する際の基本的な手順は以下のとおりである

- ①各学校において定めた目標（第2の1）と「評価の観点及びその趣旨」を確認する。
- ②各学校において定めた内容の記述（「内容のまとまり」として探究課題ごとに作成した「探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力」）が、観点ごとにどのように整理されているかを確認する。
- ③【観点ごとのポイント】を踏まえ、「内容のまとまりごとの評価規準」を作成する。

詳細は、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校 総合的な探究の時間】』を参照されたい。

(2) 単元ごとの評価を行う

単元における観点別学習状況の評価を実施するに当たり、まずは年間の指導と評価の計画を確認することが重要である。その上で、学習指導要領の目標や内容、「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方等を踏まえ、図2のように進めることが考えられる。なお、複数の単元にわたって評価を行う場合など、以下の方法によらない事例もあることに留意する必要がある。

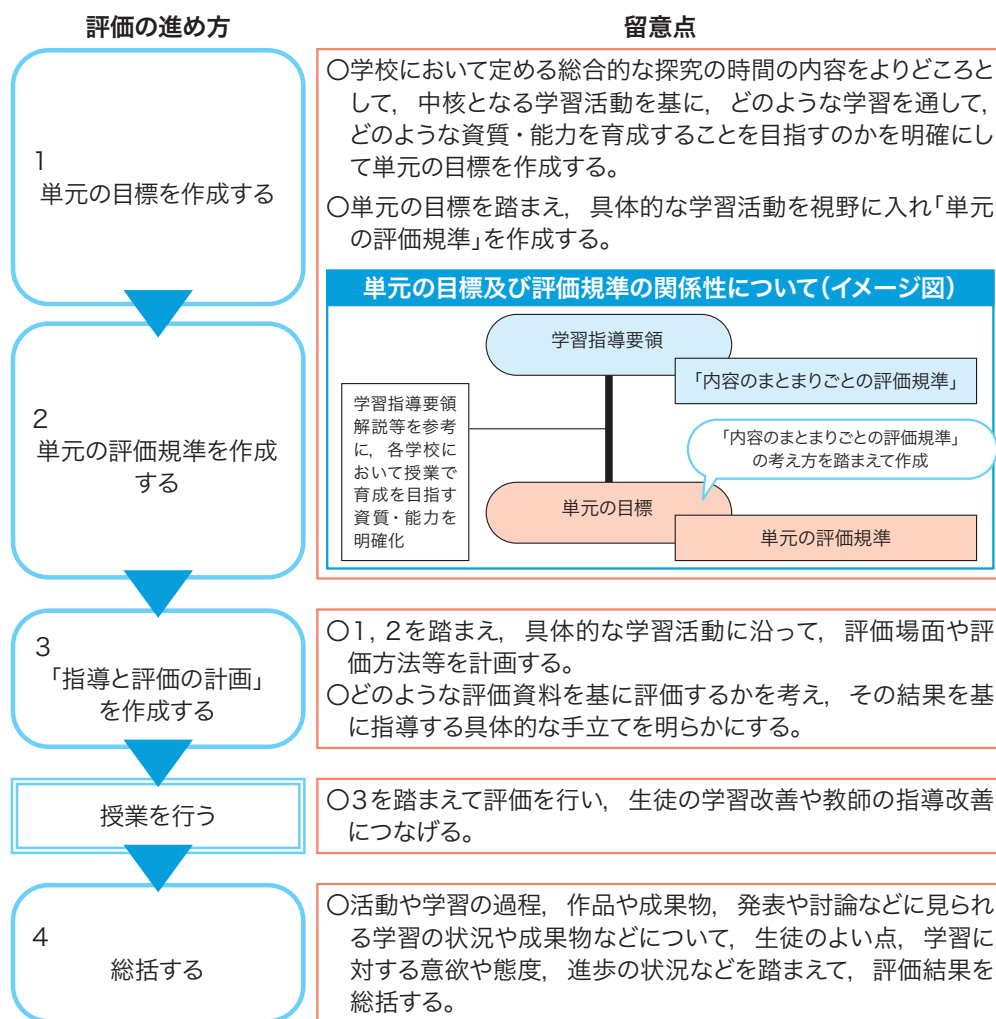


図2 単元ごとの評価の進め方と留意点

5. 多様な評価の方法

異なる方法や様々な評価者による多様な評価方法を組み合わせるとともに、評価を学習活動の終末だけでなく、事前や途中で位置付けて実施することも心掛けたい。学習過程全般を通して、生徒の学習状況を把握し、指導に役立てることが大切である。

観察による評価

発表や話し合い・討論の様子、学習や活動の状況などを学習活動の過程を通じて観察に基づき評価する方法である。生徒の行動や発言、表情や動作、エピソードなどを評価資料とするには、観察記録（観察シートやチェックリスト等）を用い、情報を蓄積しておくことが大切である。

【目的・効果】

- ・ワークシートや完成した作品では汲み取れない学習状況を見取る。
- ・過程での評価に適している。
- ・即座に指導に生かすことができる。

【留意点】

教師が生徒の活動の様子を見取る目を磨くとともに、評価を行う際の視点を明確にしたり、生徒の行動を総合的に理解し、その状況を観点に照らして分析したりするなどの工夫が求められる。

制作物による評価

論文・報告書、レポート、ノート、作品などの制作物、並びにその制作過程を通して評価する方法である。

【目的・効果】

- ・制作物に寄せた生徒の興味・関心、目の付けどころ、発想や気付きなど、こだわりや学びの過程を評価する。
- ・生徒一人一人のよさや可能性、努力の様子などを個人内評価として生かせる。

【留意点】

制作の過程での学習の様子を見取ったり、結果を累積したりして、複数の情報から進歩の状況を的確に把握できるよう工夫し、評価に客観性をもたせるようにする。

ポートフォリオによる評価

学習活動の過程や成果などの記録や作品を生徒が主体的・計画的に集積したポートフォリオを基にした評価方法のことである。活動計画表や自己評価の記録、取材メモや感想、教師や友達、保護者や地域の人のコメント、写真や報告書などを資料として集積する。

【目的・効果】

- ・継続的に資料をファイルやクラウドサーバーに蓄積することで、問題解決や探究の過程を詳しく把握することができる。
- ・振り返りの機会を設ければ、生徒が思いや考えを整理したり、解決の見通しをもったりすることができる。
- ・保護者や進学先等への説明、第三者評価のための資料にも活用できる。

【留意点】

ただの集積物にならないよう、適宜資料の並べ替えや取捨選択をするなどの整理をさせ、自己の学習を見通し、振り返る機会を設けるようにする。

パフォーマンス評価

一定の課題の中で身に付けた力を用いて活動することを通して、その力がどのように発揮されるかを評価する方法のことである。課題解決の場面において、身に付けた力を総合的に活用する姿を見取る評価ともいえる。

【目的・効果】

- ・論述やレポートの作成、発表・実演、グループでの話し合いなどを通して、身に付いた力を実際に発揮している姿を総合的に見取る。

【留意点】

身に付けた力を発揮し課題解決に取り組む姿を評価項目として具体化し、生徒と共有しておく

必要がある。また、パフォーマンス評価の質を高めるために、ルーブリックを作成することも考えられる。その際は、適切な評価項目を設定することによって、教師が指導の改善を図ったり、生徒が学習の見通しをもったり、学習の改善に生かしたりすることができるように留意する。

自己評価や相互評価

自己評価とは、評価シートや学習記録などから、生徒が自らの学習の状況を振り返ることによる評価である。相互評価とは、生徒が互いの学習状況を評価し合うものである。

【目的・効果】

- ・できるようになったことを明確につかみ、自己の高まりや成長といった変容を実感し、学習意欲の向上に結び付ける。
- ・自己評価能力や他人の評価を受け止める力の育成にもつながる。

【留意点】

自己評価では、生徒によっては自分に厳しすぎたり甘すぎたりするなど、偏ったものになりやすい。そのため、互いの評価を確認し合う相互評価を組み入れ、自己評価することが考えられる。自己評価シートや振り返りシートに記述するだけでなく、授業中の発言やノートから自己の学習状況を確認し、その後の学習の見通しを自分で考えられるようにする。また、相互評価を取り入れることにより、今まで気付かなかった自分のよさや課題に着目するようにする。

第三者評価（他者評価）

保護者や地域の人々、専門家などの外部の協力者による評価のことである。

【目的・効果】

- ・学習の様子が多面的に映し出され、生徒や教師が気付かなかった点を補うことができる。
- ・生徒の取組が認められ、成就感や自己肯定感の獲得につながる。

【留意点】

評価者に対して、学習活動の趣旨やねらいなどを事前に伝え、十分な理解を得ておく必要がある。保護者や地域の人々等に対しては、どの機会にどのような方法で評価してもらうか、年間を見通した評価計画を立てておくことが大切である。

個人内評価

観点別学習状況の評価や評定には示しきれない生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価するものである。

【目的・効果】

- ・生徒の学習意欲を高め、その後の学習や発達を促していく。

【留意点】

「学びに向かう力、人間性等」のうち「感性や思いやり」など個人内評価の対象となるものについては、生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価し、日々の教育活動の中で、生徒に伝えることが重要である。

第2節 教育課程の評価

1. 教育課程の評価の基本的な考え方

教育課程の評価については、生徒や学校、地域の実態を踏まえて総合的な探究の時間の指導計画を作成し、計画的・組織的な指導に努めるとともに、目標及び内容、具体的な学習活動や指導方法、学校全体の指導体制、評価の在り方、学年間・学校段階間の連携等について、学校として自己点検・自己評価を行うことが大切である。そのことにより、各学校の総合的な探究の時間を不断に検証し、改善を図っていくことにつながる。そして、その結果を次年度の全体計画や年間指導計画、具体的な学習活動に反映させるなど、計画、実施、評価、改善というカリキュラム・マネジメントのサイクルを着実に行うことが重要である。

2. 教育課程の評価項目・指標等の検討

教育課程の評価に当たり、具体的にどのような評価項目・指標等を設定するかは各学校が判断すべきことではあるが、文部科学省が平成28年3月に改訂した「学校評価ガイドライン」には、その設定について検討する際の視点となる例が示されている。これらの項目を参考にして、評価項目・指標等を検討することが考えられる。

- 学校の教育課程の編成・実施の考え方についての教職員間の共通理解の状況
- 児童生徒の学力・体力の状況を把握し、それを踏まえた取組の状況
- 児童生徒の学習について観点別学習状況の評価や評定などの状況
- 学校図書館の計画的利用や、読書活動の推進の取組状況
- 体験活動、学校行事などの管理・実施体制の状況
- 部活動など教育課程外の活動の管理・実施体制の状況
- 必要な教科・科目等の指導体制の整備、授業時数の配当の状況
- 学習指導要領や各教育委員会が定める基準に則り、児童生徒の発達段階に即した指導の状況
- 教育課程の編成・実施の管理の状況
(例：教育課程の実施に必要な、各教科・科目等ごとの年間の指導計画や週案などが適切に作成されているかどうか)
- 児童生徒の実態を踏まえた、個別指導やグループ別指導、習熟度に応じた指導、補充的な学習や発展的な学習など、個に応じた指導の計画状況
- 幼小連携、小中連携、中高連携、高大連携など学校間の円滑な接続に関する工夫の状況
- （データ等）学力調査等の結果
- （データ等）運動・体力調査の結果
- （データ等）児童生徒の学習についての観点別学習状況の評価・評定の結果

これらについては、生徒の学習状況の評価の結果や学習活動のエピソード、教師による実践の反省や記録、外部人材や保護者へのアンケートなど、多様な評価情報を基に、日常的に改善に生かすことが考えられる。年間指導計画の中に評価の実施時期を適切に位置付け、評価情報の公開にも耐えうる、できるだけ客観的な評価となるよう、多様な評価方法を用いて組織的・継続的に取組を進めることが重要である。

3. 教育課程の改善と外部への説明

教育課程について評価が行われた後、それが改善に利用されなければ、評価本来の意義は発揮されない。改善の方法としては、次のような手順が考えられる。

- ①評価の資料を収集し、検討すること
- ②整理した問題点を検討し、原因と結果を明らかにすること
- ③改善案をつくり、実施すること

教育課程の改善に当たっては、校長を中心としつつ、教科・科目等や学年を越えて、学校全体で取り組んでいくことができるよう、学校の組織や経営の見直しを図る必要がある。学習指導要領等の趣旨や枠組みを生かしながら、各学校や地域の実態、生徒の姿と指導内容を見比べ、関連付けながら、効果的な年間指導計画や単元計画、授業時間や週時程等の在り方について、校内研修等を通じて研究を重ねていくことが重要である。

このような取組を通して、各学校には多くの情報やデータ、意見などが蓄積される。これらについては、個人情報に配慮した上で、webページや学校通信を活用して公開したり、保護者や地域住民等に直接説明したりすることなども考えられる。その際、公表することが目的ではないので、何をどのように公開するかを整理しておく必要がある。公開の内容として、主に次のものが考えられる。

- 評価結果とその根拠
- 今後の取組を進めるのに必要な条件
- 教育課程の改善後の生徒の姿や活動の様子

また、実際に授業を公開し、総合的な探究の時間で学ぶ生徒の様子を直に見てもらうことで理解を広げることも大切にしたい。このように、保護者や外部への公開や説明は、総合的な探究の時間への理解を促進させ、その後の総合的な探究の時間の充実のために協力してもらうことにもつながる。

第6章

総合的な探究の時間を支えるための体制づくり

第1節 校長のリーダーシップと体制整備の視点

1. 求められる校長のリーダーシップ

各学校においては、育成を目指す資質・能力を明らかにし、教科・科目等横断的な視点をもって教育課程の編成と実施を行うとともに、地域の人的・物的資源を活用するなどして実社会・実生活に生徒が関わることを通じ、変化の激しい社会を生きるために必要な資質・能力を育むことが求められている。校長は、資質・能力の育成に向けて、生徒が実社会・実生活と接点をもちつつ、多様な人々とつながりをもちながら学ぶことのできる教育課程の編成と実施を行わなければならない。このことは、以下のようなサイクルで行われる。

- ①地域や学校、生徒の実態等の現状を把握する。
- ②育成を目指す生徒の姿等を目標として設定する。
- ③目標と現状のギャップを分析し、目標の達成を促す要因や阻害する要因を考察する。
- ④目標の達成度を測る具体性のある評価項目を決める。
- ⑤適切なカリキュラムを編成し、それを支える体制を整備する。
- ⑥指導計画に沿って実践する。
- ⑦成果・効果を評価・省察してカリキュラムを改善する。

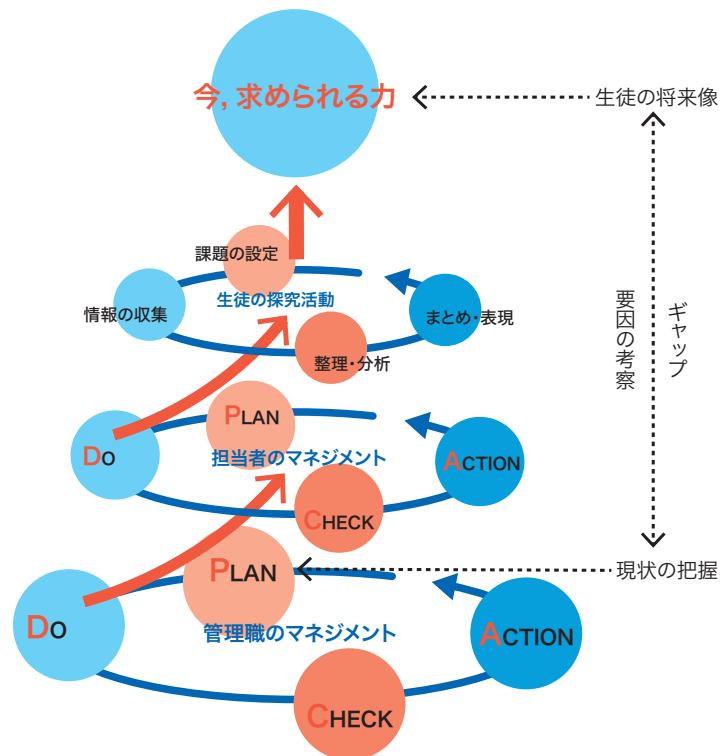


図1 教育課程の編成と実施のサイクル

その際、校長のリーダーシップの下、全教職員がホームルーム、学年の枠を越えた、研究実践や意見交換等を実施しながら、適切な指導計画を作成することが重要となる。また、指導計画を作成する際も、実施する際も学校の外部との連携が必要となり、ここにも校長のリーダーシップが必要となる。

2. 体制整備の四つの視点

総合的な探究の時間は、生徒が自己の在り方生き方を考えながら実社会・実生活に向き合い関わっていくことを通して、自らの人生を切り拓いていくために必要な資質・能力を育成し、新たな価値を創造し、人生や社会をよりよく変えていくことに向かうという他教科・科目等にはない特質を有する。校長は、各学校において総合的な探究の時間の目標及び内容、学習活動等について決定していかなければならないことから、その教育的意義や教育課程における位置付けなどを踏まえながら、自分の学校のビジョンを全教職員に説明するとともに、その実践意欲を高め、実施に向けて校内組織を整えていかなければならない。そして、全教職員が互いに連携を密にして、総合的な探究の時間の全体計画及び年間指導計画等を作成し実施していく必要がある。そのために、校長は、以下の四つの視点を考慮した校内の体制づくりに力を尽くす必要がある。

一つ目は、校内の教職員が一体となり協力できる体制をつくるなど校内組織の整備についてである。総合的な探究の時間では、生徒の様々な課題に対する意識や多様な学習活動に応えるために、グループ学習や個人研究などの多様な学習形態の工夫を積極的に図る必要がある。また、それぞれの教職員の特性や専門性を生かすことが、総合的な探究の時間の特色を生み出し、一層の充実にもつながる。まず、校内の全ての教職員が協力して取り組む体制を整備することが重要である。

二つ目は、確実かつ柔軟な実施のための授業時数の確保と弾力的な運用についてである。総合的な探究の時間については、授業時数を確保するとともに、状況に応じた柔軟な対応が求められる。授業時数を適切に運用することが総合的な探究の時間の充実には欠かせない。

三つ目は、多様な学習活動に対応するための空間、時間、人などの学習環境の整備についてである。探究の過程では、様々な体験活動や観察・実験・実習、調査・研究、発表や討論などの学習活動を行うことになる。充実した総合的な探究の時間を実現するためには、実施に必要な人的または物的な体制を整備するとともに、その改善を図っていくことが重要となる。

四つ目は、学校が家庭や地域と連携・協働しながら取り組む外部連携の構築についてである。教職員と学校外の人々が力を発揮し合う、「チームとしての学校」の取組も期待されている。地域や学校の実態、生徒の特性等に応じて学習活動を展開していくには、学校が保護者をはじめ地域の人々、専門家などの教育力を活用することが欠かせない。地域や社会に存在する多様で幅広い教育力を活用することが、総合的な探究の時間の充実を実現する。

第2節 体制整備の実践例

今回の学習指導要領の改訂により、総合的な探究の時間の目標や内容が各学校の教育目標を踏まえて設定されることとなり、教科・科目等横断的なカリキュラム・マネジメントの軸となることが明確になった。各学校においては、全教職員が自校の教育目標の実現に当たって総合的な探究の時間が重要な役割を果たすことを理解した上で、校長の方針に基づき、総合的な探究の時間の目標を達成できるように、協力して全体計画及び各学年の年間指導計画、単元計画などを作成するとともに、校内推進体制の充実を図る必要がある。

本節では、生徒に対する指導体制と実践を支える運営体制の二つの観点から、総合的な探究の時間の校内推進体制の在り方について実践例を紹介する。

1. 指導体制と運営体制の整備

(1) 生徒に対する指導体制

総合的な探究の時間の授業は、学年や学科ごとに作成された年間指導計画に基づき、学年単位・学科単位で同時展開される例が多く見られる。この場合、ホームルーム担任が自分のホームルームを直接指導する方法や、学年内や学科内の教師が指導を分担し生徒の興味・関心などを基に学習集団を組織する方法などがとられている。また、学校によっては、教師全体で指導を分担し、学年や学科の枠も外して課題別の学習集団を構成する例も見られる。

また、総合的な探究の時間では、課題の解決や探究活動の幅が広がったり学習活動が多様化したりすることや、生徒の探究が次々と深化したりすることにより、指導を担当する教師だけでは対応できない状況が次々と出てくることが想定される。このような場合に備え、まずは学年内で、さらには校内で養護教諭や司書教諭、学校司書等も含め、教師の特性や教科・科目等の専門性に基づき、生徒の質問や相談に応じたり直接指導したりする仕組みを整えておくことが欠かせない。支援のために必要とされる教師は、生徒の学習の進行に伴って変化することから、指導を担当する教師の求めに応じて、学年主任や教務主任、学科主任等が適宜調整して配置することも必要である。このような複数の教職員による指導を可能にするためには、時間割の工夫のほか、全教職員が自分のホームルームや学年・学科だけでなく、他のホームルームや学年・学科の総合的な探究の時間の実施状況を十分把握しておくことが大切である。その意味で、指導を担当する教師は、総合的な探究の時間の実施の様子を様々な形で公開する必要がある。例えば、日常の授業の公開のほか、生徒の学習活動が分かる資料を廊下に掲示したり、ホームルーム通信や学年通信、学科通信の記事にしたりすること、最終場面の発表会はもちろん中間発表会を公開することなども考えられる。ポスターセッションやプレゼンテーションの発表資料、ポートフォリオなどの成果物などをクラウドサーバー上で保存・共有することも考えられる。また、全教職員で実践の状況を紹介し合い、互いに学び合うことを目的としたワークショップ型の研修を行うことなども、学校全体の実施状況の理解を深めると同時に、教職員の協働性を高めることにつながる。

地域によっては、近隣の高等学校と連携して総合的な探究の時間の進め方を相談したり、共通の探

究課題を設定して探究の成果を合同で発表する機会を設けたりすることも考えられる。この場合は、校長のリーダーシップの下、近隣の高等学校の校長同士が連携を図り、各学校の総合的な探究の時間推進担当（コーディネーター）が相談できる場を設定できるように配慮することが重要となる。

事例① 学年内の教師が生徒の分野別グループを分担して指導した例

《A高等学校の概要》

- 生徒数 960人 ●ホームルーム数 24 ●教師数 65人
- 学区域の特色 都市部住宅地

A高等学校は大都市にある大規模校です。ほぼ全員が大学等に進学するA高等学校では、キャリア教育の視点から総合的な探究の時間において高大接続を推進し、大学で専攻したい分野について課題を設定し探究する活動を実践しています。第2学年では学年内で志望する分野ごとにゼミに分かれて探究課題に取り組みました。ゼミ担当教師は、各ゼミの課題設定や探究活動が順調に進んでいるかをチェックし、探究の進捗状況に応じて大学教員や企業を紹介するなど助言を与えています。総合的な探究の時間コーディネーターを含め学年の教師が連携して、探究の進め方の検討をしたり、進捗状況について情報共有をしたりしながら指導体制を整えてきました。

生徒の学習活動	学年教師の指導にかかわる動き
単元についての学年全体ガイダンス ●単元のねらい、探究課題や活動の例、スケジュール等を説明し、探究のプロセスを見通す。 ●探究テーマに関わる外部講師の講演を聴く。 ●自分が探究したい探究テーマを絞り込む。	学年会議(総合的な探究の時間コーディネーター参加) ●探究テーマの設定の仕方の確認や、探究活動の見通しをもつ。 ●課題設定や探究活動の参考とするにふさわしい講師を選定する。
探究テーマごとにゼミに分かれる 文化芸術ゼミ 経済社会ゼミ 国際交流ゼミ 自然科学ゼミ 環境問題ゼミ 健康福祉ゼミ ●探究テーマについて、1年間どのように探究するかをゼミの中で検討する	探究テーマを明らかにする働きかけ ●探究テーマを例にして、仮説や1年間の探究の見通しを検討する中で、教師が生徒にどのように助言するとかを学び合う。
ゼミごとに探究をする ●専門家や外部機関と連携して情報を収集する。 ●目的に応じて、フィールドワークやインタビューなどを行う。	学年会議 ●洗練された質の高い探究となるよう、関係機関と連携することで、探究を高度化したり、探究のプロセスを見通しながら、自律的に探究したりできるようにする。
中間報告会(ポスターセッション) ●教師や他のゼミの生徒から意見や助言をもらい、探究内容をブラッシュアップする。	相手意識を大切にした指導 ●ゼミ担当教師が指導する。伝えるべきこと、さらに調査が必要なことを明確にさせる。
ゼミごとにさらに探究をする ●不十分な点についてさらなる情報の収集や分析を行う。 ●情報を整理して、探究テーマにおける課題の解決に取り組む。	学年会議 ●進捗状況を調整。各ゼミの生徒の探究の様子を情報交換する。
成果発表会 ●1年間の探究の成果を保護者や地域、他学年の生徒に発表する。	発表会の運営 ●進行、機材準備等の分担をする。

事例② 全教師が第1～3学年の縦割り班活動を協力して指導した例

《B高等学校の概要》

●生徒数 360人 ●ホームルーム数 9 ●教師数 25人 ●学区域の特色 中都市部

B高等学校は、全校生徒を探究テーマごとの縦割りゼミ（各ゼミ40名程度）と、さらにゼミ内で異学年生徒の縦割り班（各班10名程度）に分け、3年間を通して異学年集団における主体性や協働性を発揮しながら探究活動に取り組んでいます。

B高等学校は、少子高齢化する地域にあって近隣の商店街に空き店舗が増える実態を踏まえ、総合的な探究の時間において、探究課題を「地域の課題とその解決に向けた取組」と設定しました。そして、第1学年から第3学年までの生徒が、自己の在り方生き方を考えながら、課題を解決していけるように、探究課題に関わる9の探究テーマを設定しました。全校生徒への説明会から、生徒は探究テーマを選び、それに基づいて縦割りゼミを編成しました。縦割りゼミで、探究テーマに関わる解決したい課題を出し合い、類似のまとまりごとに縦割り班を編成しました。9の探究テーマは、国際関係、心理、福祉、芸術、歴史文化、健康・栄養、政治経済、教育、自然・環境のキーワードで区分されています。それを支援する指導体制は、縦割りゼミごとに、教師の専門性を考慮し、2人程度のゼミ担当教師を配置します。

縦割りゼミごとに、探究課題の解決を通して育成する具体的な資質・能力を学年ごとに明確にして指導や評価に当たるとともに、それを生徒とも共有しています。

縦割り班における学習の進め方	
4月当初	■単元計画の作成 ・総合的な探究の時間推進担当を中心に、全教師による全体計画の共通理解の基で、単元を構想し、単元計画を作成する。
4月	■ガイダンスの実施 ・ガイダンスで各縦割りゼミの代表生徒が、それぞれのゼミのこれまでの取組や成果等について説明する。 ■縦割りゼミの編成 ・一つのゼミは40人程度とし、2人程度の教師で指導する。 ■縦割り班の編制 ・一つの班は10人程度とする。
5月～9月	■縦割り班ごとの探究活動 ■進捗状況の確認と取組の修正 ・縦割りゼミ内で情報共有し意見交換する。 ■夏期休業日での個別の探究活動
10月～12月	■中間発表会 ・縦割りゼミごとに外部人材（専門家や地域住民等）から助言を受け、目的と解決の方法に整合性があるのか等を確認しながら、より洗練された質の高い探究とする。 ■縦割り班ごとの探究活動
1月～3月	■シンポジウムの開催 ・探究の成果を保護者や地域住民に向けて発表する。 ■活動報告書の作成

(2) 実践を支える運営体制

学校は組織体として運営されており、教師や校内組織がそれぞれに連携して教育活動を営んでいる。

特に総合的な探究の時間では、生徒の課題の解決や探究活動の広がりや深まりによって、複数の教師による指導や校外の協力者と連携した指導が必要になる。そのため、指導方法や指導内容などをめぐって、指導する教師が気軽に相談できる仕組みを校内組織に位置付けておくことも大切になる。さらに、指導に必要な施設・設備の調整や予算の配分や執行の役割も校内に必要である。このように、総合的な探究の時間においては、校内に、指導に当たる教師を支える運営体制を整える必要がある。

そこで、校長は自分の学校の実態に応じて既存の組織を生かすとともに、新たな発想で運営のための組織を整備し、生徒の学習活動を学校全体で支える仕組みを校内に整える必要がある。

事例① 小規模校の運営組織の例

小規模校のC高等学校は、教職員数も少ないことから、教師が複数の校務分掌を担当しなければならない実態がありました。

総合的な探究の時間の担当者を1名おいていましたが、各担当がそれぞれの思いで活動を設定し指導しており、学校として育成したい資質・能力がつながっていかないという課題を感じていました。

そこで、校長のリーダーシップの下、全教師が学校の全体計画に則して指導を行う組織づくりを進めることになりました。また、既存の組織を生かして研究主任を「総合的な探究の時間コーディネーター」に任じ、そのフォロワーとして「総合的な探究の時間担当」を設け、全教師が教科・科目等の専門性を発揮できる指導体制づくりを進めるとともに、一人一人が計画、運営に対して役割をもつことにしました。

このことにより、指導方法や指導内容などをめぐって、指導する教師が気軽に相談できる仕組みを職員組織に位置付けておくことも大切です。さらに、指導に必要な施設・設備の調整や予算の配分や執行の役割も校内に必要です。このように、総合的な探究の時間においては、校内に、指導に当たる教師を支える運営体制を整える必要があります。

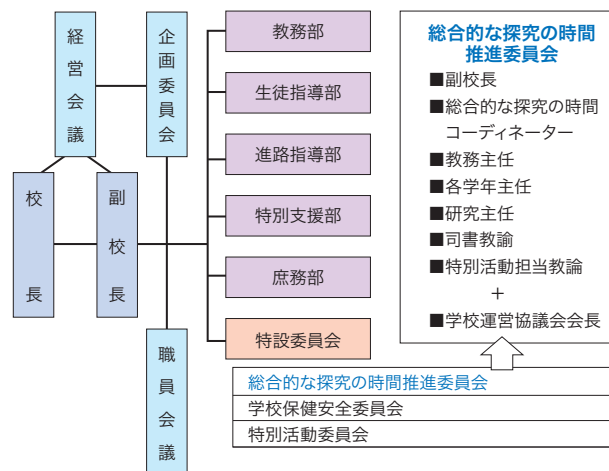
教師同士が活動や指導について相談し合う場面が増え、全教師が学年、ホームルームを越えて、情報交換・実践交流が行われるようになりました。

教職員	校務分掌	総合的な探究の時間についての分掌内容
a教頭		運営体制の整備、校外の支援者・支援団体との渉外
b主幹教諭	教務担当 ICT担当	各種計画の作成と評価、時間割の調整、指導の分担と調整、情報機器等の整備及び配当
c教諭	生徒指導主任、担任	学習活動時の安全確保、小・中学校との連携の推進
d教諭	1年主任、担任	★総合的な探究の時間担当 学年内の連絡・調整、研修、相談
e教諭	2年主任 研究主任	★総合的な探究の時間コーディネーター 学年内の連絡・調整、研修、相談 研修計画の立案、校内研究の実施
f教諭	3年主任 担任	★総合的な探究の時間担当 学年内の連絡・調整、研修、相談
g教諭	進路指導主任、 司書教諭 3年担任	職業や自己の将来に関する学習に関わること と、大学等との連携の推進 必要な図書の整備、生徒の図書館活用支援
h教諭	養護教諭 保健主任	学習活動時の健康に関わること、食育に関わること
事務職員	事業費の 予算・決算	事業の効果的な実施に資する経費に関わること

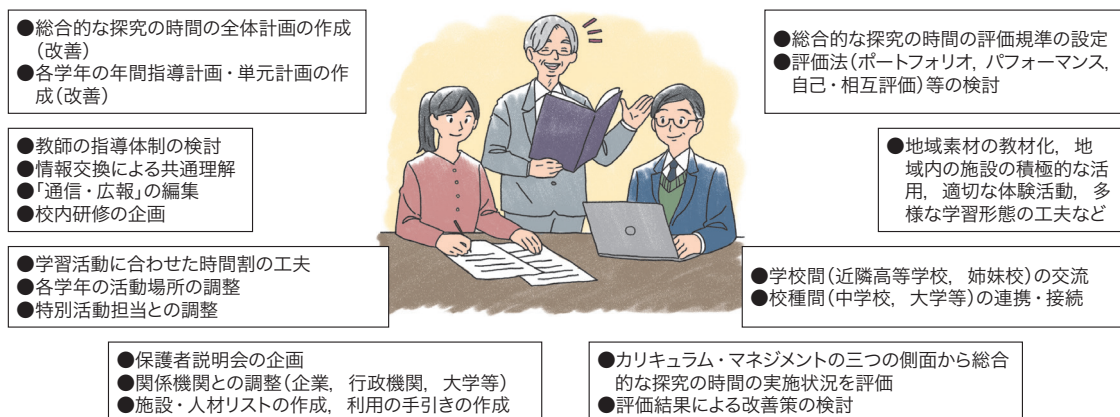
事例② 大規模校の運営組織の例

大規模校のD高等学校では、学年ごとに総合的な探究の時間の年間指導計画や単元計画を作成し、学習活動を推進していました。

学年を超えて全体計画との整合を図りつつ、総合的な探究の時間をより協働的に行うため総合的な探究の時間コーディネーターと各学年担当者等が月に1度、情報交換・協議を行う「総合的な探究の時間推進委員会」という校内組織を立ち上げました。さらに、総合的な探究の時間コーディネーターや学年主任、研究主任の空き時間をそろえて週に1時間程度の「総探打合せ」を行うようにしました。



D高等学校 「総探打合せ」の内容



D高等学校 「総合的な探究の時間コーディネーター」の職務内容（例）

【指導計画の作成】 ●全体計画作成の中心となる ●学年の年間・単元指導計画作成を支援する	・外部資源を活用できるように、積極的に地域や企業、大学等と連絡調整する。 ・生徒・教師・保護者等の思いや願いを理解するよう努力する。 ・総合的な探究の時間についての理解を一層深めるために関連する研究会、研修会等に主体的に参加し自己啓発に努める。
【教職員の協働の促進と意欲の向上】 ●校内推進組織を運営する ●情報交換を活性化させる ●校内研究との関連を図る	・定期的な情報交換会を企画・実施する。 ・学年を越えて協働して実施する学習を提案する。 ・各学年の授業の情報を収集し、その取組のよいところを随時、職員会議等で積極的に伝える。 ・若手教師に直接指導助言を行う（OJTの実施）。 ・校内研究等を先導する。また、先進事例等を集め随時報告する。
【保護者、地域、他校、異校種との連携の推進】 ●授業公開を実施する ●通信・広報を発行する ●連絡会や研究会・研修会を開催する	・授業公開や成果報告会、通信・広報等を通じて、自校の生徒の探究の様子を積極的に発信する。 ・近隣校の総合的な探究の時間の内容等を自校で定期的に報告する。 ・近隣中学校との共同校内研究会を開催する。近隣校の総合的な探究の時間に関わる合同研修会に参加する。
【指導計画・内容等の評価と改善】 ●活動の成果を検証する	・探究コンテスト等への応募や受賞状況を全教師に紹介する。 ・生徒、保護者、地域人材を対象に意識調査等を実施し、指導計画の評価を行う。 ・指導計画等についての自己評価を実施し改善に結び付ける。

2. 校内研修等の充実

総合的な探究の時間を充実させ、その目標達成に向けた鍵を握るのは、指導する教師の指導計画の作成と運用の能力、そして、授業での指導力や評価力などである。さらに、生徒や学校、地域の実態等に応じて特色ある学習活動を生み出していく構想力も必要となる。また、総合的な探究の時間は、教師がチームを組んで指導に当たることによって、生徒の多様な学習活動に対応できることから、教職員全体の指導力向上を図る必要もある。加えて、各学校の教育目標の実現や目指す資質・能力の育成について教科・科目等横断的な視点からカリキュラムをデザインする力も求められている。今後、各学校の校内研修においては、校長のリーダーシップの下、学習指導の改善のみならず、教育課程全体を俯瞰して捉え、教育課程の改善を図ることをねらいとした総合的な探究の時間の研修を積極的に取り入れることが必要である。したがって、年間の職員研修計画の中に、総合的な探究の時間のための校内研修を確実に位置付け実施することが極めて重要になる。特に、今回の改訂により、総合的な探究の時間の目標や内容は、各学校の教育目標を踏まえて設定されることとされ、教科・科目等横断的なカリキュラム・マネジメントの軸となることが明らかとなったことから、学校全体で行う研修に位置付ける意義がある。

校内研修のねらいや内容は、各学校の職員構成や実践上の課題等に応じて適切に定めていくべきものである。学習指導要領及び本書などを参考に、総合的な探究の時間の趣旨や内容等についての理解を教職員全体で確かにすることに加え、次の例を参考に、実践を進める教師の必要感を生かした校内研修計画を立てることが大切である。

●研修内容（例）

- 総合的な探究の時間の目標及び内容、育成を目指す資質・能力について
- 総合的な探究の時間の教育課程における位置付けや各教科・科目等の全体計画との関連について
- 全体計画、年間指導計画、単元計画の作成について
- パフォーマンス評価やポートフォリオ評価等の評価について
- 教材開発の在り方や地域素材の生かし方
- 国連の持続可能な開発目標（SDGs）との関連について
- 外部との連携について
- 学習活動時の安全確保について
- 総合的な探究の時間のためのICTの活用について など

●研修方法（例）

（校内）

- ・グループ研修：指導計画作成や教材作りの演習、探究課題に基づくワークショップ など
- ・全体研修：視察報告会、講師を招いての講義 など

（校外）

- ・視察研修：他校で開催される公開研究会の参加、先進校の視察 など

- ・ 実地体験研修：生徒の体験活動の臨地研修とその評価 など
- ・ 教材収集研修：地域における教育資源となるものの観察や調査 など

なお、校長は校外で行われる研修会や研究会に積極的に職員を派遣し、その成果を自校の実践に役立てることが大切である。また、近隣の学校同士で実践交流を行い互いに学び合う機会を設けることも実践力の向上に役立つ。

事例① 定期的な校内研修

《E高等学校の概要》

●生徒数 940人 ●ホームルーム数 30 ●教師数 98人 ●学区域の特色 都市部

E高等学校は、全日制3学科（普通科、理数科、国際科）26ホームルーム、定時制普通科4ホームルームを有する大規模校です。全ての学科、全ての教科・科目等において探究を重視していますが、教師の探究についての理解度に差がありました。そこで、総合的な探究の時間コーディネーターが中心となり、全ての教師を対象として総合的な探究の時間に関する定期的な校内研修を設定することにしました。校内研修は、総合的な探究の時間コーディネーターと各学年担当者が企画・運営します。E高等学校では、教師の実践的な力量を高めるために、ワークショップ型の研修を多く企画し、年度初めや年度末、夏季休業日に設定しました。研修会の年間スケジュールは以下のとおりです。

年月	研修形態	研修内容
4月	全教職員による校内研修	・ 学校教育目標・総合的な探究の時間の共通理解 ・ 単元計画作成ワークショップ
6～7月	研究授業(各学年1ホームルーム)・研究協議会(全教職員)	・ 学年を超えた相互の研究授業の参観 ・ 外部講師を招いての研究協議会
8月	全教職員による校内研修	・ 1学期の総合的な探究の時間の振り返り ・ グループワーク研修 ・ 2学期の総合的な探究の時間のブラッシュアップのためのワークショップ
11月	研究授業(全ホームルーム)・研究協議会(全教職員・外部の参観者)	・ 全学年・全ホームルームの総合的な探究の時間の授業公開 ・ 外部講師や近隣の高等学校・中学校の教職員を招いての研究協議会
2月	全教職員による校内研修	・ 1年間の成果と課題についての振り返り ・ 次年度に向けてのワークショップ(全体計画と年間指導計画の評価と改善)

※8月のグループワーク研修の内容については、年度ごとに研究企画部が生徒の探究の様子や教職員の要望を聞いて企画する。これまでに、「学習評価に関する力量形成のための研修」、「思考ツール活用研修」、「ICT活用研修」などが実施された。

事例② 中学校と高等学校が定期的に協働で行うワークショップ

《F高等学校の概要》

●生徒数 480人 ●ホームルーム数 12 ●教師数 36人

●学区域の特色 大都市の商業地域

《G中学校の概要》

●生徒数 290人 ●学級数 9 ●教師数 26人

F高等学校は、自治体から近隣のG中学校との連携型中高一貫教育の推進校の指定を受けましたが、中学校・高等学校を共通の理念で貫いた教育課程編成が進まず、苦心していました。

そこで、共通の理念で貫いた教育課程を編成するために、指導計画に視点を当てることになりました。指導計画を作成するに当たっては、当該学年までの生徒の学習経験やその経験から得られた成果について事前に把握し、その経験や成果を生かしながら指導計画を立てる必要があります。高等学校第1学年にあつては中学校の、それ以降の学年にあつては当該学年までの生徒の学習経験について把握することが大切となります。

そのような中、F高等学校の校長は、中・高一貫教育の重点的な目的を「6年間の連続性のある学力向上策の展開」に加え、「市民性の育成に向けた地域に関わる学習の推進」とすることをG中学校の校長に提案しました。

協議の結果、「市民性の育成」については、総合的な探究（学習）の時間を中心に、地域の課題解決に向けて様々な商業施設と関わることで、異なる立場や世代による多様な考えを踏まえながら、地域の課題や解決方法を多面的・多角的に捉えていくような、6年間を見通した指導計画を作成することになりました。その際、類似の活動を繰り返す場合には、学習内容が当該学年の生徒に合致しているか、繰り返し取り組むことによる質的な高まりがあるか等について十分な検討を行い、指導計画を作成し、研究授業を実施して検証することとなりました。

そこで、両校の校長は、中学校と高等学校の教師間の交流による、6年間を見通した総合的な探究（学習）の時間の指導計画の作成を期待して、両校の研究主任や総合的な探究（学習）の時間コーディネーター、研究推進委員に「総合的な探究（学習）の時間の単元づくり」を内容とした中学校・高等学校の全教師参加によるワークショップ型研修の実現に向けた調整等を行うように指示しました。研修会の経過と研修の内容については以下の通りです。

研修会の準備から実施までの経過と研修の内容

時期	研修会	協議、検討内容・研修内容
4月	第1回合同研修会 (全体会) 会場：F高等学校	●F高等学校の研究主任が、「市民性」の捉え方、育てたい生徒像、推進組織、研究計画等を説明する。 ●両校の総合的な探究(学習)の時間コーディネーターが、市民性の育成に向けた地域に関わる生徒の学習履歴について説明する。 ●自己紹介後、ワークショップのグループづくりを行う。 ・10グループを編成する(1グループ5～6人) ・グループは、所属学年、校種、経験等の偏りがないように編成する。 ・各グループに必ずまとめ役となる研究推進委員が入る。 ・市民性の育成に向けた生徒の学習活動における成果や課題を協議する。

		●研修会終了後、研究推進委員が集まり、当日のグループ協議の振り返りと、次回の研修内容について協議する。
8月	第2回合同研修会 「地域素材発掘ワークショップ」 会場：G中学校	●グループごとにワークショップを行う。ワークショップの進行は、総合的な探究(学習)の時間コーディネーター行う。 ●各グループは、地域マップを広げ、「市民性」を育むための地域素材について話し合うとともに、その素材をどの学年のどの学習活動で活用できるか、具体的な指導計画を作成し、プレゼンテーション資料にまとめる。 ●プレゼンテーション資料完成後、全グループが多目的室に集まり、報告を行う。 ●外部講師(地域商工会、行政機関職員等)を招き、意見をうかがう。 ●研修会終了後、研究推進委員が集まり、当日のワークショップの振り返りと次回の研修内容について協議する。
10月	第3回合同研修会 「授業研究ワークショップ①」 会場：F高等学校	●「地域の素材発掘ワークショップ」で発表された学習活動についての研究授業を実施する。 ●研究授業終了後、各グループに分かれ、研究授業の単元・学習活動の改善方法・内容について話し合う。 ●各グループでの話し合い終了後、全グループが報告を行う。 ●外部講師(地域商工会、行政機関職員等)を招き、意見をうかがう。 ●研修会終了後、研究推進委員が集まり、当日のワークショップの振り返りと次回の研修内容について協議する。
2月	第4回合同研修会 「授業研究ワークショップ②」 会場：G中学校	●「授業研究ワークショップ①」と同様に実施する。 ●生徒の変容や学習評価から、市民性の育成に向けた地域に関わる学習活動になっていたかを検証する。

コラム 総合的な探究の時間を進める中で教師が育つ

総合的な探究の時間を充実させるためには、指導計画を策定し、運用する力が必要となります。また、実践に伴って次々と生まれる諸課題を解決する力や地域人材等と調整する力も必要となります。このような専門性を高めるためには、日頃の改善努力に加え、校内研修の充実が不可欠です。

校内研修をより一層充実させるためには、自治体の研修等において、各学校が育成しようとする生徒の姿から必要な資質・能力を明らかにし、各教科・科目等をつないでカリキュラム・デザインができるミドルリーダー的な教師が育つ研修を位置付けることが望まれます。

計画・準備段階で高められる専門性

- ・学習指導要領及び学習指導要領解説についての理解
- ・指導計画を作成する力、授業(学習活動)を構想する力
- ・生徒、地域等について分析する力、実態把握する力
- ・自校教師、他校教師や地域人材との交渉力、調整力 等

学習実施段階で高められる専門性

- ・生徒の興味を引き出し、個に応じた指導をする力
- ・話し合い活動など集団による学習を支援・統制する力
- ・学習状況を的確に把握し、授業を進める力、評価する力
- ・生徒の自律的な探究を支援する力
- ・他教師、外部人材と協力して指導する力 等

事後評価段階で高められる専門性

- ・評価規準に照らして生徒の達成状況を評価できる力
- ・指導計画等の課題を見いだす力、活動の成果を見いだす力
- ・指導計画、授業(学習活動)を改善する力 等

第3節 授業時数の確保と弾力的な運用の実践例

総合的な探究の時間の年間授業時数は、目標及び内容、育成を目指す資質・能力を指導するのに実質的に必要な時間であり、授業時数の1単位時間を50分とし、35単位時間の授業を1単位として計算した標準の授業時数を確保することである。

総合的な探究の時間の単位は、その単位数に見合う授業の時数を行うことを条件として認定されるものであり、これを確保することは前提条件として考慮されなければならない。つまり、卒業までに、3～6単位に見合う標準授業時数105～210単位時間を確保し、実施しなければならないことを示している。そのためにも、年間指導計画に授業時数を明確に示すとともに、時間割に総合的な探究の時間を位置付けることが欠かせない。

また、総合的な探究の時間においては探究を基本とする特質を踏まえ、目標及び内容を考慮し教育効果を高める観点に立って75分や100分で授業を行ったり、特定の期間に授業を行ったりするなど柔軟な運用が求められる。

さらに、総合的な探究の時間の授業時数を確実に確保し柔軟に運用していくには、季節や植生の変化、地域の行事や季節に応じた生産活動などに目を向けて工夫を加えること、各教科・科目等との関連を考慮して授業時数を配分することで、年間指導計画及び単元計画に授業時数を適正に配当しておくことが第一に必要となる。

なお、様々な体験活動や、観察・実験・実習、調査・研究、発表や討論などの学習活動を重視する総合的な探究の時間は、ややもすると授業時数が不必要に増大していくことがあることから、短期的かつ長期的な見通しをもった計画づくりと、適切な時数管理が肝要となる。授業時数の管理については、実施しながら日常的に適切かどうかを見直していくものの、学期末などの大きな節目に実施時数を積算し学習活動の進展の状況と照らし合わせ、学習活動の見直しが必要である。

事例 1年間を見通した弾力的な授業時数の運用例

《H高等学校の概要》

- 生徒数531人 ●ホームルーム数17 ●教師数38人
- 学区域の特色 商店街と住宅地

大都市、下町地域に位置する中規模校のH高等学校は、学校教育目標に掲げられた「地域を見つめ、地域の未来を考える」生徒の育成を目指し、総合的な探究の時間を「地域未来」と名付け、精力的に地域についての調査活動、地域貢献に関わる体験学習等を実施しています。各学年の年間指導計画においては、地域行事等との関わりにより、地域での体験活動の実施時期や、探究のプロセスの各段階の実施時間等が大きく異なっています。

第1学年は、中学校の学習経験を生かした地域調査活動を実施するため、1学期に20時間を設定しています。第2学年は、11月に開催される地域の伝統祭祀について探究するため、2学期の授業時数を多くし、20時間を設定しています。

そして、第3学年は「地域創造計画」に取り組んでいます。第1学年、第2学年での探究をおして把握した地域の課題を基に、地域貢献活動と論文作成を進めていきます。そのため、1学期に論文テーマに基づいた地域貢献活動を実施し、2学期に論文「私の地域創造計画」として全校生徒や地域の方へ発表することから、1学期と2学期を合わせて35時間を設定しました。

	第1学年		第2学年		第3学年	
単元名	「地域の今を学ぶ一街の様子と人々の生活」		「地域再発見—伝統文化を中心に」		「地域創造—今、自分ができること—」	
1学期	●学年ガイダンス ●地域調査活動 ※中学校の学習経験を生かし、生徒が自ら探究のプロセスを意識しながら調査活動を行う	20	●学年ガイダンス ●地域の伝統行事(祭祀)についての調査活動	5	●学年ガイダンス ●地域創造計画の作成 ●地域貢献活動 ※地域貢献活動が自己課題となるよう課題の設定を生徒と対話しながら丁寧に行う	20
2学期	●地域課題別探究 ※同じ課題を探究する生徒でグループを編成する ●中間発表	10	●地域の伝統行事(祭祀)についての探究活動 ※地域の行事に合わせて授業時間を弾力的に運用する	20	●論文「私の地域創造計画」作成に向けた情報収集と執筆 ●論文報告会	15
3学期	●地域課題別探究 ●成果レポート作成	5	●成果発表会	10		

第4節

学習環境の整備の実践例

総合的な探究の時間に生徒が意欲的に取り組み、そこでの学習を深めていくには、学習環境の整備が欠かせない。総合的な探究の時間では、多様な学習活動が行われるため、生徒の資質・能力が十分に発揮されるような学習環境を整えなければならない。

1. 学習空間の確保

総合的な探究の時間では、探究の過程で、ホームルーム内はもちろん、学年内、学科内、さらには異学年間での学習活動などが展開されることがある。また、ものづくりや発表のための準備など、多様な学習活動が行われる。

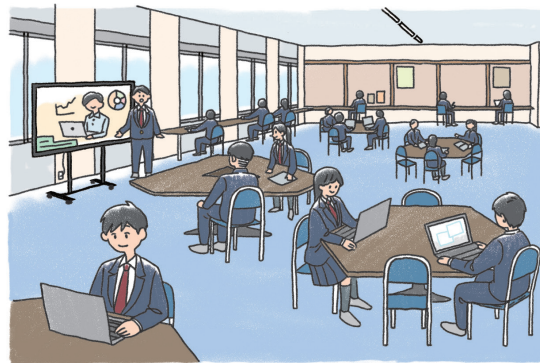
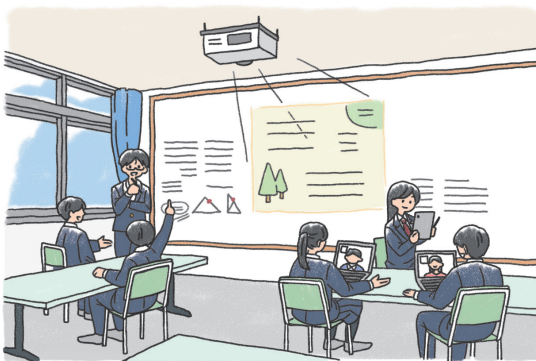
こうした学習活動を行う際、教室以外にも学習活動を行う空間が確保されていると、スムーズに展開しやすい。例えば、多目的スペースなどにミーティングテーブルを設置したり移動黒板を用意したりプロジェクターを設置したりするなど、多様な学習形態に対応できる空間を確保する工夫が考えられる。校内に余裕教室がある場合などは、学習目的に応じて有効に活用することが望まれる。

このような学習スペースには、総合的な探究の時間の学習履歴や成果、関連資料などを掲示・配置することで、学習への関心や意欲を高めたり、学習を対象化して振り返り、自らの学びを意味付けたり価値付けたりして、次の学びへと向かう動機付けにもなる。

事例 多様な学習活動に応じた多目的スペースの有効活用の例

I 高等学校は、探究活動がスムーズに行えるように、オープンスペースや余裕教室を活用して、学年ごとのフロアに多目的スペースをつくりました。探究活動においては、各生徒やグループが、探究の過程に応じて多様な活動を行うことが想定されます。

多目的スペースには、ICT端末を活用するための無線LAN環境をはじめ、グループで議論しやすいような机やホワイトボード、提示用のプロジェクターや大型モニター等が準備されており、生徒はこれらを必要に応じて自由に活用することができます。



2. 学校図書館の整備

学校図書館は、生徒の読書活動や生徒への読書指導の場である「読書センター」としての機能と、生徒の学習活動を支援したり、授業の内容を豊かにしてその理解を深めたりする「学習センター」としての機能とともに、生徒や教職員の情報ニーズに対応したり、生徒の情報の収集・選択・活用能力を育成したりする「情報センター」としての機能を有している。

学校図書館は、学校教育に欠くことのできない基礎的な設備であり、生徒の主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善にも効果的に生かすことが期待されている。そのため、学校図書館には、総合的な探究の時間で取り上げるテーマや生徒の探究する課題に対応して、関係図書を豊富に整備する必要がある。学校図書館だけでは蔵書に限りがあるため、学術情報等のデータベースへアクセスすることや外部の図書館との連携を図ることも大切である。自治体の中には、公立図書館が便宜を図り、学校での学習状況に応じた図書の拡充を行っているところや、学校が求める図書を定期的に配送するシステムを取っているところもある。地域と一体となって学習・情報センターとしての機能を高めた

い。

学校図書館では、生徒が必要な図書を見付けやすいように日頃から図書を整理したり、コンピュータで蔵書管理したりすることも有効である。学校司書等は、学校図書館の物的環境の整備を担うだけでなく、参考図書の活用に関わって生徒の相談に乗ったり必要な情報提供をしたりするなど、生徒の学習を支援する上での重要な役割が期待される。教師は全体計画及び年間指導計画に学校図書館の活用を位置付け、授業で活用する際にも学校司書等と十分な打ち合わせをする必要がある。加えて、こうした学校図書館の環境を、生徒が自ら活用できるようにしたい。そのためには、どこに行けばどのような資料が入手できるのか、どのような観点から必要な情報を探すのかといったことができるようになる必要がある。

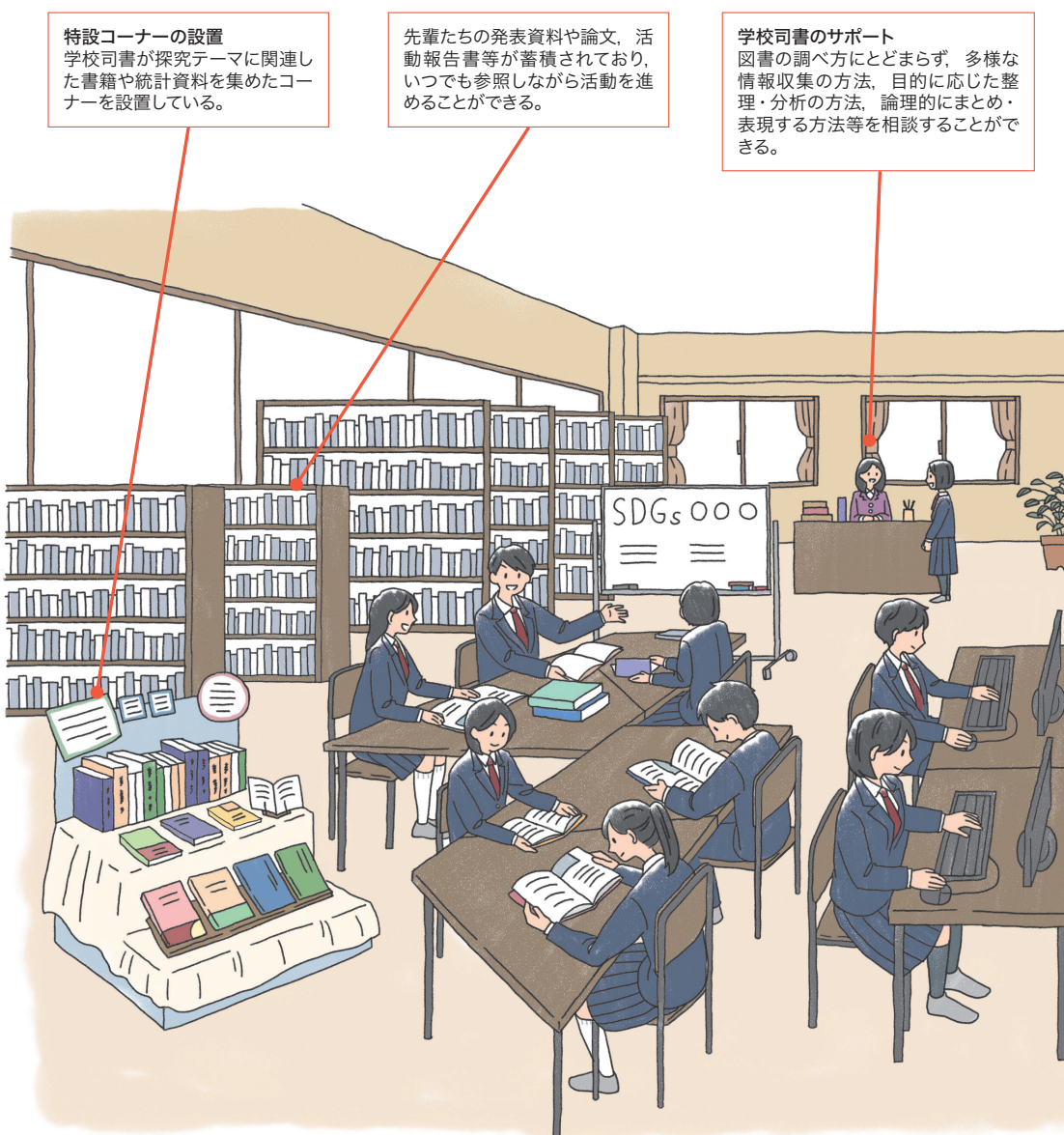
一方、総合的な探究の時間において生徒が作成した発表資料や論文集などを、学校図書館等で蓄積し閲覧できるようにしておくことも、生徒が学習の見通しをもつ上で参考になるだけでなく、優れた実践を学校のよき伝統や校風の一つにしていく上で有効である。

なお、高等学校の図書館の蔵書数は、小・中学校と比較して格段に多く、地域に関する資料等も豊富であることが多い。その意味からも、高等学校の図書館は、地域の小・中学校が積極的に活用できるよう開かれた図書館であることも大切である。

事例 総合的な探究の時間を支える学校図書館の整備の例

J 高等学校では、グループで活動するための机やICT機器、ホワイトボード等を配置し、図書やコンピュータを利用して情報を収集したり、集めた情報を基に話し合ったりするための環境を整えているほか、探究テーマに関連した書籍や統計資料を集めたコーナーや先輩たちの活動の成果が蓄積されているコーナーを準備し、生徒がいつでもこれらの情報を参照しながら探究を進めることができます。

また、総合的な探究の時間を担当する教師は、学校司書に指導計画等についての情報を共有しており、生徒は探究テーマに関する情報収集や整理・分析の方法等について、いつでも相談することができます。



第5節 外部との連携の実践例

総合的な探究の時間では、地域の素材や地域の学習環境を積極的に活用することが期待されている。とりわけ高等学校の総合的な探究の時間では、地域にある大学等の高等教育機関、各種研究機関や団体、市町村の役場や教育委員会、商工会議所や商工会、非営利団体等との連携が期待されている。それは、総合的な探究の時間では、実社会や実生活の事象や現代社会の課題を取り上げるからである。また、この時間では、多様で幅広い学習活動が行われることも期待されている。それは、生徒一人一人の興味・関心に応じた学習活動を実現しようとするからである。

このような学習を実現するためには、教師以外の専門スタッフも参画した「チームとしての学校」の実現を通じて、複雑化・多様化した課題の解決に取り組んだり、時間的・精神的な余裕を確保したりしていくことなどが重要である。そのためにも、外部の協力が欠かせない。具体的には、例えば、以下のような外部人材等との協力が考えられる。

- ・保護者や同窓会、地域の人々
- ・専門家をはじめとした外部の人々
- ・小・中学校の地域学校協働活動推進員等のコーディネーター
- ・社会教育施設や社会教育関係団体等の関係者
- ・社会教育主事をはじめとした教育委員会、首長部局等の行政関係者
- ・企業や特定非営利活動法人等の関係者
- ・小学校や中学校等、幼稚園等の関係者
- ・大学等の高等教育機関、各種研究機関や団体 等

特に、地域との連携に当たっては、よりよい社会をつくるという目的の下、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の枠組みの積極的活用や小・中学校の地域学校協働本部との連携を図ることなどにより地域社会と共にある学校を実現することが期待されている。その際、地域の教育資源などを積極的に活用するとともに、育成を目指す資質・能力について共有し、必要な協力を求めることが重要である。

このように、地域の素材や地域の学習環境を積極的に活用したり、生徒が地域の一員として地域の人々と共に活動したりすることで、学校と地域との互恵性が生まれ、息長く継続的な外部連携を実現している事例として、次のような取組がある。

- ・町づくりや地域活性化につながった活動や取組
- ・生徒が地域の伝統や文化を守り、受け継いだ活動や取組
- ・生徒が小学校や中学校等の学習支援ボランティアをした活動や取組
- ・地域の商店街の再生につながった活動や取組
- ・災害に備えた安全な町づくりや防災に関わった活動や取組 等

これらの取組は、学校を地域に開くことにもつながり、保護者や地域との信頼関係を築くことにもなるとともに、学校を核として地域社会も活性化していく「次世代の学校・地域」を創生していくことにもなる。

外部との連携に当たっては、管理職や総合的な探究の時間コーディネーター等の担当者が中心になると考えられるが、人事異動によってそれまで築き上げてきた関係性が維持されるように組織的に対応することが重要であり、校内に外部連携を効率的・継続的に行うための体制を整備する必要がある。ここでは、外部連携を適切に行うために必要な体制を整備する上での留意点を示す。

外部連携のための五つの留意点	
日常的な関わり	・信頼関係を築き、互いに協力できる態勢をつくるために、地域活動に学校側から積極的に参画したり、大学や商工会議所、非営利団体等から社会人講師として招いたりするなど、日頃から外部人材などと適切に関わろうとする姿勢をもつ。
担当者や組織の設置	・外部人材などと連携し、外部の教育資源を適切に活用するために、校務分掌上に地域連携部などを設置したり、外部と連携するための窓口となる担当者を置いたりする。
教育資源のリスト	・これまでに培ってきた地域の教育資源の活用のノウハウを生かして、総合的な探究の時間に協力可能な人材や施設などに関するリストを作成し、校内で共有化し、手軽に、日常的に活用できるように整備しておく。 ・リストを生かして、指導計画などを作成したり、具体的な学習活動を充実させたりしていく。
適切な打合せの実施	・外部人材に対して、適切な対応を心掛けるとともに、授業のねらいを明確にし、教師と連携先との役割分担を事前に確認し、育成を目指す資質・能力について共有するなど、十分な打合せをする。 ・その後の学習活動の充実のために、外部人材と事後の反省をしたり、外部人材から事後の評価を受けたりする。
学習成果の発信	・保護者や地域の人々の総合的な探究の時間への関心を高めるためにも、学校公開日や学校祭などの開催を通知したり、学校だよりの配布などをしたりして、保護者や地域の人々に総合的な探究の時間の成果を発表する場と機会を設ける。

事例① 地元の商工会議所との連携例

K高等学校では、将来の地域社会を担う人材を育成することが必要という考えの下、地域の商工会議所と連携し、地域の活性化に向けた諸課題の解決をテーマに、探究活動に取り組んでいます。

生徒と企業等が一緒になって地域の活性化に取り組むことで、生徒は地域社会への興味・関心を高めながら、自分の将来像や地域社会の未来についての考えを深めることができます。また、企業等にとっては、将来の地域社会を担う人材を育成することにつながります。

企業等からの支援の例

- ・様々な企業等から、地域の具体的な課題と取組状況等についての情報提供
- ・課題解決に向けて必要な体験活動や見学等の機会の提供
- ・探究の取組や成果に対する、企業等の視点からの専門的な助言
- ・生徒が提案する具体的な取組への協力や参画

事例② 学校支援コーディネーターの活用例

L高等学校は、同校のスクールミッションを踏まえ「社会に開かれた教育課程」を実現するため、学校運営協議会を設置し地域や関係機関等との連携・協働を進めています。学校運営協議会には、大学教員、商工会、団体職員、学校評議員（元PTA役員）のほか、小中学校との連携を進めるために近隣の小学校と中学校の校長も加わっています。

地域の人的・物的資源の活用が不可欠である総合的な探究の時間の探究活動について、学校運営協議会をプラットフォームとして地域・関係機関等との連携・協働により充実を図っています。地域学校協働活動推進員でもある「学校支援コーディネーター」が、学校運営協議会に参画するとともに、校長の学校運営の方針や学校運営協議会での協議結果に基づいて、地域・関係機関等との連絡・調整を行い、外部人材が生徒の探究活動をサポートする体制を整えています。

学校支援コーディネーターは、週に3日間校内で勤務し、教職員と連携して、効果的に地域と協働した学習活動の企画・調整・運営を行っています。

このことにより、効率的に探究活動ができるようになり、教師の負担軽減にもつながりました。

総合的な探究の時間における
「学校支援コーディネーター」活用の流れ

探究テーマに応じた学習内容や、必要な人材等を学校支援コーディネーターに相談する。

- 教師と学校支援コーディネーターが相談し、単元のねらい、内容に応じて人材バンクから適切な外部人材等を決定する。
- 学校の総合的な探究の時間コーディネーターと緊密に連携することで、より洗練された質の高い探究を実現する。
- 必要に応じて他校の人材バンクも確認する。
- 学校支援コーディネーターが招聘に当たっての連絡・調整を外部人材等との間で行う。

外部人材等と連携した探究活動を実施する。

探究の成果を振り返り、今後の活動の充実につなげる。

事例③ 総合的な探究の時間を活用して市の政策に提言する例

M高等学校は、地域社会の一員としての当事者意識をもって自己の在り方生き方を考える人づくりを目標に掲げ、2年生の総合的な探究の時間では生徒が市の模擬職員となって市政の課題を考え、解決策や改善策を提案する単元に1年掛けて取り組みます。

4月には、2年生200人が市の人事課研修担当から「辞令」を交付された後、環境・保全、健康・福祉、広報、観光、安全・防災の五つの課に分かれ、各課の担当者から基本政策を学んだ後、少人数のグループごとに政策に関心をもった点や改善すべき点等を協議し、探究したい課題について話し合います。

例えば、安全・防災課では、大規模な地震が発生した場合に被害を最小限にとどめるために市民がどのように協働することが必要か、また、高校生として地域のために何をするべきかななどの課題が探究の対象となります。避難所運営のシミュレーションをしたり、高齢者福祉施設を訪問したり、ハザードマップを基に災害時の地域連携の在り方について地域住民からの聞き取り調査に取り組んだりします。また、観光課では、市の観光計画を基に現地実習し、実際の観光客の感想や意見について聞き取り調査をして、観光客の目線でプランの長短を評価します。必要に応じて、夏季休業日においてもフィールドワークを実施し、更なる情報の収集を行います。

9月には、このような活動や体験を基にして、課題に対する解決策や改善策を中間まとめとして提案し、市の職員や他の生徒、大学教員や地域の有識者等からの意見や指摘を基に、不足している情報に気付いたり、新たな課題を発見したりして、更なる情報の収集や、整理・分析を進め、提案の精度を高めていきます。

3月には、最終まとめとして市長に提出するとともに、提案内容をプレゼンテーションし、講評を受けます。優れた提案は、市のホームページや広報に掲載されたり、実際の施策に反映されたりします。

このように、市役所の行政担当者をはじめ、大学教員や地域の有識者、非営利団体等と連携して探究活動を進めたことで、生徒の探究の質が高まるとともに、探究活動の成果が市政に反映されることで、生徒の社会参画の意識をより高めることにもつながりました。

STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成

○AIやIoTなどの急速な技術の進展により社会が激しく変化し、多様な課題が生じている今日においては、これまでの文系・理系といった枠にとらわれず、各教科等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用しながらそれを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成が求められている。

○教育再生実行会議第11次提言において、幅広い分野で新しい価値を提供できる人材を養成することができるよう、新学習指導要領において充実されたプログラミングやデータサイエンスに関する教育、統計教育に加え、STEAM教育の推進が提言された。高等学校改革を取り上げた本提言において、STEAM教育は「各教科での学習を実社会での問題発見・解決にいかしていくための教科横断的な教育」とされている。

○このSTEAM教育については、国際的に見ても、各国で定義が様々であり、STEM（Science, Technology, Engineering, Mathematics）に加わったAの範囲をデザインや感性などと狭く捉えるものや、芸術、文化、生活、経済、法律、政治、倫理等を含めた広い範囲で定義するものもある。

STEAM教育の目的には、人材育成の側面と、STEAMを構成する各分野が複雑に関係する現代社会に生きる市民の育成の側面がある。各教科等の知識・技能等を活用することを通じた問題解決を行うものであることから、課題の選択や進め方によっては生徒の強力な学ぶ動機付けにもなる。一方で、STEAM教育を推進する上では、多様な生徒の実態を踏まえる必要がある。科学技術分野に特化した人材育成の側面のみに着目してSTEAM教育を推進すると、例えば、学習に困難を抱える生徒が在籍する学校においては実施することが難しい場合も考えられ、学校間の格差を拡大する可能性が懸念される。教科等横断的な学習を充実することは学習意欲に課題のある生徒たちにこそ非常に重要であり、生徒の能力や関心に応じたSTEAM教育を推進する必要がある。

このためSTEAMの各分野が複雑に関係する現代社会に生きる市民として必要となる資質・能力の育成を志向するSTEAM教育の側面に着目し、STEAMのAの範囲を芸術、文化のみならず、生活、経済、法律、政治、倫理等を含めた広い範囲（Liberal Arts）（※）で定義し、推進することが重要である。

※ STEAMのAを広い範囲で定義するに当たり、そのAの意味するものについては、“Liberal Arts”のほか“Arts”や“Art”という用語を使用する見解がある。

○新学習指導要領においては、学習の基盤となる資質・能力や、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を育成するため、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることとされている。

STEAM教育の特性を生かし、実社会につながる課題の解決等を通じた問題発見・解決能力の育成や、レポートや論文、プレゼンテーション等の形式で課題を分析し、論理立てて主張をまとめること等を通じた言語能力の育成、情報手段の基本的な操作の習得、プログラミング的思考、情報モラル等に関する資質・能力等も含む情報活用能力の育成等の学習の基盤となる資質・能力の育成、芸術的な感性も生かし心豊かな生活や社会的な価値を創り出す創造性などの現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成について、文理の枠を超えて教科等横断的な視点に立って進めることが重要であり、その実現のためにはカリキュラム・マネジメントを充実する必要がある。

○STEAM教育は、「社会に開かれた教育課程」の理念の下、産業界等と連携し、各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に生かしていく高度な内容となるものであることから、高等学校における教科等横断的な学習の中で重点的に取り組むべきものであるが、その土台として、幼児期からのものづくり体験や科学的な体験の充実、小学校、中学校での各教科等や総合的な学習の時間における教科等横断的な学習や探究的な学習、プログラミング教育などの充実に努めることも重要である。さらに、小学校、中学校においても、児童生徒の学習の状況によっては教科等横断的な学習の中でSTEAM教育に取り組むことも考えられる。その際、発達の段階に応じて、児童生徒の興味・関心等を生かし、教師が一人一人に応じた学習活動を課すことで、児童生徒自身が主体的に学習テーマや探究方法等を設定することが重要である。

○高等学校においては、新学習指導要領に新たに位置付けられた「総合的な探究の時間」や「理数探究」が、

- ・実生活、実社会における複雑な文脈の中に存在する事象などを対象として教科等横断的な課題を設定する点
- ・課題の解決に際して、各教科等で学んだことを統合的に働かせながら、探究のプロセスを展開する点

などSTEAM教育がねらいとするところと多くの共通点があり、各高等学校において、これらの科目等を中心としてSTEAM教育に取り組むことが期待される。

また、必修科目として地理歴史科・公民科や数学科、理科、情報科の基礎的な内容等を幅広く位置付けた新学習指導要領の下、教科等横断的な視点で教育課程を編成し、その実施状況を評価して改善を図るとともに、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制の確保を進め、地域や高等教育機関、行政機関、民間企業等と連携・協働しつつ、各高等学校において生徒や地域の実態にあった探究学習を充実することが重要である。

その際には、これまでのスーパーサイエンスハイスクール（SSH）などでの教育実践の成果を生かしていくことが考えられる。

さらに、教師養成や教師研修の在り方も併せて検討していくことが重要である。

○STEAM教育の推進に当たっては、探究学習の過程を重視し、その過程で生じた疑問や思考の過程などを生徒に記録させ、自己の成長の過程を認識できるようにするとともに、社会に開かれた教育課程の観点から、STEAM教育に関わる学校内外の関係者による多様な視点を生かし、生徒の良い点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるよう努めることが重要である。

○また、実社会での問題発見・解決に生かしていく視点から生徒が自らテーマを設定し、学習を進めるためには、生徒が地域や産業界、大学などと多様な接点を持ち、社会的な課題や現在行われている取組などについて学ぶことが必要である。生徒が多様な機会を得ることができるよう、社会全体で取組を進めることが求められる。

このため、国においては産業界や大学等とも連携し、STEAM教育に資する教育コンテンツの整備を進めるとともに、事例の収集や周知などの取組を進める必要がある。

○STEAM教育等の教科等横断的な学習の前提として、小学校、中学校、高等学校などの各教科等の学習も重要であることは言うまでもない。各学校において、習得・活用・探究という学びの過程を重視しながら、各教科等において育成を目指す資質・能力を確実に育むとともに、それを横断する学びとしてのSTEAM教育を行い、更にその成果を各教科に還元するという往還が重要である。

(参 考)

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（中教審第228号）

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm

今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開
高等学校編作成協力者一覧（五十音順）

（職名は令和5年3月現在）

戎井 淳	高知県立山田高等学校教諭
門倉りえ	広島県立教育センター主任指導主事
佐藤友洋	北海道浦河高等学校教諭
清水智貴	広島県立三原高校学校教諭
園田哲郎	岡山県立津山東高等学校校長
泰山 裕	鳴門教育大学大学院准教授
武内良平	北海道釧路江南高等学校教諭
眺野大輔	静岡県教育委員会高校教育課人事監
堂脇真理子	大分県立臼杵支援学校教頭
中山順充	岡山県立真庭高等学校（落合校地）指導教諭
西野雄一郎	愛知教育大学准教授
野口 徹	山形大学教授
廣瀬志保	山梨県立笛吹高等学校校長
渡邊大輔	北海道札幌西高等学校教諭

なお、文部科学省においては、次の者が本書の編集に当たった。

常盤木祐一	初等中等教育局教育課程課課長
能見駿一郎	初等中等教育局教育課程課学校教育官
齋藤博伸	初等中等教育局教育課程課教科調査官
加藤 智	初等中等教育局教育課程課教科調査官
鈴木健一郎	初等中等教育局教育課程課教育課程第一係係長
渡邊克裕	初等中等教育局教育課程課教育課程第一係専門職
中川聖介	初等中等教育局教育課程課教育課程第一係

